

就テ、第三篇「アルゲ」屬ニ對スル比較研究外五篇あり。

鯛瀬國一

△衛生技師として群馬縣廳に在勤中の鯛瀬國一博士は、熊本醫專出身の篤學者にして、東大派の少壯醫博として其の存在を認めらるゝ内科學及び細菌學者たり。學究生活より展開して地方の醫事衛生界に躍進し始めて以來、拮据勤勉、未だ日尙淺きも斯道の發達普及に勵精努力し大に將來に俟つあらんとす。年齒少壯にして潑刺たる研究心を有し、精研に餘念なき前途は今後の活躍と相俟つて更に期待せらる。

△學歴よりすれば、大正十二年熊本醫專を卒業し、同十五年三月より昭和七年六月迄、東京帝大傳染病研究所囑託として勤務の傍ら研究に没頭し、昭和七年六月群馬縣衛生技師に任ぜられ今日に至る、斯間同八年一月東京帝大にて學位を授與せらる。主として傳研の西澤行藏及び宮川米次兩博士の指導を受くる所多く、細菌學及び内科學を專攻せり。△主論文は「南京鼠腹腔液中ニ出現スル鼠咬症「スピロヘータ」ニ就テ」にして、參考論文は「トリバノソーマ、タイレリー」の研究」なるが、他にも論著夥多あり。本籍は熊本縣宇土郡戸馳村、鯛瀬一郎の男にして、明治三十二年生る。博士も亦た篤學力行の人にして、其の異彩に富む閱歷は能く之を語りて餘蘊なきを見る。研究以外、スポーツに趣味を有し、元氣旺盛にして常に健康に留意す。其の人に接すれば謙讓にして、敢て學者たる尊大の態度を現さず、克く自抑して禮意あり、性溫情に富む。群馬縣前橋市榮町六に住む。

藤原政雄

△神戸市元町通四丁目藤原内科院長藤原政雄博士は、岡山縣赤磐郡佐伯村藤原代吉長男、明治二十三年生にして、岡山縣立岡山中學を経て、大正二年岡山醫專を卒へ、引續き岡山縣立病院島蘭内科に於て翌三年三月迄内科學研修、同年三月より五年二月迄神戸市谷内科病院勤務、同三月より十二月まで京都帝大中西内科に於て見

學、六年一月より十三年三月迄神戸市に於て内科專門開業、同年三月より十五年四月迄岡山醫大病理、及醫化學教室に於て研究、十五年岡山醫大にて學位受領後、神戸市に於て再び内科專門開業今日に至る。多年の聲望は今や圓熟せる手腕と相俟つて、内科の大家と仰がれ牢固たる地盤を有す。圍碁を趣味す。

△學位主論文「消化管粘膜ニ於ケル糖原生成ニ關スル研究」(英文)、參考論文、(1)哺乳動物ニ於ケル非經口的輸入糖ノ運命ニ就テ(獨文)、(2)腺「リパーゼ」ノ機能ニ關スル研究(英文)、(3)「ステアプシン」作用ニ對スル「アルコホル」及「レチチン」ノ影響ニ就テ(獨文)、(4)白鼠ニ於ケル消化管及四肢骨ノ生後發育ニ關スル研究、(5)糖磷酸「エステル」ノ骨酵素ニ因ル分解並ニ該「エステル」骨折ニ及ボス影響ニ就テ(英文)。

鈴木憲二

△臺灣總督府嘉義醫院長として多年の聲望を博しつゝある鈴木憲二博士は、福井縣遠敷郡雲濱村鈴木重憲次男、明治二十八年生にして、大正八年南滿醫學堂を卒へ、直ちに滿鐵大連醫院へ勤務し病理研究部員を命ぜらる、十年滿鐵より内地へ留學を被命、同年五月より京大病理學教室にて藤浪、速水兩博士指導の下に病理學並に病理解剖學研究、十四年九月滿鐵大連醫院へ歸院し内科勤務被命、十五年京都帝大にて學位受領、昭和二年臺灣總督府醫院醫長に任じ、花蓮港醫院長を命ぜられ、次で頭書の現職に就任今日に至る。

△學位主論文「十二指腸蟲病ニ關スル實驗的研究」、參考論文、(1)出血性痘瘡ノ病理解剖學的研究、(2)「アンチモン」劑ニ因ル日本住血吸蟲病ノ治療並ニ豫防實驗、(3)「アンチモン」劑ニ因ル肝硬變樣變化ニ就テ、(4)家鷄腸内ニ寄生セル鞭蟲様一新線蟲ニ就テ。臺灣嘉義市北門町七ノ一七に住む。

箱崎孝平

△生命保險界に多年活躍して健康、保健の増進上多大の業績を挙げ、其の大なる存在を認められ

今猶帝國生命保險會社の健康増進部長として最高幹部に列し、斯道の振興啓發の爲め勵精努力しつゝある箱崎孝平博士は、秋田縣鹿角郡尾去澤村の出身、明治二十年生にして、明治四十五年東京市本郷日本醫學校を卒へ、大正二年醫術開業免狀を得、三年東京帝大醫科大學内科選科修了、四年六月迄同學附屬醫院三浦内科介補、十二年五月より十五年五月迄北海道帝大醫化學教室にて、太黒教授指導の下に研究、十五年北海道帝大より學位を受領す、爾來頭書の要職に就任し今日に至る。子福者にして團樂たる家庭は常に朗かなりと云ふ、いゝババとしての博士も年壯漸く熟して、今や知命に達せんとし元氣益々旺盛也。

△學位主論文「蛋白質ノ物理化學的性狀ヲ決定スル」フアクターニ就テ、參考論文、(1)「ヘモグロビン」ノ電離恒數ニ就テ、(2)「ゲラチン」ノ膠質金ニ對スル作用、(3)「ゲラチン」ノ膠質鐵ニ對スル作用、(4)膠質金ノ膠質狀態ヲ決定スル恒數ニ就テ、(5)膠質鐵ノ「コロイド」狀態ヲ決定スル恒數ニ就テ、(6)「コロイド」金ノ沈澱諸現象ニ關スル研究補遺。他に歐文の論著夥多あり。東京市淀橋區下落合四ノ一七八に住む。

山本徹雄

△高松市西新通町に新装せる山本内科病院あり、山本徹雄博士の診療所にして、開業早々、自己の地盤を開拓すべく其の第一歩に入れり。博士は愛知醫大出身の新進にして、恩師たる現名古屋醫大内科學教授勝沼精藏博士、同衛生細菌學教授大庭士郎博士に就て内科學及び血清學を研究し、特に呼吸器病科及び血液病科を最も得意とせる近來の少壯名醫博也。今や診療界に精進して益々其の特技を發揮せんとし、打診の好評は博士の長所たる忍耐謙讓の性格と相俟つて漸次独自の領域を獲得し、輝しき前途の成功は期して待つべきものあらん。

△博士は愛媛縣立今治中學校を経て、陸軍士官學校へ入學せるも病氣の爲め中途退學、愛知醫大豫科を経て昭和三年本科を卒へ、直ちに同大學勝沼内科學教室に入る、同五年六月更に同大學研究科入學、同七年六月卒業、同八年二月

名古屋醫大にて學位受領、同九年四月開業せり。

△主論文は「家兎ニ於ケルA標識(A-merkmal)ノ發生學的並ニ遺傳學的研究」にして、參考論文は、(1)人尿中ニ於ケルA-merkmalニ就テ、(2)人同種血球凝集素ノ凝集價ニ就テ、(3)家兎諸臟器ニ於ケル血型物質ノ存在ニ關スル實驗的批判、(4)家兎胃粘膜ニ存スルA物質ノ抗原性ニ就テ等。

△感想に曰く「我國現下の醫界は全く混亂状態と云ふべく、一日も速に醫業統制の實施されん事を望む。敢て淺學菲才を顧みず、之れが實施に關する具體的意見を概説すれば、醫業は之を國營とし衛生省の統轄のもとに病院、醫院、分院或は派出所を設くる事、恰も現在我國の警察制度に於ける署、駐在所、派出所の如くし、之に適材適所に醫師を分布すれば最も理想的なる醫療衛生設備を實現し得らるべしと思惟す」云々。

△愛媛縣越智郡大井村山本一清の長男にして、明治三十二年生る、年齒未だ三十有七歳也。少壯の意氣に燃え、事を處するに周到にして、一度び事を成さんとするや忍耐に強く、徹底的に成し遂げずんば止まぬ所に、博士の性格を窺はれ、殊に其の長所を見出さる、強めて言はしむれば、やゝもすれば頑固に過ぎる嫌なきか。讀書家にして、専門以外には哲學書及び經濟學書を愛讀す、嗜好にては茶食を好む。

上野俊昌

△大阪高等醫學專門學校に内科教授兼附屬醫院内科醫長として上野俊昌博士あり。千葉醫專出身の内科學者にして、豫備陸軍三等軍醫正の印綬を帶び、久しく軍醫界に活躍する所あり、特に熱帶病及び熱帶衛生學を得意とし、又京大教授戸田正三博士に就き衛生學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。由來建築材料に就て氣濕と材料との吸濕性、並放濕性に關して詳細に研究闡明したる實驗報告を觀ず、建築材料の吸濕性と放濕性とは獨り空氣の湿度の調節に重要たるのみならず、索いては建築材料の熱傳導性に影響を及ぼし、煖房

及冷房と關係するところ頗る廣汎なり、依つて大正十二年以來之れが性質を調査し衛生學の立場より研究せるもの、即ち博士の學位論文なりとす。其の學問的價値は既に學界に定評あり、如何に精研の該博なるかを語るものとして博士の評價は定まる。

△博士は明治四十二年千葉醫專卒業、同四十三年六月任陸軍三等軍醫、同四十五年十二月任二等軍醫、大正四年十二月任一等軍醫、同十二年七月任三等軍醫正、同年八月豫備役に編入せらる。斯間明治四十三年六月より大正三年二月迄甲府衛戍病院及臺南衛戍病院にて内科學研究、同三年三月より四年十月迄陸軍々醫學校にて醫化學研究、同四年十月より九年四月迄東京第二衛戍病院にて内科學研究、同九年四月より十二年一月迄臺灣軍々醫部にて熱帶病及熱帶衛生學研究、同十二年二月より十四年三月迄京都帝大衛生學教室にて研究、同十四年四月より十五年六月迄大阪市立衛生試驗所細菌血清室主任勤務、同十五年三月學位受領、同年十一月大阪市にて開業、昭和二年春大阪高等醫學專門學校教授兼附屬醫院內科醫長に就任今日に至る。

△學位主論文は「建築材料ノ吸濕性放濕性ニ關スル衛生學的研究」にして、參考論文は、(1)光ノ衛生學的研究概論、(2)赤外線ノ性質ト保温ノ關係ニ就テ、(3)養衆ノ研究補遺、(4)眼瞼閉鎖時ニ於ケル光感ト睡眠時ニ於ケル遮光方法ニ就テ、(5)余ノ考案セル光神計ニ就テ、(6)病室ノ溫度及汚度ニ就テ等なり。著書「熱帶衛生並ニ熱帶病」他に論著夥多。△博士曰く「感想感志としては何にもありません、醫博の多いのは慶賀に堪へないが、非難の多いのは如何云ふものであるか、何事も物質か精神か、茲に現世の鬭争起點か發生せられてゐる。云ふ人、云はるゝ人、何れも時は流れに乗つてゐるのだ、世相が斯くするのだと云ふより外はない。只然し醫者は精神の修養だ、人格者仁者が必要だ」云々。至言と謂ふ可き也。

△博士は、東京市豊島區高田町に本籍を有す。學究的溫厚の紳士にして、篤學者として其の今日あるは、既に氏が闊歷に燦とし輝き、博士の面目を語るに充分也。年壯氣鋭にして研究心に富み、專念醫育と診療に精進して倦むことなく猶精研に餘念なし。今は分別盛にて學識、手腕、人格共に愈々圓熟の佳境に入る。福々しき風貌は其の性格を表示して餘蘊なく、志操堅實にして學者らしき態度に威嚴を存す、而かも人と接するに親切克く同情を以てし、能く學生を愛撫す。大阪府茨木町茨木島屋垣内七八三に住む。

羽鳥重郎

△東部臺灣花蓮港に於て開業の羽鳥重郎博士の嘖々たる名聲を、臺灣診療界に聞くや既に久矣。

博士は醫術開業試験出身の篤學者にして、内科を専門とし特に熱帶病及び熱帶衛生學の造詣深く、嘗て東大教授青山及び入澤兩博士に就きて内科學を專攻し、臺灣總督府在任中、熱帶病研究或は調査の爲め屢々香港、馬來半島、瓜哇、スマトラ、濠洲、南米、北米、英、獨、佛、瑞、伊諸國等々へ出張し研鑽大に得る所あり「臺灣の恙蟲病に關する研究」を學位論文として、新潟醫大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。六篇より成る鴻大なる學位論文は、如何に精研の該博なるかを語り、其の學問的價値は既に學界に定評あり。臺灣診療界の爲に多年盡瘁せる功績は言はずもがな、今や熱帶病醫學界に於ける權威として其の大なる學識を認められ、剩さへ立志傳的篤學者としての典型たるは特筆すべき也。

△博士は明治二十六年醫術開業前期試験に、同二十八年同後期試験に及第、醫術開業免狀下附、同二十九年一月より五月迄群馬縣監獄醫、同年九月東大醫科大學選科入學、青山、入澤兩教授に師事す、同三十年五月任同大學助手、附屬醫院勤務翌年十一月に至る、同三十二年一月日本郵船會社船醫となり翌年五月に至る、同三十三年八月臺灣總督府製藥所(後に專賣局)事務囑託、同三十七年九月同府醫學校講師囑託、同三十九年三月任同府海港檢疫醫官、同四十年二月同府醫院醫員兼任基隆醫院長、同四十二年三月任同府防疫醫官、臺灣地方病及傳染病調査會臨時委員、同四十

五年一月香港出張、第二回極東熱帯醫學會參列、大正九年六月多年臺灣に於て「ペスト」防遏に従事し盡力不尠に付單光旭日章を被授、同年九月同府州技師、兼研究所技師に被任、臺北州警務部衛生課長を被命、同年十月馬來半島、瓜哇、スマトラ及濠洲へ出張、同十三年九月外務省事務囑託せられ中南米諸國へ出張、序を以て歐洲及北米へ出張、熱帯病研究に關する視察をなし翌十四年七月歸朝す、同十五年三月任同府醫院醫長、臺南醫院勤務、同月陞叙高等官二等依願退官、陞叙從四位勳四等たり、同年四月臺北市立稻江醫院長兼臺北仁濟院醫員の職に就き、同十五年七月學位受領、次で臺南市濟生醫院に轉ぜしが、昭和六年九月關係深き花蓮港街に開業今日に至る。

△學位生論文は、「臺灣ノ恙蟲病ニ關スル研究」にして、(1)臺灣ニ於ケル發疹性腺腫熱ニ關スル第一報告、(2)同上第二報告、(3)同上第三報告、(4)臺灣ノ恙蟲病ニ關スル第四報告、(5)同上第五報告、(6)臺灣ノ地方性恙蟲病ニ就テ第六報告の六篇より成れり、參考論文は、(1)大正四年澎湖島ニ於ケル「マラリア」流行ニ就テ、(2)大正五年臺東廳下紅頭島ニ於ケル流行病ニ就テ、(3)二三動物傳染病ノ細菌學的研究、(4)臺灣産毒蛇追加——瓊蛇、(5)臺灣ノ征患事業、(6)臺灣ノ黒水熱、(7)明治三十年東京ニ流行セル赤痢ノ病原ニ就テ、(8)「ペスト」屍ニ檢出セル一病原菌ニ就テ等なり。他に論著夥多。著書、(1)「マラリア」病論(共著)、(2)臺灣通俗衛生(合著)、(3)中南米諸國ノ衛生狀態及施設一斑、(4)ラテンアメリカの旅日記等最も顯はる。

△博士は群馬縣勢多郡富士見村の出身、明治四年生る。稀に見る篤學者にして、其の今日ある閱歷は博士の六十有五の年史に輝きて光彩陸離たるものあり、尠くとも其の向學的堅忍不拔の精神と、不撓不屈の努力とは頂門の一針として學ぶべき也。眞面目なる學究的濃厚の紳士として氣品を備え、學者タイプの風貌は凛々として威嚴あり、廣き額は天才的なるを表示して餘蘊なし。老齡今や六十有五歳、矍鑠として元氣甚だ旺盛なり。其の専門に亘る學識は勿論、臨床に堪能にして多年の經驗に富み、老熟せる手腕は益々其の特技を發揮して餘す所なし。當世博士界中、博士の如き

は最も異彩に富むる大家として茲に推獎し、其の高邁なる人格を敬慕すべき也。花蓮港廳花蓮港街黒金通に住む。

田中吉左衛門

△多士濟々たる京都醫藥界は、近時競争激烈にして群雄割據の觀あり、此間に介在して獨自の専門を標榜し、卓然として群を抜き、田中血管病醫院長として悠々獨歩の概あるは田中吉左衛門博士也。博士の診療所は目黒區上目黒八丁目五六四(大阪上)に在りて結構宏大ならざるまでも、内部の設備整ひ、博士自ら診療に勵しみ日々忙殺されつゝあり。博士は金澤醫專の出身にて、九州帝大より學位を獲得せる内科學者にして、特に細小動脈及毛細血管の生理病理を研究し、臨床上には特に是を血管病と命名して其研究結果を實際に應用し居れり。此の方面の領域に就ては、多年の經驗に富み、獨特の手腕を有す。今や斯界の第一人と仰がれ、益々民衆の人望を博し、繁榮歲と共に成功の地盤を築きつゝあり。

△博士は大正二年金澤醫專を卒へ、同五年より九年迄帝國生命保險會社醫員として勤務、同十年一月九州帝大醫學部專攻生、第三内科醫員となり、同十五年九月九大を辭し釜山高橋病院長として赴任す、同年十一月學位受領、昭和二年四月現住地に於て開業今日に至る。

△主論文は「毛細血管並ニ小血管ニ關スル研究」にして、第一篇實驗的研究、第二篇臨床的研究の二篇より成る。參考論文は、(1)夏期海濱「テント」生活ノ血液像及毛細血管ニ及ボス影響ニ就テ、(2)流行性感胃ト氣象トノ關係等なり著書「黃帝内經素問靈樞」其他論著夥多あり。

△感想に曰く「最近數年間を漢方の研究に没頭して居る。漢方は經驗の結果を集成し是を陰陽五行說で統一して一つの治療大系を作つて居るが常に事實を基礎として居る事と人體の生活相に靈を認めて靈肉相對の見地より治病の原則を築いて居る點に現代の唯物的科學に基く醫學の企て及ばざる點があると思ふ。其論述は極めて抽象的冥想的である

が、其内容を深く玩味すると學論としても決して現代の科學的醫學に劣つて居らぬ。將來大に研究を進むべきものと考へる」云々。

△博士は長野縣上高井郡仁禮村の出身、明治二十年生る、十三歳にて父を夫ひ母の手に育つ、其の今日ある篤學と成業とは博士の前半生史に盡きて躍如たるを見る。眞面目なる學究的紳士にして、臨床家として今は手腕、人格共に圓熟して一般の重望を加ふ。殊に臨床に熱心にして眞剣なると、誠意親切を以てする點は氏の性格の然らしむ所にして其の態度の悠揚として迫らず、熱情あり溫味あるは博士の長所と見るべき也。賦性謹直にして潔白、恬淡として功名榮達を求めず、同情に富み能く人を愛す、若し強ひて言はしむれば正直過ぎて或は短氣の嫌ひなきか。其の高邁なる人格は敬慕すべき也。文學趣味豊かにして山秀朗を號とす。年齒不惑に入る九歳、元氣益々壯也。近年漢方の研究に興味を有し、黃帝內經素問靈樞の翻譯註釋に勵力を注ぎ精研に餘念なし。

瀨木嘉一

△東京市神田區東今川町五に、レントゲン科、理學的療法科、内科専門を以て著聞する瀨木醫院あり、斯科界現代の大家瀨木嘉一博士の經營にして、開業既に十有餘年を閲し、今や牢乎拔くべからざる地盤を有すレントゲン科装置としては高壓レントゲン深部治療装置(ケノトロン全整流式)一般レントゲン診断、寫眞用装置携帶用レントゲン装置等あり、其他ラヂウム、ヂアテルミト、四肢浴、人工太陽燈、平流、感傳電氣等一般物理的治療科の設備あり。博士は愛知醫專出身の篤學者にして、レントゲン科の權威藤浪剛一博士に就きて斯科の蘊奥を究め東京帝大總長長與博士及び博研技師三田村博士の指導を受けて病理學を研究し、後に京大教授藤浪鑑博士に就きてレントゲン學的、病理組織學的檢索に従事し、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博なり。

△博士は大正四年愛知醫專卒業後、同年六月より同五年八月まで横濱市西川病院勤務、同五年八月より同八年十一月

まで順天堂醫院レントゲン科勤務、藤浪剛一博士の指導を受く、同八年十一月より同十一年六月まで博研研究生として長與所長及び三田村技師に師事す、同十一年六月より同十四年十一月まで帝大整形外科教室、レントゲン教室にて藤浪鑑教授の指導を受く、同十四年十月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。斯間昭和六年十月内務省囑託により海外醫事視察の途につき、翌七年四月歸朝せり。

△學位主論文「レントゲン」線ノ腦下垂體又ハ生殖腺放射後爾餘ノ内分泌諸臟器又ハ生殖器ノ受クル二次的影響(1)雌性家兔腦下垂體放射實驗、(2)雄性家兔腦下垂體放射實驗、參考論文、(1)内臟全轉錯症ノ一例(2)頸肋骨ノ二例、(3)内臟全轉錯症ノ追加二例、(4)慢性腹膜結核ノ「レントゲン」放射治療ニ就キテ、(5)「レントゲン」放射線並ニ紫外線ノ蠶種ニ及ボス生物學的作用ニ就キテノ實驗的研究、(6)高壓「レントゲン」深部療法ノ概念、(7)家兔骨發育ノ「レントゲン」像、(8)「オステオゲネシス、イムペルフエクタ」ノ「レントゲン」像等。

△博士は明治二十四年三重縣桑名郡古美村古野に生る、亡父岱輔は蘭漢醫にして勳八等たり、その三男也。學界の肅正と、醫師の社會的地位の向上を高調する熱心家也。年齒漸く不惑に入る五、年壯氣銳、體軀偉大にして學者タイプの風貌に威嚴を存し溫容を藏す。趣味は寫眞と旅行とにあり。瀨木本雄醫博は長兄にして、瀨木本立醫博は長兄の長男也。

阿部政三

△市立札幌病院神經科精神科醫長兼市立札幌病院附屬靜療院長として、内外の信望を博し、札幌診療界の爲め努力精進しつゝある阿部政三博士は、東大系の神經科及精神科學者にして、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。研鑽多年、田澤鏝二博士、木村徳衛博士、三宅鏝一博士、富士川游博士等の指導を受けて造詣する所深く、今や壯齡漸く熟して學識、手腕、人格共に玉成の域に達す。其の蘊蓄せる實際的の手腕を發揮して、北海道

の精神衛生運動に貢献する所あらんとす。静療院は市立札幌醫院の附屬病院として、昭和九年十月新築落成と共に創設せるものにして、從來の我國に見る精神病院とは異なり、即ち精神病者もなるべく開放的療法に進まんとする輓近の趨勢に基きて、監置的病室は少くし、開放的病室を多くし、更に又神経症を收容すべく快適なる病室をも作り、この病室たるや恰も旅館又は別荘に静養せるの感あらしむべく、特に入念に純和風の御殿式氣分をあらはしたる病室にて、かゝる病室の存する事は未だ我國の精神病院にはあまり類を見ざる所也。静療院の位置は、札幌市を去る約二里の東南方の高臺にて、市街と眞駒内牧場とを坐しながら眺め得る景勝の地（札幌郡豊平町平岸）にて、定山溪電車の沿線にあり。氏は即ち市立札幌病院（院長林敏禪博）に於て新設の神経科精神科長並に静療院長として招聘せられ赴任せるものなり。博士の責任の重且つ大なると共に將來博士の力に俟つもの益々大なるものあらんとす。

△博士は大正十一年東京帝大醫學部卒業、東京市療養所醫局、泉橋慈善病院内科醫局等を経て、同十五年東京帝大助手となり精神病學教室勤務、次で東京府立松澤病院醫員となり、昭和六年三月長崎醫大助教授として同校精神科高瀬教授洋行中を代つて講義を擔當し、同七年五月同校を辭し、廣島養神館醫長となりしも、昭和九年四月より札幌市立札幌病院に於て神経科精神科を新設するに及び招かれてその醫長として赴任す、次で同年十月その附屬病院なる静療院の新設と共に其院長を兼任す。

△學位主論文は「燈用瓦斯中毒ノ研究」にして、副論文は「慢性ニ硫化炭素中毒」なり。

△博士は静岡縣庵原郡庵原村の出身、明治二十七年生れにして當年不惑に入る二歳也。少壯の意氣益々壯にして、精神衛生と國運隆盛とを常に念願として、自己の職務に勵精奮盡し亦他事を顧みざるの概あり。性格より言はしむれば熱情と潔癖とを共に有するものならん、言換ゆれば神經質者の有する長所もあれば又短所もなしとせず。而かも人に對して恬淡として銜はず、人を愛し人に親しまるゝの徳を有す、又能く應答禮を厚うして對手に好感を覺えしむるは

篤實にして高邁なる其の人格を敬慕せしむ。趣味としては音楽を愛し、又散歩を好む。札幌市北一條西八丁目札幌市立札幌病院神経科精神科又は札幌市外、豊平町平岸市立札幌病院附屬静療院。

田中一雄

△愛知縣犬山町田中内科病院長としての、田中一雄博士の隆々たる名聲は既に江湖に著聞す。慈惠醫專出身の逸才にして、多年米國に遊學して研鑽大に得る所あり、殊に肺結核の造詣に至つては他の追隨を許さず歸朝後、北海道帝大より學位を獲得せる名醫博として其の大なる存在を認めらる。今や斯科の大家として大衆より多大の信頼と尊敬とを受け、打診の好評と相俟つて當地方療養界に於ける名實相伴ふ一流病院として一勢力を占む。

△博士は東京府立青山師範を経て、大正五年東京慈惠會醫專を卒へ、同年九月米國ボストン市ボストン大學醫科大學へ入學、十月文科入學、七年六月文科、八年五月醫科を卒へ、同年六月同市ハーバート大學大學院へ入學し、九年四月卒業す、十年十月英佛を約三ヶ月巡視して歸朝す、十四年北大今教授教室に入り研究、十五年九月退學し、昭和二年學位を受領す、斯間在米中、大正五年九月ボストン大學名譽教授ホールレス、バカード博士を通じ同學病院助手となりウワーター教授に師事して臨床血液學を修む、六年四月上級助手となりトーマス教授に師事して内科病室を擔當す、七年九月ボストン市立病院内科に轉ず、翌年三月マサチューセツツ、ゼネラル、ホスピタルの呼吸器病内科病理實驗室へ轉じて、サウサード教授に師事して細菌血清病學を修む、九年四月バカード博士の紹介を通じ、クレマー博士の推薦により紐育市立病院肺結核サナトリウム病理實驗室主任に奉職し、一方紐育ベルビュー病院レントゲン實驗室ハイシ博士に師事して、レントゲン學教室助手として勤務す、十一年九月歸朝後、十四年より北大にて研究を續け、十五年九月退學後、郷里愛知縣に内科診療所、及び入院所を設け、昭和二年一月學位を得、同年十月田中内科診療所を新築開院し、内科（特に結核病、肺結核早期診療）及び小兒科（特に腺病實百日咳）一般の診療に従事し今日に至

れり。

△學位論文「肺結核ニ於ケル血像の診断、豫後及ビ療法ニ對スル其ノ關係ニ就テノ研究」參考論文、(1)小兒ノ炎症性鼻咽腔ニ於ケル細菌學的觀察ト其等ノ扁桃腺炎及ビ「デフテリア」ニ對スル關係ニ就テ(英文)(2)臟器毒ノ血液及造血臟器ニ及ボス影響(英文)。其他内外にて發表せる論著夥多あり。

△博士は岐阜縣加茂郡峰屋村堀部小右衛門の三男、明治二十一年生にして、大正十一年五月愛知縣丹羽郡犬山町田中円藏の娘民子と結婚し田中と改姓、分家創立す。學究的温厚の紳士、熱心なる研究家にして、刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、臨床の餘暇を以て今猶肺結核の研究に餘念なし。趣味としては運動、殊にゴルフ、室内では圍碁を好む。其の専門とする肺結核に至つては、研鑽多年、學術の探研と共に臨床の經驗に富み、圓熟せる手腕は愈々其の特技を發揮して餘す所なし。その今日の位地と聲望とを贏ち得たるもの近來の成功家と云ふべき也。賦性温厚篤實眞摯なる臨床家としての人格者たるを慶ぶ。

◇
皆見規夫

△東京市品川區五反田一ノ二五九に、内科殊に神経系統専門を以て獨立開業せる皆見規夫博士は岡山縣吉備郡水内村の出身、明治二十八年生れにして、岡山縣立高梁中學、六高を経て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、同時に慶大醫學部附屬病院内科助手に任ぜられ西野教授に師事す、其間十一年十一月より十三七月迄、同年學部生理學教授加藤博士の指導を受け、十五年三月慶大にて學位を受領す、爾來頭書の現住地に内科開業今日に至る。

△學位主論文、(1)神經ノ興奮ハ其ノ強度ノ大小ニ關セズ、麻醉部位ニ於テ同時ニ消失ス、(2)神經ノ興奮傳導ニ關スルエードリアン氏實驗批判、(3)神經麻醉部位ノ長サト筋攣縮高ノ變化トノ關係ニ就テ、參考論文、(1)神經小興奮波ノ麻醉部位傳導狀態ニ就テ、(2)筋肉ノ麻痺時間ト麻醉部位ノ長サトノ關係ニ就テ、(3)神經ノ麻痺時間ト麻醉部位ノ長サト

ノ關係ニ就テ、(4)白米病雞神經ノ電氣的抵抗並ニ其ノ血清ノ比傳導度ニ就テ、(5)日本食品ノ「ビタミン」B含有量ニ就テ。讀書家にして文雅に興味あり、號して朝山、極光といふ、また音樂、芝居を好み、圍碁を居常の樂しみとす。開業既に拾有餘年、牢固たる地盤を有し、日々繁榮を極む。

◇
五井義雄

△三重縣桑名市清水町に内科専門を以て著名なる五井病院あり、院長五井義雄博士の經營にして今や當地方を風靡せんとするの盛況を呈す。氏は當町の出身にして、明治二十二年生る。一高を経て、大正三年東京帝大醫科大學を卒へ、四年同大學附屬醫院三浦内科副勤務、七年副手を辭し、廣島縣立廣島病院内科第二部長就職十年辭して東京帝大細菌學教室にて竹内教授の下に細菌學の研究に従事す、十四年退きて桑名町に歸り開業す、十五年六月母校より學位を受領す。篤實温厚なる紳士にして、眞摯なる臨床家として信望厚し。

△學位主論文「細菌「アマミラーゼ」ノ性狀並ニ其產生要約ニ關スル研究」參考論文「芽胞ノ染色ニ就キテ、簡短迅速ナル一方法」。

◇
岸田 徵

△朝鮮道立醫院長として滿洲國間島龍井威鏡北道立龍井醫院に勤務中の岸田徵博士は、長崎醫專出身の内科學者にして、細菌學の造詣深く、殊に北研の泰博士に就て研鑽大に得る所あり。

△學位主論文は「ワツセルブラウ」ヲ以テセル腸内病原菌分離用培地」にして、參考論文は、(1)赤痢菌分類ニ關スル生物學的免疫學的研究、(2)茶ノ殺菌力ト毒素破壞力ニ就テ、(3)「コレラロート」反應及「インドール」反應早期檢出ノ培養要約ニ就テ、(4)細菌瓦斯發生ノ要約ト之が檢査法等なり。今や豊富なる學識と、多年鍊磨せる臨床的手腕とを發揮して、拮据勤勉、不斷の努力精進により篤き信望を得て、當地診療界の爲め力を盡しつゝあるは多とすべき也。

△學歷よりすれば、明治四十一年長崎醫專卒業後、母校にて内科研究の後北里養生園にて細菌學研究す、次で、東京瀨川昌著博士の江東病院、東京小兒科病院醫員として勤務の傍ら内科、小兒科研究、大正二年朝鮮道立醫院に奉職、爾來道立醫院醫官として各地に歴任、其間大正十年北里研究所に於て細菌學研究、再び昭和五年より七年に至る間北研にて研究に従事し、昭和八年二月慶大にて學位を授與せらる、現在肩書地醫院長として在勤中なり。

△出身地は島根縣美濃郡豊田村横田にして、明治十九年生る。當年當に五十歳也。元氣益々旺盛にして、勵精恪勤の聞え高く、久しく朝鮮治療界の爲め奮盡し、多年の功績は言ふまでもなく、至誠一貫、今猶仁術の爲め貴き使命を盡して以て吾志達せりと爲す。而かも其間に於て不屈の精神を貫き、克く學位論文を完成せる興學心と、不斷の努力とは特筆すべきに値す。濃厚の紳士にして、恭謙禮讓に篤く、學に職に忠なると共に人に親切を盡し、後進を待つに頗る情味あり、人格高潔也。滿洲國間島龍井道立醫院官舎に住む。

薄元茂夫

△津山市津田町二〇に内科、レントゲン科専門を以て有名なる薄元病院あり、院長は九州帝大派の名醫博にして、斯科の大家として篤き信望を博しつゝある薄元茂夫博士也。氏は岡山縣苦田郡津山町の出身にして明治二十六年生る。年齒不惑に入る三歳、漸く壯熟して最も得意時代に在り。

△岡山縣立津山中學、三高を経て、大正六年九州帝大醫科大學へ入學し、十年卒業、直ちに同學第一内科教室副手を拜命、吳建博士指導の下に内科學を研究し、十四年吳教授東大へ轉任後引續き金子廉次郎博士に師事す、十五年六月母校にて學位受領、第一内科教室を辭して、福岡縣飯塚病院長兼内科部長として就任す、其後職を辭し現住地に開業今日に至る。弓術を趣味す、九大時代には弓道の師範たり。

△學位主論文「横隔膜「シラクサチオ」ニ就テ」參考論文、(1)肺動脈狹窄ノ「レントゲン」像殊ニ肺動脈弓膨隆ノ理

由ニ就テ、(2)肺動脈狹窄ノ臨床的研究、(3)肺動脈閉鎖不全症ニ就テ。

小松原謙三

△大阪市住吉區長崎町四六に内科を標榜して獨立開業せる小松原謙三博士は、兵庫縣多可郡比延庄村小松原梅藏の男にして、明治二十八年生る。大阪府立今宮中學を経て、大正十年大阪醫大を卒へ、同年東京帝大法醫學教室に入り、三田教授指導のもとに血清化學を三ヶ年研究、十三年大阪醫大附屬醫院醫員に任ぜらる、十五年六月東京帝大にて學位受領、其後現住地にて開業今日に至る。多年聲望を扶植し、今や悠々たる位地を占め多大の信望を博す。一路は其號にして、多趣味の人也。殊に俳句を能くし玉突、繪畫、狩獵を好む。

△學位主論文「血球沈降現象ノ本態ニ就テノ研究」參考論文、(1)植物性血球凝集素ノ研究、(2)「フォルモール」反應ノ本態ニ就テ、(3)寒冷ニ依リテ發見スル健常自家同種血球凝集素ニ就テ、其他論著夥多あり。

勝田功夫

△臺灣嘉義市南門町七ノ二一勝田病院副院長にして、兼ねて臺灣電力株式會社囑託醫たる勝田功夫博士は、日本醫專出身の篤學者にして、内科、小兒科、産婦人科に通じ、特に内科、胃腸科を最も得意とし、又た寄生蟲學の造詣深し。同病院は兄弟三人にて醫務に従事し、長兄之を經營す。病床二十、内科、小兒科、産婦人科、理學的治療科、レントゲン科の各科あり、當地診療界に於ける私立病院中一流の位地を占む。博士の感想に曰く、「特に感想として述ぶる事なし。然し近代醫學の隆昌は殊に眞面目なる研究業績で各醫學會雜誌上に充満し多忙の爲め讀破盡し得ざるは研究者に對して實に相濟まぬと常に思つて居る。更に吾々は研究的態度を持續し學術の偏見を遁れ無意義なる傳統と横做を捨て醫學窮極の主題なる治療的方面の研究に醫學界の貢獻を希む」云々。

△博士は明治大學政治科三年修業後、大正九年日本醫專卒業、直ちに同校附屬病院西川内科に入る、更に慶大川添産

婦人科勤務、同十三年任臺灣總督府技手、南支那廈門病院内科醫長、同十四年英領香港並南支那に熱帯病視察、同十五年臺灣總督府屏東醫院内科醫長、昭和五年任臺灣總督府醫學教授、横川寄生蟲學教室に轉じ熱帯病寄生蟲病理學を專攻す、同八年三月岡山醫大にて學位を受領せり。斯間の指導教授は西川義方博士、川添直道博士、横川定博士なり。△主論文は「臺灣ニ於ケル半鹹水産魚類ニ關する中間宿主スル吸蟲類ノ研究」(五編)、參考論文は、(1)悪阻ノ生理的食鹽水靜脈注射療法、(2)代償性月經ノ異例ニ就テ、(3)膀胱内異物ニ就テ、(4)人工榮養幼生兒ノ乳腺腫脹並ニ分泌ニ關スル臨床的觀察、(5)黒水熱ノ統計的考察、(6)「ストラントカスミス」屬吸蟲ノ特徵トスル腹吸盤生殖盤裝置並ニ附屬器ノ構造ニ就テ、(7)臺灣ニ於ケル半鹹水産貝類中ニ寄生スル「センカリヤ」殊ニ「チストフロス、レルカリヤ」ノ一種ニ就テ、(8)肺「ヂストマ」ノ治療等なり。出生地は福島縣東白川郡棚倉町新町にして、明治廿六年生れ也。多趣味の人にして、笑酔と號す、園藝、テニス、ゴルフ、俳句、繪畫を能くし、支那料理、高級煙草を嗜む。

田中健吉

△岐阜縣郡上郡八幡町殿町一八私立郡上病院長として、多年地方診療界の爲め努力精進しつゝある田中健吉博士は、和歌山縣東牟婁郡新宮町の出身、明治十五年生にして、和歌山中學、第三高を経て、四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、續て二ヶ年間附屬病院にて内科研究、大正元年岐阜縣八幡町に私立郡上病院經營、大正十三年京都帝大大學院に入學、内科一般を研究、十五年六月京都帝大にて學位を受領し、愛媛縣宇和島市立病院長として招聘せられたるも、辭して歸郷再び八幡町に於て開業今日に至れり。學識、手腕、人格共に圓熟の域を超越して一段の貫祿を備え、今や内科の老大家として近郷より多大の信望と尊敬とを受けつゝあり。濃厚篤實、人格崇高也。△學位主論文「腸管ニ於ケル色素ノ吸收並ニ排泄ニ關スル研究」、參考論文、(1)膀胱ノ色素排泄ニ就テ、(2)ワイル氏病ノ統計的觀察、附 Herpes Labialis ノ臨床的意義ニ就テ。

湊川孟猷

△神戸市須磨浦療病院にて専ら結核病患者の診療に従事しつゝある湊川孟猷博士は、長崎醫專の出身にして、大正十年卒業後、同校附屬醫院内科、長崎市療養所、同傳染病院等に勤務、大正十四年九月以降恩師山田基博士に従ひ、須磨浦療病院に勤務す、昭和八年五月長崎醫大にて學位を受領今日に至る。斯間昭和四年十一月より同八年三月迄長崎醫大にて、竹内清教授及び林郁彦教授に就て病理學を專攻せり。

△主論文は「結核菌ト肺結核組織的病型トノ關係」(二篇)、參考論文は「結核肺ニ於ケル各組織病變ノ成立機轉ニ關スル考察」(三篇) 其他三、四篇あり。

△感想を寄せて曰く「恩師山田先生に従ひ、結核患者の診療に従事すること十餘年に候へども天資愚鈍未だこれなら確實に結核病を治すべしと思ふ自信なく醫者たるの難きと使命の重きとを痛感致すのみにて候。診療に専念する外他の趣味嗜好無し」云々。以て氏の熱心振りを察せらる。沖繩縣首里市の人、明治廿七年生の年壯也。兵庫縣垂水町東垂水三〇三に住す。

池上芳次郎

△松本市大名町に内科専門を以て獨立開業せる池上芳次郎博士は、東北帝大派の名醫博として其の手腕を認められ、今や當地方診療界の重鎮たり。氏は當市の人、明治二十五年生にして、八高を経て、大正八年東北帝大醫學部を卒へ、同年七月より九年四月迄同大學細菌學教室に助手として研究し、同年四月より熊谷内科に助手として勤務し、十一年一月より再び助手に任ぜられ、十五年六月迄研究を續く、同月東北帝大を辭し直ちに宮城縣氣仙沼町外七ヶ村公立病院長として赴任す、十五年七月母校にて學位を受領、其後辭職以來郷里松本市に於て開業今日に至る。實踐躬行を主義として、一意専心、仁術以て其の天職を樂しむ、好個の臨床家たり。

△學位主論文「淋巴清並ニ腦脊髄液ノ殺菌力ニ關スル研究」(獨文)、參考論文、(1)血清ノ耐熱性殺菌物質ニ就テ(獨文)、(2)發疹瘰癧扶斯ノウイルス、フェリックス氏反應ニ就テ、(3)發疹瘰癧扶斯ノウイルス、フェリックス氏反應及診斷液ニ就テ、(4)變形菌ノ溶血力ニ就テ(獨文)、(5)「バラチフス」A類似菌ニ就テ(獨文)、(6)「バラ」瘰癧扶斯B族特ニ「バラ」瘰癧扶斯B菌ト肉類中毒源菌トノ鑑別方法ニ就テ、(7)胃痛ヲ合併セル「アカントーデス、ニグリカンス」ニ就テ。

佃 毅

△岡山醫大稻田内科教室にて、昭和八年七月迄研究に没頭しつゝありし佃毅博士は、昭和二年岡山醫大の出身にして、卒業後母校にて研究の結果、昭和八年五月學位を受領せり、教室を勇退して以來、現在は鳥取市中町四三に住す。年齢未だ少壯、馳て展開せんとする前途は大に注目せらる。

△學位主論文は「大脳皮質及間腦ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)肺結核患者ノ血液所見、(2)「ビタミン」B缺乏時ニ於ケル吸收障礙、(3)中樞神經系統ノ血清無機物質ニ及ボス影響なり。他の論著中の「中樞神經系統ノ水分並ニ含水炭素代謝ニ及ボス影響」は博士會心の作と見るべき也。香川縣香川郡鹽江村の人、明治三十七年生る、年齒未だ三十有二歳の少壯也。

伊藤久榮

△造幣局病院長として令名ある伊藤久榮博士は、大阪醫大系の錚々たる内科臨床家として既に定評あり、當世浪速診療界に逸すべからざる名醫博たる一人物也。氏は長野縣諏訪郡豐田村の出身にして、明治二十八年生る。大正九年大阪醫大を卒へ、直ちに同學副手囑託を兼ねて、附屬病院醫員として楠本内科勤務、十年十一月任助手、十一年八月同大學研究科入學、十五年四月迄病理學專攻、同年七月母校にて學位受領、同年七月より再び楠本内科勤務、昭和二年以來造幣局病院長として今日に及ぶ。寫眞を趣味す、温厚の紳士にして、學究的眞摯なる臨床家として徳望あり。

△學位主論文は「家兎鳩及家鶏ノ脚氣様疾患ニ關スル研究」にして、參考論文なし。本論文は家兎及鳥類の脚氣様疾患に就て、五編に分ちて研究し「ヴァイタミン」B需要量及消費量の根本問題を解決し、進んで人類脚氣の病原論に及ぶべきものなり。大阪市北區新川崎造幣局官舎九〇に住む。

△學位主論文は「家兎鳩及家鶏ノ脚氣様疾患ニ關スル研究」にして、參考論文なし。本論文は家兎及鳥類の脚氣様疾患に就て、五編に分ちて研究し「ヴァイタミン」B需要量及消費量の根本問題を解決し、進んで人類脚氣の病原論に及ぶべきものなり。大阪市北區新川崎造幣局官舎九〇に住む。

向野定一

△福井縣敦賀港末廣四八に向野醫院あり、一般内科、理學的診療及レントゲン科を専門とす。院長向野定一博士は金澤醫大派の名醫博たる新人にして、母校の恩師たる現金澤醫大教授山田詩郎、行徳健助、谷野富有夫博士等指導の下にて研究せり。

△主論文「胸腔内吸入瓦斯ノ變化ニ就テ知見補遺」及び參考論文、(1)肺結核ノ人工氣胸療法及二三ノ知見補遺、(2)肺結核ノ赤血球速度ノ知見補遺、(3)肺結核ノ氣胸療法經過中ニ於ケル血液像及赤血球沈降速度ニ就テ、(4)墜道内ニ起ル急性煤煙中毒例、(5)實際的人工氣胸ニ於ケル血液像ニ就テノ補遺、(6)「アマーバ」赤痢ノ地方的散在性ニ就テ、(7)閉鎖性氣胸ノ胸腔内症ノ變化、(8)「バラ」K菌ニヨル症例を完成して金澤醫大より學位を獲得せり。

△博士は大正十二年金澤醫專卒業後、金澤醫大第一内科にて研究、昭和二年四月福井縣敦賀町敦賀病院副院長兼内科主任勤務、同六年以降金澤醫大内科にて研究、同八年六月學位を授與せらる、同十年三月敦賀病院を辭し現地に開業今日に至れり。

△福井縣敦賀郡栗野村金山の人にして、明治三十二年生る。研鑽多年の後、漸く學究生活より離れて以來、診療界に進出して開業日尙淺きも、拮据匪勉、孜々營々として獨自の地盤を開拓するに餘念なく、手腕、聲望相俟つて益々人氣を獲得し、堅實なる發展と共に日増盛況を呈しつゝあり。

西田芳雄 △埼玉縣熊谷市熊谷に内科専門を以て著聞する西田病院あり、院長西田芳雄博士の診療所なり。開業古く、圓熟せる手腕は、多年の聲望と相俟つて益々遠近の人氣を吸收し、今や牢固たる地盤を有し一流に在り。氏は現住地の出身にして、明治二十四年生る。埼玉縣立熊谷中學を経て、大正三年東京慈惠會醫專を卒へ、直ちに東京慈惠會醫院外科助手を被命、高木喜寛博士に就き修業、四年同醫院を辭し、埼玉縣熊谷市に開業、同年十二月北里研究所第一回講習修了、六年同所研究生として志賀潔博士に就て細菌學を專攻す、七年九月渡米、直ちにシカゴ、ホスピタル、カレッヂ、オブ、メヂシンに入學、八年四月同校よりドクトル、オブ、メヂシンの稱號を授けらる、同年五月ミシガン大學にて血清學を專攻す、同年十二月ニューヨーク州ドルドゥ、サナトリウムに於てベトロフ博士の下に結核免疫學を專攻す、次で北米、カナダの諸醫大を見學し、續て歐洲に渡り英、佛、獨諸醫大學を見學し、九年十一月歸朝す、爾來再び開業、十一年東京慈惠醫大醫化教室研究生として永山武美博士に就き醫化學を專攻し、十五年八月慈惠醫大より學位を受領す、爾來専ら診療に従事し今日に至る。

△學位主論文「「ヒヨリン」ノ生化學的研究」參考論文、(1) 微毒血清診斷ニ於ケル永室應用法ノ價值、(2) 腦脊髓液検査ニ於ケル膠様金試験及「マスチック」試験ノ價值。

村木金之助 △太陽生命保險株式會社醫務課主任にして、傍ら東京市神田區東今川町一に於て自宅開業し、村木十善醫院長たる村木金之助博士は、東京慈惠醫專出身の内科學者にして特に心臓、腎臟を最も得意とし、又藥理學の造詣深し、斯間主なる指導教授は松山陽太郎、石川雄三郎、板倉武等の諸博士にして、慈惠醫大より學位を獲得せる斯科近來の名醫博也。今や獨特の新手腕を發揮して診療に最善を盡すに餘念なし。其の最も得意とする心臓、腎臟、

の領域に就ての打診振は特に好評にして、益々大衆の人氣を吸收し、堅實なる發展と共に日増盛況を呈しつゝあり。

△博士は東京海城中學校を経て、大正十四年東京慈惠會醫專を卒へ、直ちに東京慈惠會醫大内科助手拜命、傍ら同年五月日本橋區濱町見龍堂内科醫院(矢尾板四郎博士院長)醫員に就職、次いで翌十五年四月東京慈惠會醫大内科教室より同大學藥理學教室に轉勤、同教室助手拜命、昭和七年二月太陽生命保險株式會社醫務課主任就職、傍ら頭書の醫院開業今日に至る、同八年六月教授會通過、八月慈惠醫大より學位を授與せらる。

△主論文は「「ピラツロン」誘導體ノ止血作用ニ關スル實驗的研究」にして二篇より成る。參考論文は、(1) 諸種内分分泌腺製劑ガ甦生塞肝臟血管並ニ分泌ニ及ボス影響ニ就テ、二篇、(2) 「ピツイトリン」ノ肝臟血管並ニ分泌ニ及ボス研究知見補遺二部より成る。

△感想に曰く「現代の醫學に對しては特筆すべき感想なきも、近時非醫者の治療、醫師類似の行爲盛となり、爲めに正規の治療を亂し救はるべき人命をも救へざる事往々あり、寒心すべき事なり、醫師界に於ても特に熟慮を願ふ」云々。近來同感の士頗る多く、醫師會廓情の叫び、漸く酣ならんとする秋、傾聽すべき清涼劑として特に注意を可要也

△三重縣一志郡戸木村村木常吉の三男にして、明治三十三年生る。年齒未だ三十有六歳、少壯の意氣益壯んにして研究心に富む、物事に熱心にして一度び思ひ立ちたる事は、萬難を排しても徹底的に目的を貫徹せしむる點は、博士の長所と見るべき也。而して其の診療振りの忠實にして熱誠克く親切を盡す所は篤き信望を博す。若し強めて其の短所を指摘せしむれば、性來の短氣は醫師として又現代社會人として時に或は自己の損失を招く嫌なきか。研究以外の趣味としては歌舞伎見物、散歩、旅行等を好む。

富澤 鍾

△名古屋市東區杉ノ町三ノ一内科専門富澤醫院長富澤鍾博士は、今や中京診療界に於ける内科の

大家として矚目せらるゝ逸物也。氏は長崎縣東彼杵郡大村の人、明治二十一年東京にて生る、明治四十三年愛知縣立醫專を卒へ、直ちに縣立愛知病院神經精神科に入り北林博士に師事して神經精神學を研究し、大正二年九月同院の命に依り九州帝大第二内科に入り、武谷廣博士に就き神經病理及び内科一般を研究す、三年十一月歸院し、五年三月辭職開業す、十年五月より愛知醫大勝沼内科教室に入り勝沼精藏博士の指導の下に實驗病理の研究に従事す、十五年九月愛知醫大にて學位受領、同年五月より歐洲を漫遊諸國大學病院を歴訪し見學する事七ヶ月、昭和二年歸朝以來専ら診療に従事し今日に及べり。

△學位主論文は「心嚢腔ノ吸收ニ關スル實驗的研究」なり。研究と醫療そのものは、博士の最も趣味とする處にして終始克く其の事に勵精して亦他事を顧みず、以て醫師の本分として自ら楽しむの人也。

幸島春夫

△北海道根室町宇綠町二丁目有光病院内科に在る幸島春夫博士は、千葉醫大派の新手腕家としての聞え高く、今は最も努力奮闘を要する時に在り。學歷よりすれば、二高を経て、昭和三年同大學を卒業するや、直ちに母校の佐々内科に勤務の傍ら佐々貫之教授指導の下に研究、同八年十二月名古屋市愛知診療所（現在名古屋病院と改稱）院長に就任、同九年六月北海道根室町有光病院内科に勤務今日に至れり、其間昭和八年十月母校より學位を受領せり。

△學位論文は「離反射ニ關スル研究」にして、參考論文なし。蓋し本論文は氏が論著中の傑作にして、氏が會心の著と見るべきもの也。千葉縣香取郡東條村船越幸島清治の二男にして、明治三十三年生る。學究生活より離れて診療界に躍進せる博士や、日々孜孜として臨床に勵精し希望ある將來に期する所あらんとす。年齒未だ少壯、潑刺たる意氣と共に前途の活躍を矚目せらる。スポーツに趣味を有し、音樂を愛好し、又た盆栽に親しむ。北海道根室町宇清隆町

一に住む。

吉川新次郎

△大阪市東區澁川區十三東之町一四二吉川内科病院院長吉川新次郎博士は、和歌山市十二番町出身、明治二十六年生にして、大正六年府立大阪醫大を卒へ、同時に大阪市立刀根山療養所醫員を被命、約五年在職の後同十一年辭す、斯間主として肋膜炎の研究に従事す、同年大阪醫大研究科に入り村田教授指導のもとに病理學の研究に従事す、同十五年研究科を退學して、大阪市に開業診療に従事す、同年五月大阪醫大より學位を受領す。開業既に十有餘年を閲し、多年の聲望、手腕と相俟つて今や堅實なる地盤を有し、好評噴々の裡に抜くべからざる繁昌を極む。文藝趣味の人也。

△學位主論文「硅酸鹽或ハ硅酸ノ試食及ビ注射ニヨル實驗的「アミロイドセ」ニ就テ」參考論文、(1)咯血ノ副因ニ就キテノ新発見、(2)肋膜炎ノ病理ニ關スル實驗的研究、(3)肋膜炎ノ病理ニ關スル實驗的研究、(4)肋膜炎ノ病理ニ關スル實驗的研究、(5)藁灰飼養ニヨル家兎「アミロイドセ」ニ就テ。

桑野 佐源太

△東京市京橋區木挽町南胃腸病院副院長桑野佐源太博士の名聲は、胃腸病の大家として世人の既に周知する所也。氏は福島縣安達郡杉田村大字館野の人、明治二十四年生にして、東北學院普通部、二高を経て、東京帝大に進み、大正八年醫學部を卒へ、九年同學衛生學教室に入り細菌學專攻、次で稻田内科教室に轉じ副手となり内科學專攻、十三年七月任同學助手、十四年四月同教室を辭し直ちに東京市南胃腸病院副院長に就任し、現在に及ぶ其間昭和二年四月東京帝大より學位を受領す。繪畫、旅行、乗馬を趣味す。南大曹博士は妻の叔父なり。

△學位主論文「バクテリオファージュ」ニ關スル研究、(1)所謂 Mischbacteriophage 二就テ、(2)定量諸法ニ對ス

ル批判、並ビニ余ノ定量法ニ就テ、(3)「バクテリオファージ」増殖作用ニ關スル知見補遺」參考論文は、(1)口唇「ヘルペス」病原體ニ關スル實驗的研究、(2)「プロタミラーゼ」ノ「バクテリオファージ」誘發作用ニ就テ。麴町區上二番町四に自宅あり。

大井 司

△臺灣高雄醫院長兼内科醫長大井司博士は、宮城縣桃生郡和淵小池千代治の三男、明治十八年生にして、後ち同縣黒川郡吉岡町醫師大井胤七の養嗣子となる。仙臺二中を経て、仙臺醫專に入り、明治四十四年之を卒へ、直に公立登米病院醫員、次で大正二年東京帝大青山内科介補を経て、臺灣總督府醫院に入り、臺中、臺南醫院に勤務し、同十三年醫院醫長となり花蓮港醫院長に補せられ、昭和二年依願免官、直に熊本醫大明石内科に入り研究、次で東北帝大に轉じ、加藤内科に研學、同年三月九州帝大にて學位受領、同三年再び任臺灣總督府醫院醫長、嘉義醫院長拜命、次で現職に赴任今日に至る。多趣味の人にして和歌、讀書、寶生流謡曲、碁、カルタ、寫眞、何れも大好き、殊に運動は最も好む所にして、野球、庭球は自らやり、其他の運動何んでも好まざるものなし、鵬洋は其號也。
△學位主論文「「バランチヂウム」腸炎及び大腸「バランチヂウム」ノ形態並ニ發育ニ關スル研究」參考論文、(1)臺灣人ニ於ケル鉅形口蟲ノ寄生ニ就テ、附鉅形二口蟲第二中間宿主ノ追加、(2)肥大吸蟲ノ日本人寄生例ニ就テ並ニ人體及豚ニ於ケル本蟲ノ感染徑路に就テ、(3)「マラリア」ニ對スル「アンチモン」劑ノ治効ニ就テ、(4)「アメーバ」嚢子ノ簡單ナル染色法ニ就テ。臺灣高雄市山下町四ノ二に住む。

中村善雄

△神奈川縣七里ヶ濱惠風園療養所長として令名ある中村善雄博士は、神奈川縣鎌倉郡腰越津村の人、明治二十五年生にして、第一高校を経て、大正十一年九州帝大を卒へ、任九州帝大助手、十三年依願免本官、同

學大學院入學、後藤教授、小野寺教授の指導を受く、同年八月副手囑託、十五年五月大學院退學、引續き小野寺内科教室にて内科學研究、昭和二年依願副手解囑、同年二月母校にて學位受領、次で實父經營の七里ヶ濱惠風園療養所に入り副長に次で所長として今日に至る。泰典は其號にして、謡曲、狩獵を趣味す。篤實温厚の紳士にして、肺結核治療界に逸色せる斯科の大家として既に定評あり。

△學位主論文「脂肪類ノ運命ニ關スル肺臟及肝臟ノ機能ニ就キテ」、參考論文、(1)肺臟「リパーゼ」ニ就キテ、(2)「キニーネ」ニ對スル血清「リパーゼ」敏感度ニ關スル疑義、(3)縦膈竇ニ發生セル皮囊腫ノ一例、附摘出セル内容ノ化學的分析成績、(4)血液及臟器ノ脂肪類微量定量法。神奈川縣鎌倉郡腰越町三三九に自邸あり。

平井 進

△高知市帶屋町にて内科専門を以て開業せる平井進博士は、京都府立第一中學校、第八高等學校を経て、大正七年十一月京都帝大醫科大學卒業、同八年一月同大學醫學教室副手、助手となり、同十三年同大學辻内科副手勤務、同十四年六月學位受領、同十五年一月高知縣宿毛町宿毛病院長に就任す、次で高知縣須崎町昭和病院、高知市片山病院を経て現地に開業今日に至れり。

△主論文「米胚子中ノ脂肪研究」、參考論文、(1)米糖中ノ糖類ニ就テ、(2)米胚子ノ「プリン」鹽基ニ就テ、(3)「デザミン」及「ヌチリールテカゼイン」ノ素分布ニ就テ。

△高知縣安藝郡奈半利町の人、明治二十五年生。自己の才學を衒ひ、傲慢の態度見ゆ、自己の人物を過信して人を責め、己が非を知りて後も猶且つ反省せざる人の様に思はる。

佐々木謙

△多士濟々たる帝都診療界を睥睨して、各科博士に就ての専門的認識を得んとするも又た容易な

らんや、茲に物色打診して品階を試みんとする佐々木謙博士は如何なる人物なるか。東京市本所區東兩國一ノ二〇に佐々木病院あり、内科、外科、呼吸器科、小兒科に別れ、内部の設備整ひ、隔離室完備す。院長は佐々木森男醫學士にして内科、外科を擔任し、佐々木謙博士は副院長として氏の最も得意とする呼吸器科を擔任す。其の玲瓏たる打診の好評は、博士獨特の手腕と相俟つて益々人氣を集中し、院長多年の聲望と共に日々繁榮を持続しつゝあるもの、博士の負ふ所又大なりと云ふべし。

△博士は東京帝大醫學部の出身にして、大正九年卒業後、恩師稻田龍吉博士及び三田定期博士指導の下に、内科学及び血清學を専攻し、又た嘗て獨逸に留學して研鑽大に得る所あり。歸朝後、學位論文「血液、肝臓及び脾臓」エステラーゼ」ノ特異性ニ關スル血清化學的研究」を完成し、母校へ提出して昭和四年六月學位を受領せり。

△博士は東京市の人、明治二十六年生れにして、當年不惑に入る三歳、學究的濃厚の紳士にして、眞面目なる臨床家としての人格者也。其の専門的學識の該博なるは言はずもがな、臨床的多年の實驗に富み、今は年壯の意氣と共に學識、手腕、人格揃つて圓熟の域に入り、篤實敦厚なる性格と相俟つて一段の貫祿を加え、最も腕の冴え盛りにて活動の盛期にあり。久しく前記の佐々木病院に精勤して、克く院長を補佐し唯だ院是を是事として誠心誠意以て仁術の最善を盡すに餘念なし。古き歴史と共に同病院の今日の隆盛を見るも其の由つて來る所以を首肯せしむ。

小泉 透

△京都醫博界は多士濟々として頗る人物に富む。茲に品階せんとする小泉透博士は、京都市左京區田中馬場町一に自己の診療所を設け、其の専門とする内科、小兒科を標榜して日々診療に勵しみつゝあり。博士は京都府立醫專出身の内科及び小兒科學者にして、特に呼吸器病を最も得意とし、京都府立醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。嘗て瑞、埃に留學し、研鑽多年、既にして該博なる學識を有し、臨床にも堪能にして永年の經

験に富む、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、打診の好評と相俟つて日増盛況を呈しつゝあり。

△博士は明治四十四年京都府立醫專を卒へ、卒業後同附屬病院内科勤務、大正十二年一月より同十四年一月迄歐洲留學、主として瑞國ベルン大學細菌學教室にてゾーベルハイム教授指導の下に研究、同年ドクトル、メヂチーネの稱號を授與せらる。次で埃國維納、血清治療研究所にてレーウエンスタイン教授に師事して研究す、歸朝後京都府立醫科大學微生物學教室へ入室、常岡教授に師事す、昭和三年より現住地開業、翌四年七月學位を授與せらる。

△學位主論文は「『デフテリ』菌屬ノ生物學的研究」にして、參考論文は、(1)異性抗原及抗體ニ關スル知見補遺其一 粘液性連鎖球菌ノ異性抗原性ニ就テ、(2)其二フ氏抗原ノ血清耐性ニ關スル實驗、(3)抗酸性菌ノ「アルカリ」耐性ニ就テ、(4)血行中ニ於ケル抗酸性菌ノ運命ニ就テ、(5)膽汁中ニ於ケル結核菌ノ排泄ニ就テ、(6)實驗上「クリソオルガン」ノ治癒機轉ニ就テの六篇なり。

△感想に曰く「現今醫學博士濫發の非難ありて廢止論改正論等論議せられつゝあれど、今日日本の醫學の進歩が先進國を凌駕する勢だ、畢竟之學位制のある賜だ、教授たる者宜しく公平に論文を審査し、惜まずドシノ學位を授與すべきだ、唯博士が今日普通開業醫に比べて兎角世間の非難を受けるのは、非人格的の者や又學位の肩書をのみ利用するからだ、依りて博士たる者人格を重じ、人並以上の専門科目を修得し、然後開業すれば世界は博士を要望する事請合だ」云々。

△博士は京都府與謝郡西辻小泉詠歸の二男、明治十九年生る、當年取つて五十歳也。年壯の意氣益壯んにして、手腕愈々圓熟の域に達して一段の重望を加ふ。殊に博士の特徴とする所は、學位に伴ふ人格の向上尊重を高調する一人者にして、常に徳操の堅持を志して克く自ら品性の陶冶に勉むるの點にあり、好箇の臨床家として其の人格を敬慕すべき也。趣味として特記すべきものなしと雖も、「醫は仁術也」をモットーとして終始醫療に専念勵精し、以て自己の

天職として趣味とするの概あり。春秋猶豊富にして洋々たる前途は、博士の將來を語るに綽々として餘裕あり、幸に健康と共に益々發奮活躍あらん事を切望す。

齋藤 齊

△大阪市東區京橋二ノ三五にて内科専門を以て獨立開業せる齋藤齊博士は、大正四年京都帝大醫科大學を卒業後、暫く朝鮮兼二浦三菱病院に勤務せしが、後京都帝大藥物學教室に入りて研究の結果、『卵黃性腎炎並ニ「アルカリ」ノ影響ニ就テ』を完成し、大正十三年二月學位を受領す。學位受領後、大阪慈惠病院勤務の後大阪市現住所に開業今日に至れり。

△福井縣の人、明治二十年生る。信義に缺け、誠意なき人に非らざるか。一言録して博士の反省を促すと共に、諸賢の批判を求めんとす。

豊島勝夫

△札幌市北八條西一丁目に内科、小兒科を標榜して、大正十二年獨立開業せる豊島勝夫博士は、東北大系の内科、小兒科學者として錚々たるもの、母校の恩師熊谷岱藏博士の愛弟子にして、研學多年、北海道帝大より學位を得たる新進の名醫博として知らる。今や該博なる學識と共に臨床的經驗に富み、打診の好評は博士の性格と相俟つて益々人望を博し、日増繁榮の盛況を呈して一流に在り。

△博士は大正五年東北帝大醫學專門部卒業後、直ちに附屬醫院熊谷内科に勤め、同七年より日赤北海道支部病院に轉勤、同十二年札幌市にて開業、昭和三年より北海道帝大醫學部專攻生として法醫學教室及び小兒科教室にて研究、同六年九月北海道帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は「一新寒性溶血毒ノ研究」にして、參考論文は、(1)諸種色素ノ血球凝集性ニ就テ、(2)諸種全屬膠質及二三

膠質ノ血球凝集性ニ就テ、(3)化學的並ニ植物性血球凝集ニ對スル「ヘモグルチノイド」ノ態度ニ就テ、其他三篇あり。

△感想に曰く「輓近經濟界の不況は我が醫業界を壓迫し、吾人開業醫の生活は日に日に脅威を感じつゝあるが、更に他方には官公立の實費診療所、相談所、施療病院、其他産業組合法による病院等の施設が簇出し、又政府は數年前より健康保險法を實施して醫業を壓迫し、然も次期議會に於て現行健康保險法の範圍に大擴張を行ひ、又新に職員健康保險法を制定せんとして居る。斯くなりては現在の窮狀に更に拍車を掛けることとなり、吾々開業醫の診療する患者の大半は保健被保險者となると云ふ奇現象を呈し吾々の生活は根本から破壊せらるゝこととなる譯である。吾人醫師が社會に於て、重大なる責務を帯び寢食を忘れて日夜社會衛生の爲めに活動し居る以上其の大半を占むる開業醫を斯くまで壓迫することは政府當局者が社會政策的見地のみより見たる偏見と云ふべく九千萬國民の保健上由々しき問題である。而してこれが現在の社會制度に於て己むを得ざる趨勢なりとせば茲に考ふべきは醫業國營論である、吾人は將來醫業國營の實現を望むや切なるものである。敢て當局者の一考を求む」云々。

△博士は宮城縣仙臺市の人、明治二十七年生る、當年不惑に入る二歳、手腕漸く壯熟して獨特の異彩を放ち、最も奮闘活躍の時代に入る、醫業國營論者の一人にして、多大の抱負を持し該博なる識見を有す。平生刀圭甚だ多忙、誠意親切を以て終始し奮闘的努力も日尙足らざるの概あり。學究的濃厚の紳士にして、臨床家として良醫たるの特徴を具備す。治療界の前途暗澹たるの秋、幸ひ健康にして、爲斯界益々健闘奮盡あらん事を囑望して止まず。

田村實眞

京畿道立水原醫院長として勵精しつゝある田村實眞博士は、慶大派の少壯醫博にして内科臨床家として錚々たる者也。學歷より見れば、大正十五年三月慶大醫學部卒業、直ちに朝鮮總督府醫院第一内科に入る、昭和二年六月京城帝國大學醫學部助手、岩井内科勤務、同六年十一月慶大にて學位受領、同七年一月朝鮮道立醫院醫官

京畿道立水原醫院拜命今日に至る。斯間京城帝國大學醫學部第一内科講座教室岩井誠四郎教授の指導を受け内科学を専攻す。年齒未だ少壯にして潑刺たる前途を有し、將來有爲の臨床家として頗る春秋に富む。

△學位主論文は「肝臓ノ食鹽及水分代謝調節機能ニ關スル研究」にして、其一及其二の二篇より成る。参考論文は、(1)「アドレナリン」及「インスリン」ノ血液内鹽素及水分ニ及ボス影響、(2)腸「チフス」患者ニ就テノ研究、(3)體溫上昇ト血液内水分及鹽素ニ關スル臨床的及實驗的研究、(4)體溫變動ト水分及鹽素代謝トノ關係特ニ體溫下降トノ關係、(5)體溫變動ト水分及鹽素代謝トノ關係特ニ解熱トノ關係、(6)體溫變動ト水分及鹽素代謝トノ關係特ニ皮膚ニ於ケル變化ニ就テ、(7)體溫變動ト水分及鹽素代謝トノ關係特ニ外氣溫變化トノ關係、等なり。

△出身地は廣島縣豊田郡大崎南村にして、田村和一の二男、明治三十四年生る。スポーツを趣味する丈に健康にして少壯の意氣益々壯也。性來几帳面にして意志強く、事に當るや熱心克く勉め徹底的に貫行する人也。向後一層の努力を要するや益々切なるの秋、折角の奮闘活躍を囑望して止まず。朝鮮京畿道水原邑山樓里官舎に住む。

海輪 十二

△秋田縣横手町四日町下に内科、レントゲン科、理學的治療科を専門とする海輪醫院あり、院長海輪十二博士の經營にして、開業拮据拾年餘、堅實の地盤を有し、當地方診療界に於ける斯科の大家と仰がれ、多大の信望を博す。氏は秋田縣師範講習科修了、其後六ヶ年間小學校教員となり獨學にて二高へ入學、次で京都帝大醫科大學を明治四十四年卒業後、引續き同大學内科副手として三ヶ年間勤め、其後秋田縣公立横手病院勤務の後、現住地にて開業今日に至る、斯間昭和六年十二月京都帝大にて學位を授與せらる。

△學位論文は「ケダニ」病ニ關スル研究」なるが、本研究に就ては「ケダニ」病本邦の權威田中敬助博士の親しき指導を受け研鑽大に得る所あり。専門は内科を以て立ちたるも、最も得意とするは「ケダニ」病及び悪性腫瘍なりとす。氏は秋田縣平鹿郡横手町の出身、海輪利道の四男にして、明治十二年生る。稀に見る篤學者にして、氏が小學校教員より奮起して獨學獨行を貫行して終に克く學位を獲得せる閱歴は燦として輝き、立志傳的篤學者としての範を示すに足り、頂門の一針として後進誘掖の活資料とすべき也。博士の年齒今や知命に入る七歳、益々元氣にして日々診療に勵み、業餘猶研究に興味を集中して精研大に勉むる所あり、學究的臨床家として茲に推獎する所以、著者は更めて敬意を表する者也。

す。氏は秋田縣平鹿郡横手町の出身、海輪利道の四男にして、明治十二年生る。稀に見る篤學者にして、氏が小學校教員より奮起して獨學獨行を貫行して終に克く學位を獲得せる閱歴は燦として輝き、立志傳的篤學者としての範を示すに足り、頂門の一針として後進誘掖の活資料とすべき也。博士の年齒今や知命に入る七歳、益々元氣にして日々診療に勵み、業餘猶研究に興味を集中して精研大に勉むる所あり、學究的臨床家として茲に推獎する所以、著者は更めて敬意を表する者也。

工藤 文雄

△滿洲國熱河省在承德、承德國立醫院長として多大の信望を博し、滿洲國診療界の爲め努力貢獻しつゝあるは工藤文雄博士也。博士は南滿醫學堂出身の篤學者にして、京都帝大より學位を獲得せる内科界の名醫博たるに耻ぢず、特に滿洲醫大教授戸田茂博士に就て研究せる結果、醫學の造詣深く、又新陳代謝に關する研究に多大の興味を有し獨特の手腕を有す。今や多年蘊蓄せる臨床的手腕を發揮して益々人望を博し、至誠以て不斷の努力精進を續けつゝあるは甚だ多とすべき也。

△博士は大正十四年南滿醫學堂卒業後、直ちに滿洲醫大醫學化學教室に副手として勤務、同十五年二月任同學助手、昭和四年同大學專門部講師兼務、同五年滿大講師兼同專門部助教授を命ぜらる、同七年二月學位受領、同年四月大連醫院内科勤務、次で現職に轉じ今日に至る。

△學位主論文は「チアン」ノ生化學的研究」にして七篇より成る。参考論文は、(1)「ロダン」ニ關スル研究(二篇) (2)膠質性「バラヂウム」ノ生化學的研究、(3)鮫魚精蟲ノ脂肪酸ニ關スル研究、(4)酵母ノ脂肪及ビ類脂肪新陳代謝ニ就テ等なり。氏の論著中「チアン中毒時の血糖誘出機轉」に關するもの又は「脂肪酸の研究」は氏が最も熱心に研鑽せるものにして氏が會心の著作と見るべき也。

△博士の感想に曰く「臨床醫師界に入ると自己の研究課目など全く眇たるもので、大海に投じた石の様なものである。智識の浅薄さを嘆くのみ、更に更に勉強しなければならぬ、ぜいたくを言ふと、も少しのんびりと研究三昧に入りたく思ふのです」云々。又謙遜なる博士の書簡の一節に曰く「大事業の御完成を祈り上げます。醫博は澤山で嘸御苦勞と存じます、雨後の竹の子の様で、井關先生の「博士録」に掲載せられたる方が羨ましい時代がありました、今は實際自分の貧弱さが耻かしい位です、先賢諸學者と一緒にされましては。終りに御成功を祈り上げます」云々、以て博士の爲人を窺はれ、著者は更めて敬意を表する者也。

△氏は長野縣小縣郡富士山村戸主藤文太の長男にして、明治三十二年生る。學究的温厚の紳士、年齒未だ三十有七歳、熱心なる研究家にして、平生刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、臨床の餘暇讀書精研日も猶足らざるの概あり、又音楽を聴くことを趣味とす。賦性眞面目にして、人に對するに甚だ親切なり。精研に餘念なき前途は猶頗る春秋に富む、折角の努力奮闘を祈るや切也。

荒川信次

△名古屋市民病院内科副部長として内外の信望を博し、日々診療に勵精しつゝあるは荒川信次博士也。博士は愛知醫大出身の内科學者にして、内科界現代の權威勝沼精藏博士の愛弟子として知られ、恩師指導の下に多年研鑽の結果、名古屋醫大より學位を受領せり。學究生活より巢立ちて未だ日尙淺く、診療界に躍進して以來、拮据勵精、今や獨特の手腕を發揮するに自由の立場に在り、向後の活躍と相俟つて有爲の前途を大に囑目せらる。

△博士は大正十一年五月愛知醫學專門學校卒業、直に同校勝沼内科勤務、同年九月愛知醫科大學入學、同十五年三月卒業、直に同校勝沼内科勤務副手拜命、昭和六年五月名古屋醫科大學助手拜命、勝沼内科勤務、同六年七月名古屋市技師拜命、名古屋市民病院内科勤務を命ぜらる、同七年二月學位受領、同八年二月同病院内科副部長を命ぜられ今日に至る。

△學位主論文は「網狀赤血球ニ關スル知見補遺」にして、參考論文は、(1)脊髄癆ト全聾トニ就テ(近藤新一共著)、(2)慢性「モルヒネ」中毒症ノ禁斷症狀ニ對スル硫酸「マグネシウム」靜脈内注射ノ觀察、(3)慢性酒精中毒症ニ對スル硫酸「マグネシウム」靜脈内注射ノ觀察等なり。

△氏は名古屋市中區南園町二丁目荒川鉞三郎の長男にして、明治三十年生る。少壯の意氣益壯にして研究心に富む、年齒漸く三十有九歳、今は働盛にて手腕壯熟と共に最も活躍の時代に入り、診療と研究とに趣味を集中して努力奮勉倦むことなし。學究的臨床家としての前途や頗る春秋に富む、幸ひ健康にして、益々精研活躍あらん事を囑望す。名古屋市中區南園町二ノ一三に住む。

野島泰治

△香川縣木田郡庵治村大島療養所長としての野島泰治博士の嘖々たる名聲は既に天下に著聞す。博士は大阪醫大系の名醫博にして、癩病の權威として其の大なる存在を認められ獨特の手腕を有す、特に其の最も得意とする癩及び癩の内外一般に渉る領域に就ては他の追隨を許さず、斯科界獨歩の觀あり。既に久しく斯界に忠勤を擢んで、癩療養の爲め懸命の努力精進を續け貢獻する所多し、多年の功績は言はずもがな、斯道の振興啓發上將來博士の力に俟つもの益々甚大なるを痛感するの秋、折角の奮盡活躍を囑望して止まざる也。

△博士は大正十年三月大阪醫科大學卒業、阪大産婦人科、大阪市立桃山病院醫員、大阪商船醫師、阪大實驗診療科、阪大醫化學等の醫員、副手、助手を経て、第三區府縣立外島保養院勤務、昭和二年六月第四區大島療養所に轉じ今日に至る。斯間昭和七年二月大阪醫大より學位を受領せり。斯間阪大緒方、古武兩教授、有馬賴吉、木内幹兩博士に就て指導を受くる所厚く、産婦人科、細菌血清學、傳染病、癩病を専攻し、特に癩及び癩の内外一般に長ず。

△學位主論文は「癩ノ血清反應ニ關スル研究」にして、五篇より成る。參考論文は、(1)煮沸血液ニ依ル疾病早期診斷

法ノ二方法(二篇)、(2)處女反應、(3)煮沸血液ニヨル痛腫ノ早期診斷反應、(4)癩ノ「リドノール」療法、(5)癩患者ニ行ヘル交感神經切除例、(6)癩患者ノ腦脊髄液ニ就イテ、(7)培養上ヨリ見タル癩菌ノ抵抗ニ就イテ、等なり。就中「煮沸血液ニヨル疾病ノ診斷法」は特に得意のものと見るべき也。

△感想に就て二三を披瀝して曰く、(1)恩師である島瀉教授が「治療のための醫學、醫學のための治療」と云ふことを常に唱導されて居りましたが現今の醫學教育に更に力強く反影せしめたものであると痛感します。(2)開業醫として苦い経験のある學者を大學教授たらしめたら、(3)内科醫たり得る婦人科醫外科醫は多いが時に應じ外科醫たり得る、内科醫は少い。外科醫たり得る内科醫養成に醫育教育の主眼を置いてもらひたいものです。

△廣島縣深安郡神邊町の出身野島德磨の二男、明治二十九年生にして、現在は大阪市北區絹笠町一四に本籍を置く。學究的溫厚の紳士にして、熱心なる研究家として其の今日あるは氏が面目を物語りて餘蘊なし。今や年齒漸く不惑に達して氏が腕は益々冴え、研究と癩療養に興味を集中して他に何等の道樂を有せず、一意専心、唯だ誠意誠實を盡して貴き使命を果たさんとする至誠の士たるを見る。賦性敦厚篤實、信義に篤く人に親切なり、又能く後進を愛し能く指導に力む。現代博士界に矚目すべき醫博人物として敬意を表し、茲に推獎す。香川縣木田郡庵治村大島療養所官舎に住む。

◇
大庭榮雄 △北海道應衛生技師大庭榮雄博士は、東北帝大の出身(大正十二年)にして、大正十三年北海道應衛生技師拜命、北海道帝大教授井上善十郎博士の指導を受け、北海道帝大より學位を得たる内科學者にして、細菌學、免疫學を得意とす。

△學位主論文は「Upon the Formation of the Bacterial (a)isense」云々、参考論文なし。「簡明傳染病解説」

は博士會心の著作と見るべき也。福島縣若松市榮町の人、大庭榮太郎の二男にして、醫學博士大庭眞咲の實弟なり。明治三十一年生る、當年三十九歳の少壯者、元氣潑刺として研究心に燃ゆ。萬事几帳面の質にて事務に缺くる處なし將來有爲の博士の前途や頗る春秋に富む、折角の努力奮闘を望むや切也。札幌市外圓山町四三三ノ四に住む。

◇
櫻井虎雄 △樺太惠須町王子製紙工場附屬病院に在る櫻井虎雄博士は、大正七年新潟醫科大學卒業、直ちに同校醫化學教室にて研究「副交感神經毒ノ血糖ニ對スル作用ニ就テ」を完成し新潟醫科大學に提出して、昭和二年十一月學位を受領せり。福島縣須賀川病院内科、樺太豊原、豊生病院内科等に歴任し次で現職に就任す。

△群馬縣の人、明治二十九年生る。博士に對する紛々たる世論の喧しき秋、博士の如きも三思反省の要なきか、著者は博士の爲め其の人格を甚だ惜む者也。

◇
島 誠 郁 △金澤市石屋小路十八に自己經營の診療所を設け、内科特に呼吸器を標榜して独自の領域に一路邁進し、年々歳々堅實なる發展を遂げ、今や抜くべからざる地盤を獲得して一流の位地を占め、悠々たるは島誠郁博士也。氏の學歴より見れば、明治三十五年十月金澤醫學專門學校卒業、同三十六年九月金澤醫學專門學校講師、同三十八年十月任陸軍二等軍醫(豫備)、同年十一月叙從七位勳六等單光旭日章、其後金澤醫科大學生理學教授上野一晴博士指導の下に研究し、昭和七年二月金澤醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「呼吸ノ變化ニ伴フ心搏頻度ノ變化ニ關スル研究」にして、参考論文は「兒童生徒ノ身長發育型ノ分類ニ就テ」外六編あり。氏は現住地たる金澤市の出身、島元恭の長男にして、明治十三年生る。溫厚なる學究的紳士にして、篤學者也。殊に特筆すべきは、氏が開業拮据幾星霜かの間、研學の念に燃え、診療の餘暇常に學を鍊り腕を

磨くに餘念なく、研鑽努力の結果、終に克く其の初志を貫徹せる點に在り、其の向學的精神と不撓の堅志、不屈の精力とは立志傳的篤學の士として、後進誘掖の爲め範を示すに足る。博士の齡今や知命に入る六歳、元氣益々旺盛にして、老熟せる獨特の手腕は一段の光彩を添ゆ。

吉田元昭

△佐賀縣東松浦郡有浦村吉田病院院長吉田元昭（舊名善晴）博士は、佐賀縣東松浦郡入野村大字鶴牧六五九吉田淺太郎の次男にして、明治三十六年生る。佐賀縣立唐津中學校、佐賀高等學校を経て、昭和三年四月九州帝國大學醫學部を卒業、直ちに同學部武谷内科教室副手及醫員となりて研究、竹谷廣博士の指導を受け七年五月學位を受領す、六年十一月私立吉田病院を創設し一般内科特に呼吸器病の治療に獨特の手腕を有し一流を占む。

△學位主論文は「結核ノ一新特殊診斷法ニ就テ」にして、參考論文は、(1)隨意性眼球震盪症ノ一例ニ就テ、(2)「AO」注射ニヨル末梢毛細血管内白血球ノ消長ニ就テ、(3)余ノ結核診斷法ノ特殊性ニ就テ、(4)「ツベルクリン」皮内反應ト余ノ結核特殊反應トノ比較成績ニ就テ等なり。

△感想に曰く、一、市或は市を有せざる郡には各科を綜合する市立或は郡立病院設立の必要あり。之により市或は郡内開業醫は相互に醫療の經濟化をなすことを得。二、醫療の普及平均化といふ立場より觀察して各村落には各々適合する條件のもとに村立病院或は醫院を設立する必要あり、或る地方には國庫補助の必要をも起るとしても實現したる。三、農村民の健康保健、能力増進といふ點より日本に極めて多い腸内寄生蟲の驅除を徹底せしむること。それにはA現在の便所を内務省獎勵の改良便所に改設するかB村費を以つて檢便しその結果驅除をなすこと。四、小學校中學校の學校衛生に努むること。五、一般人民に衛生思想普及の目的より小學校及中學校に衛生學の簡單なる學課を設けその教官には學校醫を當つること。六、結核性疾患殊に肺結核に對する理解が少いため患者及其の家族に對する周

圍の人々の態度は極めて非人道的である、故に本疾患に對する法令を設くる必要あり。

△年齒未だ三十有三歳、少壯の意氣に燃え、診療に熱心なり。性格より打診すれば、親切にして同情厚い長所のある反面に決斷力に乏しいといふ短所なしとせず、又負け嫌にて自己の主義主張を貫徹するといふ長所の反面には妥協性に乏しいといふ短所なしとせず。趣味としては寫眞を能くし、繪畫を好む。春秋猶頗る豊富にして、將來有爲の臨床家として向後の活躍を期待せらる。九州帝大教授岡田亮次博士とは親戚也。

於保泰造

△競争激烈なる帝都の診療界に割據して獨立開業せる於保泰造博士は、四谷區新宿二ノ五に診療所を開設、私立醫院としての内部を新裝整備し、博士自ら日々診療に勵精努力して治療界の爲め大に將來に俟つあらんとす。開業拮据日尙淺くも、氏が熱心なる活動振りと、博士獨特の手腕は打診の好評と相俟つて漸次独自の地盤を開拓し、益々人氣を吸収しつゝあり。博士は岡山醫專系の内科學者にして多年の經驗に富み、大阪帝大より學位を受領せり。光る學位は氏が仁術に一段の光彩を放ち、向後の活躍と相俟つて前途の發展を大に囑目せらる。

△博士は大正八年五月岡山醫學專門學校卒業、岡山市麻植内科病院、大阪市高安病院内科、神戸市天兒病院等に勤務大正十四年四月より昭和六年八月迄神戸市立救護院長として奉職、昭和四年二月より同七年三月迄兵庫縣立神戸病院醫化學研究室に於て研究に従事、同七年八月學位授與、同七年四月より同年九月迄大阪帝大醫學部小澤内科に於て内科學研究、同七年十月佐賀市にて内科開業、同九年八月上京現住所に開業今日に至る。斯間神戸の竹田正次博士、大阪帝大教授小澤博士、神戸の田村利雄博士の指導を受くる所多し。

△學位主論文は「尿中胆汁酸排泄ニ就テ」にして、(1)尿中胆汁酸測定方法ノ比較、(2)實驗的各種黃疸及ビ肝臟機能障礙ニ於ケル胆汁酸ノ尿中排泄ニ就テの二篇より成る。參考論文は、(1)血壓ト腦脊髄液壓トノ關係ニ就テ、(2) Ueber

Diegalleinsäurebestimmung in urin durch salagometer (3) 動脈硬化症ト「アチッド」鹽類等なり。
△佐賀縣小城町の人亡於保平三の四男にして、明治二十九年生る。年齒漸く不惑に達し、温厚篤實なる少壯の紳士也。内科學者として立てる博士は、特に醫化學の造詣深く、診療界に躍進して以來も醫化學及び生理學方面に關する検査と研究とに多大に興味を有し、今猶刀圭多忙の業餘此方面の研究を怠らず精研に餘念なきが如し。禁酒禁煙家にして格別趣味を有せず、唯だ診療と研究とに熱中して今も尙昨に渝らず、努力勵精日も尙足らざるの概あり。資性眞面目にして誠實を以て終始し、人に對して快活能く愛し同情に富む、又能く應答禮を重する禮儀正しき人也。學究的臨床家として將來の大成を囑望して止まず。

西郡彦嗣

△第一師團司令部軍醫部に在勤中の陸軍一等軍醫西郡彦嗣博士は、先年(昭和七年十二月以來)第六師團衛生班附として滿洲に派遣中活躍する所ありしが、今は内地に歸還して其の職務に勵精努力し、至誠報公の念に厚く大に將來に俟つ所あらんとす。氏は京都帝大出身の内科學者にして、母校より學位を獲得せる少壯醫博なるが、昭和二年京都帝大醫學部を卒へ、陸軍々醫となり、其後京大大學院に入學、内科學專攻、昭和七年十一月學位受領、歩兵第九聯隊附(伏見)、次で陸軍一等軍醫として、昭和七年十二月以來滿洲に派遣せられ、第六師團衛生班附として功績を擧げ、次で内地歸還以來東京第一衛戍病院附を歴て現職に在り。

△主論文は「有毒瓦斯ノ循環器ニ及ボス影響」にして、本論文は鹽素、「クロールピクリン」、燈用瓦斯及一酸化炭素、硫化水素瓦斯等の吸入が健康並に迷走神經切斷家兎の血壓並に電氣心働圖には如何なる變化を及ぼすかを検索せるものなり。副論文は、(1)迷路刺戟ト電氣心働圖(四篇)(戸田古一郎醫學博士と共同)、(2)結核性疾患ト電氣心働圖(二篇)(玉田政助醫博ト共著)、(3)電氣心働圖第三誘導ノ診斷學的價値、等なり。

△氏は千葉縣の出身、明治三十七年生る、年齒未だ三十有二歳の少壯也。熱心なる研究家にして、氏が三十歳未滿の年少を以て學位を獲得せるは、頭腦の明晰を物語るに足り、氏が躍如たる面目を此間に窺はる。性來謹直にして温厚、謙遜にして誇らず、淡々として己を虚うし腰の低い人也。春秋猶頗る豊富にして、向後の活躍と相俟つて一層の努力を要するや益々切なるを思ふの秋、折角の精研奮勵を望む。東京市世田谷區太子堂町七〇に住む。

宮本 延

△大阪市西成區千本通三ノ二に内科、小兒科専門を以て擡頭せる宮本醫院あり、院長宮本延博士の私立醫院にして開業古く、内部の設備を整へ感じを好くす、多年の聲望は博士獨特の手腕と相俟つて益々人氣を博め、堅實なる地盤の上にも年々歳々繁榮を増し、今や成功の位地を獲得して悠々たり。博士は大阪醫大系の錚々たる内科學者にして、母校の恩師楠本長三郎博士、小澤修造博士、故中川知一博士等に師事し造詣する所深く、大阪帝大より學位を受領せる名醫博としての手腕を認められ、浪速診療界に囑目せらるゝ一人物たるを失はず、其の今日あるも亦偶然ならざるを思ふ。

△博士は大正五年七月府立大阪醫科大學卒業後、引續き同大學内科及び生理學教室に各々一ケ年間研究に従事す、其後開業今日に至る、斯間昭和三年九月より同七年九月に至る間大阪帝大醫學部小澤内科に専攻生として研究に従事し同七年十一月學位を受領す。

△學位主論文は「臟器「リパーゼ」ノ固有性ニ就テ」にして、参考論文は、(1)各種動物赤血球ノ種屬固有性ニ就テ、(2) Note on the Permeability of the Red Corpuscles for Amino-Acids. (3) 胃及十二指腸潰瘍ノ統計的觀察等なり。

△出身地は長崎市油屋町にして、明治二十四年生る。幕末の國學者にして後伊勢神宮皇學館最初の教頭たりし敷田年治の生家豊前宇佐郡敷田、宮本家の出にして、外科の宮本哲博士の實弟也。年齒不惑に入る五歳、温厚篤實なる年壯

の紳士、學究的臨床家として多年の經驗に富み、圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮して多大の信望を博す、殊に特筆すべきは、氏が開業の傍ら懸命の努力精進を續けて研鑽克く學位を獲得せる點に在り、今や輝しき學位は氏の人格と相俟つて一段の貫祿を加え、氏が前半生史をして光彩陸離たらしめたり。研究は氏の最も趣味とする所にして業餘克く讀書精研に勉め、又時に謠曲に親しみ、圍碁を楽しむの餘裕を有す。

園田 幸雄

△東京市向島區吾嬬町西六ノ九一に内科特に胃腸科を以て著聞する園田醫院あり、斯科の新進大家を以て名聲を馳せたる園田幸雄博士の經營せる診療所にして、内科及びレントゲン科に適切なる内部の装置を完備す。開業拮据日向淺くも、博士獨特の打診の確にして親切なると、氏の熱心振りとは好感を以て迎へられ、好評嘖々の裡に益々人氣を吸收し、今や堅實なる独自の地盤を獲得して日々繁榮を極めつゝあり。氏は千葉醫專の出身にして、千葉醫大派の名醫博たる新進人物也。

△博士は大正十一年千葉醫專卒業、直ちに同附屬醫院助手となり第一内科勤務、同十四年千葉醫科大學副手となり、藥物學教室に入る、昭和五年一月再び第一内科に入局、同七年十一月學位を受領せり。斯間千葉醫科大學教授竹村正博士及び同病理學教授石橋松藏博士に就て研究す。内科を専門とし、特に胃腸科を得意とす。

△學位主論文は「胃官能ニ對スル「アルカリ」劑作用」にして、參考論文は「脾臟製劑「ミルツシン」ノ胃酸度ニ及ボス影響」なり。

△感想に曰く「己れが研究せんと欲せば必ず研究のみに邁進せざるべからず、片手間に醫科大學に在席して研究するは餘りに學問を輕視するものなり。學位所有者は學位所有者らしく人格知識共にすぐれざるべからずと思考す」云々、至言なる哉、學位に伴ふ人格の向上尊重を高調するの今日、大に人意を強からしむるの感を深うす。鹿兒島縣鹿兒島

郡伊敷村小山田の人、明治二十八年生る、故醫師園田戸兵衛の長男、兄弟四人皆醫師なり。光る學位は博士の人格と相俟つて博士の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。博士の年齒今や不惑に入る一歳、壯熟せる手腕は益々其の特技を發揮して最も得意時代に入る、猶春秋に富む前途の大成や更に大に囑望せらる。愛讀者にして讀書精研大に修養に勉むる所あり、又野球を趣味とす。生來正直生一本にして短氣の嫌なしとせざるも、眞面目なるところに氏の長所を窺はる、學究的臨床家としての人格者たるを敬慕す。

猪原 清

△金澤醫科大學助教授猪原清博士は、大正十三年金澤醫大附屬専門部の卒業生にして、同十四年同大學助手、昭和六年同學講師囑託、同七年同學助教授に任ぜられ今日に至る。此間松原(三郎)教授、早尾(虎雄)教授の指導を受け、昭和七年十二月學位を受領す。精神、神經病を最も得意とす。

△學位主論文は「腦栓塞ニ因ル臨床的所見並ニ病理組織學的變化ノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)腦軟化ノ實驗的研究、(2)諸種精神病患者ノ去勢學丸組織ノ比較的研究、(3)血液腦脊髓液間關門透過性ノ研究、(4)實驗癩毒(神經組織)ノ研究等なり。

△富山縣西礪波郡鷹栖村六三五の人、猪原清太郎四男にして、明治三十二年生る。年齒未だ三十有七歳にして少壯の意氣潑刺たり。讀書に趣味を有し研鑽怠るなし、意志強固にして思ひ立つた事は是が非でもやり通すと云ふ人なり。春秋猶頗る豊富、將來有爲の資に富む學究として、洋々たる前途を囑目す。金澤市河内町十一ノ四に住む。

古屋 貞造

△京都市下京區室町綾小路下ルに内科、小兒科、外科、皮梅毒専門を以て著聞する古屋醫院は、院長古屋貞造博士の經營にして、内科、小兒科を博士自ら擔任し、外科及び皮梅毒は別に擔當醫を置く、大正二年以

來開業拮据今日に及び、多年の努力勵精の効果空しからず、既にして抜くべからざる牢乎たる地盤を築き、圓熟せる博士獨特の手腕は益々其の妙技を發揮して餘す所なく、打診の好評は歳と共に繁榮をいや増し、今や悠々たる位地を占めて成功の域に在り。現に京都醫師會副會長、京都府工場衛生會幹事、京都市學校醫會幹事たるの肩書は、氏が社會的地位を表徴するもの也。

△博士は五高を経て、明治四十四年十一月京都帝國大學醫科大學醫學科卒業、同年十二月より大正二年迄同大學副手を拜命、大正二年一月現住所に開業、大正六年十一月京都府醫師會理事に選任せられ、同八年醫師法改正後再選せられ引續き重任今日に及ぶ、同九年京都府工場衛生會幹事に選任せられ重任今日に及ぶ、同十一年京都市學校醫會幹事に選任せられ重任今日に及ぶ、昭和三年京都市醫師會理事に選任せられ、同六年京都市醫師會副會長に選舉せられ現任、爾來京都帝大戸田教授指導の下に衛生學を研究今日に及ぶ、昭和七年十二月京都帝大にて學位を授與せらる。斯間内科學は中西龜太郎教授に、小兒科學は平井毓太郎教授に指導を受け、次で衛生學は戸田正三教授に指導を受けた。專攻學科は内科、小兒科にして、特に肺炎カタル、肋膜炎を最も得意とす。

△學位主論文は「兒童ノ服裝ト其氣候調節力ノ適否並ニ發育上ノ關係ニ就テ」にして、(1)中等氣溫ノ場合、(2)低氣溫ノ場合、(3)高氣溫ノ場合、(4)服裝ガ兒童ノ發育及ビ一般熱代謝ニ及ボス關係ニ就テ、の四篇より成る。參考論文は第一「和洋兩服ノ保溫力ニ對スル姿勢別觀察」にして、(1)中等氣溫無風並ニ有風ノ場合、(2)低氣溫、無風並ニ有風ノ場合(3)高氣溫、無風並ニ有風ノ場合(以上三篇)、第二「本邦兒童服ノ衛生學的研究」にして、(1)京都市ニ於ケル各小學校兒童ノ服裝ノ推移ト其季節、年齢並ニ社會別觀察、(2)小學校兒童服ノ形狀ノ差違ト身體發育ニ及ボス服裝上ノ疑義、(3)兒童ノ體格ト衣服重量トノ關係の三篇より成れり。

△山梨縣東八代郡御代咲村古屋逸齋長男にして、明治十六年生る、當年知命に入る三歳、學究的年壯の紳士にして、圓滿なる人格者也。氏の今日ある篤學と其の成業は、氏が前半生史これを物語りて餘蘊なく、殊に氏が開業の傍ら春風秋雨の努力研鑽を續け、終に克く其の堅志を貫行して學位を獲得せるは特筆に値し、臨床家としては稀に見る篤學の士として範を示すもの也。平生刀圭甚だ多忙なるに拘はらず、今猶研究に餘念なく、業餘克く精研修養相俟つて勉むる所あり、甚だ多とすべき也。研究以外の道樂としては觀劇を趣味す。親戚中に醫博古屋清、同藤森鶴龜齋、同成島正等あり。

林 芳 信

△東京の郊外、東村山の癩療養所たる全生病院々長としての林芳信博士の名聲は餘りにも有名な。而かも正式の學歷を有せざる氏が、醫師試験出身の身を以て、大正三年前記の癩療養所に入所して以來、當時の全生病院々長たりし現岡山國立癩療養所長光田健輔氏を常に補佐して、共に俱に恵まれざる人々の友として二十年來終始し、或時の如きは癩を嫌ふの餘り醫師が一人残らず辭任したる際なども、氏は獻身的に不幸なる病人達を慰め居りしが、昭和六年光田院長が岡山に榮轉するに及び、其の後を襲つて全生病院長となり、其間幾星霜かの間、努力研鑽、終始獨學貫行の後、未だ曾て何人も手を染めざりし一大業績たる論文、即ち「癩病患者骨變化ノレントゲン線ニヨル研究」といふ學位論文を完成の上、慶大醫學部へ提出せる結果、藤波教授主査の下に見事教授會を通過して、昭和八年十月學位を受領せり。要するに此の研究に依つて、從來癩では骨に變化が來ないと信じられる定説を覆へして、梅毒と同様癩も重症になれば骨に變化を及ぼすことを「レントゲン」にて確め、不治の難症として見離されたる癩の治療上に一大福音を與へ、學界に著しき貢獻をなしたるものと云はれ、其の學問的價値は既に學界に認められたり。氏は東京の人、明治二十三年生れにして當年不惑に入る六歳也。人格高潔、篤學者にして學者としての權威は既に早くより學界に認められ、同僚より多大の尊敬を受けつゝありしが、學位に光る研究は又一層その精彩を放て

り。東京府北多摩郡東村山村全生病院官舎に住む。

高文龍

△滿洲國四平街北三條通三十七番に於て外務省囑託醫官として開業し、當地方診療界の爲め奮盡活躍しつゝある、内科の新進大家高文龍博士は、朝鮮貴族にして京城醫專を優等にて卒業せる秀才として知られ、恩師たる現京城帝大教授徳光美福博士に師事して病理學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を獲得せる内科界近來の名醫博也。研鑽多年の學殖と共に卓越せる臨床的手腕を有し、今や研究室を離れて實地診療に精進して獨特の手腕を揮ひ、殊に朝鮮人居留民保護の爲め、渾心の至誠と親切とを以て力を盡し、大衆より多大の信賴と尊敬を受けつゝあるは大に人意を強からしむる所にして、博士の熱誠努力に對しては深甚の敬意を表すべき也。

△博士は大正九年京城醫專卒業後、引續き朝鮮總督府醫院内科にて研究し、後引續き京城帝國大學附屬病院にて研究し、昭和四年三年同大學病理學教室に轉じ、徳光教授の元にて内分泌學を專攻し、同八年十二月京都帝大より學位を授與せらる、同九年一月より外務省囑託醫官として四平街にて開業今日に至れり。

△學位主論文は「モルヒネ」習慣及禁斷症狀ノ成因ニ關スル一新考察」にして、參考論文は、(1)脾臟ノ赤血球ニ及ボス影響、(2)甲状腺機能ノ尿血清診斷法、(3)植物神經ト甲状腺トノ關係、(4)腦下垂體前葉ト甲状腺トノ關係、(5)「バルトネラ」貧血ト脾臟トノ關係、(6)「アルカリ」鹽類ト甲状腺トノ關係、(7)脾臟「ホルモン」ノ確定等なり。

△博士の感想に曰く「近來頻々として傳へらるる學界の怪聞は實に嘆はしき次第なり、殊に神聖なるべき學位問題に關する或一部の醜聞が世人をして學位全體に對する信念及尊敬の念を薄くし引いては最高學府に對する信任の度を減ぜし事多し、此の如き弊害は要するに近來餘りに西歐の唯物文明を輸入しすぎ東洋在來の美しき道德觀念の養成を忽にしたるに基因したるが如し今後大いに爲政者又は教育者の注意すべき點なりと思ふ」云々。

△博士は朝鮮貴族の出身にして、明治三十一年平南に生る。資性濃厚篤實、學究的眞面目なる少壯紳士にして篤學者たり、其の今日あるは博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、殊に朝鮮出身者の爲め代表的學者として世界的に氣を吐けるは大に壯とすべく、博士の面目の躍如たるもの斯間に窺はる。年齒未だ三十有八、少壯の意氣に燃え、研究心潑刺たるものあり。凛々としたる風貌は學者としての威嚴を存し、溫容の裡に掬すべき愛情を表示す。今は分別盛にて學識、手腕、人格共に漸く壯熱の域に入り最も得意時代に在り。性來謙遜にして偏に恩師先輩の助力を説き、少しも自己の識學を衒はず、淡々として己れを虚うして克く人を愛し、人と接するに和氣溫情に富む、殊に臨床に熱心にして眞剣なると、患者に對するに飽くまで誠實と懇切とを盡す點は、博士の特徴として傳へられ篤き信望を博す。研究以外の趣味としては古書畫、骨董を愛し、スポーツはゴルフを好む。家庭には妻溫順との間に二男二女あり、清福にして團欒の裡に常に春風滿つ。幸に健康と共に永へに幸福を祈るや切也。自邸は四平街繁華街二丁目に在り。

關齊六

△千葉市井上病院(顧問井上善次郎博士、院長花岡和夫博士)に副院長たる關齊六博士は、千葉醫大出身の新進にして、恩師佐々貫之博士に就て深く造詣する所あり。學位主論文は「臆反射ニ關スル研究、臆反射刺戟ニ於ケル筋伸展速度ト作用時間トノ關係」にして、參考論文は、(1)遷延狀心内膜炎ニ就テ、(2)種々ノ異態を伴ヘル全内臟轉錯者(完全鏡像ヘ)ノ一例特ニ其「エレクトロカルデオグラム」ニ就テ、(3)電気心働圖心室合成曲線異型ノ臨床的意義ニ就テ、(4)心房「フリンメルン」ニ對スル「エチール」炭酸「キニチン」療法ノ經驗、の外尙骨格筋「クロナギン」ニ關スル臨床的研究其他あり。

△博士は千葉中學(大正九年)、二高(大正十三年)を経て、昭和三年千葉醫大を卒へ、同年四月より翌四年一月迄陸軍衛生幹部候補生として歩兵第三聯隊に入營、同四年二月母校の佐々内科教室に入り、同八年十月迄研究を續け、同

年十二月千葉醫大より學位を授與せらる、先是同教室を去るや千葉市井上病院に勤務今日に至る。

△感想に曰く「將來一開業醫として社會大衆の吉凶に關與せんとする余は、内科の開業醫としては少くも西川博士著「内科診療の實際」中にある檢索の設備位は具有し度いと念願して居る。かくして醫師の良心がどうやら満たされ、醫師たる事に喜びを感じるだらう。但し開業の實際に當つて果してかゝる設備を具へて營業し得るや否や多大の懸念がある。少くも現行の報酬規定に於て、且又現在の大家の常識に於ては、かゝる企圖は冒險に價するかも知れぬ。けれども一般大衆が先づ開業醫の手にかゝり、診斷不明の爲に更に大病院に赴き結局二重の負擔をなし、のみならず其間の時日の浪費が金錢に換へ難い結果を齎す事實は毎々目撃する所である。茲に余の企圖の核心がある。而して有害無益なる粗診粗療を避け得ば、大衆の利益、從つて開業醫への信頼自ら大なるものがあらう」云々。

△博士は千葉市に本籍を有し、齒科醫關藤治郎氏の養子にして、明治三十六年生の學究的少壯の紳士也。前記論文の外「心房」「フリンメル」ニ對スル「エチール」炎「キニヂン」療法ノ經驗、「骨格筋」「クロナキニー」に關スル臨床的研究、「バルキヲニスムス」ニ對スル「スコボニミレ」大量療法ノ一般臨床的觀察」等々あり、何れも博士會心の論著として既に學界に其の存在を認めらる。研究室を去りて日猶淺きも、少壯の意氣に富み、孜孜として診療界に精進し、精研に餘念なき前途は大に囑望せらる。スポーツに趣味を有し、患者に親切にして人に對するに温情味ある所に博士の特徴を見出さる。千葉市千葉六四四に住む。

中條元一

△大阪府泉北郡上神谷村字母にて内科特に結核病を標榜して獨立開業し、牢固たる地盤を有する中條元一博士は、大正十五年大阪醫大の出身にて、昭和九年一月大阪帝大より學位を獲得せる少壯醫博也。學位主論文は「肺結核患者ノ新陳代謝ノ異常ニ就テ」にして、參考論文は、(1)肺結核患者ノ糖代謝ニ就テ、(2)肺結核患者ノ「マ

ンツ」氏反應ニ關スル一考案等。前記現住所の出身にして、明治三十四年生る。俳句を能くし、芥汀と號す、又圍碁を趣味す。未だ少壯にして研究心に富み、學究生活を勇退して診療界に躍進するや、開業日尙淺きも、拮据勉勵、専門の旗色を鮮明にして、専ら肺結核診療の爲め努力精進する所あり。多年の經驗を有し、獨特の手腕は診斷の好評と相俟つて、益々人氣を吸収し年次堅實なる發展振を示しつゝあり。

大關幸一

△宮城縣若柳町學校通りに大關内科病院あり、名聲嘖々として當地方診療界を風靡す。院長大關幸一博士の開設せる私立病院にして、外に診療所(若柳町宇川北中町四三)、分院(栗原郡尾松村)、坂口診療所等を設け副院長の外全科診療擔當醫あり。殊に内科領域に關する博士獨特の打診は益々遠近の人氣を吸収し、兩々相俟つて今や抜くべからざる地盤を有し、牢乎として一流の位地を占む。博士は元仙臺醫專出身の篤學者にして、研鑽多年の後、東北帝大教授熊谷岱藏博士指導の下に内科學の蘊奥を究め、特に呼吸器、泌尿器、血液疾患を最も得意とし、東北帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。學位論文は既に學界の定評あれば贅せずもがな、學殖と共に臨床に多年の經驗を積み、卓越せる手腕を有す。

△博士は明治四十四年仙臺醫專專門學校醫學科卒業後、多年郷里なる山村に全科を標榜して開業、其の間東京帝國大學醫學部に於て第十三、十四、十五回醫學講習科修了、郡内一流の流行醫たりしが奮然として門を閉じ、純然たる内科醫として後半生を送らんと、豫て聲望を慕ひつゝありし東北帝大熊谷教授の門下に入り、茲に内科臨床醫學を研究すること前後四年、患者の信望を一身に集めつゝ傍ら作り上げたる論文は、即ち主論文「紫外線ニヨル皮膚紅斑ノ臨床的意義ニ就イテ」にして、原著は獨逸文なり。外に參考論文として、(1)腎臟疾患ノ統計的觀察、(2)肺結核患者ノ血液像ニ就テ、(3)肺結核ノ豫後、の三篇あり、之を東北帝大醫學部に提出して昭和九年一月學位を獲得せり。其の篤學

は博士の面目を語るに充分にして、立志傳的博士の前半生史をして光彩陸離たらしめたり。

△博士の感想に曰く「今後内科一般の診療に従事するは勿論なれども就中肋膜炎の早期診断及び脱期性肺結核への遂進豫防に意を注ぎ社會に貢獻せんとして居る」云々。

△博士は宮城縣栗原郡尾松村大關市郎右衛門の長男にして、明治二十二年生る。資性温厚篤實、學究的年壯の紳士にして、眞面目なる臨床家としての爲人を窺はる。今年齒漸く不惑に入る七歳、意氣益々壯にして研究心に富み、學識手腕、人格共に愈々圓熟の佳境に入る、研究室を離れて以來診療界に進出するや、孜々として日々診療に勵み、熱心忠實に克く誠意親切を盡し、以て仁術の最善を務めつゝあり、蓋し其の篤き聲望を博せる所以亦實に茲に存す。平生人と接するに懇篤にして温情あり、快活にして能く人を愛す、又應答禮を重んじて時務を缺ぐことなく、自ら人に親しまれ其の高邁なる人格を敬慕せしむ。趣味として讀書以外になく、妻きん子との間に一女あり。

山本 清太郎

△京都市下京區七條通千本東入内科、特に呼吸器専門醫としての山本清太郎博士は、學歴より見れば、京都市私立立命館中學を経て、大正十二年京都府立醫專卒業後、同年六月より市内大宮病院内科、小兒科勤務、同十三年十一月京都府立醫大内科勤務、小川、淺山兩教授の指導を受く、同十四年十月より大阪合同紡績勤務、昭和二年四月より現住地に開業、同四年十二月より京都帝大皮膚科教室勤務、松本教授の指導を受く、同九年一月京都帝大にて學位授與、今日に至る。内科特に呼吸器病を最も得意とす。主論文「Immunitätsforschung beim experimentellen Rekurrens」(三篇、全部獨逸文)、參考論文「Haematologische Untersuchung beim experimentellen Rekurrens」(獨逸文)外、十一篇。滋賀縣栗原郡上田上村大字桐生山本清喜の三男にして、明治三十年生る。開業將に拾年に垂んとする今日、診療の傍ら研學切磋の功を積み、學位論文を完成せる業績と其の篤學は、氏の仁術に一

段の光彩を放ちて見ゆ。性格は短氣の方なれども、未だ少壯にして大に奮闘努力を要するの秋、折角の自重加餐を祈る。西洋音樂殊にピアノに多大なる趣味を有す。長兄は郷里の小學校校長、次兄は陸軍三等主計正たり。京都帝大天文學教授山本一清理博は氏の從兄弟の息なり。

堤 貞雄

△長崎縣嚴原町協立嚴原病院内科部長として新手腕を發揮し、内外の信望を博しつゝある堤貞雄博士は、熊本醫大派の新進にして、九州帝大より大學院卒業に依り學位を獲得せる少壯醫博としての手腕を認めらる。主論文は「絲膿菌毒素」ピオチアナーゼ」及「ピオチアノリジン」形成に關する實驗的研究」にして參考論文なし。他の論著中の「毒素及抗毒素及「ピオチアナーゼ」及「ピオチアノリジン」の本態」は、氏が會心の著作にして最も得意のものと見らる。感想としては「醫師界に對してはお互の品位を傷けることなく、社會大衆の爲め眞面目に盡したい」云々。以て氏の治療方面に對する態度の眞摯なるを窺はる。聞説、何れ近き將來に郷里人吉町に自宅診療所開設の豫定なりと。

△博士は熊本縣球磨郡人吉町堤友次郎の養子にして、明治三十二年生る。學歴より見れば、昭和四年三月熊本醫大に於て學士試験合格後、直ちに九州帝大醫學部副手拜命、武谷内科勤務、同六年五月九州帝大大學院に入學、同八年三月滿期卒業、同年十一月協立嚴原病院に奉職し、同九年一月學位受領、以て今日に至る。大學院在學中は武谷廣及び小川政修兩教授の指導を受けたり。學究生活より診療界に躍進せる博士は、其の第一歩として現職に就任して以來日尙淺きも、氏がモットーとせる社會大衆の爲め眞面目に盡し度いとの信條の下に勵精し、希望ある將來に向つて修養と準備とに、おさ／＼餘念なき前途は更に大に期待せらる。性來眞面目にして言行を苟くもせず、人と接するに親切にして温情に富む、臨床醫家として相應しき性格の持主と見らる。讀書家にして精研修養相俟つて卷を放たず。時に

暇を獲れば園基に親しみ其の日の勞を忘る。年齒未だ少壯にして、春秋猶頗る豊富なるの秋、折角の努力活躍を望む。長崎縣下縣郡嚴原町今屋敷六九七に住む。

久野 順二郎

△熊本醫大講師より轉じて現在鐵道醫として活躍の時代に入れる久野順二郎博士は、北海道帝大派の少壯醫博にして内科専門を以て立てり。學歷より見れば、大正十五年北海道帝大醫學部卒業後、海軍に出仕して昭和三年海軍々醫大尉に任ぜられ豫備役に編入さる、同四年より六年迄京都帝大醫學部副手、同六年より七年迄熊本醫大助手、同七年より十年迄熊本醫大講師たり、後鐵道醫に任ぜられ今日に至る、其間昭和九年一月北海道帝大より學位を受領せり。此間北大教授中川博士に就て内科學を、京大教授尾崎(良純)及び熊大教授尾崎(正道)兩博士に就て藥理學を專攻せり。主論文「水芭蕉ノ有毒物質ニ關スル藥理學的研究」、參考論文、(1)「ピツイトリン」ノ利尿作用ニ關スル研究、(2)腎臟血管ノ藥理等。大阪市東區淡路町一丁目九に本籍を有し、明治三十二年生る。音樂と繪畫に興味を有す。少壯の意氣益々壯にして、學究生活より展開せる今後の躍進は大に待望せらる。大阪女子醫專教授瀨戸文雄博士とは近親の間柄也。滋賀縣米原町鐵道官舎に住む

田原 利崇

△京都市上京區元誓願寺千本東入元四丁目内科専門醫として、京都帝大派の名醫博たる田原利崇博士あり。大正二年金澤醫專の出身にして、卒業後約半ケ年間明石市湊内科醫院勤務、次で同三年十一月より九年九月迄約七年間滋賀縣大津市日赤滋賀支部内科醫局勤務、次で現住所に於いて開業診療に従事す、昭和四年三月京大醫學部法醫學教室に専修科生として入學、同六年助手任命、同八年十二月京大より學位を受く。

△學位主論文は「死後經過日數測定ニ關スル研究補遺」にして四篇より成り、參考論文は、(1)足跡ノ法醫學的研究、

(2)食品中毒ニ關スル研究、(3)犯罪捜査ト紫外線應用外三篇あり。京都市の人、明治二十一年生れにして當年不惑に入る八歳也。開業の傍ら研學切磋、克く鴻大なる學位論文を完成せる篤學は特筆すべきに値し、氏の面目を語るに充分なり。今は牢乎たる地盤を有し、手腕、聲望相俟つて年次堅實なる發展振りを示しつゝあり。

家坂 正清

△肛門病科、一般内科を専門として京都市淀橋區百人町一ノ一八に自宅開業せる家坂正清博士は縣立新潟中學(大正六年)に次で、四高(同九年)を経て、大正十三年六月京都帝大醫學部を卒へ、直ちに慶大醫學部内科教室へ助手として勤め、昭和元年同内科教室を辭して自宅開業、同三年再び慶大醫學部藥物學教室へ研究生として入室、同五年研究完了、同九年二月慶大より學位を獲得せる新進の少壯醫博也。

△學位主論文は「硫酸代謝ノ中樞性調節」にして、參考論文は、(1)硫酸代謝調節中樞ノ肝臟組織内硫酸量ニ及ボス影響、(2)自宰神經毒ノ硫酸代謝ニ及ボス影響、(3)硫酸代謝調節神經ニ就テ、(4)硫酸代謝調節中樞ニ對スル「アンチピリン」ノ影響等四篇なり。指導教授は慶大教授阿部勝馬及び西野忠治郎兩博士にして藥物學及び内科學を專攻せり。特に肛門病科及び一般内科を最も得意とす。

△博士は京都市淀橋區柏木三ノ三三三に本籍を有し、醫師家坂清次郎(同區百人町二ノ二〇〇居住)の長男にして、明治三十一年生る。嚴父は醫師として熱心なる研究家を以て知られ、往年居を新潟市より東京に移して以來、現住地に於て自宅開業に従事し牢固たる地盤を築き居れり。博士の今日ある素より明晰なる頭腦と百折不撓の努力の結果とは云へ、嚴父の指導宜しきを得嚴正なる薫育の然らしめし事實は見逃すべからず。博士の年齒未だ三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして、拮据勵精、日々診療に精進して獨特の手腕を振ひ、打診の評判は多年の聲望と相俟つて堅實なる發展振を示しつゝあり。趣味としてはスポーツを好み、業餘猶精研に餘念なきが如し。

山崎達男 △東京市小石川區表町五九に在る山崎内科醫院は、院長山崎達男博士の經營にして、開業拮据、拾有餘年に及び、玲瓏たる打診の好評は多年の聲望と相俟つて牢乎たる地盤を有し、繁榮歳と共に日増盛況に在り。學系は九大系の内科學者にして、恩師吳建博士に就きて斯學の蘊奥を究め、次で東大教授竹内松次郎博士の指導の下に臨床的細菌學及び免疫學を研究し、論文を東京帝大へ提出して學位を獲得せる名醫博也。研鑽多年の學殖は言はずもがな、實地の經驗に富み卓越せる手腕を有す。

△更にその略歴を概括すれば、大正十年九州帝大醫學部を卒へ、引續き同學部第一内科教室に勤務、吳教授の指導を受け研究に従事す、同十二年十二月教室を辭して郷里千葉市寒川長洲に歸り、大正十四月二月上京現住所にて開業今日に至る、斯間東京帝大醫學部細菌學教室に於て研究の結果、同九年二月東京帝大より學位を授與せらる。主論文は「オツエナ」菌の研究」にして、参考論文は、(1)「エンテロコクケン」ノ研究、(2)結核菌ノ研究、(3)痘毒ニ就テ、(4)培養基ニ及ボス日光ノ影響等なり。

△千葉縣山武郡公平村道庭山崎玄達の次男にして、明治三十年生る。年齢未だ三十有九歳、少壯の意氣益々壯にして、學識、手腕、人格共に漸く圓熟す。賦性篤實溫厚にして、人に對するに愛想よく、高邁なる品格を備ふ。趣味としては讀書、撞球、狩獵、園藝(朝顔)を楽しむ。

比企能達 △日本醫科大學教授として内科學を講じつゝある比企能達博士は、東大系の御大島蘭内科に巢立ちたる年壯の學者也。學歷より見れば、神奈川縣小田原中學、二高を経て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、引續き東大病理學教室及び島蘭内科教室に於て研究、東大醫學部副手、助手を歴て講師となる、次で講師を辭し現職に任ぜ

られ今日に至る。其間昭和九年四月母校にて學位を授與せらる。指導教授は緒方知三郎教授、長與又郎教授、島蘭順次郎教授なり。

△主論文は「唾液腺ノ内分泌ニ就テ(唾液腺條紋部ノ構造並ニ機能ニ就テ)にして、参考論文は、(1)糖尿病ノ研究、(2)經皮膚性結核初感染ニ就テ、(3)肝硬變症ノ統計的研究、(4)心臟「プロック」ノ一例等なり。

△神奈川縣中郡旭村山下比企喜代助の長男にして、明治二十六年生る。年壯の意氣と共に研究心に富み、今や多年蘊蓄せる學識、手腕を以て勁壇に起ち、誠意誠實を盡して只管學生の指導に餘念なきが如し。醫育界の前途多事益々多望ならんとするの秋、幸に健康と共に折角の努力盡瘁を望む。東京市本郷區弓町二ノ一に住む。

野口憲三 △東京市淺草區壽町二ノ八(市電厩橋)に内科一般殊に呼吸器病科を以て、嘖々たる好評裡に斷然群を抜きつゝある野口醫院あり、院長野口憲三博士は斯界の大家として既に周知せらる。開業拮据歳を閱すること二十有年餘、博士獨特の手腕は打診の評判と相俟つて益々人氣を吸収し、牢乎たる古き地盤は繁榮歳と共に擴大して今や抜くべからざる盛況を呈す。博士は千葉醫專出身の篤學者にして、研鑽多年の後、千葉醫大教授松村肅博士指導の下に結核菌に就て研究し、論文を千葉醫大に提出して同大學より學位を獲得せる内科界近來の名醫博也。殊に特筆すべきは、社會の信用厚く且つ繁昌せる開業を殆んど中止状態に敢てなし、専心毎日研究に従事せり、且つ研究の目的として單に學位を得んが爲めの研究、即ち微々たる個人的慾望の爲めの研究にあらずして社會、人類の強敵結核を研究し、之れを征服撃滅せんとする目的を以て松村主任教授の快諾を得て教室に入り専心研究に盡瘁せしなり、以て學位論文を完成せる點にあり。而して其の鴻大なる論文は如何に學識の該博なるかを語り、其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、其の今日の成功を贏ち得たるもの、博士の面目の躍如たるものあるを見る。又一面には現

在淺草醫師會理事、府醫師會議員醫政調査委員、東京猪ノ鼻會評議員、健保審査員、千葉醫學會評議員等の公職に在りて斯道の爲め盡瘁する所あり。

△更に其の略歴を概説すれば、明治三十七八年戰役の際野戰近衛歩兵第一聯隊に屬し、最初より最終迄從軍各地に轉戦す、即ち明治三十七年三月十四日韓國鎮南浦上陸各地に轉戦、滿洲開原城西東馬家窩棚に至る、明治三十八年十二月三日屯營歸着す、越えて明治四十四年千葉醫專卒業後、母校井上内科にて研究、翌四十五年より京都帝大笠原内科にて研究、大正二年二月より東京帝大三浦内科にて研究、同四年五月より現住所に開業今日に至る、斯間同十五年十二月より千葉醫大衛生學教室にて研究を續け、昭和九年四月學位を受領せり。専攻は内科及び衛生學にして、特に呼吸器科を最も得意とす。

△主論文は「結核菌ノ濾過型ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文六編あり、(1)二三主要食料品中ヨリ分離セル同屬菌ノ比較研究、(2)各臟器培養基ニ於ケル結核菌ノ發育成績、(3)數種金屬ノ腸「チフス」菌、善通大腸菌、葡萄狀球菌ニ對スル「オリゴヂナミー」作用、(4)The Etiology of Beriberi(共著)、(5)Ueber Bacillus beriberie (共著)、(6)脚氣ノ原因ニ關スル研究、(共著)等。

△感想に曰く「世界人類は勿論其他動物の強敵結核に對しては古來之が撃滅を企圖し多くの學者其他一般人が努力せし事大なり。而して、獨逸の學者にして偉人コッホ先生今日迄の處にては其殊勳者なり、雖然其功績は結核菌體並に其毒力及び多少の免疫の點を發見せしなり、之れを戰爭に例すれば敵を發見し、其兵種並に其兵種特有の性能を知得したるのみなり、即ち偵察せしのみなり、即ち結核菌を撃滅するには尙前途遠し、余は想ふにコッホ先生若是日本人なりせば結核、撃滅に成功せられしならん、可惜彼は獨逸人にして日本魂を所有せざりしなり、故に結核菌は日本人に因てのみ征服し得るものと信じ而して結核菌も亦公明正大なる日本人に撃滅せらるゝを希望するものならん何んとなれば

彼は人類の病敵中の頭首なれば也、故に吾人醫士即ち日本醫士は大なる努力的な研究と不撓の攻撃と世界人類愛的精神とを以て一刻も早く結核菌を征服すべき也、是れ一則是人類幸福の爲め一則是結核菌の最終の満足の爲め也」云々。
△博士は埼玉縣北埼玉郡種足村大字上種足に本籍を有し、野口百三郎の長男、明治十六年生る。學究的温厚の紳士にして、其の今日ある閱歴は博士の前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり、殊に開業の傍ら幾星霜かの間、具に辛酸難苦を嘗めて懸命の努力精進を續け、終に克く學位を獲得せる篤學は推獎に値し、立志傳的典型たるを失はず、其の向學的精神と不撓不屈の努力とは後進の採つて大に學ぶべき也。今や壯齡知命に入る三歳、元氣旺盛にして學識、手腕、人格共に愈々圓熟の域を超越して一段の貫祿を備ふ。殊に博士の長所として傳ふべきは歐米の蠻風、野卑を極めて嫌ひ、純日本主義を全く好み、明治大帝の軍人に下し賜はりし勅諭を遵奉す。約二十年來毎年年頭に伊勢神宮、橿原神宮、春日神社、桃山御陵、乃木神社、北野神社を參拜せり。是れ帝國國民として國運の隆盛、降て自家の安泰を祈ると同時に、醫師と云ふ貴き業務に従事する故特に清き心を以て、清き道を歩み、清き事を爲すべき爲めなり、則ち神の御心を以て人に接し、且つ事を處すべき爲めなりとす、以て其の爲人を窺知するに足る。強ひて其の短所を言へば世間にいふ生一本正直なれば或は短氣にあらざるか。讀書家にして研究は博士の最も趣味とする所、又擊劍を能くす。妻靜江との間に二男二女あり。

◇
筒井龍雄 △九州帝大派の一勢力と見るべき新進の内科學者たる筒井龍雄博士は、現在臺北醫專講師として教壇に立ち、學生指導の傍ら自己の研究に没頭しつゝあり。年尙未だ少壯にして研究心に燃え、潑刺たる前途は聽て那邊に展開し來るや刮目を以て待望せんとす。

△氏は九州帝大醫學部の出身にして、昭和四年卒業後、引續き母校の武谷内科教室に勤務し、恩師指導の下に研究の

結果、昭和九年三月九州帝大にて學位を授與せられ今日に至る。學位主論文は「大腸運動及ソノ中樞性調節作用」にして、他にも論著あり。

△氏は香川縣の出身、明治三十七年生る。學究的渾厚の紳士にして、年齒未だ三十有二歳の少壯也。謙遜なる氏の書簡の一節に曰く「未だ全くの若輩、何等特別の經歷とてもなく、自信ありと申すほどの業績とては一もなきを自ら遺憾といたして居ります。恩師武谷廣先生の御指導により漸く臨床醫家の末席に列り、内科醫としての第一歩をふみ出したるに過ぎざるものにて、今後の研究を期して居ります、幸にして將來御批判を蒙りうるに足る程の人たりうれば喜び之れにすぎたるものではありません」云々。以て其爲人を知り、今後一層の努力を要するや益々切なるを思ふの秋、將來有爲の資に富む博士や、著者は老婆心ながら、幸に自重加餐を祈ると共に、折角の努力奮闘を望むや切也。臺北市東門町一七八に住む。

◇

持田治郎

△今治市今治腦病院長持田治郎博士は、日本醫專の出身にて、名古屋醫大派の名醫博として令名あり、新進の精神病學者にして特に微毒性精神異常領域に就て、該博なる學識と共に獨特の手腕を有し、最も得意なるが如し。斯間指導教授は精神病學界の權威東大教授三宅鏞一博士、及び同杉田直樹（現名古屋醫大教授）博士にして、兩教授に就て斯學の蘊奥を究めたり。今や多年蘊蓄せる學理と相俟つて、實際的敏腕を發揮して内部の改善を行ひ、自ら臨床に當面して誠意誠實を以て仁術の最善を盡し、斯界の爲め至誠以て公に奉じ盡瘁する所あり。因に今治腦病院は愛媛縣立代用精神病院にして、定員百二十三名、近代的完備せる設備ありと。

△學歷より觀れば、博士は埼玉縣立熊谷中學を経て、日本醫大の前身日本醫專を大正十四年卒業して、母校病理學教室に二ヶ年助手勤務、次で東京帝大醫學部精神病學教室に入り、三宅教授の指導を受くること六ヶ年、同時に井ノ頭

病院副院長を兼ね、昭和八年四月今治腦病院院長として赴任す、同九年四月學位を受領せり。

△主論文「人ノ間腦部ノ研究」、(1)人ノ間腦部ノ生後ノ發達ニ就テ、(2)麻痺性癡呆症並ニ早發性癡呆症ノ間腦部ニ就テ。參考論文、(1)ジェリノー氏「ナルコレプシイ」ノ十六例、(2)「インドラミン」注射ニヨル接種「マラリヤ」ノ臨床的並ニ顯微鏡的觀察外五篇。他の論著中の「麻痺性癡呆症ノ「マラリヤ」療法」は氏が最も得意の傑作と見るべき也。

△感想に曰く「昔のお醫者様が現在醫者と大衆から謂はれる様になつたことは、醫師が醫道から醫術にだした結果である、現在の保健、簡易保健が吾々の醫道を金で制限することは醫道の冒瀆と謂はざるを得ない、吾々は醫術から眞の醫道に立ち歸り、非醫者の制覇から離れた眞の國民保健を吾々醫師會の手から編み出すことだ」云々。埼玉縣大里郡深谷町大字西島の人、明治三十四年生る。少壯氣鋭にして、研究心に富む、熱情の人にして人に厚く、同情と理解とを以てし、溫情の掬すべきものあり。運動に興味を有し、殊にテニスと野球とを好む。從兄に醫師三名、内氏と共に醫博三名あり。

◇

大山恭次郎

△秋田市秋田腦病院長としての大山恭次郎博士の名聲は、既に精神病界に喧傳し、新進大家としての新手腕を認めらる。氏は北海道帝大派の少壯醫博たる新人物にして、母校の恩師内村祐之教授に就て精神病學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せり。學歷より見れば、昭和四年北海道帝大醫學部を卒へ、卒業後昭和九年五月迄同學部精神病學教室に勤務の傍ら研究に従事し、昭和九年五月學位を受領するに及び、教室を辭し現職に就任今日に至る。

△學位主論文は「ヘス氏示差瞳孔鏡ニヨル瞳孔反應ノ研究」にして、(1)ヘス氏示差瞳孔鏡ノ精神病學、神經病學的應

用ニツイテ、(2) Ueber die Beeinflussbarkeit der Pupillenstörung der progressiven paralysis durch die Malariabehandlung (3) 諸種鎮靜催眠劑ノ瞳孔對光反應ニ及ボス影響ニツキテの三編より成り、参考論文としては、(1)「マラリヤ」療法ノ血液腦脊髄液諸反應ニ及ボス影響、(2) 流行性腦炎後遺症ニ對スル「アトロピン」高量療法ノ經驗、(3) 腦炎性視症ノ臨牀的觀察等三篇あり。

△出身地は東京市神田區錦町三ノ十九にして、明治三十五年戸主大山猶次郎の長男に生る。年齒未だ三十有四歳の少壯にして、潑刺たる意氣と共に研究心に富み、今は本職の爲め多年蘊蓄せる學識と、臨牀的手腕とを發揮して斯界の爲め懸命の努力精進を續けつゝあり、斯道治療界の爲め將來博士の力に俟つものあるを囑望せらる。其の人醫人としての特質を具備し、溫恭にして情味掬すべきものあり、人格又た高邁なるは心強く思はる。春秋猶頗る豊富にして、分別盛なるの秋、折角の努力奮闘を望むや切也。秋田市牛島町に住む。

若林 宏

△東京帝國大學醫學部附屬病院吳内科に新進の若林宏博士あり。氏は東大系の出身、内科界現代の權威吳建教授門弟中の新人として知られ、内科學及び細菌學を專攻し、特にレントゲン診斷學及び結核病學を得意とす。斯間傳研の佐藤秀三教授、河本禎助教授及び帝大の吳建教授の指導を受け、東京帝大より學位を獲得せり。年齒未だ少壯にして、不斷の精研精進を續けつゝある前途の躍進は大に期待せらる。

△博士は昭和二年東京帝大醫學部を卒業、直ちに傳染病研究所に入り細菌學血清學を研究、昭和七年四月同所を辭し東京帝大附屬醫院吳内科に入り内科學を研究現在に至る、昭和九年五月學位受領。學位主論文は「脂肪酸類ノ結核菌發育ニ及ボス影響ニ就テ」にして、参考論文なし。「脂肪酸類ト結核菌トノ關係ニ就テ」は博士會心の論著と見るべき也。

△博士の感想に曰く、「將來の醫療の制度は如何になりゆくか、殆んど豫斷を許さず、現在は之に至る過渡期として醫人、一般人皆落つかざる状態にあり、然りと雖も如何に社會が變遷するとも醫人としての社會に對する奉仕精神には何等の變更もなく又醫人がその最大の努力を盡すに對して社會の人が之を遇する事吝かならざる事も、又當然の事なるべしと思はる」云々。

△氏は徳島市富田浦町宇東富田、若林虎吾博士の二男、明治三十六年生にして意氣益々壯也。熱心なる研究家にして切磋草勵の氣象に富み、意志強固にして努力研鑽倦むことを知らず、聽て診療界に躍進せんとする修養を積みつゝあり。趣味としては蝶類學の研究に多大の興味を有し造詣する所あり。年齒未だ三十有三歳にして、學生氣分髣髴として未だ去らず、恬澹として朗快なる態度は人に親しまるゝの徳を有す。佐藤久醫博、高田眞醫博、入澤達吉醫博とは親戚の間柄也。東京市中野區昭和通一ノ五に住む。

室 勇 三

△京都市左京區田中野神町一五に新興せる内科、小兒科を専門とせる室醫院あり、院長室勇三博士の新設經營せる診療所也。開業早々新裝せる内部の設備を整へ、博士自ら日々診療に當面して倦むことなく、致々營々「醫は仁術也」をモットーとして努力勵精する所あり、學究生活を巢立ちて今や獨特の手腕を發揮するに独自の立場に在り、今後の躍進と相俟つて將來の發展を囑望すべき也。

△博士は昭和二年朝鮮總督府立京城醫學專門學校卒業、同年一年志願兵として歩兵第七聯隊へ入隊、同三年除隊、同年京城帝國大學醫學部副手囑託、同五年任陸軍三等軍醫、叙正八位、同年任京城帝國大學醫學部助手、同六年同助手依願免官、同年京城齒科醫學專門學校講師、同八年同講師辭任、同年京都帝國大學醫學部松尾内科入局、同九年同學部副手囑託、同年六月京都帝大にて學位授與の後、現住所にて開業せり。

△學位主論文は「サルヴァルサン」ノ殺「スピロヘータ」性ノ本態ニ就テ」にして、(1)「サルヴァルサン」ノ殺「スピロヘータ」性ト網狀織内皮細胞系ノ機能トノ關係ハ血管内ニ注入セラレタル「サルヴァルサン」ノ殺「スピロヘータ」力ニ及ボス脾臓及ビ網狀織内皮細胞系統ノ影響ニ就テ、(2)血管内ニ注入セラレタル「サルヴァルサン」ノ殺「スピロヘータ」力ニ及ボス脾臓及ト夫レニ及ボス脾臓及ビ網狀織内皮細胞系ノ機能ノ影響ニ就テノ三篇より成る。参考論文は、(1)球菌毒素ト「ボルモーン」トノ關係、(2)非特異性細胞賦活作用ト「ホルモーン」トノ關係、殊ニ「カゼリン」ノ白血球喰嚥機能ニ及ボス二、三内分泌腺トノ關係ニ就テ、(3)巨大ナル脾腫ヲ伴ヘル浙巴肉腫症ノ一剖檢例、(4)朝鮮人ニ發生セル「ヘパトーム」ノ統計的並ニ組織學的觀察、(5)白血球ノ喰嚥作用ニ及ボス脾臓機能並ニ墨汁注射ノ影響ニ就テ等なり。

△氏は福井縣の出身、明治三十六年生にして、年齒未だ三十有三歳の少壯也。眞面目なる學究の人として多年臨床の經驗を積み、手腕漸く壯熟して開業と共に活躍奮闘の時機に入る、將來有望の臨床家として、折角の努力奮勵を望むや切也。賦性滯厚にして謹直、人に對し患者に接するに、親切朗快にして眞摯なるは甚だ多とすべき也。

宮地伸一

△東京市中野區昭和通二ノ四〇に内科特に呼吸器科専門宮地醫院長として、近時著るしく名聲を揚げ、好評嘖々の裡に刀圭常に多忙を極めつゝある宮地伸一博士は、愛知醫專出身の内科専門家として知られ、臨床の傍ら研鑽多年、慶大教授阿部勝馬博士に就て専ら藥物學を研究し、天稟の才能と不斷の精進により、論文提出の結果慶大より學位を獲得せる名醫博として其の篤學を稱せられ、氏が前半生史をして一層光彩あらしめたり。内科特に氏の最も得意とす呼吸器に至りては、多年實地の經驗に富み、博士獨特の手腕は玲瓏たる打診と相俟つて極めて評判良く、多年の聲望と共に今や牢固たる地盤を有し、悠々として抜くべからざる位地を占む。

△學歷より觀れば、氏は東京市本所區江東橋四丁目五十番地に本籍を有し、明治二十九年生れにして、東京府立第三中學校(大正三年)を経て、大正七年愛知醫專を卒へ、翌八年より小石川病院内科に二ヶ年在職、次で東京市技師に就任、大正十五年より慶大醫學部藥物學教室に入り、阿部教授指導の下に藥物學研究の傍ら診療開始、慶大醫學部へ論文提出の結果、昭和九年六月學位を受領せり。

△主論文は「「ピツイトリン」ノ血糖及ビ「アドレナリン」過血糖ニ及ボス影響」にして、参考論文は、(1)「エゼリン」寡血糖に就て、(2)「サントニン」ノ家兎血糖ニ及ボス影響並ニソノ減血糖作用機轉ニ就テ、(3)「ヴェラトリン」ノ家兎血糖ニ及ボス影響等なり。

△氏の年齒今や不惑に達す、氏が診療の傍ら多年努力研鑽不撓不屈の精神を貫徹したる篤學は特筆すべきに値す。氏は性來克己心に強く、一度信じたことは徹底的に成し遂げずば已まず、また猪突的に活動する素質の人なれば、却つて後に悔をのこすことも屢々あらん。若し夫れその職務に對しては至誠勤勉無類といふ活動家にして、又情誼に厚過ぎるほど人情味ある人也。従つて人と接するに快活にして朗かなる態度は人に親しまるゝ徳を有す。讀書家にして精研修養相俟つて業餘の樂しみとす。

福原文雄

△吳海軍病院部員たる海軍々醫少佐福原文雄博士は、廣島一中より二高を経て、大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、同年六月海軍に入籍今日に及ぶ。斯間母校の大學院在學中、恩師金子廉次郎教授及び小川政修教授の指導を受け、大學院を卒業して昭和九年六月九州帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は「脚氣並ニ「ヴァイタミン」B缺乏症ト蔗糖分解性大腸菌簇トノ關係ニ就テ」にして、参考論文は、(1)耐寒水泳者ニ就テ二、三ノ觀察、(2)肝臟「ヂストマ」ニ併發シタル原發性膽管上皮細胞癌ノ一例、(3)重症脚氣恢復期

ニ現ハレタル一種ノゴードン氏症候ニ似而非ナル防遁反射様現象ニ就テ、以上三篇なり。感想に曰く「終始平凡に過ぎたいと思つてゐる」云々。

△広島縣尾道市福原純造の三男にして、明治三十一年生る。多年海軍々醫界に努力盡瘁せる功績は言はずもがな、今は分別盛にて年齒漸く三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして、至誠一貫、盡忠以て國家に奉ぜんとする熱誠努力は甚だ多とすべき也。賦性穩健篤實、眞面目にして寛厚能く人を容れ後進を愛撫す。尺八、麻雀を趣味とす。吳市神田町十丁目九ノ四に住む。

山口夷甫

△小樽市住之江町財團法人北海道社會事業協會病院内科醫長たる山口夷甫博士は、北海道帝大出身の新進にして、恩師有馬英二博士指導の下に内科學を研鑽し、更に細菌學教室に至り恩師中村豐博士の指導をうけ、母校より學位を獲得せる少壯醫博として其の將來を囑目せらる。學位論文に對する學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、久しく内科教室に止まりて研學切磋、精研に餘念なかりしも、曩に學究生活を脱して以來、現職に赴任するや、多年蘊蓄せる臨床的手腕を發揮して拮据勵精、打診の好評と相俟つて、益々内外の信望を博しつゝあり。博士の感想に曰く「現代の醫師に缺くものは人格の陶冶である、故に吾々は學術的研究と共に、人格の陶冶に心懸けねばならない」云々。以て博士の爲人を知ると同時に、博士の言や至言といふべく、學位と共に人格の向上尊重を高調するの秋、折角の修養と共に常に徳操の堅持を心懸けることは、最も緊要なるを痛感す。

△更に學歴より見たる博士は、北大豫科を経て、昭和三年北海道帝大醫學部を卒へ、引續き同學部第一内科教室並びに細菌學教室に入り、有馬教授並びに中村教授指導の下に研究に従事し、昭和九年六月母校にて學位を授與せらる、次で教室を辭して現職に就任今日に至る。

△學位主論文は「痘毒補體結合反應並ニ沈降反應ノ特異性ノ吟味」にして、參考論文は、(1)實驗的尙儂病家兎ト過敏症ニ就テ外四編あり。

△出身地は茨城縣稻敷郡大須賀村市崎にして、明治三十二年山口太助の次男に生る。年齒未だ三十有七歳にして、少壯の意氣に燃え、研究心潑刺として尙禁せず、今や診療界に躍進して「醫師自ら人格者たれ」をモットーとして、勵精奮闘常に學を鍊り腕を磨くに餘念なきが如し、將來有爲の新人物として最も囑望せらるゝも亦首肯するに難からず。頭腦明晰、志操堅實、眞面目にして飽迄成し遂げずんば止まぬ意志に強き人也。而かも人と接するに快活にして能く人を愛し、人に親しまるゝ徳を有す。趣味としては讀書、登山、テニスを好む。東北帝大理學部教授山口彌輔理博は叔父なり。小樽市入舟町七ノ十一に住む。

吉野高善

△沖繩縣八重山郡石垣町に内科、小兒科、外科、耳鼻咽喉科より成り、レントゲン並に入院室の設備、其他内部の設備を遺憾なく整へ、名實相伴ふ南島唯一の治療機關として有名なる南島病院あり、院長吉野高善博士の獨力經營せる私立醫院にして、開業拮据十年餘に垂んとし、博士自ら内科を擔任して診療に當り、各科擔任の専門醫と協力して當地方診療界の爲め努力貢獻する所あり。多年の聲望と博士獨特の手腕とは、好評嘖々裡に隆々たる繁榮を持續し、今や牢乎抜くべからざる地盤を獲得し私立病院中の王座を占む。

△博士は大正十二年五月臺北醫學專門學校卒業、直ちに同校研究科(内科學)入學、同十四年六月臺灣總督府花蓮港醫院勤務、昭和二年本籍地に於て開業、同六年五月臺北醫學專門學校研究科(寄生蟲學)入學、同九年七月岡山醫大より學位受領、爾來現住所に於て醫院を經營す。斯間横川定博士指導の下に寄生蟲學を專攻せり、専門は内科を以て立てり。

△學位主論文は「有鉤條蟲ノ後胚發育ニ關スル研究」にして、(1)有鉤條蟲卵ノ孵化機轉ニ就テ、(2)有鉤囊蟲ノ最幼若型及「オンコスハエラ」ノ中間宿主體內移行経路ニ就テ、(3)中間宿主體內ニ於ケル有鉤囊蟲ノ發育ニ就テの三篇より成る。参考論文は、(1)東部臺灣ニ於ケル小兒「マラリア」ノ流行學的並ニ臨床學的觀察、(2)八重山群島ニ於ケル「ストロンギロイデス、ステルコラーリス」症二十五例ニ就テノ臨床學的觀察、(3)劇烈ナル發作性直腸痛ヲ原因セル蟻蟲症ノ二例、(4)鉤蟲驅除ニ對スル「アスカリドール」ノ應用ニ就テ 附、鉤蟲ノ種別並ニ性ト驅除效果トノ關係、(5)有鉤條蟲ノ頭節形成ニ關スル實驗的研究、(6)有鉤條蟲ノ離脫受胎片節ノ排卵狀況並ニ同蟲ノ卵子ニ就テ、(7)有鉤條蟲ノ寄生ニ因ル自覺症狀及同蟲ノ人體内發育ニ就テ等なり。

△沖繩縣八重山郡石垣町字大川、吉野高知の長男にして、明治三十一年生る、學究的少壯の紳士也。其の今日ある篤學と成業とは、博士界中異彩に富む醫博人物として特筆に値す。熱心なる研究家にして、又稀に見る讀書家たり、研究と醫療との外別に何等の道樂を有せず、今は唯だ誠意親切を以て仁術の爲め最善を盡し、刀圭甚だ多忙にして席を温むる暇なく、勵精努力日も尙足らざるの概あり。賦性温厚篤實、謙讓にして誇らず、人に對し患者を待つに懇切同情を以てす。好箇の臨床家としての特徴を具備する人格者たるを尊ぶ。

駒井一雄

△滋賀縣栗太郡常盤村在住の駒井一雄博士は、新進の鍼灸醫學の根本たる經穴の科學的研究を完成したる内科、小兒科學者にして京都帝大生理學教室に籍を置き、大阪府立盲學校及び愛知鍼灸學校に教鞭を執り鍼灸醫學を講じつゝあり。博士は昭和二年京都府立醫大第一回の出身にして、鍼灸醫學の研究を志し、京都府立醫大生理學教室及び京都帝大生理學教室に於て教授石川日出鶴丸博士指導の下に斯學の蘊奥を究め、論文を京都帝大に提出して學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。學位論文は鍼灸醫學の實驗的研究にして、既に學界に定評あれば贅せず

もがな、如何に精研の該博なるかを語り、我國に於ける斯學研究の嚆矢として大に氣焰を吐けるは學界の爲め慶幸とする所也。

△博士は昭和二年京都府立醫大卒業後、母校生理學教室に於て越智眞逸教授の指導により鍼灸術治效本質の機構を究むるため研究を開始せり。翌昭和三年三月より同學小兒科教授三浦博士につき小兒科學の知見を究め、他日の斯術の臨床的實驗に資せり。昭和五年十一月更に鍼灸術の根本原理闡明のため本邦生理學界に於て神經生理の泰斗たる石川日出鶴丸博士について、從來斯學の研究者の看過せし經絡及び經穴の純學術的研究に手を染めたり。之れ本邦に於いて前人未踏の境地を開拓せしものと云ふべく一般鍼灸界及び治療醫界のため益するところ大なるものあるべし。

△學位主論文は「鍼灸醫學ノ實驗的研究」にして八篇より成り。参考論文は、(1)膽囊ノ自律神經求心性中樞ノ存在部位ニツイテ、(2)灸ノ生理學的研究第一回及び第二回報告の二篇なり。學位は昭和九年八月京都帝大にて授與せらる。幾多論文中の「灸治の科學的研究と其の學說」は實踐醫學誌上にて發表せるものにして、博士會心の著作と見らるべき也。

△感想に曰く「餘は鍼灸を家業とせる漢法醫家にして三百八十年の歴史を持つる家に生を享けたため京都府立醫大を卒へるや斯業の根本的研究に乗り出せり。鍼灸術は過去四五千年の歴史を有せるものにして今日に至るも治效本質に衰兆なく益々人々に喧傳せらるゝは、蓋し今日の科學を以つてして尙ほ親知し得べからざる神祕の存するが故ならんと信ず。その神祕の鍵は經穴と經絡に存するものと考へ之れを徹底的に研究して、日本醫學建設のために資するとともに斯術の長と洋醫學の長との融和を圖らんことを期せり。今日其の業の端緒を得後來益々努力斯學のため献身の奉仕の任にあたらんことを決せり。しかもかかる事業は唯一人にてよく成し得べからざるところにして多數の有識有能の士の協賛助力を要するところなれば先づ斯學の研究團體を創立し雜誌を發行して醫家と鍼灸家の提携研究機關た

らしめたり誌名を大日本經穴治方學會と稱し名譽會長に石川日出鶴丸博士、會長に不肖就任現在に及べり」云々。博士の伯父は彼の滿洲帝國建國の創業に參劃せし駒井徳三氏にして博士の意氣の壯たるやけだし宣べなる哉。

△滋賀縣栗太郡常盤村大字穴駒井晴雄の長男にして、明治三十一年生る。學究的温厚の紳士にして、年齒未だ三十有八歳、少壯の意氣益々壯にして研究心に燃ゆ、其の今日あるは博士の學歴に盡きて餘蘊なし、殊に本邦最初の根本的鍼灸研究醫學者として前人未踏の分野開拓てふ、一大業績を完成せるは萬人の敬服するところにして一度博士の學説の發表さるゝや、學界に一大センセーションを興し、本邦治療界革新のために一大警鐘となるに至れり、博士の面目の躍如たるものあるを見る。而かも猶研究を續け、精研に餘念なき前途は更に將來の大成を期待せらる。頭腦明晰にして志操堅實、研究に對する態度の熱心にして眞劍味あるは將來の成功を語るに足る。賦性穩健にして篤實、謙遜自抑して偏に恩師先輩の助力を説き、人と接するに少しも自己の學識を衒はず、淡々として只管己れを虚うする奥床しさは、學究の人としての敬慕の念を深からしめ、其の高邁なる人格を尊ばる。趣味としては音楽、寫眞、文藝等にして狂灸と號す。猶春秋頗る豊かにして、洋々たる前途を有す、幸に健康と共に、斯學振興の爲め益々精研盡瘁あらん事を切に祈る。滋賀縣栗太郡常盤村に住む。

柳澤朝一郎

△東京市淺草區北清島町四一に内科、外科を標榜して既に堅實なる地盤を有し、好評噴々の裡に多大の信望を博しつゝある著名なる柳澤醫院あり、院長柳澤朝一郎博士の經營拮据、開業既に二十年餘の歴史を有する私立醫院也。多年の聲望を扶植して今や一流の地位を占め、打診の好評と相俟つて門前常に市をなすの盛況を呈しつゝあり。博士は愛知醫專出身の内科、外科學者にして、細菌學の造詣深く、特に内科を得意とす、學位は千葉醫大より獲得せる斯科界の名醫博として既に斯界に定評あり。

△博士は大正二年愛知醫專卒業、直ちに縣立愛知病院外科にて研究、大正四年横濱監獄醫となり、後鈴木外科病院に勤務、三井病院にて内科見學、大正五年現住所に開業今日に至る。其間東京帝大醫學講習科にて小兒科内科を習講する事二回、大正十三年醫學研修會に入會、昭和六年迄東京帝大鹽田教授及稻田教授の基講義を受くる事毎週二回缺席せしことなし。昭和六年千葉醫大衛生學教室に入り豫防醫學を研究す、同九年八月學位受領。主論文は「腸内嫌氣性腐敗菌ニ對スル研究」にして參考論文なし。

△感想に曰く「醫業難が叫ばれるが醫業のみならず、何の業務でも困難だ、役人ならいざ知らず他の人々は出来るだけ努力する事だ、働くことだ、是で醫業難も何もかも解決するのである、僕は二十年間働いた、朝は五時半から六時迄には必ず起きる、大學の研究の時も常にこの一番に登學した、それで朝一といふ名を貰つた、夜は十一時から十二時に寝る、夜中に時々起きる、然し病氣など少しも知らない、毎朝劍道、ラヂオ體操をする、酒、煙草は用ひない、然し金はたまらない、されど生活難もない、社會に對する不平不満は無い、只感謝々々で楽しい日を送つて居る」云々。△長野縣北佐久郡協和村の出身、明治二十四年生る、年齒不惑に入る五歳、年壯の學究的紳士也。殊に特筆すべきは、氏が開業幾星霜かの間、臨床の傍ら學術の研究を捨てず、不倦不怠の努力研鑽を續け、終に克く其の堅志を貫行して學位を獲得せる點にあり、尠くも此の厚志篤學は立志傳的範を示すに足らん。劍道二段にして剛健の氣象に富み、常に健康にして精力主義を以て終始し、意志強固にして沈着なる態度は悠揚として迫らず、人に對するに懇篤にして温情あり、患者を待つに誠意誠實を以てす。趣味としては劍道の外、筑前琵琶を愛好し旭朝を號とす、又角力好き也。好箇の臨床家として敬意を表し、茲に推奨す。

谷澤貞次郎

△茨城縣結城郡絹川村大字小森に内科、小兒科特に呼吸器を以て著聞する谷澤醫院あり。院長谷

澤貞次郎博士は東北帝大の出身にして、呼吸器病現代の權威たる恩師熊谷岱藏博士に就きて斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる所謂東北帝大派の名醫博なるが、更に其の學歴を討檢するに、二高を経て、大正十三年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部井上博士の醫化學教室に入り同教室副手を囑託され、同十五年同教室助手に任ぜられ、昭和四年醫化學教室を辭し熊谷内科教室に入り専ら肺結核に就て研究し、同五年七月同教室を辭し原籍地なる現住所に開業して今日に至る、其間昭和九年八月東北帝大より學位を受領せり。主論文は「組織臟器ノ含窒素化合物ニ就テ」にして、參考論文は「肝臟ノ自家融解」外三篇あり。

△感想に曰く「我が國の死亡率を見るに肺結核その第一位を占む、而して歐米諸外國に於ては肺結核患者年々減少すれども、我が國に於ては却て年々増加す、これ國民保健上誠に由々しき問題にして、吾人醫業に携る者結核の撲滅に向つて進まれんことを望む」云々。博士の原籍地は現住地茨城縣結城郡絹川村大字小森なり、明治三十年生れにして當年漸く三十有九歳、學識、手腕、人格共に壯熟の域に入り、少壯の意氣と共に最も活躍の時代に在り。殊に其の最も得意とする肺結核領域に至りては、研鑽多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して療養界の爲め盡す所あり、其の玲瓏たる打診の好評は益々遠近に喧傳し篤き信望を博す。讀書家にして書見を業餘の趣味とす。

鈴木三郎

△從五位勳四等豫備陸軍二等軍醫正鈴木三郎博士は、二高醫學部の出身にして、明治三十一年卒業後、一年志願兵に次で軍醫として奉職し、近衛師團、第一師團等に勤務、累進して大正十年陸軍二等軍醫正となり、同年十一月現役を退き豫備役となる、斯間陸軍々醫學校にて前後二回内科を研究し、陸軍に於ても主として内科を擔當し居れり、戰役には日露役及び大正三年十二月青島戰爭に参加せり、現在にては仙臺市花京院通七七自宅診療所に於て一般内科の診療に従事し居れり。

△博士の感想に曰く「開業醫師に對し世人種々の惡口を弄し居るも、之等は皆患者本位の言にして誠に面白からぬことなり、醫師とても人間なり、宜しく醫師の立場をも顧みざるべからず、要するに醫師と患者間の空氣悪しきためなるが故に、此の惡氣を除くにあり、此の方法に就ては二、三意見あるも茲に省略す」云々。

△主論文は「血液中ニ於ケル尿酸代謝ノ研究」、(英文)にして、參考論文は、(1)眞鴨及家鴨ノ肝及筋肉ノ含水炭素(獨文)、(2)章魚ノ有機燐酸化化合物(獨文)、(3)「バラチフス」ニ就テ、(4)我陸軍ニ於ケル主要ナル外傷性疾患ノ原因機轉及其豫防策 附歐洲強國トノ比較、(5)先天性遺傳性指關節強剛ニ就テ、等なり。秋田縣由利郡矢島町故鈴木勇一郎の三男にして、明治九年生る、鈴木立男博士の弟也。人と爲り謹直篤厚、殊に同情心に富み、萬事に几帳面なり、その眞摯なる紳士的態度は多とす。

重信正道

△樺太大泊本町に於て内科及び耳鼻咽喉科を標榜して開業せる重信正道博士は、長崎醫專大正九年の出身にて、田中及び清川兩博士に就て内科學を專攻し、後ち慶大教授弘中及び小此木兩博士に就て耳鼻咽喉科學を學び、次で川上漸教授指導の下に病理學を專攻し、昭和九年九月慶大にて學位を授與せられたる少壯醫博也。

△學位主論文は「家兔ノ血球ヲ以テ免疫シタル白鼠ニ於ケル移植白鼠痛ノ生機ニ就キテ」にして、參考論文に、(1)榮養ニ關スル一般臟器ノ病理學所見、(2)鼻中隔ヨリ發生セル血管肉腫、(3)上顎性粘液液腫ニ關スルモノ、等あり。

△感想に曰く「形而上上下下より事物の全體を觀じ、其局所に及ぼし歸向を察し、時中の處置を大自然の理法に準據して取り得る事を學ぶ事を希望す」云々。東京市の人、明治二十九年生、重信一華の二男也。錦戒、又は克道はペンネームにして、哲學を趣味す。正を愛し邪を惡み、至誠以て仁術の爲め人事の最善を盡し、以て天職と爲す眞面目なる臨床家也。

武田 義男 △大阪市港區八幡屋大通二ノ七五に武田内科醫院あり、院長武田義男博士は大阪醫大系の内科学者にして、内科学の泰斗小澤修造博士の門弟として知られ、恩師指導の下に斯學の蘊奥を究め、學位主論文「胃液及十二指腸液内二、三酸素ノ實驗的研究」及び參考論文六篇を完成、大阪帝大醫學部に提出して學位を獲得せる新人也其の學歴よりすれば、昭和二年四月大阪醫大を卒へ、同年同月より五年四月迄三年間大阪帝大醫學部副手として勤め引續き同五年四月より九年四月迄四年間同學部助手として勤務す、爾來現住地にて開業、昭和九年九月學位受領今日に至る。

△滋賀縣甲賀郡石部町大字石部内貴又右衛門の二男にして、明治三十二年生る。母校の研究室を巢立ちて診療界に躍進するや、努力奮勵日も尙足らず、今や獨特の手腕を揮ひ、誠意誠實を盡して仁術の爲め大に將來に待つ所あらんとす、前途の發展や大に待望せらる。研究以外には端唄、長唄を趣味す。

藤田 繁雄

△大阪市鐘紡淀川病院長として名聲を馳せ、斯界の爲め努力奮盡しつゝあるは藤田繁雄博士也。氏は長崎醫專の出身にして、内科を専門とし、特に結核病を最も得意とす、結核界の權威佐多愛彦博士に親炙して、恩師指導の下に多年研究して斯學の蘊奥を究め、大阪帝大より學位を受領せり。更に其略歴を概括すれば、明治四十二年長崎醫學專門學校入學、大正二年同校卒業、同年長崎縣警察醫に任命せられ、大正三年長崎縣立病院内科研究、昭和六年鐘紡入社、同九年九月學位受領、以て今日に至れり。

△學位主論文は「感染獸ノ年齢ト結核性變化ノ特色」にして、參考論文は、(1)農村青春期男女ノ「ツベルクリン」反應ニ就テ、(2)純綿纖維並ニ加工綿纖維ノ結核性變化ニ及ボス影響ニ就テ、(3)結核過敏性ノ發生ニ關スル實驗的研究、

(4)高熱時ニ於ケル赤沈反應ト「ツベルクリン」反應トノ關係ニ就テなり。

△佐賀縣東松浦郡鏡村半田の出身にして、明治二十三年生る、當年不惑有六歳、學究的年壯の紳士也。殊に篤學者としての輝しき閱歴は、氏が前半生史に盡きて光彩陸離たるものあり。今尙結核に關する研究に余念なく、業餘技々として精研に倦むことなし。研究以外には佛教を趣味として造詣する所深く、信義を重んじ禮節に厚く、自ら克く品性の陶冶に勉め、人に對するに懇篤親切を以てす。大阪市旭區友淵町一二三に住む。

本多 秀貫

△東京市四谷區永住町二に一般内科、レントゲン科特に呼吸器科、消化器科を以て著名なる本多内科醫院あり、一般内科の外特にレントゲン科を併置し、その他紫外線、赤外線、デアテルミイを設備す。院長本多秀貫博士は、愛知醫專出身の篤學者にして、名古屋醫大より學位を獲得せる斯科近來の名醫博なるが、開業拮据二十年の間、臨床の傍ら研學切磋常に學を鍊り腕を磨くに餘念なく、終に三井慈善病院放射線科保利清博士指導の下に「レ」線學を専攻して學位論文を完成せり。學位論文は既に學界に定評あれば言はずもがな、よくその學殖の豊富なるかを語るに足る。一面又臨床の經驗に富み、博士獨特の手腕は多年の聲望と相俟つて、好評嘖々の裡に大衆の人氣を集申し、牢乎たる地盤は既にして抜くべからざるものあり。蓋し其の今日ある博士が、開業の傍ら學位を獲得せる篤學は立志傳的にして特筆に値し、博士の面目を語るに充分なり。

△博士は大正三年愛知醫專卒業後、同三年より十二年迄愛知縣碧海郡高濱町にて開業、同十二年九月より昭和三年十二月迄東京四谷區荒木町近藤内科療院副院長として就任、次で昭和四年二月以降現住所にて開業の傍ら、和泉橋病院放射線科にて研究に従事し今日に至る。其間、昭和九年二月名古屋醫大より學位を受領せり。

△學位主論文は「日本人下顎縫合癒合機轉ニ關スル「レ」線解剖學的研究」にして、參考論文なし。愛知縣碧海郡高濱

町吉濱本多秀賢の長男にして、明治二十一年生る。其の今日ある閱歴は博士の前半生史これを語りて餘蘊なく、殊に其の篤學は立志傳的にして特に異彩を放ちて見ゆ。壯齡今や不惑に入る八、元氣甚だ旺盛にして刀圭常に多忙の裡に今も猶日新醫學の研鑽に餘念なし。「日本獨特と思はれた所謂開業醫制度の破壊に傾かんとするを悲しむ。尤も大きな原因は蓋し全世界を風靡した經濟不況であらう、而し余は醫師の品格の低落と同時に醫業の何たるかを解せぬ一民衆や官僚の錯覺が今日あらしめたことを否定し得ないと考ふる者だ。此の際吾人は充分結束して、昔乍らの良風を固執し、醫業の發展を期せずば蓋し國民保健の大業を完成し得ぬと確信する者である」云々、との持論者也。以上は博士の心境を語るものにして其の爲人を窺知するに難しとせず。讀書家にして殊に文藝趣味深く、音樂を愛し、運動を好む、時に又乗馬を楽しむ。家庭は妻禎子との間に子女無く、家庭的に恵まれざる丈け研究心一層強く、其の前途更に洋々たるものあり。

◇

萱場次郎

△仙臺市東三番丁四五に内科特に呼吸器科を以て名聲を博し、好評噴々の裡に年次堅實なる發展を遂げつゝある萱場病院あり。院長萱場次郎博士の經營にして、病床十三、レントゲン科、光線科、電氣治療科其他内部の設備全く成り、院長自ら日々診療に勵精して余念なく、博士獨特の手腕は氏が篤實濃厚なる性格と相俟つて益々人氣を集め、今や當市診療界に一流の地位を占む。氏は東北帝大（専門部出身）系の内科學者にして、特に呼吸器病科を得意とし、母校の恩師熊谷岱藏教授に就きて斯學の蘊奥を究め、東北帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。目下仙臺稅務監督局醫、私立吉田高等女學校醫、私立榴ヶ岡幼稚園醫等の囑託を受け公職にあり、氏が社會的聲望の歸する所亦以て知らる。

△博士は大正二年東北帝大醫學專門部醫學科卒業、直ちに新設熊谷内科に入り、大正三年一年志願兵として、仙臺歩

兵第四聯隊入隊、大正四年再び同内科に復す、大正七年陸軍三等軍醫に任じ正八位に叙せらる、大正九年現住地に開業、昭和五年熊谷内科教室に於て開業の傍ら研究、同九年十二月學位受領、現今に及ぶ。

△學位主論文は「蜆「エキス」ノ排膽及催膽作用ノ研究」にして、獨逸文の原著也。參考論文は、(1)「アミラーゼ」ノ絮條形成作用ニツキテ、(2)腦脊髄液検査上「アミラーゼ」測定ノ診斷的價値ニ就キテ、(3)人工氣胸療法ノ統計的觀察、(4)胸腔内壓殊ニ脚氣患者ノソレニ就テ、(5)胸腔内壓ニ就テ、(6)實驗的肺結核ニ對スル祛痰劑ノ影響、(7)實驗的肺結核ニ對スル紫外線、赤外線ノ影響等なり、主論文は黃疸に對する民間藥蜆が特有の排胆及催胆作用を營むことを新しき方法と見方とより研究し其の神經影響をも明かにし、逆に胆道系の神経主宰と肝分泌神經影響と機構とを知り得たり。參考論文中祛痰劑、紫外赤外線等の結核治療に新認識を與へたと胸腔内壓の研究は當時前人未踏の領域を探究せる點に寄與せるもの尠からず。

△感想に曰く「開業醫としての觀點よりせば從來の醫療機構を全革し一時的なりとも無統制に墮せしめ、然る後徐ろに新らしき、より科學的なる機構を作るにあらずんば醫の往くところ、大衆の赴く所荆棘のみ、學界展望に至りては感想のみ徒に多くして謂ふべきを知らず唯だ Japan を排して Nippona「イズム」に邁進せんことを望むや切なり」云々。氏は宮城縣宮城郡七郷村荒井宇畑中の人、萱場利兵衛の次男にして、明治二十一年生る。年壯にして手腕圓熟の域に入り多量の分別を有し、識見に富む、感想にもある如くニツボン、イズムの主論者也。性格より言へば、東北人の通有性を自覺しながら改め難く、肉體の頑健を過信、努力一點張り、従つて伸縮性なく、飽迄野人として立ち、唯だ誠意誠實を以て終始する人なるか、自ら氏の長短は此間に窺はる。「全部の日本人は皆親戚なる觀あるも、狹義の親戚中博士なるものなし」云々とは氏の談片なるが、亦以て氏の心境を物語りて余す所なし。趣味としては魚釣及びスポーツの見物を好む。

◇
加藤清彦 △日赤秋田支部病院理學診療科醫長としての加藤清彦博士の名聲は、其の地方に喧傳し多大の信望を博す。氏は昭和二年三月慶應義塾大學醫學部卒業、同年四月慶應義塾大學醫學部理學的診療科教室助手となり、昭和七年六月日本赤十字社秋田支部病院理學診療科醫長として赴任し爾來同職に在り、昭和九年十一月慶大にて學位を受領せり。斯間藤藤浪剛一教授の指導を受け、理學的診療科を専攻せり。

△學位主論文は「レントゲン線ノ基礎代謝ニ及ボス影響ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)子宮筋腫ノ「レントゲン」治療ニ就テ、(2)「レントゲン」線ニヨル婦人去勢ニ就テ、(3)子宮及附屬器ノ「レントゲン」呼吸ニ就テ、(4)潜在性脊椎破裂なり。

△氏は愛知縣海部郡佐織村大字小津の人、加藤正名の次男にして、明治三十四年生る、年齢未だ三十有五歳也。研究心に富み、平生臨床甚だ多忙なるに拘はらず、今猶業餘克く勉めて精研に余念なし、潑刺たる前途は頗る春秋に富み大に將來の大成を待望せらる。秋田市保戸野北鐵砲町三九に住む。

◇
細見新治 △神戸市湊川腦病院長細見新治博士は、明治四十三年醫師試驗合格、翌四十四年一月關東都督府醫務囑託、同年五月解囑、大正四年一月湊川腦病院長就任、昭和四年一月より同九年十二月迄京都帝大醫學部精神病學教室專修科に在學、今村新吉教授の指導を受け精神病學を専攻し、同九年十二月京都帝大にて學位を受領せり。主論文は「「サルヴルサン」ノ注入経路ト腦髓移行量ノ變化ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)麻痺性痴呆ニ對スル「マラリヤ」療法、(2)麻痺性痴呆ニ對スル回歸熱療法、(3)麻痺性痴呆ニ對スル「ディアテルミー」療法、(4)精神分裂症ニ於ケル神經病學的徵候ノ研究、(5)復生ノ臨床的研究(第一編)等なり。

△神戸の人にして、明治十九年生る。顧ふに醫師試驗出身より奮起して興學の志に燃ゆる氏は、在職の儘京大精神病學教室に入りて、滿五ヶ年の努力精進を續け、日夜倦まざる奮闘的學究生活のうちに終に克く、學位論文を完成せる天稟の頭腦と、百折不撓の努力とは、立志傳的篤學の士としての範を示せるものにして、我學界の一驚異たるに値す。今年齒當に知命に達す、現職に就任して以來二十有餘年の久しきに亘りて、至誠一貫、専心忠實に本職の爲め勵精努力し、多年貢獻せる功績は言はずもがな、院是に従ひ熱誠完く最善を盡し以て天職と爲すの概あるは、精神病界の爲め大に意を強からしむ。神戸市湊區湊川町三三に住む。

◇
大竹藤一 △日本醫科大學講師として内科學を講じつゝある大竹藤一博士は、日本醫專出身の内科學者にして、金澤醫大より學位を獲得せる新博士中の一人物也。氏は愛知縣の出身、明治二十七年生にして、大正十五年日本醫學專門學校卒業、直ちに日本醫科大學附屬醫院行徳内科醫員を奉職し、昭和九年日本醫科大學講師に任ぜられ、同十年一月金澤醫大にて學位を授與せられ、今日に及ぶ。斯間行徳健助教授の指導を受けたり。

△學位主論文は「腓液分泌ノ研究補遺」にして、參考論文は、(1)胃液分泌ト反覆攝食トノ關係、(2)糖類ノ靜脈内注射ガ胃液分泌ニ及ボス作用、(3)食鹽ノ胃液分泌ニ及ボス影響等なり。

△眞面目なる年壯學者にして、熱心なる研究家を以て知られ、今や多年の蘊蓄を傾倒して母校の教壇に起ち、將又臨床に直面して學生指導の傍ら自己の研究に没頭し、誠意誠實を盡して希望ある將來に俟つあらんとす、潑刺たる其の前途は大に期待せらる。研究以外には旅行を趣味す。東京市本郷區駒込曙町一三に住む。

◇
牧野寅三 △京都帝大醫學部松尾内科に新進の牧野寅三博士あり。氏は大阪醫大出身の内科學者にして、母

校の恩師楠本教授の門下生として知られ、楠本内科を巢立ちて後、更に京大教授松尾博士に師事して研究を重ね、京都帝大より學位を獲得せる後、引續き今猶恩師指導の下に研究續行中にて、聽て診療界に躍進せんとする修養に餘念なきが如し。氏は昭和三年大阪醫大を卒業後、同年四月より昭和五年四月迄、同大學楠本内科勤務、昭和五年四月より京大松尾内科勤務今日に至る、斯間同十年一月京都帝大にて學位を授與せらる。斯間主なる指導教授は阪大總長楠本長三郎博士及び京大教授松尾巖博士にして、内科を専攻せり、特に消化器病科及び腎臟病を最も得意とす。

△學位主論文は「植物性神經ト實驗的腎炎」にして、第壹——六回報告より成れり。外に參考論文七編あり。氏の論著中「植物性神經ト實驗的腎炎」は博士會心の作にして最も得意のものを見るべき也。

△感想に曰く「特に感想として申上げるものはないが、醫界は他の學界と異なり數多の研究者に依り貴重なる研究業績の續出は誇りを感じるものである」云々。氏は大阪府中河内郡布施町大字太平寺、亡牧野太吉の長男にして、明治三十五年生る。年齢未だ三十有四歳、學究的少壯の紳士、熱心なる研究家として知られ、今猶研究續行中にて修養の時代に在るが、聽て診療界に躍進せんとする前途の展開は頗る刮目に値す。今は唯だ研究に没頭して他事を顧みることなく、努力研鑽日も尙足らざるの概あり。愛讀家にして書見を唯一の趣味として精神修養相俟つて克く勉む。人と爲り濃厚にして人と争はず、書生氣分の朗快さは人に親しまるゝの徳を有す、一面には又意志強固にして、研究に對する態度の眞摯なると、熱あり力ある熱心振りは、博士の將來を大ならしむる素質の人と見るべく、將來有爲の資に富む博士の前途や、多々益々努力奮闘を要するの切なるを思ふの秋、折角の自重加餐を祈ると共に、一層の精研奮勵あらん事を、老婆心ながら著者は更めて囑望して止まざる者也。大阪府中河内郡布施町大字太平寺に私邸あり。

渡邊 靜

△神戸市兵庫區水木通三丁目三ノ一に於て渡邊内科醫院を經營し、傍ら日本海員救濟會神戸病院

副院長内科醫長として、豊原副院長と共に診療に従事しつゝある渡邊靜博士は、長崎醫專出身の内科學者にして、特に呼吸器科に長じ最も得意とす。更に其の略歴を概説すれば、大正十二年長崎醫學專門學校卒業、直ちに長崎醫科大學副手囑託、内科學教室に入り研究、次いで二三病院を経て、現在日本海員救濟會神戸病院副院長内科醫長たり、昭和四年十一月より京都帝國大學松本信一教授指導の下に學位論文研究に従事し、昭和拾年壹月京都帝大にて學位を授與さる、現在京都帝國大學化學研究所研究員たり。又日本海員救濟會神戸病院副院長内科醫長として勤務し、傍ら現住所に於て渡邊内科醫院を經營し、診療に従事しつゝあり。斯間、長崎醫科大學前内科學教授山田基博士、京都帝國大學教授松本信一博士に就きて内科を専攻し、特に呼吸器科を得意とす。

△學位主論文は「膀胱腫瘍ノ實驗的研究」にして八篇より成る。參考論文は、(1) 微毒ノ免疫ニ關スル研究(四篇)、(2) 「テール」腫瘍ニ關スル研究(二篇)、(3) 「ラツテ」膀胱寄生蟲ナル *Trichosomoides Crassicauda* ニ關スル研究(二篇)、なり。膀胱腫瘍の實相を把握し得たる上掲の主論文並に微毒免疫の真相を追求し得たる參考論文中の微毒免疫に關する四篇は博士快心の論著なりとす。

△大分縣西國東郡田染村嶺崎、渡邊信十郎の二男にして、明治三十四年生る。多年鍊磨せる手腕は愈々壯熟の域に入り、今や其の特技を發揮するに自由の立場に在り、向後の活躍と相俟つて將來の發展を大に囑望せらる。讀書家にして書見を唯一の樂しみとし業餘克く精研に勉むる所あり、又謠曲を趣味す。文才あり、無有を號とす。博士の年齢未だ三十有五歳、前途洋々たり。折角の努力健闘を望むや切也。

矢野 豊

△茨城縣土浦町三八平本内科醫院長矢野豊博士は、千葉醫大派の新進なる名醫博にして、内科を専門とし特に呼吸器科を得意とす。内科は母校の恩師岡田清三郎教授、及び柏戸留吉教授指導の下に研究し、又加賀

谷勇之助教授に就て血清學を専攻せり。學位論文は「各種細菌並ニ動物諸血球ト人血球トノ共通抗原物質ニ就テ」にして、學位は千葉醫大より獲得せり。

△博士は大正十四年千葉醫大専門部卒業後、千葉醫大附屬醫院第二内科に次で、千葉縣船橋町清川醫院に勤務し、翌十五年十月再び第二内科醫局に入る、昭和二年五月同醫局を去り再び清川醫院に勤務す、同五年一月更に千葉醫大法醫學教室に入り血清學の研究に従事し同七年七月同教室を去る、其間千葉市井上内科病院に勤務し、同七年八月より現住地にて開業す、翌八年十月母校にて學位を授與せられ今日に至る。

△千葉縣東葛飾郡入榮村大字夏見の人、矢野定吉の二男にして、明治三十二年生る。學究的温厚の紳士にして、年齢漸く三十有七、少壯の意氣に燃え研究心に富む。その今日ある輝しき閱歷は言はずもがな、多年の研鑽經驗と相俟つて今は手腕、人格共に圓熟し最も得意の時代に入る。研究室を去り愈々獨立の舞臺に立ちて以來日猶淺少なれども、誠實と親切とをモットーとして熱心に働きつゝある診療振りは、打診の好評と相俟つて漸次獨立の地盤を築き、年と共に向上發展の域に進み、日増盛況を呈しつゝあるは大に心強く感ぜらる。趣味としては俳句、圍碁、野球等を好み、業餘又克く讀書精研に余念なきを見る。春秋猶豊富にして前途洋々たれば、切に自重加餐を祈る。

叶山常吉

△慈惠醫大派の一新勢力と見るべき、神經及び精神病科の新手腕家として囑望せられつゝある叶山常吉博士は、目下東京府立松澤病院醫員として活躍し、内外の聲望を博しつゝあり。氏は大正八年三月慈惠醫大卒業、同年六月海軍少軍醫に任官、大正十年三月皇太子殿下御召艦香取の乗組員として歐洲を巡航視察、昭和五年十一月海軍軍醫少佐に任官、翌年三月退職、同年四月慈惠大研究生、同九年二月東大精神科入室、同年十月松澤病院勤務、同十年一月慈惠醫大より學位受領、今日に至る。斯間慈惠醫大教授浦本政三郎博士及び東大教授三宅鑛一博士に就き神

經、筋生理を専攻せり、特に神經及精神病科を得意とし斯科を以て立てり。

△學位主論文は「神經及筋ニ於ケル乳酸量ニ關スル研究」にして五篇より成り、参考論文なし。氏の論著中「神經及筋ノ化學的過程（綜説）」は博士會心の作と見るべく博士の最も得意とせる著作なりとす。

△富山縣東礪波郡井波町、梅崎喜八の五男にして、明治三十年生る。多年海軍に出仕して軍醫界に活動する所ありしも、退官以來其の専門とする神經及び精神病科を以て立ち、今は唯だ其の職務に勵精して猶其の研究を捨てず、讀書靜修、孜孜として精研克く其の領域に就て深奥の探究に勵しみつゝあり。たま／＼氏の感想の一片を寄せて曰く「知は名に相應しかるべし。徳は更に名よりも重かるべし」云々と、以て博士の心境を語るに足り、其の人格を窺はる。性來眞面目にして謹嚴、お世辭を云ふ事と金を儲ける事は至つて下手の方なり。而かも人に對しての温情と熱情とは人に親しまるゝの徳を有す。趣味としては書見を楽しむの風あり。東京市品川区東大崎三ノ二四六に住む。

松野孝一

△東京逓信局保険課濱松簡易保險健康相談所長として活動し、斯道の指導啓發の爲め努力貢獻しつゝあるは松野孝一博士也。氏は日本醫大派の新進にして、内科及び小兒科を以て立ち、特に乳兒疾患、消化器並びに心臟疾患に多大の興味を有し最も得意とす。研鑽多年の間、主として岡田清三郎教授、宇佐美助教、藤井靜英教授等の指導を受け、最近名古屋醫大より學位を獲得せる新博士中の一異彩を以て注目せられ、光る學位の前途や氏が向後の活躍と相俟つて更に大に囑望せらる。

△博士は昭和五年三月日本醫科大學卒業、同五年五月愛知醫科大學副手を命ぜらる（小兒科學教室）、同七年一月名古屋醫科大學岡田内科教室に轉科を命ぜらる、同九年十二月學位論文通過、同十年一月學位を授與せられ、現職に在り。學位主論文は「水素「イオン」濃度ニ關スル知見補遺」にして、(1)果物ノ水素「イオン」濃度ニ就テ、(2)「ヂキ

タリス」葉ノ効力檢定ト水素「イオン」濃度トノ關係ニ就イテの二篇より成り、參考論文は「兩側性臍胸ノ一治癒例」なり。

△岐阜縣大垣市栗屋町、醫師松野熊轉の三男にして、明治三十三年生る。學究的少壯の紳士にして、年齢未だ三十有六歳、意氣潑刺として研究心に燃ゆ、學究生活を興立ちて實社會に起つや、日尙淺きも、今は唯だ至誠以て公に奉じ、一意専心、其の職務に努力勵精致々として倦むことを知らざるの概あり。多趣味の人にして、就中讀書を唯一の樂しみとし精研修養克く勉むる所あり、其他柔道、ラヂオ、活動、角力、旅行等を好む、從つて話題に富み社交上利する所又尠からずとせず。人と爲り温厚にして快活、能く人を愛し又能く人に親まる、常に徳操を重んじて自ら克く精神の修養に務むるの人たるを想はしむ。將來有爲の臨床家としての人格を尊重し、博士の春秋猶頗る豊富なるの秋、幸に健康にして、爲斯界益々奮盡健闘あらん事を、著者は更めて衷心囑望して止まざる者也。濱松市鳴江町一六八〇に住む。

石田 宏

△東京市淀橋區西大久保二ノ一九六をトして目下開業準備中の石田宏博士は、金澤醫專出身の内科學者にして、特に消化器病科を最も得意とする新進の大家たる一人物也。學位は京都帝大より獲得せるが、斯間内科界現代の權威京都帝大教授松尾巖博士に親炙して造詣する所深く、多年の蘊蓄を傾倒して臈て診療界に躍進せんとする前途の活躍や頗る囑目に値す。

△博士は大正三年金澤醫專卒業、其後金澤市金城病院、同市立櫻木病院、三重縣小林病院勤務、同五年末本籍地開業其間福井縣豐及吉野尋常高等小學校々醫、福井縣學校醫會評議員囑託、昭和四年より京都帝國大學醫學部醫院勤務、京都帝國大學專修科入學、昭和十年二月學位受領、目下現住所開業準備中。

△學位主論文は「腎臟障時ニ於ケル肝臟ノ尿素及ビ殘窒窒素排泄機能ニ關スル研究」にして、七篇より成る。參考論文は八篇あり。氏の論著中「尿素ノ微量定量」及び「肝臟ノ機能」等は博士會心の作にして最も重要なものと見るべき也。

△福井縣丹生郡吉野村芝原の出身、明治廿五年生れの學究的温厚の紳士にして、當年不惑に入る四歳也。氏は學校卒業後臨床家として立つて以來、地方二、三の病院に勤務し、或は自宅開業して多年實地の經驗を踏み、臨床に堪能にして獨特の手腕を有し、今や學殖と相俟つて愈々圓熟の域に入り、最も奮闘的活動を要するの時代に在り、近く開業と共に冴えたる腕の鳴る時を期待せらる。讀書家にして今猶精研に余念なく、書見を唯一の趣味とす。性來几帳面の實にして、事物の大小に關せず一づゝ整頓を好み、萬事正確に整理する長所を有す、以て其の爲人を窺はる。

城谷 文四郎

△山口縣技師にして、下關市立高尾病院に副院長として、尙市立衛生試驗所及び市立診療所兼務として内外の信望を博し、日々診療に勵精努力しつゝある城谷文四郎博士は、長崎醫大派の一新勢力と見るべき新進の内科學者にして、特に急性傳染病を最も得意とする少壯醫博として其の手腕を認めらる。氏は長崎中學校卒業後、大正八年官立長崎醫學專門學校に入學、同十二年三月同校卒業、直ちに軍醫生活に入りしも健康を害し、大正十三年六月豫備役編入、同年九月より下關市立高尾病院に奉職し現在に至る、尙、市立衛生試驗所、市立診療所に兼務す。昭和十年八月長崎醫大にて學位を授與せらる。斯間長崎醫大國友、影浦、辻三教授指導の下に研究せり。

△學位主論文は「腸「チフス」血液像知見補遺」にして四篇より成る、(1)赤血球並ニ血色素ニ就テ、(2)白血球像、(3)其ノ他ノ血液像、(4)有核赤血球出現ニ就テノ實驗的研究とす。參考論文は、(1)腸「チフス」經過中ニ於ケル血漿噬菌現象ノ臨床的觀察、(2)腸「チフス」豫防接種後ニ於ケル血漿噬菌現象ノ消長、(3)急性傳染病及其ノ他二、三疾患ニ於

ケル鹽基性顆粒赤血球ノ性狀ニ關スル臨床的觀察、(4)パイフェル氏「インフルエンザ」菌膜膜炎ノ三例、(5)汎發性種痘疹四例、(6)猩紅熱ト月經トノ關係ニ就テノ小經驗、(7)多染色性、鹽基性嗜好顆粒及超生體可染性網狀赤血球等ノ相互關係並ニソノ本態ニ關スル知見補遺、(8)鹽基性顆粒赤血球出現率ニ關スル私見等なり。

△長崎縣南高來郡北有馬村、城谷健閣の七男にして、明治三十三年生る。學究的少壯の紳士にして篤學者たり、氏が市立高尾病院に奉職の傍ら、春風秋雨の努力研鑽を續け、終に克く其の興學の初志を貫行せる跡は、氏が前半生史をして一段の光彩を放てり。今は熱誠以て公に奉ずるの念を以て、一意専心、唯だ其の職務に勵精して仁術の自分を盡しつゝあり。研究以外の趣味としては圍碁と俳句とを好む。賦性謹直にして至誠の士也。下關市東大坪町五に住む。

螺 良四郎

△東大派の名醫博たる螺良四郎博士は、内科醫として起ちて以來、大阪市北區堂島北町一一佐多醫院(院長佐多愛彦博士)に於て専ら内科を擔任し、勵精拮据十年一日の如く不斷の精進を續け、今や浪速診療界に於ける内科の大家として大衆より多大の信望と尊敬とを以て迎へられ、醫院の隆盛と共に嘖々たる名聲を博せり。博士は世人周知の如く、院長佐多博士の愛婿にして、嘗て獨、英に留學して内科學及び生理學を研鑽し、學識、經驗相俟つて獨特の手腕を有し、内外臨床醫家として今や一段の貫祿を備え、最も活躍の全盛時に在り。

△博士は大正七年十二月東大醫學部卒業、同年大學院入學、入澤内科(入澤教授)教室に於て副手勤務、大正十年九月より藥物學教室(林教授)に入る、同十二年二月渡歐ハンブルヒ市サン、ゲオルヒ病院及アルトナ市立病院に約五ヶ月、次で伯林シャリテール病院第二内科のブルグシュ教授の下に六ヶ月、次で英國に渡りサン、パソロメウ醫科大學の生理教授ロバットエバンス氏の下に約一ヶ年研究に従事し、大正十四年五月米國を經由して歸朝、同年七月より開業今日に至る、斯間大正十三年三月東京帝大より學位を受領せり。

△學位主論文は「生殖腺内分泌知見補遺(第一及第二報告)」にして、參考論文は、(1)家族的遺傳性運動失調症ニ就テ、(2)甲状腺變調性兒癩症ニ就テ、(3)脚氣ニ於ケル植物性神經機能ニ關スル研究等、其他論著夥多。博士は朽木縣の出身、故笹川正男(元慶大教授)の弟にして、明治二十六年生る。スポーツと文藝とを趣味す。年齒不惑に入る三歳、學究的年壯の紳士、妻愛子は佐多愛彦博士の娘也。兵庫縣川邊郡立花村に住む。

荒井 惠

△侍醫として多年宮内省侍醫寮に忠勤を勵み、至誠一貫、奉公の念に燃えつゝある荒井惠博士は東大派の錚々たる内科學者にして、嘗て獨逸に留學して研鑽、歸朝後母校より學位を得、當世博士界の中堅にして内科の大家として矚目せらるゝ一人物也。博士は東京獨逸協會中學校、一高を経て、明治四十一年十二月東京帝大醫科大學卒業、同四十二年一月より大正元年八月迄東京帝國大學醫科大學助教授故宮本叔博士に師事、其間陸軍一年志願兵服役し、終了後任豫備陸軍二等軍醫、大正元年九月より同十年七月迄、臺灣總督府に奉職、臺北醫院第二内科醫長、醫學專門學校講師、總督府防疫醫官、總督府技師等に歴任又は兼任、大正十年八月休職上京、東京帝國大學傳染病研究生となる、同十一年六月私費を以て獨逸國に留學、同國ハンブルク熱帶病研究所及エツペンドルフ一般病院に在學同十二年十月歸朝、同十三年六月侍醫に任ぜらる、同十三年四月學位受領、以て今日に至れり。

△學位主論文は「「バラチフス」B菌ノ排泄路ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)「バラチフス」B菌ノ經口的輸入ニヨル家兎ノ免疫及感染ニ關スル實驗的研究、(2)デウドレネ氏培養基ニ就テ、(3)臺北ニ於ケル腸「チフス」ノ疫學的觀察、(4)阿里山ニ於ケル二三ノ醫學的調査ニ就テ、(5)臺灣人ノ體格研究補遺、(6)「ザルコスボリチア」ノ研究(獨文)等なり。其他論著夥多。

△東京市麻布區士族荒井信勞の四男にして、明治十七年生る、學究的溫厚の紳士として的人格者也。啞雷山人は其號

にして、史論、地誌に多大の興味を有し、讀書を唯一の楽しみとす、又旅行に趣味を有す。東京市牛込區南山伏町一六に住む。

吾妻俊夫

△昭和醫專教授にして同校の中堅たり、内科界現代の大家として名聲を博せる吾妻俊夫博士は、東京市の出身、明治二十四年生にして、大正三年三月第一高等學校卒業、同七年十一月東京帝國大學醫科大學卒業、直ちに東大醫化學教室に入り柿内教授の指導の下に醫化學研究、同十二年七月東大稻田内科に轉勤す、同十三年十二月東京帝大にて學位受領、目下頭書の現職に在り。

△主論文は「血清脂肪酵素ノ研究」にして、原著は英文より成る。参考論文は「養育院入院者ノ營養研究」なり、此他論著夥多。學者肌の人にして、年齒漸く不惑有五歳、學識、手腕共に圓熟して才氣益々發揮せんとする時に在り。猶春秋に富む前途は大に期待せらる。東京市神田區岩本町二二に住む。

菊池武彦

△日赤香川支部病院長として内外より多大の信望を博し、當地方診療界の爲め努力貢獻しつゝあるは菊池武彦博士なり。博士は岡山中學校、六高を経て、大正八年十一月京都帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部副手囑託、同九年十一月任同助手、同十年十一月任京都帝國大學助教授、同十四年五月依願免本官、同十四年六月京都帝國大學副手囑託、次で京都帝國大學醫學部講師となり、同年三月京都帝大にて學位を授與せらる、目下現職に在り。△學位主論文は「家兔摘出心臓ノ「アドレナリン」ト「アセチルヒヨリン」並「ピロカルピン」トノ作用ノ相互干涉」にして、参考論文は、(1)蛙及ビ家兔摘出心臓ニ於ケル「アドレナリン」ノ作用ニ及ボス葡萄糖ノ影響ニ就テ、(2)亞鉛及ビ「アドミウム」ノ藥物學的研究(第一)急性中毒現象ニ就キテノ研究、(3)同上(第二)循環系統ニ對スル作

用ノ研究、(4)同上(第三)滑平筋及ビ骨格筋ニ對スル作用ノ研究等、其他論著夥多。

△岡山縣小田郡笠岡町大字笠岡の人、菊池於菟太郎の男、明治二十六年生る。學究的年壯の紳士にして、賦性篤實溫厚、臨床家としての特質を備ふ。年齒不惑に入る三歳、手腕圓熟、最も活躍の全盛時に在り。高松市天神前四八に住む。

柴田博衛

△岡山市弓之町七二にて内科専門を以て開業せる柴田博衛博士は、京大派の名醫博にして、内科臨床家として錚々たるもの也。今や超然たる位地を占め堅實なる地盤を有す。氏は岡山縣邑久郡行幸村服部の人、柴田倉造次男、明治二十九年生にして、岡山縣立岡山中學校、第六高等學校第三部を経て、大正十年京都帝國大學醫學部卒業、爾來同學部内科教室副手、京都市立京都病院醫員に歴任して、宮崎縣立病院内科部長となる、大正十五年三月京都市帝大にて學位受領、次で現地開業今日に至る。

△主論文は、(1)局所免疫ニ關スル知見補遺、(2)細菌ノ組織親和力ニ關スル實驗的研究の二篇にして、参考論文は、(1)「チフス」凝集素ノ膽汁内移行ニ就テ、(2)ステツプ氏ノ所謂「チフス」中間排菌者ニ就テノ疑義、(3)「チフス」患者膽汁ノ分割的細菌検査、(4)急性傳染病患者膝液酵素ノ消長、(5)腸壁扶斯經過中ニ於ケル潜在性腸出血ニ就テ、(6)腸壁扶斯經過中ニ於ケル血液粘稠度ノ變化ニ就テ、等なり、其他論著多數あり。

△學究的溫厚の紳士にして、年齒漸く不惑に達し、少壯の霸氣に富み、獨特の手腕は壯熟して益々其の特技を發揮せんとする域に入り、努力勵精日も尙足らざるの意氣を示せり。猶洋々たる前途は頗る春秋に富む、折角の奮闘を望む

高崎文雄

△東京市澁谷區上通四ノ一〇に著名なる高崎内科醫院あり、院長高崎文雄博士の經營にして、開

業拮据十年餘に垂んとし、多年聲望を扶植し、今や堅實なる地盤の上に、打診の好評と相俟つて益々人氣を吸収し、悠々たる位地に在り。略歴より言へば、博士は大正二年金澤醫專を卒へ、直ちに同校醫化學教室に入り醫化學を専攻し、同三年滿鐵奉天醫院内科に入り、同八年南滿醫學堂講師を命ぜられ、同十三年迄内科學を擔當せり、それより京都帝大清野教授の研究室に入り血清免疫學及細菌學の指導を受け研究に従事す、昭和二年六月京都帝大にて學位を受領す次で現住所に於て内科専門にて開業今日に及ぶ。

△學位主論文は「細菌凝集反應ニ及ボス色素ノ影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)網狀内皮組織系統機能異種赤血球貧食作用トノ關係、(2)二、三水溶性「カンフル」製劑並ニ「コラミン」ノ細菌發育ニ及ボス影響ニ就テ、(3)浸、滲出液ノ結氷點測定ト及ビ浸、滲出液穿刺前後ニ於ケル尿ノ結氷點測定トノ關係ニ就テ、(4)結核菌蛋白ノ沈澱元性ニ就テ、外三篇あり、其他論著夥多。

△大阪市東區空堀通三丁目出身、明治二十一年生にして、當年不惑に入る八歳、學究的濃厚の紳士也。内科臨床家として立ちて以來、多年の經驗を踏み、臨床に堪能にして今や手腕圓熟の佳境に入り、徳操の修養と相俟つて一段の貫祿を備え、最も重望せらるゝ時代に在り、氏の得意や想ふべき也。讀書家にして今猶研究を捨てず、趣味としては紀行文、傳記、歴史物を特に愛讀す、時に又旅行を樂しむ。

◇
豊島順吉 △京都帝大醫學部講師として松尾内科に新進の豊島順吉博士あり。京都帝大醫學部(大正十三年)の出身にして、内科を以て立ち、昭和三年七月母校より學位を獲得せる少壯醫博也。學位論文は「リチン」免疫ニ關スル知見補遺」にして、教授松尾巖博士指導の下に完成せるものなるが、今猶恩師に師事して研究に没頭しつゝあり、聽て展開せんとする前途は大に囑望せらる。

△博士は本年(昭和十年)二月たま／＼自分自身の胃潰瘍のために研究を始め、獨國ストラスブルグ大學ワイス、アロン兩教授が動物實驗の結果により人工的に「アミノ」酸を作つて胃並に十二指腸の潰瘍に與ふれば治癒することを發見したるを知りたる博士は、爾來この「アミノ」酸の投與により何等の食餌療法も要せず、博士自身の難病のみならず、約五十名を完全に治癒することを得、これに依つて胃潰瘍のみならず、胃痛患者も減少させることが可能となり、學界の注目を引き、全國數萬の同病患者に新しき光明を與へたるは特筆すべきを要す。

△氏は秋田縣河邊郡新屋町の出身にして、明治三十二年生る、年齒未だ三十有七歳、學究的少壯の紳士也。學者肌にして熱心なる研究家を以て知られ、今は母校の教壇に起ちて學生指導の傍ら、恩師指導の下に胃潰瘍の新療法に關する研究に没頭し、業績の發表と共に實驗上の研鑽に努力勵精日も尙足らざるの概あり、聽て該療法が氏の研究の進行と共に一般診療界に普及實施せらるゝの日を期待せらる。切に自重加餐を祈ると同時に、斯科界の爲め折角の精研盡瘁あらんことを。京都市岡崎町北御所町二〇に住む。

◇
鈴木正彦 △名古屋市中區下茶屋町四二に鈴木内科醫院あり、院長鈴木正彦博士に就ての認識を得んとするも亦容易ならず。氏は愛知縣の出身、明治三十四年生にして、大正十二年愛知醫專卒業後、多年研鑽の後、學位論文「ワクチン」ノ研究」を完成、東京帝大醫學部へ提出して昭和五年十二月學位を獲得せり。自己の人物を過信する人か、或は謙遜家として然からしむる人かは知らざれども、自己の存在を公表するを避忌する風あるは、現代的臨床家として自己認識の不足ならずや、一言録して識者の批判を待たんとす。

◇
日置陸奥夫

△金澤醫大助教授にして、兼ねて金澤市若松療養所長たる日置陸奥夫博士は、學系は東大派に屬

し、金澤醫大派の一勢力と見るべき内科界近來の少壯醫博にして、今や多年の蘊蓄を傾倒して金澤醫大の教壇に起ち學生指導の傍ら療養界の爲め自ら日々診療に直面して至誠公に奉じ、不斷の努力精進を續け大に將來に期する所あらんとす、而かも年齒未だ少壯にして常に學を鍊り腕を磨くに餘念なく、潑刺たる前途の大成は更に大に期待せらる。
 △博士は四高を経て、大正十五年東京帝大醫學部を卒へ、同年直ちに金澤醫大内科助手任命、昭和六年十二月論文通過、翌七年一月金澤醫大にて學位授與、同年五月金澤醫大助教任命、同年十二月金澤市若松療養所長囑託兼務今日に至る。斯間大里俊吾教授の指導を受け内科學を專攻せり、又細菌學の造詣深し。學位主論文は「脂肪代謝ニ關スル研究殊ニ組織脂肪ノ定量法ニ就テ」なり、其他の論著夥多。
 △氏は金澤市の士族、明治三十六年生れの學究的少壯の紳士也。志操堅實にして、人と爲り穩健、寛厚能く學生を愛撫し、人を容れ又能く親しむ。研究以外の趣味としては謡曲と能樂を好む。將來有爲の學究として頗る春秋に富む、幸に健康にして益々精研活躍あらん事を望むや切也。金澤市味噌蔵町上中丁八に住む。

今川 芳樹

△京都市上京區大將軍鷹司町三六にある今川内科醫院は、院長今川芳樹博士の經營にして、拮据黽勉、博士自ら診療に従事し日々刀圭甚だ多忙を極む、既にして牢乎たる地盤を獲得し、博士獨特の手腕は打診の好評と相俟つて益々人氣を吸收し、今や卓然として悠々たる位地を占む。氏は京大派（昭和四年卒業）の内科臨床家として知られ、學位主論文「燐酸「エステル」ノ「アルカロイド」酸類ニ就テ」を母校に提出して、昭和八年八月學位を得たる少壯醫博として名聲を馳せ、多大の信望を博す。

△氏は京都市の出身、明治三十六年生れの學究的少壯の紳士也。學究生活より離れて診療界に躍進以來日尙淺きも、努力主義をモットーとしての勵精振りは、氏が前途に光明を與へ、博士の將來を語るに餘裕綽々たるを想はしむ。氏

が趣味に就て言へば、三高時代柔道の選手として絞めが得意にて、一般からは今川絞めと稱せられ、試合の時は相手より強敵として仲々恐れられたるものなりしと聽く、然し今はもう練習する暇もなきが如し。室内娛樂は餘り好まざる方なれども、新聞の政治記事を読むのと、浪花節を聞くことは最も好きな方なり。有爲の資に富む博士の前途や、多々益々努力を要するの切なるを思ふ著者は、幸に博士の健康を祈り、折角の健闘奮勵あらん事を、老婆心ながら切に望む者也。

的場 克巳

△三重縣桑名町立診療所長として名聲を馳せ、當地方診療界に於ける内科の新進大家として囑目せらるゝは的場克巳博士也。氏は名古屋醫大派の名醫博中の最少年にして、内科を以て立ち、殊に胃腸科學及び醫學の造詣深く、胃腸病科に關する領域を最も得意とす。母校の恩師朝川順教授及び河本禎助教授等に師事して多年研鑽する所あり、學究生活を離れて診療界に躍進以來、日尙淺きも、氏が不斷の熱誠努力と、博士獨特の手腕とは極めて評判を博し、大衆より信頼と尊敬とを以て迎へられつゝあり。

△氏は昭和五年愛知醫大卒業、直ちに同大學朝川内科教室勤務、次で名古屋醫大醫學教室副手、名古屋市生駒泌尿科病院醫員、鶴天學友會名古屋支部理事を経て、昭和八年五月以來現職に在り。斯間昭和九年二月名古屋醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「リパーゼ」ニ關スル知見補遺」にして、(1)唾液「リパーゼ」量ニ及ボス食物ノ影響ニ就テ、(2)前房水「リパーゼ」ニ就テ、(3)硝子體「リパーゼ」ニ就テ、(4)筋肉勞作ノ尿「リパーゼ」ニ及ボス影響ニ就テの四篇より成る。參考論文は「酵母製劑ノ酵素量ニ就テ」なり。他の論著中主要なるものとしては、(1)運動競技ノ尿「リパーゼ」ニ及ス影響ニ就テ、(2)唾液「リパーゼ」量ニ及ボス味覺ノ影響ニ就テ等を擧ぐべき也。

△感想に曰く「本年夏から私は禁酒を實行してゐる、來年からは禁煙をする豫定で目下準備中である、私は元來小心な上に若くて醫家として甚だ未熟だから、之に依つてせめて自分の心神を常に平靜にし度い自分が常に平靜だと言ふことが若干でも自分の足りない所を補つてくれることと思ふ、こう考へることが自分の醫家としての自責を少しでも軽減してくれる様に思ふ、私の様な小心な男が醫者になつたこと自體が現在の私には重荷である」云々、以て博士の心境を物語り、其の爲人を窺はる。氏は三重縣宇治山田市河崎町、的場常右衛門の長男にして、明治三十八年生の少壯也。年齒未だ三十有一歳、研究心に富み霸氣滿々たり、親分肌の所ありて義侠心に富み、能く人を愛し後進を世話す、従つて財的には損する所少からず。現在にては特筆すべき趣味を有せざるも、學生時代には陸上競技部選手、講話部員たりしが故にスポーツを好み、講演、寄稿を樂めり、大學に短歌會並樹を興し、雜誌「並樹」の同人たりしことあり、目下も時々筆硯に親しむ。河川海、江澄はペンネーム也。三重縣桑名町外堀に住む。

戸木田 菊次

△東京市中野區神明町五九に内科、小兒科を専門とせる戸木田醫院あり、院長戸木田菊次博士經營の診療所也。氏は東大派の内科學者にして藥理學の造詣深く、内科及び小兒科を以て立てり。氏の學歴より見れば七高を経て、昭和二年東京帝大醫學部を卒へ、泉橋病院内科入局、同六年より東大藥理學教室入室、同九年十一月母校より學位を受領せり。斯間林春雄教授及び田村憲造教授に師事せり。學位論文は「デギリタン」葉末及其ノ製劑ノ力價檢定方法ニ就テ」なり、參考論文なし。

△氏は鹿兒島縣薩摩縣上東郷村宇舟倉の出身、明治三十五年生る。學究的臨床家として診療界に進出して以來、拮据艱勉、努力勵精日も尙足らず。今や堅固なる獨自の地盤を獲得して益々發展の進境に在り。業餘園藝、乘馬、撞球を趣味す。將來有爲の資に富む博士の前途や洋々たり、折角の努力奮闘を望む。

平田 梅治

△東京帝大醫學部講師として内科學を講じ、兼ねて泉橋病院に勤務の傍ら研究に没頭しつつある平田梅治博士は、東大系の内科學者として錚々たるものにして、熱心なる研究家として知られ、研鑽多年、孜々として倦まず、馳て診療界に躍進せんとする前途の展開は頗る刮目に値し、將來有爲の資に富む少壯醫博の前途や大に期待せらる。

△博士は大正二年七月金澤第四高等學校入學、同五年七月同校卒業、同五年九月東京帝國大學醫科大學入學、同九年十二月醫學部卒業、同十年一月東京帝國大學醫學部副手囑託、附屬醫院勤務囑託、同十三年六月看護婦及看護法講習科醫囑託、同年十一月依願解囑託醫、同十三年四月大學院入學、同十四年四月同院退學、同十五年五月任東京帝國大學助手、同十五年六月東京帝大にて學位受領、引續き東京帝國大學醫學部講師として現職に在り、兼ねて泉橋病院に勤務す。

△主論文は「コフェイン」屬及其複鹽ノ溶血系ニ於ケル抗溶血作用並ニ此等藥物ノ過敏症防止作用ニ就テ」にして、原著は獨逸文なり。氏は「コフェイン」屬及其複鹽は何れも溶血素に於て抗溶血作用を有する事實を確證したるを以て更に此抗溶血作用に就て詳細なる研究を遂げたるもの即ち本論文の骨子なりとす。參考論文は、(1)筋萎縮側索硬化症ニ屢々見ラル、赤血球増加ニ就テ、附血管收縮ト赤血球數トノ關係、(2)筋萎縮側索硬化病ノ統計的觀察ニ就テ等なり、其他論著夥多。

△博士は富山縣婦負郡八尾町平田松太郎の三男にして、明治二十六年生れの學究的少壯の紳士也。學究肌の眞面目なる學者としての熱心振は同僚の間にて皆稱する處、生來几帳面にして物事を粗雑にせず、意志強固にして物に動せず功名榮達に恬澹たり、人に對して親切にして能く學生の提攜に務む。著者は更めて博士の健康を祈り、益々精研努力

あらん事を望む者也。東京市麹町區中六番町二に私邸あり。

渡邊 健太郎

△東京武藏野病院(板橋區茂呂町)に神經、精神科主任として活躍しつつあるは渡邊健太郎博士也。博士は愛知醫專出身の神經、精神科學者として錚々たるものにして、東京帝大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。博士は私立明倫中學校を経て、大正四年六月愛知縣立醫學專門學校卒業、直ちに縣立愛知病院第一内科部に入り内科學研究、同五年五月同院診察醫補、神經精神科勤務、同七年五月診察醫、同十二月愛知縣立醫學專門學校囑託教員、同十一年七月愛知醫科大學病院診察醫、同十二年三月愛知醫科大學附屬醫院看護婦養成所教員囑託、同十三年五月愛知醫科大學助手、精神病學教室勤務、附屬醫院勤務、同年六月愛知縣立愛知學園々醫囑託、同十五年五月任公立大學助教授、高等官七等待遇、補愛知醫科大學助教授、同十五年七月醫學博士の學位を受領す。其後濱松市腦病院長たりしが、目下現職に在り。

△主論文は「非經口的ニ注入セル臟細胞ノ含水炭素同化作用ニ及ボス影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)精神病患者ノ空腹時ニ於ケル血液含糖量ニ就テ、(2)睡眠障碍及ビ夜間ニ於ケル血糖量變化ニ就テ、(3)甲状腺「レントゲン」(ラヂウム)放射ノ含水炭素同化作用ニ及ボス影響(種村式共著)、(4)「アドレナリン」ノ蜘蛛膜下腔注射ニヨル血糖量ノ變化ニ就テ(種村式共著)、(5)流行性感胃ニ續發スル「ナルコレプリー」様症狀ノ一例、(6)精神病患者ニ於ケル赤血球沈降速度ニ就テ等なり。

△名古屋市西區上園町、渡邊義一の二男にして、明治二十三年生る、學究的年壯の紳士也。臨床家として經驗豊富、手腕圓熟、今は最も活躍の時代にして一段の貫祿を備ふ。

津野田 誠吾

△臺灣總督府臺中醫院長として多年臺灣診療界の爲め努力貢獻しつゝある津野田誠吾博士は、九州帝大派の一勢力と見るべき内科界の名醫博にして、臺灣診療界に於ける重鎮として囑望せらる。博士は明治三十六年第二高等學校卒業、明治三十九年東京帝國大學獸醫學科卒業、同年十月警視廳屠畜検査技師、同四十一年京都府技師、同四十五年六月依願免官、大正五年九州帝國大學醫科大學入學、同九年六月卒業、同年七月同大學附屬醫院小野寺内科副手、同十四年十二月被任助手兼講師、同十五年五月被任同大學助教授、同年九月學位を授與せられ、昭和二年依願九州帝國大學助教授を辭し、臺灣總督府醫院醫長に任ぜられ、目下現職に在り。

△主論文は「水銀劑ノ吸收ニ關スル實驗的研究」にして、二篇より成る。參考論文は (1)動物組織并ニ尿中水銀比色法、(2)「アルカロイド」ノ電氣的導入法ニ就キテなり。宮城縣志田郡古川町大柿十日町の出身にして、明治十二年生る。當年知命に入る七歳、元氣旺盛にして老大家の域に入り一段の貫祿を備へ、學究的臨床家としての人格者也。賦性篤實溫厚、謙讓にして人に篤く、親切能く後進を愛撫す、又克く應答禮を重ずる誠實の仁也。趣味は謡曲と音楽とを好む。臺中市臺中醫院長官舎に住む。

新井 寛治

△神奈川縣鎌倉大町八八八にて内科専門を以て開業せる新井寛治博士は、東北帝大派の名醫博にして、内科の大家と仰がれ大衆より多大の信望と尊敬とを受け、當地診療界に於ける一流の位地を占む。博士は栃木縣立栃木中學校、第二高等學校を経て、大正九年東北帝國大學醫學部を卒へ、直ちに同大學助手に任じ病理學教室に勤務、同十一年十二月助教授に任じ、同十五年三月官を辭し、同大學熊谷内科教室に内科學を修め、昭和二年四月磐城共濟病院長就任、同年六月學位を授與せらる、其後職を辭し現住地にて開業今日に至る。

△主論文は「末梢神經ノ形態的生物學的性情ニ關スル研究、第一末梢神經ノ腦内移植(獨文)」にして參考論文は(1)動

物腫瘍ノ腦内移植實驗(獨文及邦文)、(2)人間ノ頭蓋内腫瘍ニ關スル研究(イ)——(ホ)、(3)内分泌腺ノ萎縮ニ關スル研究 第一、所謂「多腺性内分泌機能不全症」ニ就テ 第二、腦下垂體ノ高度萎縮、(4)稀有ナル泌尿器發育異常等なり、其他論著夥多。

△博士は栃木縣下都賀郡野木村大字野渡の出身にして、明治二十九年生る。年齒漸く不惑に達し、少壯の意氣益壯にして、多量の分別を有し今は最も活躍の時代に在り、好箇の臨床家として敬意を表し、茲に推奨す。趣味としては寫眞を好む。

神座 李 蹊

△東京市赤坂區青山南町五ノ四五に神座内科醫院あり、院長神座李蹊博士の經營にして、開業拮据十有餘年に及び既に堅實なる地盤を有し、好評噴々の裡に繁榮を持續しつゝあり。博士は第一高等學校を経て、明治四十四年東京帝國大學醫科大學を卒へ、同四十五年一月より四月迄、同大學病理學教室に研究、後轉じて同大學産科婦人科教室に勤務、翌大正二年八月に至る、大正二年九月英領新嘉坡三五公司醫務勤掌し、同十一年八月に至る、大正十一年十一月東大附屬傳染病研究所研究生となり、同十五年三月に至る、爾來私立醫院開設、内科一般の診療に従事し今日に至る、斯間昭和二年七月東京帝大にて學位を受領せり。

△主論文は「加里缺乏要約ニ因リテ起ル哺乳動物及ビ鳥類ノ脚氣様疾患、附加里劑ノ脚氣患者ニ及ボス治療效果(第一三報告)」にして、參考論文は、(1)加里鹽類缺乏要約ニ因リテ起ル哺乳動物ノ脚氣様疾患、附加里劑ノ脚氣患者ニ及ボス治療效果、(2)右上(第二回報告)なり。其他論著夥多。

△博士は山梨縣東八代郡黒駒村大字下黒駒の出身、明治十八年生る。學究的年壯の紳士にして、壯齡當に知命に入る一歳、手腕圓熟の域を超越して氏が仁術に一段の貫祿を備え、今は成功の位地を獲得して最も得意の時代に在り。



原田 三代三

△東京市澁谷區大向通二三に内科専門を以て開業せる原田内科醫院長原田三代三博士あり、氏は大正十三年東京帝大醫學部の出身にして、内科を以て起ち、學位論文「腦損傷並ニ疾患が糖代謝及ビ體溫ニ及ボス影響ノ實驗的並ニ臨床的觀察」を母校に提出して、昭和九年五月學位を獲得せる少壯醫博也。山梨縣の人、明治三十年生、年齒漸く三十有九歳なれば、少壯の意氣を以て起ち、自己の存在を社會的に認めしめ、正々堂々と大に活躍を要する時代ならずや、況んや未知の患者は博士に就ての認識を得んとする要望の切なる秋に於てをや、而かも氏が之を避忌する風の見ゆるは、現代的臨床家としては餘りに時代錯誤の感なき能はず、獨り博士のみと言はず、一言附して一部學者の反省を促すと共に、識者の批判を仰がんとす。



石田 稻 男

△岡山縣笠岡町に石田内科醫院あり、院長石田稻男博士は大正四年京都帝大醫科大學の出身にして、開業の傍ら岡山醫大にて研究を重ね、學位論文「「カロチン」ノ家兔石灰新陳代謝ニ及ボス影響」を完成、岡山醫大に提出して、昭和九年七月學位を獲得せり。蘊蓄せる多年の經驗に光る學位は氏が仁術に一段の光彩を放ち、今や圓熟せる手腕と相俟つて最も得意時代に在り。氏は岡山縣の出身、明治二十一年生る。當年不惑に入る八歳、益々元氣にして、一意専心「醫は仁術也」をモットーとして、唯だ誠實に親切に、日夜診療に努力勵精するを本分とし、他に何等の道樂も趣味も求めず、拮据匪勉、精力主義を以て一貫始する熱誠の仁也。多年の聲望を扶植して、今や悠々たる位地を占め、大衆より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあるは、好箇の臨床家としての氏が本分とする所にして、猶春秋に富む前途の大成を待望せらる。



古澤平作 △東京市世田谷區玉川町一九〇に目新らしき精神分析學診療所あり、新興せる精神分析學の先驅者として起てる古澤平作博士の經營にして、分析治療室其他新裝せる内部の設備を整え、精神分析學を主治療となし神經症を中心としてその他の疾患を治療するを目的とせり。博士は東北帝大派の一新勢力と見るべき名醫博にして、斯科界の一生面を展開せんとする新人也。開業日尙淺きも、多年の蘊蓄を傾倒して博士獨特の手腕を揮ひ、精神分析に相應しき玲瓏たる檢診は、博士がモットーとする誠意誠實と相俟つて益々信望を博し、遠近よりの外來患者日々輻輳して近來著るしく發展の傾向を示し來れり、斯界の振興啓發上欣幸とする處にして、將來博士の力に負ふ所益々大なるを思ふ。

△博士は二高を経て、大正十五年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部精神病學教室に入る、昭和六年十月同大學助教に任ぜられ、同年十二月埃國に精神分析學研究の爲め留學、主としてウキーン大學精神病學教授 Otto Postl 及びウキーン精神分析學研究所、Tyrend 教授指導の下に研究、同八年歸朝、同年六月東北帝大より學位を受領、同年九月精神分析學診療所を開設、今日に至る。斯間母校の恩師丸井清泰教授の指導を受けて斯學を専攻せり。

△學位主論文は「Eine sehlfiprene Gesichtshalluzination」云々、參考論文は Alternierende ebarupter-n. Symptomenneurse その他四篇あり。氏の論著中の「自我の研究（強迫神經症に見られたる魔術的身振に就いて）」は博士會心の作にして、最も重要なものと見るべき也。

△博士は神奈川縣愛甲郡南毛利村船子、古澤鷹太郎の五男にして、明治三十年生る。學究的溫厚の紳士にして、年齒三十有九歳の少壯也。若し余の如き社會的經驗少なき盲蛇におちざる者が思ひ切つて物を言ふとすれば、もつと日本人が科學的生物學的になりきることである、そこには進歩があり發展があり行きつまりがない、研究は如何なる場合をも一つの現象として突破さしてくれる」云々と、感想の一片を述べて大に氣を吐けり、氏が研究に對する熱心振りを察せらる。生來眞面目にして自家宣傳的の事を好まず、又巧言令辭を嫌ひ、自分を本當に知つて來る人を相手にし、どこまでも「誠」を求めて行く所に博士の長所あり、又一面には餘りに一人で事物を脊負ひ込む質の人なれば、強ひて言へば或はそれが短所ともならんか。人に對し患者に接するには誠意誠實を以てし、親切を盡す所に徳を有す。専門以外には寫眞の研究に興味を有す。春秋に富む少壯醫博、幸に健康にして、斯科界將來の爲め益々奮闘あらん事を、著者は更めて翹望して止まざる者也。

中山 幹

△多士濟々たる浪速診療界に於て、呼吸器病科及び消化器病科を標榜して躍進せる新進の大家として推獎すべきは中山幹博士也。博士は現在大阪帝大醫學部竹尾結核研究所員として勤務の傍ら、大阪市住吉區王子町二ノ三に自己經營の醫院を主宰し、中山内科醫院長として活躍する所あり。醫院は一般内科並に小兒科、レントゲン科設置、其他充實せる内部の設備を新裝せり、殊に呼吸病科及び消化器病科に最も重きを置き、親切と誠意、誠實をモットーとして、博士自ら診療に勵精努力し甚だ多忙を極めつゝあり。開業日尙淺きも、氏の熱心なる經營振りに伴ふ應待と、博士獨特の打診の好評とは、益々民衆の信望を博し、近來著るしく院務の發展を示し、日増繁榮の盛況を呈しつゝあるを見る。

△博士は東京慈惠醫大の出身にして、大正十二年三月卒業後、直ちに東京慈惠會病院内科勤務、同十三年七月鹿兒島市山下町中山胃腸病醫院勤務、同十五年四月鹿兒島市電氣局醫員囑託、昭和三年一月東京市麴町區内幸町胃腸病醫院勤務、同四年四月鹿兒島市學校衛生醫員囑託、同年九月大阪帝大醫學部管理竹尾結核研究所に研究員として入所、同八年四月大阪帝大醫學部に學位論文提出、同年四月大阪市北區堂島佐多醫院勤務、同九年四月學位授與、同年六月現住所に於て内科醫院開業現在に至る。斯間、佐多愛彦博士、高木喜寛博士、松山陽太郎博士、今村荒男博士、谷口映二

博士、谷村忠保博士等に師事せり。内科一般を専攻し特に呼吸器病科及び消化器病科を最も得意とす。

△學位主論文は「弱毒結核菌ノ病原性ト免疫力(實驗的研究)にして、(1)強弱諸株結核菌病原性ノ比較研究 附、試獸ノ年齢ニ由ル感染病變ノ差異、(2)弱毒結核菌ノ免疫力ニ就テノ實驗的研究の二篇より成る。参考論文としては(1)乾燥結核菌塗布免疫試験(實驗的研究)、(2)結核菌ノ累積的血流内注入ニ因スル結核病變ト菌量トノ關係ニ就テ、(3)強毒及ビ弱毒結核菌ノ單獨接種並ニ混合接種ノ結果ニ就テ、(4)各種結核菌ノ二次的畢丸内接種ニ基ク畢丸組織ノ病變ニ就テ、(5)「ピリルビン」ノ生理的作用(其一)自家造血「ホルモン」トシテ作用スルヤ、(6)腦迴轉狀頭皮ニ就テ等あり。

△感想に曰く「現代醫學界に就いて何か感想を……との事だが別段とりたてて新しい感想もありそうでない。だが、今や世界何れの國に比しても、亦あらゆる學術部門の角度から視ても、わが醫學界ほどの地歩と、その眞剣さとこれが業績の偉大さとに於ては(勿論質的、量的兩方面を考察しても)斷然他部門の窺知、追従をさえもゆるさない豪勢ぶりである。然かも研鑽探究のメスは遂日眞摯なる學者の輩出により各分野を通じて愈々深遠なる生命の零圍氣が克明に別抉されてゆく。自覺しくも、心強い、わが醫學界の姿ではないか」云々。

△鹿兒島市上荒田町中山誠助の長男にして、明治二十七年生る、年齒不惑に入る二歳、學究的溫厚の紳士也。讀書家にして、璞山をペンネームとし、精研修養相俟つて書見を唯一の趣味とす、又スポーツを好み、園藝にも親しむ。學究方面に對する熱心さは今も猶變らず、診療に熱誠克く勵精すると共に日も猶足らざるの概あり。性來謙遜家にして自己の識學を衒はず、又自己の長所を誇らず、功名榮達には恬澹として、一意専心、唯だ仁術是れ天職なるを以て任じ、且又自己品性の陶冶に力め、古い短所の芽はつぶして新しい長所の發芽を求むることに努力するの人也。以て其爲人を窺はれ、學德兼備せる醫博人物として敬意を表し、茲に推獎す。

木場 武雄

△帝都診療界に於て、内科殊に胃腸病の大家として木場武雄博士の噴々たる名聲を聞くや既に久矣。博士の經營せる木場内科醫院は、現に赤坂區青山南町六ノ四二に結構高壯なる陣を張り、内科に相應しき内部の設備を整へ、博士自ら診療に勵精努力し日々繁忙を極む。博士は京大系の内科學者にして、内科界現代の權威京大教授辻寛治博士の愛弟子として知られ、大學院在學中恩師の指導を受くる所厚く、特に内分泌學の蘊奥を究め、所謂京大派の名醫博たるに恥ぢず。該博なる學識と共に多年實地の經驗を積み、圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮し、特に其の最も得意とする胃腸病に至りては他の追隨を許さず、打診の好評は博士の溫厚篤實なる性格と相俟つて益々遠近の人氣を集中し、既に獲得せる地盤は牢固として動かさず、今や超然として抜くべからざる位地を占む。

△博士は鹿兒島縣立鹿兒島中學校、五高を経て、大正四年十一月京都帝大醫科大學を卒へ、同年十二月任陸軍見習醫官、熊本歩兵第十三聯隊入營、同五年七月任陸軍二等軍醫、補都城歩兵第六十四聯隊附、同六年六月補東京第一衛戍病院附、同七年八月西伯利事件從軍出征、同八年七月補陸軍士官學校附兼教官、同九年六月任一等軍醫、補姫路騎兵第十聯隊附(此間以別命同隊御在隊見習士官賀陽宮恒憲王殿下奉侍)、同年十一月大正四年乃至九年戰役の功に依り叙勳六等單光旭日章及金壹千圓を授け賜ふ、同十年九月依願休職被仰付、同年同月京都帝大醫學部副手囑託、辻内科勤務、同十一年三月同大學院入學、辻教授指導の下に内科學一般研究、同十二年九月豫備役編入、同十三年三月三高校醫囑託、同年十一月大阪遞信局醫囑託、同十四年二月京都帝大にて學位受領、同年同月大學院退學、同十五年五月日赤京都支部療院内科就職、昭和二年三月日赤京都支部療院長就任、同年八月日赤岩手支部病院副院長兼内科醫長に轉任、斯間大正九年五月陸軍士官學校に於て賀陽宮恒憲王殿下同校御卒業の際御紋章入ネクタイピン壹個御下賜、同年十二月姫路騎兵第十聯隊に於て賀陽宮恒憲王殿下陸軍騎兵少尉御任官の際御紋章入木杯壹個御下賜、昭和四年十一月依願日赤岩手支部病院副院長兼内科醫長を辭し、東京市にて開業今日に至る。

△學位主論文は「甲状腺機能ト胃腸運動トノ關係ニ就テ」にして、参考論文は、(1)甲状腺機能ト過敏症トノ關係ニ就テ、第一篇甲状腺機能ト過敏症「シヨック」トノ關係ニ就テ、第二篇甲状腺機能ト過敏症血液像トノ關係ニ就テ、(2)甲状腺機能ト免疫體產生トノ關係ニ就テ(第一回報告)甲状腺機能ト「アレキシン」產生トノ關係ニ就テ、(3)甲状腺機能ト免疫體產生トノ關係ニ就テ(第二回報告)甲状腺機能ト人工免疫トノ關係ニ就テ、(4)「インシュリン」「アドレナリン」及ビ甲状腺「エキス」ノ剔出腸管運動ニ對スル作用ニ就テ、(5)砂時計胃ヲ伴ヘル脊髄病ノ一例等なり。

△感想の一片を吐露して曰く「醫者といふ職業は他の商賣と違つて直接患者の生命に關係を持つ重大な任務のあること申すまでもない故に實の良き醫者を造つて貰ひ度い、金錢で入學試験が左右せらるゝやうな學校は無い方がいゝと思ふ、現代の醫學界に於て徒らなる大學の昇格が學生の質を悪くし延いて學問は別としても醫學博士の品位に低下を認めることは識者の唱ふる所のやうであるが、更に無定見なる醫專の再興への後戻りは國家試験の餘儀なきにまで至つて粗製濫造の事實を暴露してゐるのではあるまいか、而も試験に依つて振ひ落されたる、所謂非醫者の行動の社會殊に患者に對する影響を懼るゝのである」云々、以て博士の抱負の一端を窺はる。

△博士の出身地は鹿児島市西千石町にして、明治十九年木場休次郎の長男に生る。學究的温厚の紳士にして、年齒當に知命に達し、元氣旺盛、精力主義を標榜して日々診療に勵しみ、努力奮闘日も尙足らざるの概を示す。殊に臨床家としては學識、手腕、人格共に圓熟の佳境に入りて一段の貫祿を備ふ。若し夫れ其の性格を打診すれば、守愚不覺世途險、無事始知春日長とも評すべきか。一度び其の醫咳に接せんか、態度悠々、應待懇懇、圓滿主義にて、春風駘蕩と云つた風の朗快さを懐かしめ、話題豊富相手の心理を掴んでかその言葉は心良いろズムとなり、自ら親しみを感じしむるの徳を有す。讀書家にして文學趣味の人也。

外科

内臓外科、整形外科、腎臓外科、蟲様突起外科、軍陣外科

大野良藏 △大阪市西區南堀江木棉橋南に外科大野病院あり、院長大野良藏博士の經營する所、煉瓦建の結構巍然として街角に聳え、滋味ある外觀美は自ら内容の充實を表示し、手術場、手術用機械、科學的診療科等の施設整ひ間然する所なし。専門は外科一般特に内臓外科は博士の最も得意とする所にして、院長自ら診療に勵み手術臺に起つ、其の玲瓏たる手腕と、應待にも如才なき社交振りは、大野外科の今日の人氣を博せる所以にして、日本治療界に於ける私立病院中斯科の霸王を以て稱せらるゝも亦偶然ならざるの感を深うす。博士は九大系外科界の長老今の名譽教授三宅(速)博士の高弟にして、多年恩師に師事して造詣する所あり、其の學識深遠にして獨特の手腕を有する點に於ては既に嘖々たる定評あり。加ふるに副院長として斯道の新進松田邦三郎博士克く院長を補佐し、聲望兩々相俟つて益々向上隆盛の域に在り、著者は改めて博士の成功を祝福すると共に更に向後の活躍に期待して止まず。

△博士は福岡縣二日市町日本最古の築城大野城に城主たりし而も南朝忠臣として有名なる大野式部大輔乘資郷の遠裔にして乗孝と云ひ、明治二十三年を以て生る。熊本五高を経て大正六年九州帝大醫科を卒へ、一年間稻田(龍吉)教授の下に内科を研究し、後三宅(速)教授の指導を受けて外科学を専攻し、同十二年七月九州帝大より學位を受領す、翌十三年大阪大野病院院長として元井上病院を繼承し、昭和三年改竣増築して以來今日に至る。

△學位主論文は「急性出血性腫瘍疽及ビ腓液中毒症ノ病原研究並ニ其免設的豫防及ビ治療法ニ就テ」にして、参考論

文は、(1)胃酸性と腺分泌トノ關係、(2)蛋白質ノ溶血現象ニ及ボス作用、外ニ歐文一篇あり、
 △「學術の研究につき一般實地家が目覚めて全般的に向上せしめたき希望を有す。又醫界に對しても此醫業非常時を
 リードする手腕ある名會長の出現を望む」云々とは、博士の希望の一端を吐露せるものなり。著者は病院改築の竣工
 近き頃訪問したる事あり、内外頗る多端なるにも拘はらず、親しく院長室に迎へられ、初めて其の風貌に接したり、
 凛々としたる中に社交的圓滿さを藏し、恬澹として自己を飾らず、談論風發頗る快活さを感じ、其の濃厚にして氣品
 高き所に敬慕すべき深き印象を残せり。讀書家にして殊に俳句に興味を有し、菅公廟天拜山に因みて天拜と號す、其
 の文筆の雅健又た稱讚に價す。

柳 壯 一

△北海道帝大教授にして、同醫學部に於ける中堅人物として重きを爲すは、外科學の泰斗たる柳
 壯一博士也。博士は東大の出身、今の名譽教授近藤(次繁)博士の門弟にして、後ち慶大の長老茂木(藏之助)博士
 にも師事する所あり。歐洲留學より歸朝後の博士は、専ら北大の教壇に起ち柳外科今日の礎を成すに至る。

△兵庫縣洲本の士族柳壯藏の長男、明治二十三年生にして、慶應義塾幼稚舎、東京高師附屬中學校、七高を経て大正
 五年東京帝大醫科大學を卒ゆ、直ちに同大學附屬醫院近藤外科に勤め、同九年六月より慶大醫學部講師として外科學
 を講ぜり、同十一年二月北海道帝大助教となるや、外科學研究の爲め直ちに歐洲に留學を命ぜられ、同十三年三月
 歸朝後間もなく教授に任ぜらる、爾來醫學部に於て第二外科學講座を擔任して今日に至れり、其間大正十二年二月慶
 大より學位を授與せらる。

△學位主論文は「膿(Eit.)ニ關スル研究」にして其比重「プロテオリゼ」膿球成分細胞等が起炎細菌の種類、切
 開後の日數、全身症狀によつて左右せらるるや否やを詳細に研究して、其間の知見を擴めたるものなり。外に參考論

文「所謂「ポトリオミヨーゼ」ノ二例ニ就テ」の一篇あり。他に論文夥多、著書としては「繙帶學提要」「外科治療
 學總論」及「氣管枝喘息」(近刊)あり。

△感想に曰く「學生に對しての講義や指導は平凡な、しかし最も大切な部分を主としてやります。六つかしい議論や
 不定の學說などは學生をして迷はしめる外に何物もないと思つて、この様な事は卒業後醫局での修養に資して居りま
 す」云々。熱意のあるところに、博士の面目の躍如たるものあり。

△博士の該博なる學殖は言はずもがな、識見高邁、常識に富み、寛大能く人を容れ、社交に對するも常に禮節を缺さ
 ず、又た能く後進の提擧に力を盡す。業餘は運動と音楽と園藝とに興味を有し克く讀書す。札幌市北四條西十五丁目
 に自宅あり。

桂 三 友

△大阪市東區京橋三ノ七一に桂外科病院あり、院長桂三友博士は、五高醫學部の出身にして、久
 しく臺灣總督府に奉職し、正五位勳五等を有す。其間獨逸ミュンヘン、キール大學等に學び整形外科、外科並びにエ
 ツキス光線に關する研究を爲し、其後再び歐米各地の衛生状態を視察せり。開業拮据既に十有餘年、圓熟せる手腕は
 其の性格と相俟つて益々民衆の信望を高め、桂外科今日の大なる存在を認めしむ。蓋し氏の理想とせる傳統的醫者の
 永袖式を排して簡易化せる同病院の特徴は時代の要望に適應せるものと見るべき乎。

△博士は熊本縣大津町の出身、明治十年生にして、同三十四年五高醫學部を卒業し、直ちに聘せられて清國上海居留
 地病院に奉職し、翌三十五年五月臺灣總督府臺北醫院醫員に任ぜられ、間もなく同院第二病棟主任となり、同四十
 一年五月臺灣總督府醫學校助教兼務、同四十二年二月日赤臺灣支部醫院醫務囑託、同四十四年臺北醫院外科部長、同
 年臺灣蕃匪討伐の功に依り叙勳六等、同年十二月總督府より獨逸へ留學を命ぜられ、大正三年十二月歸朝復職、臺北

醫院理學的治療科長に次いで、任總督府醫院醫長兼總督府醫學教授、同十二年二月京都帝大より學位受領、同年三月再び命を受けて歐米各地を視察し翌十三年四月歸朝す、先是依願免官となり歸朝後、大阪市電氣局病院醫務を囑託せらる、翌十四年十二月以來開業、一般外科の診療に従事しつゝあり。

△學位主論文は「ウエルシ菌ニ就テ及之ニ因スル瓦斯瘧疾ノ實驗的病理」にして參考論文なし。他に、(1)人工氣胸術ニ就テ、(2)肺結核ニ向ツテ人工氣胸術ノ臨床的注意、其他發表せる論著多し。

△感想に曰く「心の富は無限に求めよ、物質上の富は分に應じ食えれば足れり。父の遺訓清かれと思はぬ人はなければ、嫌味のない肌ざりは誰にも好感を抱かしむる博士の特性と見るべきか、又博士に面識ある著者の打診を以てせば、世の中を苦にせぬこと、唯己を全うして以て天命を待つ主義で、何事も徹底的でなければ氣に喰はぬ質で、人も之れを求めんとし時に損ずることがある、但しそれが長所であり又短所ともなる、殊に理財慾に乏しきことは最も指摘すべき點かと想はる。

◇

七田龍雄 △下關診療界は近時醫博人物に富む、就中外科を以て斷然頭角を抜けるは七田龍雄博士也。博士の經營する七田外科病院は、市の中央西南部町に堂々の陣容を構へ、外觀と併せて内部の充實を期し、病床數二十五、レントゲン装置、其他紫外線、赤外線等々の施設完備す。博士は九大系の外科學者にして、母校より學位を得、特に内臓外科は最も得意とする處なり。外科界の泰斗三宅速教授の高弟として、多年恩師の指導を受け、又法醫學は教授高山正雄博士に師事して造詣する所あり。研鑽多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して、最も活躍の全盛時に在り。

△佐賀縣小城郡小城町大字岩藏七田利三の五男、明治二十五年生れにして、佐賀縣立小城中學校、五高を経て、大正七年九州帝大醫科大學を卒へ、同八年任陸軍二等軍醫、補近衛歩兵第四聯隊附、同九年九州帝大大學院入學、同十一年任一等軍醫、同十二年大學院退學と同時に近衛輜重兵大隊附被仰付、同年十二月學位受領、同十四年二月病氣に依り依願豫備役被仰付、九州帝大醫學部副手として再び三宅外科に勤め、同時に附屬醫院醫員を被命、同年二月健康恢復と共に青森縣立病院外科皮膚泌尿科部長として赴任、昭和二年大阪市井上病院(院長大野良藏博士現大野病院)副院長となる、同四年二月現地に開業今日に至る。

△學位主論文は「血液凝固ニ關スル臨床的並ニ實驗的研究」にして、參考論文は「慢性腸重積症(特ニ診斷)ニ就テ」の一篇あり。其後の論文として、(1)肝臓ノレントゲン放射ニ依ル止血的効果、(2)十二指腸乳頭部痛腫(二例)ニ就テ(3)疼痛等は博士會心の作と見るべき也。

△多趣味の人にして謡曲、テニス、ゴルフ、乗馬、其他戶外運動を好み、日常刀圭多忙の裡にも克く保健に意を注ぐ殊にスポーツに對し醫者は率先實社會をリードすべき責務ありと信じ、現に下關市體育協會副會長及下關庭球協會長をつとめ、スポーツ醫學研究會を設立し國民將來の保健上大に奉仕する處あらんとするが如きは推獎に値す。春秋猶豊富、年壯の意氣益々壯なる秋なれば、洋々たる前途の活躍を望むや切也。

首藤守彦

△大阪市東區高麗橋三丁目、並に此花區今開一丁目に外科を以て著聞する首藤病院あり、斯道の俊敏首藤守彦博士の經營する所也。内部の設備と相俟つて打診、手術の好評高く、殊に其最も得意とする内臓外科に至りては、綿密なる頭腦、周到なる手當を以て斯界其の人ありと推稱せらる。博士は東大系大正四年組の出身にして

母校の恩師佐藤(三吉)博士の指導を受くる事厚く、大阪醫大より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。

△大分縣大分郡阿南村の人、首藤勘八の長男、明治二十一年生にして、静岡縣立掛川中學校、六高を経て、大正四年東京帝大醫科を卒へ、直ちに副手として佐藤外科教室に勤め、同六年助手となり、傍ら女子醫專講師として外科學を擔任す、同七年恩賜財團濟生會大阪府病院外科醫長となり七年間勤続す、大正十二年關東大震災にあたりては大阪府救護班長として、其の手腕著名なりき、同十三年四月學位受領後、開業首藤病院を設立經營今日に至る。

△學位主論文は「胸腺ニ關スル研究」にして、(1)胸腺摘出ガ家兎脚氣様疾患ニ及ボス影響、(2)胸腺ト「ヴァイタミン」トノ關係、(3)胸腺ニ於ケル一種ノ網狀組織ニ就テ、の三篇より成り、胸腺の機能と胸腺の組織學的檢索にして學界に重きを爲す。參考論文は、(1)畢丸胎兒腫ニ就テノ知見補遺、(2)移植術ニ就テ、(3)盲腸「ヘルニア」ニ就テなるが、其他内臓外科に關する論著は甚だ多し。

△「人生は常に誠實にやればよろしいので職業の如何を問はず終始一貫誠實を以て信條となし反省と躍進をすべきである」とのモットーは、即ち博士をして其の今日あらしめたるものと斷言するを得ん。文學的趣味富豊にして、殊に山を愛し、自然に親しむの風流あり、其號時中は文才の人として知らる。其の業餘また能く讀書毎夜深更に及ぶと云ふ。年齒不惑に入る八、元氣甚だ旺盛にして最も得意の時代にあり。現代博士界中、臨床家として尤も將來を囑目せらるる重要人物なりとす。

西川 義英

△北海道帝大教授として醫學部第一外科に西川義英博士あるは言を俟たず。博士は六高を経て、大正二年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手囑託、附屬醫院勤務、同四年七月同大學助手拜命、同七年二月岡山醫專講師、及岡山縣病院醫長として赴任し、同年四月任同校教授、同九年十一月外科學研究の爲滿二ヶ年獨、英、

和へ在留を命ぜられ、同十二年九月歸朝す、同時に岡山醫大教授兼附屬醫學專門部教授拜命、同十三年六月學位受領、翌十四年普通試験委員を命ぜらる、同年十月北海道帝大教授拜命今日に至る。

△學位主論文は「Zur Pathologie der Kleinen hirn brücken winkel-Tumoren」にして、外に參考論文として、獨文の原著二篇あり、學位は東京帝大より獲得せり。其の他論著夥多、就中、(1)頭蓋靜脈管ノ「エックス」放線映像ノ臨床上意氣ニ就テ、(2)所謂腰薦痛ノ診療ニ就テ、(3)精系捻轉及畢丸獨捻轉ニ就テ、等は獨、邦文中の一部分なり。△感想に曰く「讀書萬卷とか濟衆施藥とかは支那人の形容詞である「劍は一人敵なり」で、そう多數の患者に自ら刀は執れぬ、幸に職を學府に奉じ、研究、學生及び教室員指導の任に當つてゐる、此等の諸士が各地に於て善く努力し診療上正しく清く萬全の策を樹つる様切望する。又實績を擧げてゐるを喜ぶ」云々。博士は和歌山縣海草郡雜賀村西川信一郎四男にして、宮内省侍醫西川義方博士の弟也。明治二十一年生れなれば當年不惑有八、愛讀家にして旅行を趣味す。性來謙讓にして博學を銜はず、虚心坦懷、淡々として只管己れを虚らし、至誠一貫、唯だ天職に誠實勤勉を以てし、克く後進を愛撫す。妻榮子との間に一男一女あり、家庭圓滿なり。札幌市南十條西一丁目に住む。

中村 男也

△大阪鐵道病院長中村男也博士は、東京帝大醫科の出身にして、明治三十六年卒業後母校の外科教室に勤め、同三十八年十二月迄恩師佐藤三吉博士指導の下に外科學を專攻す、其間同三十七年三月大學院入學、同三十八年一月任同醫科大學助手、同三十九年四月より四十年二月迄郷里に於て開業、同四十年三月より四十四年一月迄公立彦根病院勤務、同四十四年一月より大正四年三月迄縣立岐阜縣病院勤務、同四年三月神戶鐵道病院勤務、同十年九月在外研究員を命ぜられ、同十二年十二月歸朝、同十三年七月學位受領、次で神戸鐵道病院長を歴て現職に任ぜられ今日に至る。

△學位主論文は「マウス」体内ニ於ケル溶血性連鎖球菌ノ性質」にして、参考論文は、(1)「ゲラチン」ニ因ル「バクテリオファージ」作用ノ阻止、(2)「リゾチム」作用ニ就テの獨逸文原著なり。學位は東京帝大より獲得せり。
△長野縣上高井郡須坂町の人、明治十一年生る。學究的眞面目なる紳士にして、謹嚴なる風貌の裡に高邁なる品格を備え、名利に淡なり。大阪市住吉區天王寺町三二五三ノ三に住む。

石山福二郎

△岡山醫科大學外科學教授石山福二郎博士は、新進なる九大系の外科學者にして、特に内臟外科は最も得意とする處なり。博士は東京市日本橋區吳服橋通四丁目に本籍を有し、石山萬之助の二男にして、明治二十六年東京市に生る。獨逸協會學校中學、一高を経て、大正七年九州帝大醫科を卒へ、直ちに副手として第一外科教室に勤め、三宅速教授に師事す、同九年助手となり、同十三年七月九州帝大より學位を受領す、同年任助教、昭和四年歐洲留學を命ぜられ、主として伯林大學「シアリテ」ザウエルブルック教授につきて、各種臟器手術の胸腔臟器機能に及ぼす影響を研究し、昭和七年歸朝、臺北醫專教授たりしが、同九年二月現職に任ぜらる。外科學會評議員として多年盡力する所あり、昭和七年第三十三回日本外科學總會に出席、「廣汎性肺虚脱」に關する研究を發表し學會の注意を喚起せり。

△學位主論文は「膽汁ノ十二指腸内排出ニ際スル膽囊機能ノ實驗的研究、特ニ膽囊壁ニ存スル「ヒヨリン」様物質ト「アドレナリン」トノ關係ニ就テ」にして、参考論文としては、(1)畢丸移植ノ臨牀的並ニ實驗的研究、(2)三叉神經痛ニ對スルガツセル氏神經節剔除術ニ就テの二篇あり。研究方面にては内臟外科中特に胃腸、膽道疾患に興味を有し、殊に膽道疾患に對する研究論文多く、就中胆石症につきては三中教授と共著の大篇あり、其他論著三十有餘種に及ぶ。
△感想に曰く「醫育統一、會て叫ばれ又一度實現せる醫育統一が再び専門學校出現により破れたるは遺憾に不堪」猶

「各學會に設備完全なる演說會場を設立したし」云々。希望としては、(1)眞の意味に於ける各科特に内外科の提携による完全なる治療法の出現、(2)外科的治療成績の向上、(3)歐米外科界に對する指導的地位の確立等なりと云ふ。運動家にしてスポーツに多大の趣味を有し、柔道四段、又た俳句を好くす、性格は直情徑行學究的の人也。岡山市大和町一五に住む。

鈴木諒爾

△海軍火藥廠醫務部長海軍々醫大佐鈴木諒爾博士は、埼玉縣入間郡三ヶ島村の人、明治十九年生にして、一高を経て、京都帝大福岡醫科大學に入學、大正三年九州帝大醫科を卒へ、同年海軍中軍醫に任ぜらる、同六年大軍醫に進み、同九年日獨戰役の功に依り双光旭日章を賜ふ、同十年依命九州帝大大學院に入學、整形外科教室にて二ヶ年間住田教授指導の下に研究す、同十二年任軍醫少佐、同十三年七月學位受領、同十四年海軍々醫學校教官兼監事に任命、昭和二年任軍醫中佐、同三年一月叙勳四等、同年二月軍令部出仕と同時に歐米出張、を命ぜられ、同四年一月歸朝、同年二月佐世保海軍病院部員、同年十一月戰艦陸奥軍醫長、昭和五年十二月軍醫學校教官兼監事、昭和六年十二月任軍醫大佐、海軍燃料廠醫務部長に補せられ、昭和七年十一月海軍火藥廠醫務部長の現職に轉補せらる。
△學位主論文は「種々ノ年齢ニ於ケル人體管狀骨々端部骨長徑成長附所謂正常内化骨ノ本態ニ就テ」にして、参考論文は、(1)人體胸部ノ廓發育狀態ト肋骨長徑成長トノ關係ニ就テ、(2)骨移植並ニ成形手術ノ興味アル實驗例ニ就テ、(3)眞性侏儒「ナノメシア、プリモルデアリス」ノ一例ニ就テ、(4)距骨々折ノ數例及び其療法ニ就テなり。學位は九州帝大より獲得せり。現に神奈川縣平塚市海軍火藥廠集會所に住す。

河合五郎

△静岡縣三島町四三六に私立三島病院あり、院長河合五郎博士の經營にして外科を以て著聞す。

博士は慈惠醫專出身の外科學者にして、北海道帝大の重鎮今裕教授に師事して免疫病理學を専攻し、學位は北海道帝大より獲得せる斯科界の篤學者也。今や手腕、聲望相俟つて其の地方を風靡する勢力を有す。

△明治二十五年北海道空知郡瀧川町に生る、愛媛縣士族友田正五男にして、東京府士族河合光雄の養子となり現姓を冒す。大正六年東京慈惠醫專を卒へ、直ちに同校助手拜命、今教授指導の下に病理學研究、同七年十二月同教室を辭し、北里研究所副助手を命ぜられ秦部長の下に細菌學研究、同九年六月北里研究所を辭し、東京市京橋區外科林病院に醫員として同十一年四月迄勤務、再び東京慈惠醫大助手を命ぜられ細菌學研究、同年七月同醫大講師囑託、細菌學實習を擔任す、同十二年九月震災のため北海道帝大病理學教室研究生として今教授の下に免疫病理學の研究に従事し、翌十三年四月同大學講師拜命、同年七月學位受領、同年十月辭す、爾來私立三島病院長として今日に至る。

△學位主論文は「「エビデルモトキシン」ノ病理學的研究」にして、表皮細胞毒の皮膚溶解作用あるを究め、且つ之が胃粘膜細胞に對して有毒なるを實驗し、火傷後胃潰瘍發生の原理を採明せるもの、參考論文は、(1)内國製「リゾール」類似品ノ効力比較試験、(2)多數ノ「スピロヘータ」ヲ證明セル多發性粟粒護腫ノ一例、(3)實驗的「シヨック」ノ血液像、外四篇あり。静岡縣田方郡三島町四三六に住む。

細見 憲

△陸軍二等軍醫正細見憲博士は、現に東京陸軍々醫學校教官に在り、得意の外科を擔當す。博士は九大系の外科學者にして、大學院在學中、恩師後藤七郎教授指導の下に外科學を専攻し、母校より學位を獲得せり。△學位主論文は死組織移植に關する實驗的並に臨床的研究にして、動物實驗の成績を基礎として人體に於て死髓を缺損部に、死神經を神經缺損部に移植し、死筋膜を強直關節の授働手術に、又死髓を直腸脫患者の肛門輪狀狹窄法に應用し、臨床例十七例に於て良好なる成績を收めたり。外に參考論文は、(1)外傷性肉腫ニ就テ、(2)ページエツト氏乳

子病ノ二例、(3)胃腸鉗子ニ就テ、(4)興味アル腹内石灰化性腫瘍ニ就テ、(5)犬ノ膽道成形術後ニ發生シタル胃及ビ十二指腸潰瘍ニ就テの五篇あり。

△京都府天田郡細見村細見愛太郎長男、明治二十七年生れにして、京都府立一中、三高を経て、大正八年九州帝大醫學部を卒へ、同九年六月任陸軍二等軍醫、同十年九月九州帝大大學院學生として後藤七郎教授指導の下に外科學專攻、同十一年八月任一等軍醫、同十二年九月休職、同十三年五月待命、同年七月補歩兵第二十四聯隊附、同十四年一月學位受領、大正十五年より昭和四年迄獨、佛、米に留學す、歸朝後補陸軍々醫學校教官、軍陣外科學を擔任す。

△性來謙遜家にして自己の識學を衒はず、偏に恩師先輩の助力を感謝し、淡々として己れを慮うす、能く人を愛し、又克く後進の指導に力む。其の態度の眞摯にして奥床しきところに博士の人格を窺はる。研究以外には劍術を趣味し又野外運動を好む。家庭には良妻美代子あり、弟は京大出の理學博士にして現に海軍燃料廠研究部主事たり。東京市淀橋區西大久保三ノ三〇に住む。

前田 和三郎

△慶大教授にして整形外科學の主任たる前田和三郎博士は、京大系の錚々たる外科學者にして、曩に歐米留學より歸朝後、直に熊本醫大教授に任ぜられたるが、在職二年の後、更に新設の整形外科學教室の主任として迎へられ、將來大に活躍せんとする新人物也。

△大阪の人、明治二十七年生にして當年漸く四十有二歳也。大阪府立北野中學校、三高を経て、大正九年京都帝大醫科を卒へ、直に助手として外科學及び整形外科學教室に勤め、同十一年助手となり同教室に勤續す、同十二年之を辭し大學院入學、足立(文太郎)、鳥潟(隆三)、伊藤(弘)三教授指導の下に外科學及び解剖學を研究す、同十三年鳥潟教授の命により慶大醫學部助手として理學的診療科に入り、藤浪(剛一)教授の指導を受け「レントゲン」學研究、

同十四年京都帝大へ歸學、同年二月京都帝大より學位を得、大學院退學、同時に京都帝大醫學部講師となる、同年文部省在外研究員として外科学、整形外科学及び「レントゲン」學研究の爲米、佛、獨へ一ヶ年在學を命ぜられ、同年末歐米視察を終へ鳥潟外科学教室へ歸學す、同十五年任熊本醫大教授、整形外科学擔任、猶同學理學的診療科教室兼任を命ぜらる、昭和三年慶大醫學部に轉じ、整形外科学教授として現在に至る。

△學位主論文は「腸管疊積症ニ關スル實驗的研究補遺」にして、第一、二回報告より成る。参考論文は、(1)本邦人十二指腸ノ局所解剖學ニ就テ(獨逸文)(2)胃腸吻合術及胃切除術後ニ於ケル「レントゲン」像ノ外科学的考察、(3)輸膽管ノ深部ニ停セル膽石摘出術ニ關スル研究、(4)伊藤教授「クリニク」ニ於ケル腹水治療の四篇なり。

△「有爲の門下を養ひ日本の整形外科学の發展を計りたし」といふ抱負の下に、博士は初め外科をおさめ、後整形外科に轉じ、之に精進せる學者にして、其學生を教導するに諄々敢て倦まず、其職を醫學教育に奉じて以て天職と爲す純學者肌の人也。趣味としては戶外運動、殊に游泳とボートとを最も好み、時に又音楽に親しみ風流を楽しむの餘裕あり。東京市麻布區本村町二二五に住す。

赤松得二郎

△金澤市仙石町五に赤松外科外病院あり、院長赤松得二郎博士は東大系の外科学者にして、豫備陸軍一等軍醫正の印綬を帶び、正五位勳三等を有す。陸軍々醫學校教官鶴田軍醫總監に師事して、外科学を造詣する所あり。學位論文は中華民國山東省に於ける「カラ、アザール」流行の狀況を調査し、其臨床的及生物學的研究を論じたるものにして、學位は母校より獲得せり。

△岡山中學校、六高を経て、明治四十一年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに陸軍見習醫官となり、同四十二年六月任陸軍二等軍醫、補歩兵第四十一聯隊附、四十四年六月補善通寺衛戍病院附、同年十二月任陸軍一等軍醫、補工兵第十

一大隊附、大正元年八月陸軍々醫學校外科專攻學生被仰付、同二年七月補歩兵第四十三聯隊附、同三年七月陸軍々學校修業、同七年六月任陸軍三等軍醫正、補京都衛戍病院附、同八年六月補歩兵第五十一聯隊附、同年十月兼補津衛戍病院長、同九年四月青島陸軍病院院長兼青島守備軍民政部御用掛被仰付、同十一年八月任陸軍二等軍醫正、補金澤衛戍病院長、同十四年四月學位受領、同年八月任陸軍一等軍醫正。

△學位論文は「山東「カラ、アザール」ニ就テ」にして、参考論文なしと雖も、他に、(1)撓骨環狀靱帶不全脱臼ニ就テ、(2)膝關節十字靱帶及側靱帶斷裂ニ就テ等の外發表せる論著相當多數ありと聞く。

△博士は岡山縣小田郡矢掛町赤松莞爾二男、明治十五年生る。赤松純一博士の弟にして、赤松翁一博士の從兄也。多年陸軍の醫界に活躍せる功績は言はずもがな、診療界に進出して以來日猶淺く、開業据拮漸く數年なるも、開業醫として今や牢乎たる地盤を有し、其の今日あるは博士の前半生史これを語りて餘蘊なし。當年知命に入る四歳、元氣旺盛にして學識、手腕、人格共に圓熟の域を超越して一段の貫祿を加ふ。雲生はペンネームにして、文學趣味に富み、古醫書を愛讀し、漢學殊に支那時文に堪能なり、又た圍碁、將棋、水泳などを好む。妻生浦との間に二男五女あり、良家庭を爲す。

土屋直義

△九州診療界の中樞たる福岡市東中洲町に土屋外科病院あり、院長土屋直義博士の經營にして、内部の設備整ひ、多年の聲望と相俟つて門前常に盛況を呈し、今や牢乎として抜くべからざる地盤を有す、蓋し成功と云はざるを得ず。博士は熊本醫專出身の外科学者にして、九大教授中山(森彦)及び後藤兩博士に就きて外科学の蘊奥を究め、又病理學は同中山(平次郎)及び田原兩博士の指導を受け、九州帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。

△大正元年熊本醫專卒業後、直ちに九州帝大第二外科教室に入り中山森彦博士に師事す、同二年十月鐵道院鳥栖治療

所主任として赴任し、同三年九月福岡縣三井郡小郡町に開業す、同十年十月九州帝大病理學教室に入り中山平次郎及び田原淳兩博士に師事し、爾來二ヶ年分内分泌腺の研究に従事す、同十二年末再び第二外科教室に轉じ、後藤七郎博士の下に同十四年六月迄外科學を專攻し、同年五月學位受領し、爾來専ら診療に従事す、昭和六年には暹羅皇帝が米國よりの歸途同伴、暹羅國に衛生視察に赴き更にビルマ、印度、マレイ半島に足跡を印す。

△主論文は「耳下腺ノ機能ニ關スル研究」と題し耳下腺と他の諸臓器との關係及び該腺機能に就て諸方面より實驗的研究を試みたるものなり。参考論文としては、(1)脾臓ノ剔出或ハ障碍ガ中樞神經組織並ニ肝臓組織ニ及ボス影響ニ關スル研究、(2)セルトリー氏細胞核ニ就テの二篇あり。著書としては日本に於ては勿論、外國に於ても未だ出版を見ざる「醫療機器學」あり、頗る廣範のものなり。猶古來よりの内服藥たる硫酸「マグネシヤ」を主劑として外國藥を創製し、大阪武長より社會に提供し甚大なる効果を擧げつゝあり。

△福岡縣三井郡小郡村士族土屋秀民次男、明治二十一年生る。當年不惑に入る八歳、年壯氣銳、學究的温厚の紳士にして、臨床家として多年の經驗に富み、今は腕の冴え盛なれば、最も重望せらるゝ得意時代に在り。人と爲り穩健にして篤實、人に對するに應答の禮を重んじ、理解あり同情に富む、其の篤き聲望を博せるも、蓋し其の性格の反映なるを思はしむ。文學趣味豊かにして文筆の才あり、蒼城を號とす、また刀劍を愛し旅行を好む。

清水 亮

△清水亮博士が院長として主宰經營しつゝある渡島外科病院は、函館市(蓬萊町五十番地に在り)に於て最も古き歴史を有する外科専門病院として著名なるが、昭和九年三月當市未曾有の大火に罹災後、舊位置に於て復興、從前通りの名稱を以て病院の建築成り内部の設備を完備せり。博士は金澤醫專出身の外科學者にして、北海道帝大より學位を獲得せる篤學の士也。斯間北海道帝大にては兒玉教授に細菌學を、田所教授に生化學を、秦及び西

川兩教授に就て外科學を專攻せり。特に蟲様突起外科及び腎臟外科に最も興味を有し特獨の手腕を有す。

△博士は大正三年金澤醫專を卒へ、直ちに一年志願兵として第一師團歩兵第一聯隊に入營、五年三月退營と同時に金澤醫專衛生細菌學副手となる、同七年任陸軍三等軍醫、同八年任金澤醫專助教授、同十年任北海道帝大助手第一外科教室勤務、同十四年北大醫學部講師となる、同年六月學位受領、昭和二年北海道岩見澤町立病院長として就任す、同五年二月獨逸外科學界の情況視察の途に上り、伯林市を中心として獨逸各都市著名なる大學、公市立病院外科を見學し、次で佛、英を廻はつて、同年秋歸朝し、同年十一月より函館市に於て最も古き歴史を有する渡島外科病院を繼承し其の院長として今日に至る。

△主論文は「外科的領域ニ於ケル赤血球沈降速度並ニ其本態的研究」にして、参考論文は、(1)眼球臓器ノ生物學的研
究、(2)流行性感胃ノ細菌學的研究、(3)定鹽ニ發生セル汗疱様皮膚病ヨリ得タル絲狀菌ニ就テ、(4)大動脈瘤ノ比較病理
解剖學的研究、(5)血清蛋白質ノ理化學的變化ヲ基準トスル酸滴定試験の五篇なり。

△感想に曰く「これからの臨床醫家たるものは、須く自からの持つて居る學位だとか、或は肩書だとか云ふ氣持をか
なぐり棄て、實力をもつて技能を發揮せしめ病人に對しては一刀を加へ、一針を施すにも自己の精魂を打ち込んで事
に當り、以て濟生の誠を盡す様に心掛くべきであらう。私は常に所謂完成された醫者とは、眞の健康と、強い信仰心
と而して絶えざる努力をもつて自分の技能の向上を計り、經驗を重ねる事に精進する人であらねばならぬと思つて居
る」云々。至言なる哉。

△博士は東京市淺草區東三筋町に本籍を有し、清水重高長男、明治二十四年生る。年齢漸く壯熟して多量の分別を有
し、臨床家としては最も重望せる年輩にあり。益々内容を充實させて病人の幸福を計り度いと希望を有し、猶多くの
資金があるならば、獨逸のポツツダムにあるクリュッペルハイムの様なものを造つて見たい抱負を持し居れり。貴

公子然たる風貌を具へ、温厚にして眞摯なる態度は人に敬慕せらるゝ所以なるべし、運動趣味の人にして殊に競技の見物を好むと云ふ。

◇

中村愛助

△東京市中野區櫻山町五〇にて外科専門を以て開業せる元陸軍々醫學校教官陸軍三等軍醫正中村愛助博士は、九州帝大出身の外科學者にして、陸軍々醫學校にては軍陣外科學を專攻、當時より學位論文を研究完成し、次で嘗て獨逸に留學するや、伯林大學外科學教室にてピール教授の指導を受け研鑽大に得る所あり、歸朝後又母校の恩師後藤七郎教授に師事して、學位論文提出、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。

△博士は三高を経て、大正四年九州帝大醫科大學を卒へ、同五年二月陸軍々醫志願、同九年任陸軍二等軍醫、同六年陸軍々醫學校入學、同八年同校卒業の上補東京第一衛戍病院附、同年十二月歐洲出張を被命、主として獨逸にて研究英、佛兩國を經由して、同九年十二月歸朝す、再び第一衛戍病院外科室勤務、同十一年三月補龍山衛戍病院附、同十三年三月補廣島衛戍病院附、同年九月内地修學の爲め休職の上、九州帝大醫學部後藤外科に入り、作業完成の上、復職を爲し、同十四年六月學位を受領す、同年八月補東京第一衛戍病院附、兼陸軍々醫學校教官、次で東京第二衛戍病院附、陸軍々醫學校教官を経て、昭和三年現職を去る、爾來現住所にて開業今日に至る。

△學位主論文は「肺臓外科ニ關スル實驗的研究」參考論文は、(1)外科手術用絹絲ノ一般性質ト組織内ニ於ケル運命及ビ周圍組織ニ及ボス病理的變化ニ關スル實驗並ニ臨床的研究、(2)前論文補遺、(3)外傷性腸管破裂ノ症例ト其ノ處置ニ就テ、(3)上顎内皮細胞腫全切除ノ一例の四篇なり。其後他に發表せるもの尠からず、最近實地家、學生の爲外科書を著述公刊せり。

△感想に曰く「現代學界に於ける所謂官僚主義は、學術の蘊奥を極めたり斯學向上には偉力はあるが、大先輩學者た

るもの自己勢力扶植傳搬に傾くやの傾向弊風を認め遺憾に思ふ、學界一方に立つの士は宜しく純眞なる學究の士でなければならぬ、その境遇と學者のバックなるもの如何に關係はない筈である。醫師が非常に多い、研究の根源に立つて實地に之を應用するのが醫師の役目である、醫學の性質上仁術を施行する此の醫師は、現在生活上や醫業上大變弱い、不利な地位に置かれてある様に見える、自分は眞の醫家として醫學なるもの眞意「仁術なる」言葉に合ふ様に處して行きたい、往々に見られる、客引き態度や、自己宣傳、他學者の誹謗無智なる患者に對する勝手な行動等は眞正面より之を排撃し、苦しめる病者に向つて衷心より、正しく救つて見たい誠意は醫師實地醫家をして、やがては社會一般より敬慕せらるゝ位置に到らしむるであらう」云々。

△東京府北多摩郡昭和村に本籍を有し、明治二十二年生る。引締りたる體格にて、凛々しき風貌に學者らしき威嚴を存し拘すべき温情を藏す。一度び其の嚙咳に接せんか、敢て城壁を設けず、謙遜にして少しも自己の才學を衒はず、恬淡として談話を好み、應待眞摯にして明朗なる態度は頗る好感を覺えしむ。松塘はペンネームにして文才あり、洋畫を好くす、劍道及び柔道にも堪能にして敢て人後に落ちず、また刀劍を愛し多く秘藏して鑑賞を樂しむ。年齒當に不惑に入る七、年壯氣銳にして春秋猶豊富なれば、幸に自重加餐を祈るや切也。東京市中野區櫻山町五〇に住む。

◇

伊藤幸憲

△現代外科界の大家として浪速杏林界に久しく其名聲を馳せ、現に自己經營の大坂築港病院（港區四條通り二ノ一七）院長として、私立病院中に大なる存在を認められつゝあるは、醫博伊藤幸憲其人なるは、既に何人も識る所なるべし。顧みて其今日ある博士のプロフィルを打診するに、博士は岡山醫專出身の外科學者にして、岡山醫大より學位を獲得せる篤學の士、嘗ては米國に遊び其地にて病院を經營し、或は紐育市コロンビヤ大學大學院に入學して教授クラークに師事し、後ちボストン市ハーバート大學大學院に轉じて外科病理學教室に入り、カウンセ

ルマン教授及びウォルバツハ教授の指導を受け、次で渡英してロンドン大學のユニバーシティ、カレッジ、ホスピタル醫科大學外科教室に入り、チヨキス教授指導の下にて研究せるなど、歴々として其研鑽努力の跡を語るに餘蘊なし。既にしてその玲瓏たる手腕と相俟つて盛大なる今日の成功を贏ち得たるもの亦偶然ならざるを想ふ。

△博士は大阪府立北野中學校を経て、大正二年岡山醫專を卒へ、直ちに岡山縣病院外科教室勤務、同四年外科助手醫長拜命、同五年四月朝鮮元山府立病院副院長、同七年十一月渡米加州スタクトン市に於て日本病院經營、同九年六月コロンビヤ醫科大學大學院入學、同十年一月ハーバード醫科大學に轉じ、同十一年二月渡英、ロンドン大學にて同十二年二月迄研究、傍ら四ヶ月間獨、塊、佛、伊、瑞、其他歐洲各國を視察し同年四月歸朝す、直ちに岡山醫大病理學教室に入り田村教授の下に同十四年十月迄研究を續け、同十四年七月學位を受領す、同十五年以來大阪私立築港病院を經營す、次で東區高麗橋一丁目高麗橋醫院を増設經營する所ありしが、昭和五年二回の大患に罹りて以來本院の經營を畏友小野醇吉博士に委託し、爾來四星霜の後健康全く舊に復したるを以て、昭和九年五月以來僚友相原義一博士と共同し分院伊藤外科泌尿科院と稱し、同醫院に於て再び從來の如く、外科泌尿科専門にて醫業に従事することなれり、但し斯間大阪築港病院の方は従前通りにて變ることなく今日に至れり。

△學位主論文は「骨膜並ニ骨髓ノ移植ニヨル骨再生ニ就テノ實驗的研究」にして、獨逸文の原著なり。外に參考論文として獨逸文の原著五篇あり。

△感想の一片を述べて曰く「醫政に關與せざる自分は自分の専門の外科を以て熱心と親切を以て患者に對し報酬は患者の貧富に應じて決定なし居れり。開業に對しては日本の現状は不可なり、宜しく米國の如くに各醫師は單に「オフキス」を有するのみにして一般開業醫の自由の出入なし得る病院の經營を取るべきなり。尙各大學を今日以上に開放して一般開業醫の自由研究の便宜を計られたし」云々。

△博士は大阪市の人、明治二十三年生る、年齒不惑に入る六歳也。漸く壯熟して一段の重望を加え、臨床家としては最も腕の冴えたる全盛時代に在り。學究的濃厚の紳士にして、居常禮儀節文を重んじ時務に缺くることなし、一度其の風貌に接せんか、舉措悠々として進らず、快活にして恬淡たる態度は好感を與へ、又一掬の温情は更に敬慕の念を深からしむるものあり。趣味としては第一にゴルフ狂、外に謠(觀世)、俳句(ホトトギス派)、碁などに親しみ、讀書を愛す、又時に旅行を楽しむ。自宅は兵庫縣武庫郡甲東園に在り。

宮路善久

△滋賀縣蒲生郡中野村(八日市中野)に外科専門宮路病院あり。院長宮路善久博士は京大派の外科學者にして、母校の恩師猪子止才之助、伊藤隼三、鳥瀉隆三博士等の指導を受くる所多く、母校より學位を獲得せる名醫博也。顧みて其の學歷より博士の年歴を公開すれば、東京中學、二高を経て、大正八年京都帝大醫學部を卒へ直ちに同大學副手として附屬醫院に勤務、同十一年任同大學助手、引續き附屬醫院に勤務す、十四年八月學位受領、同年依願免本官、同時に京都帝大醫學部講師囑託となり、外科學教室に勤む、同年依願解囑、津市立病院外科部長に任ぜられ、昭和三年辭職直ちに歐米視察を爲し、歸朝後頭書の現住所に開業今日に至る。

△主論文は「特殊溶解現象研究」にして、(1)鶏赤珠特殊溶解現象、(2)鶏白血特殊溶解現象、(3)特殊溶解素ノ生産ニ必要ナル免疫元の三篇より成る。參考論文は、(1)「アンチモン」ノ靜脈内注射ニヨル「フライリア」症ノ治驗、(2)「アンチモン」劑ニヨル「アメーバ」赤痢ノ治驗、(3)血清蛋白ノ血清學的證明法ニ就テ、(4)惡性淋巴腺腫ニ就テの四篇なり、他にも論著夥多。

△感想に曰く「迷信とか頑迷とか或は認識不足の爲め折角救命的な進歩せる現代の醫療が拒まれること屢々あり、遺憾至極である、吾々は一般民衆に醫學的常識を認識せしむることが現時治療界の急務でないかと思ふ」云々。然かあ

らしめ度きものなり。滋賀縣蒲生郡中野村醫師宮地直一嗣子にして、明治十八年京都府須知町にて生る。當年知命有一にして學識、經驗、人格共に爛熟し一段の重望を加ふ。性來田園生活に興味を有し、日常刀圭多忙の裡に又た閑日月あるを楽しむ。賦性溫厚篤實、患者に對し、又人に接するに親切と、同情と、理解とを以てす。

◇

藤田宗一 △東京市澁谷區圓山六五に在り、外科専門を以て喧傳する藤田病院は、藤田宗一博士の私立病院也。開業拮据十年有餘、既にして牢固たる地盤を有し、博士獨特の手腕は益々其の特技を揮ひ、明敏にして利岸なるメスの好評と相俟つて人氣を吸収し、今や遠來よりの外來患者輻輳すと云ふ。博士は東大系の外科學者にして、恩師鹽田教授指導の下に斯學の蘊奥を究め、又傳研長與教授の下に實驗病理學を専攻し、母校より學位を獲得せる近來の名醫博也。

△學歴及び閱歷より言へば、三高を経て、明治四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに醫術開業試驗附屬病院に於て鹽田教授指導の下に外科學研究、同四十五年三月醫術開業試驗委員拜命、大正二年七月より約二ヶ年間三重縣尾鷲病院に就職、同四年二月同院を辭し上京再び醫術開業試驗附屬病院に於て外科學研究、同十一年七月より東京帝大傳染病研究所病理學教室に於て長與教授の指導を受け實驗病理學研究、同十四年五月同所退學、同年十月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。

△學位主論文は「畢丸内分泌ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文「メツケル氏憩室ニ因スル腸絞扼物ノ興味アル治驗例」の一篇あり。他にも論著夥多。著書には「臨床紫外線療法」あり。

△感想に曰く「國家が非常時であると共に、杏林界亦非常時である。國家の國民保健衛生に對する施設不備加ふるに一定の體系を備へず、その根本方策の那邊に存するやを知るに苦しむ。近時内務省に於ては國民保健法案を立案して、

之を議會に提案すると稱し、遞信省に於ては簡易保險局に於て疾病保健を立案せりと稱し、農林省管下には産業組合を動員して組合病院の設立を助成す。之等何れも地方農村疲弊の源を除去せんと努むるもその方策たる多岐多端にして統制を缺き、國家としての醫事衛生に對する根本方針を知るに苦しむ。宜しく衛生省を設立して國家行政の重要事たる醫事衛生の根本策を樹立しその方途の萬全を期す可し」云々。三思傾聽すべき也。

△香川縣大川郡津田町藤田文祐養嗣子にして、明治十八年生る。資性溫厚、眞面目にして、學者タイプの風貌凛々として威嚴を存し、高適なる品格を備ふ。平生刀圭甚だ多忙にして席を温むるの暇なしと雖も、元氣旺盛にして日夜倦むことを知らず、孜々として熱心に診療に精進し、患者に對するに誠意誠實を以てし、飽く迄親切を盡す點に博士の特徴を窺はる。書見を業餘の楽しみとし、俳句を能くす、雨琴は其號也。氏は又多年醫師會のために盡瘁し現時澁谷區醫師會長として同業間にその重きをなし、又一面日本醫師會醫政調査委員、及び東京府醫師會理事として杏林界多難の局面に立ち、業餘の閑を空うせず専ら醫師公共の爲に努む。趣味としては、謠曲に對する趣味は一段にして素人天狗の一人なりとの定評あり。家庭には妻樂子との間に二男二女あり。

◇

兒玉周一 △東京慈惠醫大助教兒玉周一博士は、大正六年東京慈惠醫專を卒へ、直ちに同學生理學、醫化學教室助手に任命せられ、同七年より八年十二月迄東京病院外科醫員勤務、同九年より十三年迄東京帝大附屬傳染病研究所研究生、同十三年三月渡米留學、同十五年六月渡歐、同年末歸朝、同時に東京慈惠醫大講師となり、次で助教に任命せられ、東京病院並に慈惠會醫院外科を擔任す、其間大正十五年一月東京帝大より學位を授與せらる。

△主論文は「膽汁分泌機能ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)非經口的ニ注入セル肝細胞乳劑ニ因ル肝臟ノ検査、附諸臟器ニ及ボス影響ニ就テ、(2)肝膽ノ分光學的研究ニ就テなり。鹿兒島市醫師町兒玉利實の三男、明治二

十五年生る。博士の夫人阿里子は東京帝大名譽教授故河合師太郎博士の次女にして、京都帝大教授市河三祿林博は義兄に當る。春秋猶豊富、前途有爲の資、幸に自重加餐を祈る。東京市澁谷區千駄ヶ谷町原宿一七〇に住す。

伊藤 肇

△名古屋市技師にして名古屋市民病院外科部長たる伊藤肇博士は、既に世人周知の如く外科界の大立物にして、京都帝大名譽教授たりし故伊藤隼三博士の嗣子にして、大正六年京都帝大醫科を卒へ、直ちに同大學副手を歴て、八年任助手、同年附屬醫院看護婦講習科講師囑託、十一年任京都帝大助教授、醫學部勤務、十四年看護婦産婆養成所看護婦科講師の囑託を解かる、同年依願免本官、南滿洲鐵道株式會社職員を命ぜられ、滿鐵大連醫院外科醫長として赴任す、十五年三月京都帝大より學位受領、昭和四年六月滿鐵大連醫院を辭し鳥取市に亡父の遺業を繼承して伊藤病院を經營す、同六年三月伊藤病院を鳥取市に寄附す(以後市立鳥取病院として經營されつゝあり)、同年四月大阪財團法人田附興風會北野病院科長を囑託され、同時に京都帝大醫學部講師を囑託さる、同年五月醫學部講師並に北野病院科長を辭す、同時に任名古屋市技師、名古屋市民病院外科部長を命ぜられ今日に至る。

△主論文は「ワクチン」、「ワクチン」上澄及び「ワクチン」含菌體ノ免疫學的研究」にして、參考論文は、(1)特發性總膽管擴張ノ一例ニ就テ、(2)呼吸固定性ト肝臟腫瘍、(3)嚥下時運動性ト甲状腺腫、(4)甲状腺結核ニ就テ、(5)原發性外傷性皮膚接種結核ニ就テ、(6)結核性胸圍塞性膿瘍ノ手術法ニ就テ、(7)同上、(8)陳久性膿胸ノ治療方針ニ就テ、(9)無菌的手術後皮膚縫合ニ際シ排液「タンボン」挿入ノ可否ニ就テ、(10)氣管枝喘息ニ對スル頸部交感神経切除術ノ實驗的批判の十篇なり、此他にも論著夥多。

△亡父隼三博士は東大の出身、恩賜組の首席にして、在學中より非凡の英才を以て稱せられ、嘗て獨、瑞に遊學し、歸朝後京都帝大教授に任じ、附屬醫院長、醫科大學長を経て醫學部長時代に再び歐米を視察し、大正十三年官を辭し

て京都帝大名譽教授となり、爾來鳥取市に伊藤病院を設立して専ら診療に従事し、餘生を送りつゝありしが、昭和四年五月逝去せり、可惜也。肇博士は即ち其の長男にして、明治二十五年生る。嚴父の衣鉢を繼ぎて嚴肅謹正、學者肌にして世の毀譽褒貶の如きは毫も介意せず、曩には亡父の創設せる伊藤病院を鳥取市に寄附するなど、恬澹として名利に顧慮することなし、友情に篤く同情に富み、應答の禮を重んじて時務に缺ぐことなし、其の眞摯誠實なる態度は故人の人格を偲ばせて敬慕の念を深からしむるものあり。名古屋市東區主税町三ノ一五に住む。

村尾 圭介

△當世博士界中稀に見る兄弟三博士の一美談として茲に擧ぐべきは村尾圭介博士、内藤八郎博士村尾千之博士の三兄弟なるべし。而かも三兄弟共揃つての謙遜家なれば、或は之を一笑に附して吾不關焉の態度を持つるか知らざるまでも、村尾圭介博士のプロフィールに就て、著者の立場より茲に聊か之を品隋せしめんか、圭介博士は明治四十二年卒業の東京帝大系の錚々たる外科學者として聞え、近藤外科より濱松市常盤の村尾醫院にて外科の診療に従事し、次で東京市中野の療養所に勤務の後横濱療養所に移り、東京市本郷區元町に在る現在の成器寮醫館創立に際し招かれて赴任し來り、爾來本寮經營の衝に當り今日に至れりと聽く。要するに氏の前半生史を一貫して多く結核治療の爲め努力盡瘁しつゝあるものと肯かせしむ。

△學位は大正十五年四月母校より獲得せるが、學位論文は「組織體外培養ニヨル最項ノ實驗」と題する博士會心の作と見るべく、其の學問的批判は既に學界に定評あれば贅せずもがな、氏が努力研鑽の跡を物語るものなり。趣味としては書畫を好み、殊に書道に堪能なりと聽く。有名なるクリスチャンにして、人格高潔、義俠に富み能く後進を愛撫し又克く人を容るの雅量有す、學究的濃厚の紳士として敬意を表すべき也。出身地は静岡縣濱名郡にして、亡醫師村尾春洋の三男として明治十六年生る。長兄醫學士村尾達彌は亡父の遺業を繼ぎ、次兄は小澤徹二、長弟は醫學士磯

部晋、次弟内藤八郎醫博は名古屋市東區針屋町二丁目にて開業、末弟村尾千之醫博は神奈川縣鎌倉町に開業せり。猶聞説、東京市療養所長田澤鏡二醫博、成器寮主田澤秋作、及び田澤止郎とは義兄弟の間柄であり、千葉醫大教授伊東彌惠治博士とは従兄弟の關係ありと、多數の學者を輩出せる餘慶ある家柄といふべし。東京市世田谷區代田二丁目九六一に住む。

坂田敬之

△愛媛縣新居濱町住友病院に坂田敬之博士あり、博士は東大出身の外科並にレントゲン科學者にして、陸軍三等軍醫正の印綬を帶び、東京帝大より學位を獲得せる名醫博たる一人物也。多年陸軍々醫界に活躍して貢獻する所あり、該博なる學識と共に卓越せる手腕を有し、民間治療界に精進して以來愈々其の特技を發揮し、診療手術の好評と相俟つて益々内外の信望を博す。今や四國醫博界の中堅たる斯科の大家として矚目せらるゝも偶然にあらず。

△學歷より見たる博士は、大正五年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに陸軍見習醫官拜命、同六年六月任陸軍二等軍醫、補歩兵第六十四聯隊附、同七年八月第六師團軍醫部々員、同九年九月東大大学院入學、近藤教授指導の下に一般外科學研究、同年十月任一等軍醫、同十二年九月大學院退學復職、東京第一衛戍病院附、同年十一月大阪衛戍病院附外科主任、同十三年八月日赤大阪支部病院兼務、同十五年十一月學位受領、昭和二年夏任三等軍醫正、補京都衛戍病院附、昭和三年八月支那駐屯軍病院長として天津に赴任北支事變に活躍す、次で昭和五年八月陸軍退職後現職に就任今日に至る。

△學位主論文は「胸腺X線照射ノ實驗的研究」にして、參考論文なし、他に發表の論著夥多あり。(1)胸腺ト惡性腫瘍トノ關係、(2)惡性腫瘍ト體質トノ關係、(3)結核性淋巴腺炎ニ對スルX線作用ノ知見、(4)陳舊性尺骨神經斷裂縫合ニ就

テ、(5)「ペリドール」ノ肉芽發生並ニ上皮形成促進劑トシテノ效果、其他枚舉に違あらず。

△熊本市北千反畑町の出身、醫博坂田圭一の弟也。明治二十三年生れなれば當年不惑に入る六歳、年壯の意氣益々壯にして多量の分別を有す。賦性謹直にして高潔、人と接するに快活にして愛想あり、同情に富む、殊に患者に對する態度の眞剣にして、誠實と親切とを盡す點は其の篤き聲望を博する所以と見るべき也。多趣味の人にして、研究以外には謡曲、繪畫、寫眞などを能くし、又旅行、登山、漁獵などを好む。愛媛縣新居濱町惣開に住む。

野村久中

△一宮市南石野町十五番地野村病院長として、野村久中博士の嘖々たる名聲を聞くや既に久矣。博士は京大系の外科學者にして、外科界の泰斗猪子止才之助教授、故伊藤隼三教授の愛弟子として知られ、多年恩師の指導を受けて造詣する所あり、後に又愛知醫大教授林直助博士に就きて病理學を研鑽し、母校より學位を得たる斯科界の名醫博也。開業既に二十有二年を閱し、學術の研究と共に臨床に多年の經驗を有し、玲瓏たるメスの評判は益々遠近に喧傳し、繁榮歳と共に牢固たる地盤を築き、今や卓然として群を抜き一流に在り。

△博士は愛知縣一中、六高を経て、明治四十一年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學外科教室副手として猪子教授に、次で伊藤教授指導の下に一般外科學を研究す、同四十二年京都私立東山醫院外科醫長就任、大正二年一宮市にて開業、昭和三年九月現住地に新築移轉今日に至る、其間大正十二年より愛知醫大病理學教室にて林教授の指導を受け、同十五年十二月學位を授與せらる。

△主論文は「家鴨腫瘍ノ實驗的試食ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)名古屋市ニ於ケル惡性腫瘍ノ地理的統計ニ就テ、(2)愛知縣下ニ於ケル惡性腫瘍ノ地理的統計的研究、(3)岐阜大垣市ニ於ケル惡性腫瘍ノ地理的統計ニ就テ、(4)岐阜縣下ニ於ケル惡性腫瘍ノ地理的統計的研究、(5)家鴨腫瘍ノ飼食的試驗第一報告の五篇なり、其他少からざる論著

あり。

△愛知縣丹羽郡丹陽村野村久之丞の長男、明治十四年生る、當年知命に入る五歳也。益々元氣にして、今は手腕、人格共に練達して老熟の域に達し、「醫は仁術也」をモットーとして、診療に熱心に力め親切と誠意とを以てす。一面又人と接するに快活にして圓滿、愛情あり同情に富む、蓋し性格の反映にして其の篤き聲望を増し、克く今日の成功を贏得たる所以知るべき也。

加藤豊彦

△臺灣嘉義市榮町六ノ六に開業せる加藤豊彦博士は、大阪醫大の出身、學位は九州帝大より獲得せる外科専門家に於て、特に内臓疾患を最も得意とする名醫博也。猶公職としては嘉義市協議會員、市政調査委員、衛生委員等に擧げられ、臺灣總督府專賣局嘉義支局醫務囑託、第一生命保險、安田生命保險、大同生命保險、太平生命保險、三井生命保險等の醫務を囑託せらる。人と爲り穩健篤實、患者に對するに眞摯にして親切なりとの評判を聞く。

△廣島縣双三郡萩原村加藤直隆の養嗣子にして、明治二十六年生る、大正九年大阪府立醫大卒業後、直ちに九州帝大醫學部副手囑託、外科學第二講座教室勤務を被命、同十年七月任同大學助手、同十五年一月依願免本官、同時に九州帝大醫學部專攻生として入學、引續外科學第二講座教室にて研究を續け、傍ら佐賀縣西唐津港にて開業、同年十二月學位受領、昭和二年夏前記開業を閉鎖し臺灣總督府醫院醫長に被任、臺中醫院外科部長として赴任す、昭和四年八月依願職を辭し嘉義市醫に就任す。

△學位主論文は「胸腸腔内ニ流出シタル血液ノ凝固セザル理由並ニ同腔内ニ於ケル血液凝固防止性物質ノ本態ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)胃、大腸下垂症ニ對シ固定術ヲ施シタル經驗、(2)「エーテル」ノ外科的應用ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究、(3)クルムスキ氏液ノ外科的應用ニ關スル實驗的及臨床的研究の三篇なり。



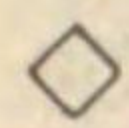
高木四郎

△滿洲安東縣滿鐵醫院に外科部長として高木四郎博士あり。博士は京大系の外科専門家に於て恩師猪子止才之助博士に就きて斯學の蘊奥を究め、又森島及び尾崎兩教授の指導を受けて藥物學を研究し、大學院を卒業して母校より學位を獲得せる名醫博也。

△更に學歴より見たる博士は、大正六年京都帝大醫科大學卒業後、直ちに猪子外科教室に入り、同八年十月迄研究、それより神戸市佐野病院副院長兼外科部長就任、同十年二月神戸製鋼所醫務囑託、同十一年二月同所の依頼に依り兵庫縣相生町に於て播磨病院を創設し院長となる、同十三年四月之を辭し、同年七月より十五年六月迄大學院學生として母校藥物學教室に於て森島、尾崎兩教授の指導を受く、退學後直ちに日赤岐阜支部斐太療院長に就任、同十五年十二月學位受領、昭和三年春日赤を辭し、高知市楠病院外科部長として赴任し、同六年九月現職に轉任今日に至る。

△主論文は「諸種藥品ノ局所麻酔作用ニ就テ」にして、參考論文は、(1)心臓房室間相互ニ於テ興奮ノ兩義傳導ニ成立スルカ(「クロラール」心臓ニ就テノ實驗)(2)「クロラール」心臓ニ於ケル電氣刺戟實驗並ニ「ストロファンチン」ノ心臓刺戟傳導路ニ對スル作用ノ研究、(3)藥物ニ由ル「クロラール」心臓ノ恢復ニ就テの三篇なり。

△富山縣富山市惣曲輪高木喜兵衛の四男、明治二十三年生る。年壯の意氣益々壯んにして學識、手腕、人格共に圓熟の域に達す。勵精恪勤の人にして、至誠以て公に奉じ、仁術の爲め最善を盡し努力精進する所あり。一面又人と接するに、溫厚篤實、能く人を愛し、理解あり同情を以てす、以て其の性格の一斑を窺はれ、同時に其の崇高なる人格を敬慕せしむ。滿洲安東縣山手町三一號に住む。



筒井省二

△鶴岡市莊内病院院長兼外科部長として筒井省二博士のあるは、既に久しく其の地方に喧傳す。博士は九大系の外科學者にして、大学院卒業に依り母校より學位を獲得せる名醫博也。指導教授は母校の中山森彦博士及び後藤七郎博士にして恩師の薰陶に負ふ所多し。多年蘊蓄せる學殖と共に實地の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なし。

△埼玉縣北葛飾郡富多村大字立野筒井源次郎の長男、明治二十三年生る。一高を経て、大正五年九州帝大醫科大學を卒へ、直ちに副手囑託となり第二外科教室に勤務、同七年五月任同大學助手、同年九月滿鐵職員となり遼陽醫院に赴任し、同九年十月滿鐵公主嶺醫院、同十年八月滿鐵大連醫院に轉勤す、同十二年四月依願同社辭職、同年七月九州帝大大學院入學、後藤教授指導の下に外科學研究、同年九月九州帝大附屬醫院醫員を被命、同年十二月大學副手囑託、第二外科教室勤務、同十五年六月醫員及び副手を辭し大學院を退學す、同年七月鶴岡市莊内病院に奉職し、副院長兼外科部長として就任し、昭和六年五月院長となり、今日に至る、期間昭和二年二月學位を授與せらる。

△學位主論文は「諸種細菌ニ對スル腎臟機能ノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)頑固ナル「アマーバ」赤痢ヲ蟲様突起瘻ニヨリ治癒セシメタル經驗、(2)脾脫疽ノ四例ニ就テ(3)外腸性大腿骨肉腫ノ一例ニ就テの二篇なり。其他論著夥多。

△賦性穩健篤實、學者タイプの風貌凛々として威嚴を有し、平和の裡に一掬の溫情を藏す。研究以外、運動、寫眞、繪畫に多大の趣味を有し、又能く讀書して常に精神の修養に力む。鶴岡市馬場町に住む。

陰山 采

△日本赤十字社病院治療主幹(外科並整形外科擔任)としての陰山采博士の嘖々たる名聲を聞くや既に久矣。博士は東大系の外科及び整形外科學者にして、整形外科界の權威たる恩師田代義徳博士に就きて斯學の

蘊奥を究め、又長與及び緒方兩教授に就きて病理學を專攻し、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。嘗ては歐洲大戰中の歐米を視察し、後に又歐洲に留學してアショッフ教授の門に入り研鑽大に得る所あり。今や帝都醫博界に於ける斯科の大家として囑目せらるゝ一人物たるを否むべからず。

△顧みて其の今日ある博士の學歷及び閱歷を公開すれば、福岡縣嘉穂中學校、五高を経て、大正二年東京帝大醫科大學を卒へ、直に日赤本病院外科醫局に入る、同八年六月社會を帶び歐洲大戰に際し米、英、佛、白、伊諸國の戦線醫務狀況を視察し翌九年一月歸朝す、同十年日赤本病院外科治療主任となる、同十二年二月東大田代整形外科教室に入りて研究、傍ら長與、緒方兩教授の下に病理學教室にて研究、同年十一月日赤病院より歐洲留學を命ぜられ、獨佛、瑞、奧、洪諸國に學び、同十四年九月歸朝、爾來引續現職に在り、昭和二年三月學位を受領す。

△主論文は「結核菌感染ニ際シ網狀織内皮細胞系統ノ初期反應ニ就テ、並ニ二十日鼠ノ鳥、牛兩結核ニ於テ結核菌體內感染ニ關スルゴールドマン氏細胞輸送説ノ批判」にして、參考論文なし、他に論著夥多、枚舉の遑なし。

△大分縣臼杵町海添の人、明治二十二年生れにして當年不惑に入る七歳也。大學卒業後日赤病院に終始し、至誠一貫今日に至る功績は決して尠からず、今や同病院の重鎮として篤き信望を博するも亦偶然ならず。賦性篤實敦厚、眞面目にして恭謙禮節に厚く、寛容能く人を容れ部下を愛撫す。學究的溫厚の紳士として、其の高邁なる人格を慕はる。研究以外の趣味としては弓術を好み、健康の増進と共に心身の鍛鍊に餘念なきが如し。東京市麻布區筈町一六八に住む。

藤田 小五郎

△社會事業の急先鋒たる前の大阪市財團法人弘濟會弘濟病院(大阪市東區粉川町)外科醫長兼醫務係長として實費診療團の爲め盡瘁活動しつゝありし藤田小五郎博士は、昭和九年四月父の急死に依り辭職東上以來

家政の整理等々研究に従事しつゝあり。博士は大阪醫大系より出色せる外科専門の大家として既に斯界に定評あり、殊に其最も得意とする創傷傳染病に至りては獨歩の觀あり、到底他の追隨を許さずとの評判也。

△博士は東京麻布中學を経て、大阪府立高醫へ入學し大正六年大阪府立醫大を卒ゆ、直に醫化學教室に止まり、同年十二月助手兼病院醫員拜命、外科教室勤務、同八年二月辭職同時に、大阪市天王寺にて開業の傍ら母校の研究科へ入學、同九年四月より附屬病院實驗診療科に於て微生物學研究、同十年爲病氣診療閉業、同十一年十一月京都帝大專修科へ入學、皮膚科教室にて松本教授指導の下に研究、昭和二年四月退學、同年學位受領、同三年三月頭書の弘濟病院外科醫長拜命、同時に同看護婦養成所教師囑託、同五年一月同所幹事、同四年十一月より五年一月迄大阪慈善病院醫長兼職、同七年四月弘濟病院醫務係長兼職を命ぜらる、同九年四月辭職以來東京に移り今日に至る。

△學位主論文「實驗的鼠咬症ノ血清化學的研究補遺」(英文) 參考論文、(1)加熱及非加熱組織「エキス」ノ非徑口的注入ニ關スル研究、(2)實驗的再歸熱「マウス」ノ血清化學的研究補遺、(3)實驗的家兔鼠咬症ノ豫防藥ノ試驗、外六篇あり。他に論著夥多。

△感想の一片を吐露して曰く「治療の爲めの醫學、醫學の爲めの治療を主體となすは最も醫界振興の理想たるべし」云々、高邁なる理想として傾聽に値す。博士は明治二十六年東京にて生る、當年四十有三歳也。學究的溫厚の紳士にして、思慮あり識見に富む、外科系疾患の實驗及び臨床醫學研究所の設立は多年博士の希望する所なりと聞く。趣味としては風俗地理歴史を愛好し、考古學の研究家として知られ、西銘は其號なり。性格は極めて短氣なれども、心底には一片の蟠りなく又毫も惡意の存することなし、深く長く交際ある人には厚誼友情の染々たるものあるを味はる、著者も亦其一人として博士に對する敬慕の念を歳と共に深からしむる者なり。東京市芝區三田小山町五に住す。

◇

石川 一佐久

△外科界近來の名醫博たる石川一佐久博士は、東京市瀧野川區瀧野川二〇七六に在り内科、小兒科及び外科を以て著聞する兄弟經營の石川病院に得意の外科を擔任する外、千葉醫大講師として學生の指導に努力しつゝあり。博士は東大の出身、外科界現代の權威佐藤三吉博士の愛弟子にして、多年恩師の指導を受くる所厚く、又藥物學は母校の林春雄及び田村憲造兩恩師に就きて專攻せる結果、學位は母校より獲得せる所謂東大系の名醫博たるに耻ぢず、嘗て獨、佛、米に留學して歸朝後は、助教授として千葉醫大の教壇に起ち、其の蘊蓄を披瀝して只管學生の指導に盡す所ありしも、今は講師として之を續け、自己の病院に於て日々診療に勵しみ、獨特の手腕を發揮する所あり、特に其の最も得意とする内臓外科の領域に至つては、益々好評裡に民衆の人望を集中しつゝあり。

△博士の學歷よりすれば、大正五年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに佐藤外科教室に入り、同八年四月迄佐藤教授指導の下に外科學專攻、同八年四月任臺灣總督府技師、南支那出張を命ぜられ財團法人福州博愛會醫院外科醫長として同十年六月迄南支那に於て活動す、それより東京帝大醫學部藥物學教室に入り林教授及び田村教授に就き藥物學研究同十一年六月東大大学院入學、同十三年九月任千葉醫大助教授、兼同附屬醫院第二外科醫長を命ぜらる、同十四年十月外科學研究の爲め獨、佛、米、諸國へ留學を命ぜられ、昭和二年四月學位受領、同年五月歸朝、同三年十月依願免本官、更に千葉醫大講師となり、同時に石川病院外科長として就任今日に至れり。

△學位主論文は「腸管ノ蛋白體透過性ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文なし。其他論著夥多。將來醫界に對しては「醫界の當局には、學識、體験を具備せる臨床家であり、最も人格ある醫政家をして當らしめよ」との抱負を持ち、又「日本醫界の現状よりして、醫學界と一般開業醫界との間に緊密なる相互連絡を最も肝要と思考す」との持論者也。

△明治二十四年新潟縣にて生れ、東京市に本籍を有す。學究的溫厚の紳士、今は最も得意時代にて腕の冴え盛也。人

と接するに圓滿にして、和氣溫情に富み、能く人を愛し後進を親しむ。讀書家にして書見を業餘の楽しみとし、運動を好み殊に劍道を能くす、又寫真に堪能なり。春秋猶豊富にして、研究に醫療に餘念なき前途は益々輝かし、幸に自重加餐を祈るや切也。

◇
名倉英二

△整形外科界新進の大家として名倉英二博士の名聲は、帝都醫博界に噴々として聞かや既に久し矣。現に博士は昭和醫專教授兼同附屬病院整形外科部長たるの外、千住名倉分院（神田區駿河臺四丁目二番地）副院長として活躍する所あり。博士は九大系の出身、整形外科界の泰斗住田正雄博士及び神中正一教授の高弟にして、恩師指導の下に斯學の蘊奥を究め、又嘗て歐洲を視察し、母校より學位を得たる斯科界近來の少壯名醫博也。今や其の蘊蓄を披瀝して教壇に起ち、學生の指導と相俟つて臨床に精進し、獨特の新手腕を發揮して益々信望を博し、超然として斯界に獨歩の觀あるを見る。

△博士は東京府立一中、一高を経て、大正十一年九州帝大醫學部卒業後、直ちに同學部整形外科教室に勤務、昭和二年一月歐洲見學、同年三月學位受領、同年七月歸朝後、直ちに築地聖路加國際病院整形外科主任として就職す、翌三年四月同病院を辭し、昭和醫專教授となり整形外科を擔任す、其傍ら、同六年五月より整形外科名倉分院副院長として診療に従事し今日に至る。

△學位主論文は「縫縫合並ニ移植ニ關スル實驗的研究（其組織學的探究及び臨床的治驗）」にして、參考論文は、(1) 我教室十年間ニ於ケル上膊骨下端骨折ノ治驗、(2) 自家考案脊柱彎曲測定器及び其測定法ニ就キテ、(3) 縫移植及び縫合ニ就キテ、(4) 皮下腫切斷手術ニ關スル實驗的研究特ニ「アヒレス」腫ノ治癒現象ニ就キテの四篇なるが、其後發表せる論著又尠からざるものあり。

△東京市足立區本町（舊千住）五丁目、接骨醫界の名門名倉謙藏次男にして、名古屋醫大教授名倉重雄博士の弟たり明治二十九年生れにして年齒漸く四十歳也。眞面目なる學究的温厚の紳士にして、少壯の意氣に燃え、研究心に富む人と爲り穩健篤行、志操堅實にして高邁なる人格を備ふ。學成りて後敢て自己の才學を衒はず、淡々として只管己を虚うし、人に厚うする謙遜なる態度は多とすべき也。趣味としては柔道（四段）を好み、又謡曲を楽しむ。東京市神田區駿河臺一ノ八ノ十五に住む。

◇
鈴木保壽

△水戸市下市東臺に私立下市病院あり、父兄弟の共立病院にして開業古く、内部の設備整ひ、當市診療界の王座を占む。院長は博士の嚴父鈴木鍊平氏にして、博士の令兄鈴木善衛氏及び鈴木保壽博士は副院長として院長を輔佐し共に診療に従事す。博士は外科を擔任し、博士獨特の手腕を發揮して餘す所なく、父兄の手腕聲望と相俟つて好評益々當地方を風靡し、遠近よりの外來患者日々輻輳し盛況を極む、蓋し其の今日の繁榮を見るもの、父子和合協力結晶の美談として推獎し祝福すべき也。博士は慈惠醫專出身の篤學者にして、恩師男爵高木喜寬博士に就きて外科學を、同寺田正中博士に就きて細菌學、血清學並に膠質化學を研究し、慈惠醫大より學位を獲得せる外科界近來の名醫博也。

△博士は茨城縣立水戸中學校を経て、大正五年東京慈惠會醫院醫專を卒へ、同年四月より十二月迄母校外科助手を被命高木教授に師事す、同年十二月一年志願兵として宇都宮歩兵第五十九聯隊へ入隊、翌六年十一月滿期除隊、翌七年二月父兄と共に私立下市病院を創設開業す、同八年五月より三ヶ月間泉橋慈善病院に於て片山國幸博士よりX光線科の講習を受く、同九年三月任陸軍三等軍醫、同十年四月茨城縣立水戸中學校々醫囑託、同十三年十月東京慈惠醫大研究科學生として入學、寺田教授の指導を受く、同十五年四月より昭和二年八月迄研究の傍ら吉川春次郎博士に就き外

科の指導を受く、昭和二年六月學位受領、同年九月私立駒澤病院外科部長就任、傍ら慶大醫學部に於て茂木博士の外科手術を傍觀生として見學す、同三年十二月以來専ら下市病院に於て診療に従事し今日に至る。其間昭和七年二月二十三日上海事變急なるや、突如動員の下命に接し、直に出征し二ヶ月にして復員となり凱旋す、直に二等軍醫に昇進し從七位に叙せらる。

△主論文は、(1)自然凝集反應 (Spontaneous Agglutination) ノ本態ニ關スル研究にして二篇より成る。細菌免疫反應上に於ける甚だ興味ある一新事實として認めらる。参考論文は、(1)電解質殊ニ金屬類加寒天培地ニ發育シタル菌ノ被凝性變化ニ就テ、(2)牡蠣灰ノ蝮蛇毒ニ對スル解毒效果ノ有無ニ就テの二篇なり。

△水戸市下市東臺の人、父は鍊平(醫師)、母はみね其の二男にして、明治二十二年生る、善術の弟にして、且つ慈惠醫學士にして洋畫家たる良三の兄也。温厚の紳士にして學究的篤學者たり。其の今日ある閱歷は博士の前半生史これを語りて餘蘊なし。今は腕の冴え盛にて學識、手腕、人格共に圓熟して一段の貫祿を備え、眞面目にして熱心なる臨床家としての評判高し。運動に多大の趣味を有し殊にベースボールを好み、又尺八を能くし、盆栽を楽しむ。妻はせき子にして一男あり、昭和三年歐洲へ留學す。



崔日 文

△大邱府東雲町に著名なる樂山醫院あり、外科界の新進大家崔日文博士の經營にして、充實完備せる内容の設備と相俟つて、嘖々たる診療手術の好評は益々遠近の人氣を吸收し、今や當地方診療界に卓然として群を抜く。博士は京城醫專出身の篤學者にして、外科界現代の權威たる東大教授鹽田廣重博士に就きて斯學の蘊奥を究め、又細菌學界の泰斗東大教授竹内松次郎博士指導の下に斯學を專攻せる結果、東京帝大より學位を獲得せる名醫博たるに耻ぢず。研鑽多年、學術の研究と共に、臨床の實修に不斷の努力精進を續け、今や獨特の手腕を發揮して餘す

所なく、年次成功の地盤を築きつゝあり。殊に博士は鮮人出身者中の代表者として重きを爲すは、博士界の爲め大に人意を強からしむるに足る。

△顧みれば、博士は大正五年京城醫專卒業後、直ちに忠清南道公州慈惠醫院醫員を拜命し外科に勤務す、同七年六月慶尙北道大邱慈惠醫院醫員拜命、同十二年より官命に依り東京帝大醫學部外科學教室にて鹽田教授の指導を受け外科學研究、同十三年慶尙北道大邱慈惠醫院に復職、同年九月より慶尙北道立醫學校講師の囑託を受け外科學を講義す、同十四年九月より東京帝大醫學部細菌學教室にて竹内教授指導の下に細菌學研究、同十五年二月慶尙北道立安東醫院醫官に任じ外科部長を命ぜらる、昭和二年六月學位受領、昭和三年一月大邱道立醫院外科部長拜命、昭和五年五月辭職以來、現住地に於て開業今日に至れり。

△主論文は「水疔ニ就テ」にして、参考論文は「「ノーマ」病屍體心血ヨリ分離シ得タル小桿菌ニ就テ」なるが、水疔の原因に就きては諸種細菌説あるも未だ不明に屬す、尙ほ其の病理解剖、死因等に就きては未だ定説を聞かず、殊に動物實驗に成功の士なし、著者の實驗に依りて始めて其の結果を發表せるもの、即ち本主論文の學問的價値の存在する所以なり。

△朝鮮慶尙南金海郡業面花田里の人、明治二十五年生る。學究的篤學の好紳士にして、其の今日ある閱歷は燦として博士の前半生史に輝く。年齒正に四十有四歳、年壯の意氣益々壯にして、今は學識、手腕、人格共に圓熟の域に達し、最も得意時代として活躍する所なり。殊に博士の特徴として擧ぐべきは、眞面目なる臨床家として、其の態度の眞實にして熱心なると、飽迄親切を盡し患者をして徹底的に信賴せしむる點にあり。一面又人と接するに恬淡として自己の才學を衒はず、快活にして和氣温情に富む。惠軒は其號にして、書畫を愛し音樂を好む。當世博士界中異彩に富む、立志傳的人物として茲に推奨し、敬意を表す。

岡田實秋 △宇和島市立宇和島病院に外科部長として岡田實秋博士あり。長崎醫專の出身、學位は長崎醫大より獲得せる篤學の士なるが、專攻外科中特に得意とすべきはなきも、甲状腺手術及び蟲様突起炎手術には特に興味を有し獨特の手腕を有す。今や四國診療界に重きを爲す名醫博たるに耻ぢざる一人物と爲す。

△長崎市城山町岡田實の長男、明治二十八年生れにして、大正七年長崎醫專卒業後、直ちに長崎縣立病院醫員を命ぜられ、同十一年四月任同校附屬醫院助手、外科勤務、同十二年四月長崎醫大副手囑託、外科勤務、間もなく任長崎醫大助手、生理學教室に轉ず、同十四年再び外科學教室勤務、昭和二年七月學位受領、同年九月長崎醫大講師となり、直ちに釜山鐵道病院外科部長として赴任するに及び講師を辭す、次で現職に轉じ今日に至る。

△主論文は「甲状腺ノ生理補遺」にして、(1)甲状腺製劑ノ鶏胎兒發育ニ及ボス實驗的研究、(2)甲状腺摘出後出汁ニ現ハルル變化補遺の二篇より成り、參考論文は、(1)肝臓内筋肉移植ニ就テ、(2)軟骨移植ニ關スル實驗的研究、(3)異物造形術ニ關スル實驗的研究、(4)甲状腺ト體溫調劑トノ關係、(5)血液ノ糖分及ビ殘餘窒素含量ニ及ボス甲状腺ノ影響、附甲状腺ト二三ノ内分泌腺トノ相互關係、(6)過敏症ト甲状腺トノ關係ニ就テの六篇なり。指導教授は母校の緒方大象教授にして恩師の薰陶に負ふ所多し。

△性格より打診して博士の長所と見るべきは、溫和從順なること、謙讓なること、感動的なること等々は見逃すべからず。若し強めて言はしむれば、心配性なること、或は決斷力に乏しき嫌なきかと思ふ。以前は文學を好みしも近來は文學にはあまり興味なく、科學殊に生物學に興味を有し、醫學書の外には生物學の書を多く讀破し、又克く精神の修養と徳操の堅持とを心掛け自強息まざるの概あり。宇和島市榊形町一九九九に住む。

泉山幸吉

△樺太豊原町大通四丁目二番地に共立泉山病院あり、院長泉山幸吉博士の主宰する所、高壯なる結構と相俟つて内部の設備整ひ、當地診療界に頭角を抜き、樺太私立病院中の首位を占む。博士は東北帝大系の錚々たる外科學者にして、嘗て講師として母校の教壇に立ち、學生を指導して勵精克く其の任を盡し、母校より學位を得たる斯科界近來の名醫博として既に江湖に著聞す。

△學歷より見たる博士は青森縣立八戸中學校、二高を経て、大正十年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに任同大學助手、外科學教室勤務、昭和二年三月東北帝大醫學部講師囑託、同年五月日本外科學會評議員に擧げらる、同年七月學位受領、同年同月日赤宮城支部病院副院長兼外科醫長に就任、同時に東北帝大講師囑託を解かる、同五年六月辭職、樺太豊原町に共立泉山病院を設立し院長として今日に至る。

△主論文は、(1)開放性氣胸ノ呼吸運動ニ關スル實驗的研究、(2)變壓呼吸ニ關スル實驗的研究第一回報告(人體實驗)(3)同上第二回報告(犬及家兎ニ於ケル實驗)の三篇より成れり。參考論文は、(1)赤血球沈降速度ノ變化ニ關スル研究、(2)急性膀胱壞死ノ三例、(3)蛔蟲填充ニヨル外鼠蹊「ヘルニア」ノ箱頓症ニ就テの三篇なり。此他に發表せる論著澤山あり。

△青森縣三戸郡八戸町の人、明治二十八年生る。當年四十一歳にして少壯の意氣益々壯也。濃厚の紳士にして、學究的臨床家として既に定評ある如く、診療甚だ熱心にして克く誠實と親切とを盡し、其の態度の眞摯にして熱情あり温味ある點は、敦厚篤實なる性格と相俟つて其の人格を敬慕せしむるの徳を有す。趣味としては繪畫觀賞にして、且つ油繪、日本畫をよくし素人の域を脱すとの評あり。醫學博士は數多いがその内でも外科醫は比較的少ない、又外科醫學博士にても臨床方面で學位を獲得せらるゝ人は更に僅少である、従つて博士の如く實地臨床に堪能なる仁を樺太の如き避地に置くのは何としても惜しい氣がする云々と評せる人あり、然し博士は猶春秋に富むを以て、今後の活躍は

期待す可く、幸ひ健在にして自重加餐を祈ると共に、樺太治療界の爲め益々努力盡瘁あらんことを望む。

渡邊 完

△大阪市電氣局病院副院長にして、外科及びレントゲン科を主宰し、兼ねて同院附屬看護婦養成所主任として勵精克く其の任務を果たし、至誠以て公に奉じ治療界の爲め不斷の精進を続けつゝあるは渡邊完博士也。學系は京都府立醫大系の先輩にて、學位は東北帝大より獲得せる斯科界の名醫博なるが、曾て獨逸に留學して外科學及びレントゲン學の泰斗ルハルシュ、ビツケル博士に師事して造詣する所あり、又近くは昨年第四回國際放射線學會に日本代表委員として出席、旁々歐米各國を視察せり。研鑽多年の學識は言はずもがな、經驗豊富にして獨特の手腕を有す。特に其の最も得意とする手術及びレントゲン胸腹部内臟診斷に至つては他の追隨を許さず、斯道の大家として自他共に許す所にして、多士濟々たる浪速杏林界に拮指を屈せらるゝ一異彩たるを失はざる也。而して博士は昭和五年以來、市長の許可を得て職務の余暇、夜間自宅診療を開始して公衆の爲め仁術の最善を盡すことに努力盡瘁しつゝあり。

△博士は和歌山中學を経て、明治四十三年京都府立醫專卒業、直ちに日赤大阪支部病院外科勤務、大正二年日赤和歌山支部病院外科轉勤、同四年再び日赤大阪支部病院外科へ歸り、同九年三月まで勤務、此間大正八年には日赤救護醫員として東部西比利亞に出征し列國傷病兵救護に従事し、翌九年叙勳六等、同院辭職後は大阪島瀉病院に勤め、同十一年二月同院より海外留學を命ぜられ、主として獨逸柏林大學病理學及實驗生物學教室にてルバルシュビツケル教授の許に病理學、外科學及レントゲン學研究の後、歐米各國の斯學教室を見學して同十三年四月歸朝す、同時に同院を辭し大阪市電氣局病院醫長となる、同十四年一月學位を得、同十五年十二月チエツコスロバキア國よりワールクロス勳

章を贈與せらる、昭和五年以來現職に就任の傍ら市長の許可を得て餘暇夜間自宅診療に従事す、昭和九年五月大阪市より視察の爲め歐米各國に出張を命ぜられ、旁々第四回國際放射線學會に日本代表委員として出席、同年十二月歸朝せり。

△主論文は「胃ノ運動機能ニ關スル病理的生理」にして、原著は獨逸文なり、外に參考論文として獨逸文原著四篇あり。其他自著論文夥多。博士の感想に曰く「醫政方面には暗く又それには適せざるが、醫學を基礎とする醫術を施す醫人少きこと、徒らに學に囚はれて人格陶冶を疎することは歎しく思はれる」云々と。一服の清涼劑として三思傾聽すべき也。

△大阪市の人、明治二十一年生る。舊和歌山藩士漢詩人近藤美長（號古拙）孫眞の長男、幼少にして近親渡邊家の養嗣子となる。學究的温厚の紳士、臨床家としての立派なる人格者也。博士が餘暇夜間自宅診療を始めたは、只町内の爲め忠實なる健康相談醫として、又衛生顧問として防疫其他に従事せんが爲めにして、同僚の發展を聲援するとも毫も阻害せず、又決して羨しいとも思はず淡々として働き、以て醫者の天職として自ら之を安ずるの概あるは奇特とせざるを得ず。而して博士自身の抱負としては、將來時期を得れば自己の欲する研究に没頭し、又た獨逸のツアンデルインスチット式のものゝ設備と共に理想的レントゲン診療に従事せんことを期待せるやに聽く。性格謹嚴にして正邪の區別嚴峻なり、而かも人に對するに理解あり同情を以てし、能く部下を愛し指導に努む、やゝもすれば親分式の義侠心あるやに見らる。趣味は謠曲（實生流）寫眞、登山等とす。著者は更めて其の人格を敬慕する一人なるを特筆し置く。自宅は大阪市東區南久寶寺町一ノ四七に在り。

松岡 元治郎

△和歌山市寄合町一九に松岡外科皮膚科醫院あり、院長松岡元治郎博士は岡山醫專出身の一異彩

京都帝大の著宿故伊藤隼三教授の門下生として、久しく博士の指導を受けて外科學の蘊奥を究め、岡山醫大より學位を獲得せる外科界現代の逸物也。和歌山の刀圭界にて第一流の外科醫を物色せば、先づ松岡博士に拇指を屈せざるべからず。由來和歌山には日赤支部ありて立派な外科醫が揃つて居るに拘らず、同病院の入院患者にして轉じて松岡博士の治を乞ふもの枚舉に遑あらずといふ、盛なりと云ふべし。

△博士は三重縣立第二中學校を経て、大正二年岡山醫學專門學校へ無試験入學、同六年同校卒業、同時に縣立岡山病院第一内科有給助手拜命、七年依願退職、直ちに京都帝大醫科大學專修科に入り伊藤隼三博士の下に外科學を習得す、八年更に同大學醫學部研究科に入學斯學の研究を續く、十二年指導教授に伊藤弘博士を追加整形外科一般を研究す、十四年學位受領、十五年京都帝大醫學部副手囑託、間もなく之を辭し恩師伊藤隼三博士經營の鳥取市伊藤病院に勤務、昭和二年和歌山市金森病院に轉勤、同三年十一月以來獨立開業今日に至る。

△學位主論文、(1)皮膚消毒藥トシテ「ピクリン」酸ノ價值ヲ論ジ併テ沃度丁幾(グロツツヒ氏法)トノ優劣比較ニ及ブ、(2)皮膚消毒藥タル「ピクリン」酸ニ因スル皮膚並ニ衣類ノ黄染斑除去ニ就テ。參考論文、(1)雄性生殖器ノ生體色素攝取知見補遺、外五篇あり。其他論著夥多。博士錄後發表せる論著としては、(1)「モレクラ」、マクネシウム」を以てする痔核の注射療法に就て、(2)淋菌性肋膜炎に就て、(3)淋菌性筋炎に就て、(4)輸血に關する知見補遺、(5)二十年前に左足蹠より潛入せる縫針の興味ある摘出例等あり。

△感想に曰く「醫業の繁榮と醫療社會化の偕和點は社會と醫業界が之に認識を徹底して共存共榮の途を確く履み行くの外はない即國家は醫業者の身分を確認し、其の業權を保護し、殊に其の團體的活動を充分に扶翼す可く、醫業者は高等なる天職に省み高尚なる醫風を確保し、殊に國家の社會的施設に獻身的の努力を捧ぐ可し、而して醫業者と社會との接衝は互に團體的活力の發揮によりて之を共榮的に結合し、相利用するに在りて存す、要するに醫業が國策遂行

上の重心に發展し國家社會の敬重を全する事を得ば、その繁榮は傳統の地位を失はざる事を得んと思ふ」云々。

△博士は京都市上京區紫野御所田町の人、明治二十五年生る。藝術に趣味を有し詩歌をよくす、又花卉を愛し、園藝に親しむ。篤實溫厚の紳士にして、人に篤く、患者を待つに親切、治療に當りては専ら病を對照とし金錢を顧慮せず病を治癒せしめざれば止まざるの熱意を以てす。肉身の血を取りて患者に輸血し又職員看護婦の申出を入れ瀕死の病人に輸血し其生命を取り止めたる事實あり、或は瀕死の弟を救はんとして貧困者の娘が身を賣りて治療費に當てんとするを聞き治療費の全額五百餘圓を免除したる事實あり、傳へ聞きたる諸新聞は近來稀に見る美舉として賞讃し各小學校の先生は好箇の修身教材として取扱たりと云ふ。其他美談佳話擧げて數ふべからず。澆季の世稀に見る奇特の士として表彰すべきに値す。

ト部義雄

△埼玉縣大里郡深谷町大字深谷に有名なるト部病院あり、院長ト部義雄博士の經營する處にして最近(昭和七年九月)病院の新築成り、内臓外科、耳鼻科、レントゲン科、婦人科其他の設備を完備す、外觀の美裝と内容の充實と相俟つて、斷然頭角を抜き當地方診療界の王座を占む。博士は東京帝大系の逸才にして、多年の造詣深く、該博なる知識と共に實地の經驗に富み、今や外科専門の大家として其の存在を認めらる。殊に其の最も得意とする内臓外科に至りては獨特の怪腕を振ひ、近郷を風靡するの概あり。

△博士は獨逸協會中學、一高を経て、大正二年東京帝大醫科大學卒業後、直ちに開業試験附屬永樂病院外科に勤め、同五年十月辭して現住所に開業、同十二年七月より同十四年六月まで、東京帝大醫學部法醫學教室に於て三田教授の指導を受けて血清學研究、同十五年七月東京帝大より學位を得、同年九月病院設立、昭和七年九月新築落成と共に移轉し今日に至る。

△主論文は「生体内ニ於ケル沈降原及び沈降素ノ結合ニ關スル實驗的研究並ニ過敏抗體ノ本體ニ就テノ研究」參考論文なし。他に自著論文澤山あり。

△埼玉縣兒玉郡大澤村大字猪俣七卜部葵堂の二男にして、明治二十一年生る、年齒正に不惑有八歳、篤實溫厚、人格崇高なる年壯の紳士也。貴公子然たる風貌に、學者らしき威嚴を備え、而かも人に接するに尊大振らず、又敢て城壁を築かず、應答應接すべて丁重にして、人をして好感を抱かしむるの徳望を有す。従つて診療に臨むや頗る親切を盡し、患者をして信頼と尊敬の念を深からしむ、地方博士界中に逸すべからざる好箇の臨床家として茲に推獎する所以也。

今吉政吉

△前の佐世保海軍病院長にして、現在英彦山公園期成同盟會長、豊前山岳會長、福岡縣築上郡八屋町明仁堂病院長たる海軍々醫少將今吉政吉博士は、福岡縣築上郡東富島村今吉與四郎の二男、明治十七年生る。明治三十七年東京慈惠會醫專在學中、醫術開業免狀を得、同年海軍少軍醫候補生被命、海軍病院船西京丸乗組、日露戰役從軍、同年任海軍少軍醫、同三十九年任中軍醫、同四十年軍艦宗谷乗組韓國皇太子殿下帝國御渡航護衛、次で練習艦兼警備艦として巡航、同四十二年任大軍醫、同四十三年舞鶴海軍病院附兼看護術練習所教官、同四十四年補第三艦隊旗艦新高軍醫長、大正二年海軍々醫學校甲種學生、同三年卒業、同年航空母艦若宮軍醫長として日獨戰役從軍、同四年任軍醫少佐、補練習艦等置軍醫長、同七年十二月海軍々醫學校選科學生、滿二ヶ年間外科學研究、同八年任海軍々醫中佐、同九年補佐世保海軍病院附、同十年補佐世保海軍病院副官兼部員、同十一年二ヶ年間獨逸へ留學許可、同十二年一月より三月迄伯林オスカー、ヘンネ、ハイムにて院長ビーザルスキー教授の下に整形外科學研究、同年四月より十三年七月迄伯林大學第二外科教室にてヒルデブランド教授の下に外科學專攻、同十二年五月より十四年一月迄

ウルバン病理室にてコツホ教授の下に病理學專攻、同十二年任海軍々醫大佐、同十四年三月歸朝、同年四月補佐世保海軍病院第一部長兼教官、同十五年八月慈惠醫大より學位受領、次で補佐世保海軍病院長、任海軍々醫少將、昭和六年十二月豫備役に編入せらる。

△主論文は「臍再生ニ關スル實驗的研究」にして獨逸文を以て著す。外に、參考論文、(1)腹腔内酸素注入ニヨル腹腔臓器ノ「レントゲン」検査ニ就テ、(2)蟲様突起ノ「レントゲン」検査ニ就テの二篇あり。他にも論著夥多。専門は外科にして特に内臓外科を得意とす。

△現代學界又は醫師界に對する感想を叩けば「そんな廣い事は小生には見へない。唯、醫學界と醫療界と受療界は三位一體であれば理想的だが現状は全く連絡を缺くと云つてよいと思ふ、ソコで醫學界は世界をリードする位だが醫療界は非醫學者や、非醫者の方が却つて治療がうまい、ソコで受療界は全く迷信的になつて醫學的でない妙な現象だ」云々。

△在職中の博士は、職務即ち趣味として至誠一貫盡忠を全ふせるは勿論、海軍外科の發達に貢獻せし所甚大なり、即ち盲腸炎の早期手術を隨時手術に完成したるが如き、骨折の即時觀血手術、臍の移植による機能復興療法、胸腔のレントゲン診断による胸膜炎と肺結核との關係調査の如き、其一例なり又、部下後進の指導誘掖に盡し博士の指導を受けたる人にして、現在海軍外科界の錚々たる地位に就ける者少からず。現役を退くや家族を東京に残し孤影漂然故郷に歸り老母に仕へる傍、明仁堂病院を開院せり。現在社會衛生の改善は婦人の衛生思想の發達に在りとして専ら看護婦の養成に務め婦人會の衛生講話、其他公共團體の爲め指導啓發する所多し。又農村の疲弊は全く農民の無智と無節制に因するものなりとし、之が匡救に務め、思想善導は敬神にありとの見識の下に歸郷するや、先づ郡内の縣社に歸郷奉告祭を行ひ、社會的事業を發企する毎に必ず神社に奉告祭を行ひ、自ら範を郷黨に示せるを以て、神域は公園化

され、地主小作の對立は緩和され、我利一片の人々も漸く協同一致するに至り、今はなくてはならぬ人として地方民の尊敬と信頼とを一身に集め、氏も亦「良醫は國を醫す」との信念の下に、先づ其第一步として郷里の改善啓發に獻身的努力を拂ひ以て公に奉ずるの念鬱勃として禁ぜざるものあり。登山に興味を有し、豊前山岳會長として北九州の山々にてかくれたる景勝を顯彰する事多く、又草本植物昆蟲類の珍らしきものを發見し斯界に紹介せしこと一再ならず。東京市澁谷區若木町三三、病院所在地福岡縣築上郡八屋町。

下川 繁次

△治療界の一勢力たる日本赤十字社秋田支部病院に外科醫長として、多年内外の信望を博しつゝある下川繁次博士は、京都帝大派の名醫博たる外科學者にして、内臓外科特に蟲様突起炎の専門大家として仰がれ、學徳相俟つて評判極めて良好なるは、地方治療界の爲め甚だ多幸とす。

△博士は佐賀縣立小城中學校を経て、大正七年長崎醫專卒業後、直ちに縣立長崎病院醫員を命ぜられ外科勤務、同九年七月三菱鑛業株式會社に轉勤、同社芦別鑛業所病院外科部長として就任、同十一年七月同社を辭して京都帝大醫學部專修科へ入學、昭和二年四月學位を得、同時に同學部專修科を退學して同學部副手となり附屬醫院外科部へ勤務す幾何もなく同年九月副手を辭し日赤秋田支部病院外科醫長として就任今日に至る。

△主論文「虎疫流行ノ狀況ニ鑑ミテ「コレラ」菌ト水質トノ關係ヲ論ズ」其一、二、三、四より成る。參考論文、(1)「酸類及鹽基類ノ性質ト殺菌力トノ關係」其一、二、三より成る。(2)「環境ノ理學的性質就中溫度ノ高低ガ消毒劑ノ效果ニ及ボス影響ニ就テ」(3)「「フオルマリン」室内消毒法ニ對スル石灰壁ノ影響ニ就テ」外五篇あり。他に自著論文澤山あり。

△博士將來の希望としては「巨萬の富を貯へやう等とは思はない、又其の必要も認めない、自己に所期以上の富は自

己のみならず、其の子孫に至るまで害こそあれ益はないものと思ふ。故に生活の安定さへ得れば萬民の爲に所謂「醫は仁術也」を標示したい念願である」云々。希くば其の時期の到來を待望して止まず。又現代醫師界に對する感想としては博士曰く「萬事眞面目にやる可きだと思ふ。「正直の頭に神宿る」をモットーとしたい。醫師は技術は勿論ながら人格の修養を第一とすべきだと思ふ」云々。至囑々々、亦以て他山の石に値す。

△佐賀縣小城町の人、亡下川寛之助の五男にして、明治二十九年生る。年齒漸く不惑に達す、學究的少壯の紳士也。多趣味の人にして凡ての運動を好み、學生時代は庭球及び劍道の選手たり、殊に庭球界に於ては其の當時、天下に其の名を謳はれし程なれば、特に庭球(目下硬球)に興味を持つ、又撞球、圍碁、寫眞、カルタ等々の外、室内娛樂の一般をも楽しむ風あり。嗜好品中の一つは煙草にして、酒は一滴だに飲めぬ程嫌ひの方なり。人と爲り謹直にて篤實、寛厚能く人を容れ、人に對する同情心に富む、やゝもすれば同情し過ぎて却つて數々の事態を生ずる事往々あるやに聽く、以て其性格を窺はれ人格を敬慕すべき也。秋田市保戸野八丁新町に住む。

浦上 愛夫

△日赤三重支部山田病院外科醫長として多年信望を博し、勵精克く斯道治療界の爲に努力盡瘁しつゝある浦上愛夫博士は、東京帝大系の雋才、學位は九州帝大より獲得せる名醫博にして、長き歲月の間實地の經驗を練り、又學理方面は九州帝大の石原教授及び三宅教授等に師事して其の深奥を究はめ、斯科専門の大家として既に江湖に著聞す。殊に其の最も得意とする腹隆外科の手術に至りては、獨特の好評噴々たるものあるは既に世人の周知する處也。

△兵庫縣津名郡生穂村中ノ内組玄潮の次男にして明治二十二年生る。大正四年東京帝大醫科大學卒業、翌五年二月日赤本社病院醫員となり外科勤務、八年五月本社病院在籍の儘日赤三重支部山田病院に補助勤務、外科醫長就任、九年

八月本社病院に復歸、同年十一月第二次東部西伯利亞派遣日赤救護班醫長を被命、浦潮斯德に出征、同地に於て日赤救護病院勤務、十年十二月内地歸還、十一年一月日赤本社病院勤務、十一年一月日赤三重支部山田病院に復歸外科醫長となる、十四年一月日赤本社より滿二ケ年間九州帝大醫學部へ留學を命ぜられ、同年九月九州帝大大學院入學、昭和二年一月迄石原教授、三宅教授指導の下に生理學及び外科學研究、學位を得、大學院退學、日赤三重支部山田病院へ歸任今日に至る。

△主論文「小腸ノ運動ト「アウエルバツハ」神經叢トノ關係ニ就テ」參考論文、(1)小腸粘膜炎ノ運動ニ就テ、(2)「胃石」昆學士共著。

△人と爲り謹直恪勤の士にして、識見に富み主張を藏す、而して其の間自ら親切あり、禮意あり、人に對するに寛容にして能く人を容るゝの雅量を有す、臨床家として好個の人格者たるを尊敬す。博士の年齒今や不惑に入る七歳、學識、手腕、相俟つて愈々圓熟の域に入り、最も活躍の時に在り。切に自重加餐を祈る。宇治山田市常盤町西世古三一四に住む。

小林大乗

△東京市神田區旭町一に在る小林外科醫院は、小林大乗博士の經營する所にして、外科、内臓外科、整形外科を専門とす。新潟縣南蒲原郡三條町の人にして、明治二十四年生る。四高を経て、大正八年京都帝大醫學部卒業、直ちに同大學附屬醫院外科教室に入り實地研究の後、十年三重縣津市立病院外科部長となり、居ること二年餘、十二年四月以降再び母校に歸り、大學院學生として外科研究室にて伊藤(弘)教授、鳥瀉教授等の指導を受け整形外科並に外科一般を研究し、十五年六月京都帝大にて學位を得て、岐阜縣立病院外科部長として赴任す、其後職を辭し上京して現地に開業今日に至る。

△主論文「實驗的動脈外壁交感神經切除術」二篇より成る、外參考論文五篇あり。

△屋外運動旅行を趣味す。博士曰く「近頃醫師の中には「醫は仁術」と云ふ天職に對しての信念はどうかと案ぜられる者がないだらうか。醫師と云ふ尊い使命を忘れかけて居る者がありはせまいか等と考へさせられることどもを見聞する」云々。

目良亮三

△札幌市南四條西一丁目に保全病院あり、院長は目良亮三博士にして、博士の經營する私立病院也。外觀内容充實し、博士自ら診療に勵しみ日々繁忙を極む。博士は東大系大正七年組の一異彩にして、外科界の權威近藤教授の愛弟子として知られ、多年恩師の指導を受け造詣する所深く、嘗て歐洲に留學し、母校より學位を得たる東大派の名醫博也。博く學識を有し、臨床に堪能にして、獨特の手腕を有す。今や斯科の大家と仰がれ、當地診療界に重きを爲す。

△和歌山縣の人にして、明治二十五年生る。七高を経て、大正七年東京帝大醫學部を卒へ、引續き近藤外科に勤務、同十年札幌病院に轉じ外科勤務、同十三年渡歐、ウキン大學血清學研究所にて研究、同十五年歸朝、札幌病院に復歸して外科醫長に就任す、昭和二年七月學位受領、爾來現住所にて開業今日に至る。

△主論文は「等種並ニ異種抗體形生ニ對スル抑制並ニ促進現象ニ就テ」研究せるものにして、其の學問的價値は既に學界に定評あり。

△學究的溫良の紳士にして、當年不惑に入る四歳、年壯の意氣益壯にして、圓熟せる手腕と相俟つて今は最も得意の時代也。當世博士界中好箇の臨床家として推奨し、高邁なる其の人格を尊重す。

關 市 衛

△外科、レントゲン科を専門の旗標として、近來益々人氣を集め、年と共に益々向上發展しつゝあるは關市衛博士也。博士は豫備海軍々醫大佐にして、その診療所は東京市杉並區和泉町三四一（京王電車代田橋下車）に在り、病院向に新築されたる結構は、完備せる内部の設備と相俟つて快朗なる感じを起さしめ、日々外來患者の輻輳すること他の追隨を許さざる觀あり。顧みて博士の今日ある過去奮闘の人生史を緝いて觀るに、博士は山形縣西置賜郡豊川村高峰の出身、明治十五年生にして、同三十五年醫術開業試験に合格し、直ちに海軍に入り累進大正十一年海軍々醫大佐に任ぜられ、同十二年豫備役編入、同年より慶大醫學部外科教室に入り外科學研究の傍ら臨床細菌學を研究し、昭和二年慶大より學位を受領す、それより北海道小樽市立病院に暫く勤務し、五年秋辭職歸京して從來の住宅たる現住地に醫院新築六年五月より開業今日に至れり、正五位勳三等功五級を有す。醫術開業試験より早くも身を起して其成功を贏ち得たるもの、立志傳的篤學の士として推獎するに足り、その潤飾たる奮闘の半生史は後學頂門の一針として可也。

△學位主論文は「手術後胃腸出血トウエルシ菌ノ關係ニ就テ」にして第一、二報告より成る。參考論文としては、(1)ウエルシ菌ノ簡便分離法ニ就テ、(2)ウエルシ菌様毒性嫌氣菌ニ因ル敗血症ノ一例、(3)「プレソヨード」及其外科的疾患ニ對スル効果ニ就テの三篇あり。外ニ「近世戰傷論」其他論著澤山あり。昭和三年四月學位主論文「手術後胃腸出血トウエルシ菌ノ關係ニ就テ」及び「ウエルシ菌ノ簡便分離法ニ就テ」の二篇に對し淺川賞を授與せられたるは有名にして、如何に本論文が優秀なるかを物語るに足る。世人周知の如く、淺川賞は故北里研究所部長醫博淺川範彦氏の獎學基金により、毎年日本全國の細菌學に關する論文の最優秀なるものに對し、委員銓衡の上授與さるゝものにして、優秀論文無ければ授與されない年もあり、昭和三年には關博士と傳研部長細谷省吾博士が其選に入り、昭和八年などは恙蟲病の研究篤學者に授與せられたるが、大分問題となり新聞紙上にも紛々たる論議されたる如く

兎に角該賞は相當名譽のもので、細菌學研究の専門大家多士濟々の中に博士の如き外科専門の臨床家としてやつた業績に對し、かゝる名譽の賞牌（金製メダルに現金一〇〇圓附）を授與されたる事は異常の光榮にして博士の面目を語るに充分也。

△感想としては「醫業に對する問題の多い事今日より甚だしきはあるまい。之に對する感想は多々あれど簡單には書けない。されど要するに醫業の本質は患者對醫師の相互信用が基本となるのであつて例へば警察や役場の仕事の様にどの區域の人は何處の醫病院へ行けなど、強制さるべきものではない（醫業國營とし或は國民全體を健保にでもすれば格別）と同時に安いから……設備がよいから……宣傳したからとて必ずしも患者が集まり且つ永續するものではない。故に一般開業醫は安價診療所などの出現に恐れず飽く迄技術本位、親切本位で病苦を癒し患者の信用を得るに努めさへすればイクラ開業受難の時代でも必ず夫れだけの効果はあるものと信する」云々と述べ居れり。

△學者タイプの風貌は凛々しき裡に溫容を包み、中肉中脊の引締りたる體格の持主にして、極めて平民主義で開放的な所に快朗を覺えしめ、人格高潔也。一度び其醫咳に接せんか、舉措悠揚として迫らず、餘り多くを語るを欲せずと雖も、語調溫和にして言葉に表裏なく、自ら守るべきを守つて低く己を持するの態度は、その眞面目を語りて餘蘊なし。

吉 富 正 一

△高田市高田病院に外科部長として吉富正一博士あり。熊本醫專出身の秀才にして、學位は京都帝大より獲得せる名醫博なるが、斯間の指導教授は京都帝大名譽教授故伊藤隼三博士、同猪子止才之助博士、京大教授鳥瀧隆三、同磯部喜右衛門、同伊藤弘等の諸博士也。感想を寄せて曰く「醫者の天職は申す迄もなく患者の病氣を治す事であると思ふ、徒らに理屈ばかり云つて治療の方は第二とする所謂自稱醫學者があつたとすればそれは天職の

本分をやまつた者と云ふべきであると思ふ、近來醫學研究が盛になつた事は結構な事だし基礎的研究の範圍と奥行の擴大した事も喜ぶ可き現象には違ひないが、私は直接の治療醫學の研究がもつと盛んになつてもいいものではないかと思ふ、近頃の學位論文を拜見すると治療醫學は殆んど縁の遠い基礎の基礎と云つた内容のものが大部分を占めてゐる様に思ふ是等基礎醫學的研究は一部少數の純學者換言すれば終世研究のみを以て終る學者に御願して世界大多數の醫師は直接治療に關係ある醫學の研究に没頭して欲しいと思ふ。それには特に大學の研究室も必要としない、市井の開業の片手間でもいゝ病院勤務の餘暇でもいゝ吾々が日常患者を扱つて困る場合や氣付く點は數へ切れぬ程起るものである。こんな事を今少し熱心に突込んで研究してもらへたら、其の恩惠は獨り病床に憐む患者のみではなからうと思ふ」云々。

△山口縣大島郡家室西方村の人、明治二十五年生る。京都府立第一中學校を経て、大正六年熊本醫專を卒へ、直ちに京都帝大醫學部醫院外科教室勤務、同七年四月德島縣牟岐町生田病院長として赴任、同八年四月辭職、京都帝大醫學部醫院整形外科教室勤務、同年十一月より十年三月迄山口縣大島郡吉富病院外科部長勤務、同十年四月東京市電氣局療養所外科勤務、十三年九月三度び京都帝大醫學部外科研究室に入り伊藤教授の指導を受く、昭和二年十二月學位受領、同時に岐阜縣高山町日赤支部病院長として就職、昭和三年八月山口縣吉富病院長、昭和五年八月現職に轉じ今日に至る。

△主論文は「末梢神經傳導遮斷ニヨリ發現スル下肢ノ血流變化ニ就テ」と題し二篇より成れり。參考論文は、(1)神經切斷後ト髓切斷後ニ於ケル腓腸筋ノ「クレアチン」含有量ノ比較研究(第一回報告)(2)同上(第二回報告)(3)狹心症ニ對スル外科的療法トシテノ交感神經切除術或ハ迷走神經抑制枝切斷ノ價值ニ關スル實驗的批判、(4)家兔ノ心臟ニ於ケル求心性交感神經性疼痛傳達路ノ分布ニ關スル補遺、(5)纖維性骨炎ノ血液「カルシウム」含有量及上皮小體製劑

ノ是ガ消長ニ及ボス影響ニ就テ外二篇あり。

△資性濃厚篤實、篤學者にして眞面目なる學究的紳士也。學者タイプの風貌は凛々として威嚴を有し、高邁なる品格を備ふ。年壯の意氣と共に學識、手腕、人格愈々圓熟して篤き聲望を博す。趣味としては各種の運動を好む。平和なる家庭は妻尙子との間に二男一女あり。實兄吉富又平醫博は先年死亡、可惜也、實弟は海軍少佐にして驅逐艦卯月艦長(聯合艦隊)たり。高田市西城町三ノ六二に住む。

岡崎 儀四郎

△東京市牛込區早稻田大學前に岡崎病院あり、内科、小兒科、内臟外科、レントゲン科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、傳染病科、専門を以て著聞す。院長は岡崎正見氏にして内、外科の大家として徳望あり。岡崎儀四郎博士は副院長として院長を能く補佐し、得意の外科を擔當す。外に小兒科に、江口勝二博士、其他各科擔任の専門醫あり。岡崎博士は新潟醫專の出身にて、學位は京都帝大より獲得せる斯科界近來の名醫博也。多年研鑽の結果、經驗に富み卓越せる手腕を有す、其の玲瓏たる診療手術の好評は、氏が淵良なる性格と相俟つて益々人氣を博し、大衆より多大の信頼と尊敬を受けつゝあり。現に早稻田大學校醫たる肩書は氏の信用と位地とを裏書する表徴たるべし。△博士の今日ある略歴を紹介すれば、佐賀縣の出身にして、明治二十六年生る。大正七年新潟醫專を卒へ、引續き母校の附屬病院に於て外科助手として勤め、次で京都帝大醫學部附屬醫院に於て、大正十三年九月より昭和三年五月まで専ら研究に従事し、同年六月京都帝大より學位を授與せらる、爾來現住地にて開業の傍ら暫く東京帝大醫學部鹽田外科に勤務す、又た早稻田大學校醫を囑託せられ今日に至る。

△學位論文は「聽神經節細胞ノ人工的變化ニ關スル實驗的研究」にして、其の學問的批判は既に學界に定評あり。△當年不惑に入る三歳、學究的淵厚の紳士也。臨床家として多年其の腕を磨き、手腕今や壯熟の域に入る、今は最も

得意の時代にして極めて人望あり。讀書家にして書見を唯一の楽しみとし、今猶精研に餘念なく又克く精神の修養に力む。

別所正恭

△神戸診療界は近時頗る醫博人物に富む、其間に介在して年次著るしく擡頭しつゝあるは別所正恭博士なるか、博士の經營せる別所外科醫院は林田區御藏通五ノ七三にあり、一般外科及び整形外科を専門とし、レントゲン其他理學的療法の設備全く整ひ、超然として群を抜く。博士は愛知醫專出身の整形外科及び解剖學者にして、整形外科界の重鎮前の九州帝大教授住田正雄博士に就て斯學の蘊奥を究はめ、又愛知醫大教授淺井猛郎博士指導の下に解剖學を専攻し、大阪醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△兵庫縣津名郡江井町垂井別所伊藤太の長男にして、明治二十九年生る。大正九年愛知醫專を卒へ、直に九州帝大醫學部整形外科助手に任命、同十二年四月辭して愛知醫大解剖學教室助手に任命、昭和三年十月學位受領、同四年一月辭して大阪市外科住田病院勤務、同五年一月以來現地にて開業今日に至る。

△主論文は「副腎ノ組織學的並組織發生學的研究」にして、參考論文は「脊椎「カリエス」ノ統計的觀察」なり。他の論著中「脊椎「カリエス」及副腎組織」の一篇は博士會心の作と見て可也。戶外運動を趣味とし、且古代美術、工藝品の鑑賞を樂しむ。住田正雄博士は叔父、大山稻三郎博士は義父に當る。

劉 四 朗

△青森縣五所川原町西北病院長として、農村醫療報國の爲め奮盡活躍しつゝある劉四朗博士は、東北帝大出身の外科學者にして、外科界の權威恩師關口恭樹教授の指導を受くる所厚く、母校より學位を獲得せる所謂東北帝大派の名醫博たる一人物也。西北病院は當地方診療界に於ける産業組合病院として模範的のものにして、現

在博士三名、學士九名、女醫一名を抱擁して各科を分擔せしめ、本院は病室九十五室の外深部診療用レントゲン設置其他太陽燈、赤外線、デアテルミー、モノポール等内部の施設完備す、外に三診療所を有しレントゲン、赤外線、太陽燈等の設備亦整ふ。博士は外科を擔任するの外院長として院務を統轄す、其の責任や重且つ大と云ふべし。

△更に學歴より見たる博士は、大阪府立北野中學校、名古屋八高を経て、大正十年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに助手に任命、同學部外科勤務、同十三年九月關口外科醫局長、昭和二年三月東北帝大醫學部講師囑託、同月講師依願解囑、同年四月日本赤十字社病院外科勤務、同三年八月米澤三友堂病院外科勤務、同年十二月學位受領、同七年四月西北病院病院長として赴任現在に及ぶ。

△主論文は獨逸文の原著に「Ueber die Wirkung verschiedener Hormonpräparate. Subkutaninjektionslösungen und I amostatica auf die Blutgerinnbarkeit und ihren zeitlichen Verlauf」と題す一篇なり、外に參考論文として、(1)急性化膿性炎症ニ於ケル一過性糖尿ノ發現並ニ食餌性糖尿ノ定量的検査(共著)(2)所謂腹膜腔内壓ノ測定ニ就テ第一報、第二報、(3)カチユボルファ氏腹壁造瘻法ニ據ル腸管運動ノ觀察並ニ二、三蠕動誘起劑ノ之レニ及ボス定性的觀察ニ就キテ、外獨逸文の原著一篇あり。

△感想の一片を披瀝して曰く「眞面目なる治療は醫療國營に非ずんば不能と考へ好んで産業組合病院に職を奉ず、殊に農村不況の實景を見ては都市に於ては健康保險法による施設或は逓信省簡易保險相談所或は施料病院等輕費治療の實施せらるゝに拘らず、農村に於てこれに代りて輕費治療を行ふ立場にあるものは組合病院の外、他なきを考へ出來得る限りの輕費治療を行ひ農村醫療を全部組合病院組織化し、やがて醫療國營の前提たらしめんと希望す、即ち醫療報國は醫を職とするもの責務なりと思惟す。殊に本年より北津輕郡某村に醫師なきを氣の毒に思ひ病院より醫學士一名を村醫として派遣し收支を公表し剩餘金を生じたる場合は殆ど全部を同村の施料費に或は醫療に關する公共事業

に寄附せんとする一方法は本病院の方針、即ち醫療報國を行はんとする一表現にしてこの方法はやがて日本農村醫療更生法として國內諸所に實施せらるべきものと考ふ」云々。

△京都市中京區堺町藥師下ル劉小一郎（京都市より選ばれて齋藤仙也、新宮涼亭等三人と共に東京大學に入學し明治十六年卒業の醫學士）の四男にして、明治二十九年生る。當年漸く四十一歳、少壯の意氣益壯にして、妥協性に富む、温厚の紳士也。熱心なる農村の醫療報國を主義として今は全心全力をそれに注ぎ、活躍奮闘大に斯道の爲め貢獻的努力しつゝあるは甚だ多とすべき也。碁、將棋、麻雀、運動競技等を趣味とす。因に兄弟五人、長兄醫學士劉威一（大阪華中堂病院長）次兄農場經營在朝鮮、三兄醫學博士（京大講師、大阪北野病院内科々長）ありと。青森縣五所川原町旭町に住む。

宮田 量之助

△茨城縣下館町に宮田醫院あり、外科を専門とす、院長宮田量之助博士の經營にして、診療所及び病室を有し十五名を收容し得、X光線、太陽燈、赤外線其他諸種の設備整ふ。博士は千葉醫專出身の外科學者にして、千葉醫大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博なるが、其間母校の恩師三輪德寛、高橋信美、松村恭、平松瀧平、高木憲二等の諸博士に就きて指導を受け造詣する所深し、既にして深淵なる學識は言はずもがな、臨床に多年の經驗を有し、卓越せる手腕は愈々獨特の妙技を發揮して益々人望を集め、今や當地方診療界に於ける一流を占め日増盛況を極めつゝあり。

△茨城縣結城郡豐加美村の人、明治二十二年生る。大正元年千葉醫專を卒へ、直に同附屬醫院三輪外科助手勤務、同六年水戸市濟生病院外科部長就任、同八年茨城縣下館町に病院開設、同十四年病院を閉鎖して千葉醫大衛生學教室副手囑託となり、昭和三年十二月千葉醫大より學位を受領す、同年外科教室（高橋外科）副手轉勤、翌四年千葉醫大を

辭し、次で東京泉橋病院内科、東京帝大醫學部整形外科に轉じ、同五年現在の地に再び開業今日に至る。

△主論文は、「醗酵性球菌ノ研究」にして、本論文によりて、醗酵性球菌就中連鎖狀球菌の二分類を確實にせり。参考論文としては、(1)皮膚移植ニ就テ（獨文）(2)薦骨部畸形腫外一篇あり。

△眞面目なる學究的温厚の紳士にして、好箇の臨床家としての特質を備へ、診療と手術そのものに趣味を集中して、誠心誠實を盡す點に、博士の最も特徴とする長所を見出さる。讀書家にして書見を業餘の楽しみとす。

百瀬 丑之助

△風光明媚なる宮崎縣土々呂港土々呂病院跡に、外科特に内臓外科を以て著聞せる、百瀬病院は院長百瀬丑之助博士の經營にして四十有餘の入院室を有し、高級なるレントゲン機をはじめとして、内部の設備全く整ひ、當地方隨一の私立病院として首位を占む。博士は九州帝大系の錚々たる外科學者にして、特に内臓外科を最も得意とし、母校より學位を得たる外科界近來の名醫博として既に江湖に著聞す。

△博士は獨逸協會中學より一高を経て、大正九年九州帝國大學醫學部を卒へ、後藤外科教室に入り教授、軍醫監、後藤七郎博士の膝下に外科學を研鑽すること多年、更に大正十五年大學院に學び、恩師後藤博士を指導教授として潰瘍の成因に關して實驗的に研究を専録、昭和四年春學位を得、昭和五年春恩師の命によりて、宮崎縣土々呂港土々呂病院に院長として着任以來頗る名聲を馳せたるにも拘はらず、經營者側と意志の疏通を缺き、着任後十ヶ月一旦歸學と決したるも、地元有志等の懇望もくし難く、一時棧橋通りの自宅にて開業すること約一年、遂に土々呂病院を購入し百瀬病院と改稱して今日に至る。

△主論文は「胃腸吻合術後ニ發生スル所謂消化性空腸若クハ胃空腸潰瘍ノ成因ニ關スル實驗的研究」にして、外に、参考論文として、(1)胃又ハ十二指腸潰瘍、膽囊炎及蟲樣突起炎ノ合併——所謂腹部「トリアス」(三主徴)ニ關スル

外科的經驗ニ就キテ、(2)所謂術後消化性空腸潰瘍ノ興味アル治驗例ニ就テの二篇あり。

△感想としては「こんな田舎に開業しやうとは夢にも想ひませんでした、人間の運命なんて一寸先も分からないもんですネ、土々呂病院に着任後間も無く狭い自宅で開業を餘儀なくされ、博士、學士が顔を揃えて居る土々呂病院を相手に鎬を削つたのですからネ、それが僅か十ヶ月足らずで閉鎖され、遂に私が其の病院を購入した時の愉快さは、一高に入學した時以來の嬉しさでしたよ。何しろ此の病院は翡翠の如き土々呂灣港を一望の中におさめ、太平洋上遙かに浮ぶ漁船の影、點々として果しもなく、後は綠蔭濃かなる小山を脊負ひ、夏涼しく冬暖かく、實に病院としては理想郷です、兎も角患者本位に一層努力しませう」云々と。折角の努力奮勵を望むや切也。

△氏は生粹の江戸ツ子にして、明治二十二年當時の接骨家百瀬久長氏の次男として生る。今年齒四十有七歳にして年壯の意氣益壯也。勤勉勵精の人にして、診療に臨む態度の眞摯にして熱情あるは、患者に好感を與へ其の人格を敬慕せしむ。趣味は水泳にして夏季は患者を待たせつゝ水青き土々呂の海に特意の拔手をきりて涼をとるといふ。

來須 正男

△京都府立醫大助教授として母校のため精研克く教壇に勵み、兼ねて第一外科副部長として附屬醫院に於て其の診療に従事しつゝあるは來須正男博士也。新進なる外科學者として京都府立醫大派の少壯醫博たるに耻ぢず。

△學位主論文は「腦血管ノ神經支配ニ就テ」にして、參考論文としては、(1)肝臟ノ海綿様血管腫、(2)脾臟囊腫、(3)血友病、(4)「アドレナリン」ノ腦髓ニ及ボス影響ニ就キ其ノ呼吸停止並ニ血壓下降ノ本態ニ就テ、等あり。

△島根縣那賀郡石見村長見の人、金作の長男にして、明治二十八年生れ也。大正八年京都醫專卒業、爾來外科教室醫員、助手を経て十四年京都府立醫大講師となり、昭和四年六月京都府立醫大より學位を得、翌五年助教授に任ぜられ

今日に至る。専攻は外科學にして恩師河村叶一教授、望月成人教授等に師事して造詣する處あり。

△學者肌の少壯紳士にして、年齒漸く四十有一歳、英氣潑刺として研究心に富み、其の熱心と眞摯なる態度とは、尙洋々たる前途に囑望せらるゝ處益々深し。志操堅實、謙讓の資に富み、克く己を持して人に厚く、又た學生提撕のため能く盡す。京都市上京區小山中溝町一九ノ二に住す。

下村 一郎

△外科界現代の大家として其の名聲を馳せつゝある下村一郎博士は、神戸下山手病院長として、多士濟々たる神戸診療界に割據躍進して、今や牢固たる地盤を有し、好評嘖々の裡に年次堅實なる發展振を示しつゝあり。學系は長崎醫專の出身にて、京都帝大教授磯部喜右衛門博士に就て外科學を専攻し、京都帝大より學位を獲得せる斯科の大家たるに耻ぢず、特に其の最も得意とせる肛門外科に至りては獨特の評判専ら也。

△學歷よりすれば、大正四年長崎醫專卒業後、直ちに大阪回生病院外科に勤務、大正十四年より昭和四年まで京都帝大醫學部外科教室にて研究、昭和四年六月學位を授與せらる。

△主論文は「輸尿管逆流ニ關スル實驗的研究」にして七篇より成り。參考論文としては、(1)上行性腎臟傳染ニ關スル實驗的研究、(2)大網膜癒着ニ關スル實驗的研究あり。

△静岡縣田方郡伊東町玖須美の人、下村龜太郎の長男にして、明治二十三年生る。年齒正に不惑に入る六歳、年壯銳氣にして學識、手腕、人格共に漸く圓熟して今は最も重望せらるゝ時代に在り、其の得意や想ふべき也。熱心なる研究家にして、刀圭多忙の業餘今猶精研に餘念なく、診療に臨むや誠意誠實を以てし、多大の信望を博す。一面又人と接するに親切にして同情に富む、以て其の性格の一端を窺はれ、高邁なる人格を敬慕せしむ。研究以外の趣味としては長唄と圍碁とにあり。神戸市中山手通り二ノ八三に住む。

飯森正夫 △金澤市堅町に在る飯森病院は、外科専門にして病室二十三、レントゲン科、其他の設備整ひ、内容の充實と共に其評判極めて高し。院長飯森正夫博士は東京帝大派の學風を汲み、曩年渡歐の際は獨逸外科學界の權威者レーン教授に親しく師事して造詣する所あり。研鑽多年の経験と共に手腕、今や圓熟し最も得意の時代に在るが如し。

△博士は金澤の人、飯森益太郎の養嗣子にして、明治二十七年生る。大正九年東京帝大醫學部を卒業し、直に同附屬醫院近藤外科教室に勤務し、近藤次繁教授の指導を受く、十二年廣島縣立病院外科部長として赴任、十五年渡歐留學の途に上り、昭和二年歸朝以來開業今日に至る。其間昭和四年六月東京帝大より學位を得たり。

△主論文は「嫌氣性細菌ノ研究」にして、參考論文に「瓦斯壞疽ノ治療法ニ就テ」あり。

△感想を叩けば、博士曰く「日本の醫學會と稱するものは、實際開業醫師には縁遠いものとなつて來た、開業醫が多く集る様な學會にしたいものです。尙ほ醫師會にはもつと權威あらしめ醫師を統制指導しもつと社會的に有爲なる事業をなし大衆から信頼される様に努めなければならぬ」云々と。博士が學界と併せて醫師界に對する抱負の一片として氣を吐ける所甚だ多とすべし。

△愛讀家にして、又スポーツファンの一人也。年齒不惑に入る二歳、漸く壯熟の期に入る、臨床家としては腕の最も冴えたる全盛時代にして一段の重望を加ふ。少壯氣鋭にして、春秋猶頗る豊富なるの秋、宜しく自重して切に加餐を祈ると共に、益々發奮活躍あらん事を。

佐藤盛二

△横濱診療界に進出してその最も得意とせる外科、皮膚科、泌尿科を以て立ち、中區尾上町三丁目三十六番地（尾上町電車交叉點附近）に陣して獨立開業せる佐藤外科醫院長佐藤盛二博士は、慶大醫學部出身の錚々たる外科學者にして、母校の恩師阿部教授及び茂木教授に師事する事多年、更に京都帝大磯部教授及び大阪帝大岩永教授の薰陶を受け、研鑽多年の経験と共に手腕圓熟の域に入り、玲瓏たる診療手術の評判は益々その人氣を集め、遠近よりの外來患者日に輻輳し院內常に賑ふ。同醫院は類焼後昭和八年秋再興せるものにして、尙院内に横濱性病豫防協會を置き、着々其の豫防事業にも努力盡瘁しつゝあるは多とすべき也。

△更に顧みて其學歷より博士のプロフェツショナル年歴を公開すれば、博士は大正十三年慶大醫學部を卒へ、直ちに渡米衛生學研究を計畫せしが、慶大藥物學教室阿部教授の下に研究し、尙外科學教室茂木教授の下に助手として研鑽し、更に大阪帝大外科學教室、京都帝大外科學教室に學び傍ら諸大家に就きて皮膚泌尿科を研究せり。昭和四年六月醫學博士の學位を得、同七年五月横濱市尾上町三丁目三十六番地に、佐藤外科醫院を開設す。

△主論文「鹽素代謝ノ中樞性調節ニ就テ」及び數篇の參考論文を提出して慶大より學位を獲得せる所謂慶大派の名醫博たるに恥ぢざる一人物也。

△感想としては氏の懷抱せる一片を吐露して曰く、「諸種傳染病に比して、最も必然的罹患性のある花柳病に對する豫防事業が徹底せないのは、國家としても遺憾な事であつて、此種疾患が強壯青年者を冒す關係上、國防、産業、經濟に亘る損失は測り識れざるものがある。昭和二年公布の花柳病豫防法規は、嚴として存在するけれども、チフス豫防法等の如く、一片の命令のみで實行出来る。白晝公然の豫防方法ではないのだから、何等其成績は舉らない。花柳病國禍を豫防する意義ある敷設は性及び性病に關する一般人の常識を正しくする事で、此意味に於て余は、當を得たる性教育即時實施を要望する」云々と。

△博士は福島縣伊達郡川俣町の人、當年漸く不惑に達す、少壯氣鋭にして多量の分別を有す、手腕漸く圓熟して今は

最も活躍の時代に入る。學究的温厚の臨床家にして、その診療に當るや熱心能く患者の心理を捕捉して誠意、親切を以てす、その厚き聲望を博する所以決して偶然ならざるを思ふ。春秋猶豊富にして、前途洋々たり、切に自重加餐を祈る。

池田孝男

△帝都醫療界多士濟々又その競争も激甚なりと云はん乎。京橋區越前堀二丁目に靈岸島病院あり恰も聖路加國際病院と相峙するかの觀とまでは行かざるも、錚々たる病院として斯界既に定評あり。その病院の外科部長の椅子を持つるは池田孝男博士也。博士は東大系の外科學者にて、現東京帝大名譽教授佐藤三吉博士に師事して多年恩師の指導と薰陶を受け、又獨逸留學中主としてプリードベルゲル教授に就て免疫學を專攻せり、歸朝後「免疫沈降反應ニ於ケル二重輪現象ノ研究」なる學位論文を提出して、母校より學位を獲得せる所謂東京帝大派の名醫博たる一人者也。多年日本醫科大學教授として學界に見參、克く學生の指導に精勵相勤めたるも後これを辭し、帝都醫療界に精進して以來、拮据奮勵、獨特の手腕を揮ひ、老練なるメスの評判は嘖々として既に斯界に公評あるが如し。

△千葉縣山武郡千代田村の出身にして、明治十七年生る。一高を経て明治四十四年十二月東京帝國大學醫科大學卒業直に同大學助手として勤め、大正五年十月まで外科學を專攻せり、それより日本醫學專門學校教授に聘せられ十三年四月までその職にあり、同年六月より十五年九月まで歐米へ留學す、歸朝後は再び日本醫大教授として昭和五年三月まで勤務、斯間昭和四年八月學位を得、爾來頭書の現職にありて一般診療に従事しつゝあり。

△醫界に對する感想を寄せて曰く「醫師の質を良くする爲に所謂「指定」制度を全廢して平等に國家試験制度を實施することが緊要と考へます。又、學位はつまらぬものながら此の制度が現存し世の人が之に信を置く以上は人格の銓衡を嚴密にすることを各教授會に切望します、背德漢が往々博士の中から出るのは教授會にも大いに責任がある」云々

々と。此處にも亦醫界淨化の強き叫びあり、大に三思傾聽に値す。

△博士は多趣味の方なれど、可成自己の職業の中に趣味を求めんと努むる方なり。若しそれその性格を打診すれば温實誠行の士、謙遜家にして己れの識學を衒はず、名利に恬澹として自己を紹介せらるゝが如きを好まず、而かも居常人に對するに眞摯にして應答の禮を重んじ、其態度の寛量にして紳士的なるは敬意を表すべき也。猶春秋豊富なれば、幸に健康と共に折角の加餐を祈り、此後共斯道淨化のため益々活躍し多幸あらんことを切望す。東京市麴町區富士見町二ノ一に住す。

龜谷敬三

△宇治山田市常磐町に二十有六年の歴史を有し、私立病院中に斷然一頭角を顯はせる龜谷病院あり。當院は博士の父の創設せしものにして、病床五十有餘を有する地方屈指の大病院なるが、現在にては院長龜谷敬三博士の主管經營に移り、その結構の宏大にして内部の設備の完全と共に、院長自ら外科を擔當し博士獨特の手術振は有名にして、加ふるに新進の渡部喜平博士内科を擔當せるあり。兩々相俟つて好評嘖々の裡に繁榮を永らへつゝあるは祝福すべき也。

△博士は宇治山田市岩淵町龜谷環の養嗣子なり、明治三十二年生れにして、八高を経て、大正十三年東京帝大醫學部を卒へ、直に附屬醫院近藤外科に勤務、昭和三年愛知醫大助教授に就任し桐原外科教室に勤む、同四年八月東京帝大より學位受領、翌五年養父の急逝により依願退官し、頭書の自己病院の經營と共に一般の診療に従事し今日に至る。斯間母校在學中は恩師近藤次繁教授、青山徹藏教授等の指導を受け外科を專攻せり。

△學位主論文は「植皮ニ關スル實驗的研究」にして參考論文なし。

△若し夫れ博士の抱負を叩けば、堂々氣を吐いて曰く「我國現今の醫師の社會的地位は漸次下落しつゝあるに非ざる

か。世人の醫師に對する尊敬は地を拂つたと云はる、政治家、學者と同様又は其以上の努力と修學を經來つた醫師が斯くも社會より輕視さるゝ所以は那邊に存するか、惟ふに現在の醫師には向上の目標が缺けて居る、現在の醫師は何を理想とし目當てとして活動して居るかといふに、玄關が繁昌して收益の増大する事がそれであらう。そして殆んど全國開業醫の凡てに共通の唯一の理想であらう、幸運と手腕相俟つて到達したる彼岸は結局或額の蓄財（財界の成功者とは比べ物にならぬ微細な額）に過ぎぬ、如何に才能あり如何に努力精進を續くとも、此を一步も出る事は出來ぬであらう。さて此より一步出でんとするか即ち邪道に踏み入るのである。成功せる醫師にして精力餘ある者の進む道は大凡そ行手は決つて居る、一縣市國會の議員に出で、社會的名譽心を満足せしめんとする者、二、肉體的精力を邪道に注ぎ込む者、三、蓄財を書畫骨董に注ぎ込む者、此等が醫師中の成功者の歩み來れる常道であらう。成功者の落着く彼岸が斯の如きものである事を見極むる時、若き醫人は最早行手の希望を認めぬ緊揮一番の必要を認めぬ、故に大學卒業直後と二三十年後との間に何等の進歩を認めぬ。此では醫師が社會の尊敬を受け得ぬのは當然である、茲に於て吾人は何か新しき崇高なる目標を定め向上を計る事の必要を痛感するものである、開業醫と雖も日進の醫學の普及乃至改善に精進し或は保健衛生乃至救療的社會事業に勞を吝まず協力して寄與をなす等、醫人の地位を向上する道は幾多求め得べしと信ず」云々。

△以上博士の前半生たる三十有七年史を緝けば、象牙の塔を勇退して洋々たる醫療界に身を投じて以來、その今日あるを首肯せしむるに足り、博士の面目を語るに充分なり。而かも前途最も有爲なる少壯醫博の今後の躍進は更に大に期待せらる。望むらくは臨床家として餘り小事に拘泥せず、宜しく大人物たるの度量と社會に對する理解と同情とを以て益々發奮精進あらん事を切望して止まず。

◇

佐伯 正之進

△宇都宮市旭町一丁目（本丸）に佐伯外科醫院あり、一般外科及泌尿器外科、臨床に關する病理、細菌、化學及理學的診斷治療上の施設完備して、診療手術の好評と相俟つて門前常に賑ひ、當市診療界に於ける一流病院としての地位を占む。院長佐伯正之進博士は東北帝大系（専門部出身）の外科學及レントゲン科學者にして、特に内臓、泌尿器外科を最も得意とし、東北帝大より學位を得たる斯科界近來の名醫博として既に江湖に著聞す。嘗て陸軍に出仕して陸軍一等軍醫（豫備）の印綬を帶び、西伯利事變に次で上海事變に出動參加して活躍する所あり、依功正七位勳五等たり。

△博士は栃木縣立宇都宮中學校を経て、大正六年東北帝國大學醫學專門部卒業、直ちに同大學醫學部杉村外科教室に勤務、同年九月見習醫官を命ぜられて陸軍に出仕、同十三年八月任陸軍一等軍醫、翌十四年九月依願豫備役被仰付、其間大正八年四月より二ヶ年歩兵第五十九聯隊附軍醫として西伯利事變に参加、ハバロフスク、チタに轉戦、又陸軍々醫學校に於てレントゲン學を專攻す、而して大正十二年九月關東地方大震災に際し第八師團衛生隊に在り、東京戒嚴地救護に従事せり。軍職を退官後再び東北帝大醫學部杉村外科教室に復歸し、助手として勤務の傍ら外科學專攻、昭和四年五月東北帝大講師囑託、同年八月東北帝大より學位受領、同年十一月頭書の現住地に外科醫院を開設す、同七年二月上海事變に動員應召、第十四師團第一野戰病院附として上海、嘉定方面に出動、次で第三野戰病院に轉じ北滿、ハルビン綏化に行動す。專攻は外科學及びレントゲン學にして、主として東北帝大教授杉村七太郎博士及び前陸軍々醫學校教官軍醫總監岩崎小四郎博士の指導を受け造詣する所深し。學位主論文は「外科的腎疾患ニ於ケル尿及び血中ノ「クレアチニン」定量ニ就テ」にして、原著は獨逸文より成る、外に參考論文六篇あり。幾多論文中博士の最も得意とするは「腎臓外科上ニ於ケル化學的レントゲン學的病理學的研究」なり。

△感想の一端を披瀝して曰く「現下醫學界に於て臨床醫學上の研究業績の重んぜらるゝに至れるは愉快とする所、一

方實際上には確實なる基礎醫學上の檢索方法と雖も餘り運用せられざるは遺憾なり。將來臨床醫家の學術的研究方法及手技鍊磨の愈々必要なるを思惟す」云々。著者曰く至極同感なり、近時此の傾向益々濃厚となり、一般的に最も重要尊重せらるゝに至れるは臨床醫學界の爲め欣幸とする處なり。宇都宮市三條町佐伯庄之助の長男、明治二十八年生る、當年漸く不惑に入る一歳、少壯の意氣益壯也。讀書家にして書見を業餘の道樂とし、又た外語の研究に多大の趣味を有す。春秋猶頗る豊富、輝しき學位の前途は洋々として益々多望也。

◇ 城島千尋

△山口縣宇部市東新川驛前に城島外科あり、病室十四、クロマイエル氏燈設置完備、城島千尋博士の經營する處なり。博士は福岡縣山門郡東山村大字本吉の人、城島二郎の長男にして、明治三十四年十二月生る。學系は長崎醫專の出身にて、學位は九州帝大より獲得せる外科専門家也。大正十二年長崎醫專卒業後一年志願兵として歩兵第五十六聯隊へ入營、大正十四年陸軍三等軍醫任官、翌十五年一月九州帝大醫學部後藤外科教室入局、外科學一般專攻生を許可せらる、昭和四年三月學位を得、同五年七月以來現住地にて開業今日に至る。一般外科を専門とす。恩師後藤七郎博士に就て造詣する所深し。

△主論文は「血管結紮ノ組織ノ運命ニ及ボス實驗的研究」にして、參考論文は、「十二指腸潰瘍百例ノ外科的經驗」なり。弓術音樂に興味を有す。開業漸く數年に及び、診療手術の好評と相俟つて、年次堅實なる發展を見るに至り、今や相當の地盤を有す。眞面目なる臨床家として篤き信望あり。

◇ 中島明

△埼玉縣北足立郡戸田村大字下戸田にて外科専門を以て開業せる中島明博士は、京都府立醫專の出身にして、慶大派の少壯醫博として名聲を博す。埼玉縣比企郡八和田村字上横田の人、敬三の長男にして、明治二

十七年生る。大正六年京都府立醫專卒業後、東京帝大醫學部佐藤外科、恩賜財團濟生會大阪府病院、東京鐵道病院等に歴任して、慶大醫學部解剖學教室助手として岡島敬治教授の指導を受け、昭和四年學位を得、爾來現住所に於て開業今日に至る。指導教授は慶大教授岡島敬治博士にして、解剖學及び外科學を研究し、専門としては外科を以て立つ。△主論文「兩棲動物ニ於ケル脾臟ノ組織學的研究」(獨文)、參考論文「腎臟皮下損傷ニ就テ」外獨逸文原著四篇あり。

△感想に曰く「白を黒と云ひ、又は徒に前醫を誹謗して自己を高くしやうとする者が多いのに驚く。一定の經過を見ねば診斷の不明の疾病に對し、なんだ斯んなものが診斷がつかぬと云ふ様な口吻で云つたり、無暗に手遅れと云ふて暗に自分の處に早く來なかつた(實際は不治の者でも)からと云ふ連中が居るので不愉快な事がある」云々。と亦以て他山の戒しめともならんか。喜怒哀樂を顔に出し易い癖あり、或は短所とも見るべきか。居常の趣味としては釣魚を樂しみ、又たスポーツファンたり。眞面目なる學究的臨床家として敬意を表す。附記す、東京市日本橋區兩國中島醫院長中島明博士とは同名異人也。

◇ 長坂清人

△長坂清人博士の經營せる長坂病院は、本院を中央線木曾奈良井驛(長野縣西筑摩郡橋川村奈良井)に置き、郡下の中心地たる木曾福島町驛前に長坂病院福島分院を置く。分院は新築にて本院より規模擴大、敷地約千五百坪各科設置、綜合病院にして經營は本院と同じく、自炊入院に重きを置き、輕費診療を以て醫療の大衆化普及を目ざし、診療界の淨化、醫療機關の充實擴充に奉仕的努力を以て邁進せんとするが、博士の理想とする所也。其の規模の宏大、且つ内部の設備が完備せる點に於て、木曾谷地唯一の私立病院として既に其の存在を認めらる。博士は九大系の外科學者にして、恩師後藤七郎博士に就きて内臟外科を、同神中正一博士に就きて整形外科を研究し、母校

より學位を獲得せる斯界の名醫博也。開業日猶淺少にも拘はらず、診療手術の好評は博士が奉仕的努力と相俟つて、繁榮年と共に博士の理想を實現しつゝあるは、地方診療界淨化の爲め欣幸とする處也。

△博士は大正十四年九州帝大醫學部卒業後、直ちに母校副手となり、順次累進、醫局長、助手、講師拜命、昭和四年學位受領、同五年招かれて宮崎縣延岡市黒木病院副院長となりしが、同六年末退職歸郷、七年春より診療所開設現在に至る。尙昭和六年以降日本整形外科學會評議員として同會の爲に盡瘁す。

△主論文は「ベルテス氏病論」にして、参考論文は、(1)彈撥膝ニ於ケル軟骨所見、(2)肺臟心臟等ニ轉移セル上脛骨肉腫ノ一例、(3)窒扶斯性脊椎炎ニ就テ、(4)腰椎横突起骨折ニ就テ、(5)脊椎棘狀突起疼痛論、(6)脊腰痛患者ノ血球沈降速度ト其診斷的價値、(7)腸「チフス」ノ整形外科的後遺症ニ就テ、(8)遊離移植セラレタル生筋膜ノ運命の八篇なり。主論文は組織學的檢索症例數、世界文獻の半數に及び、昭和四年日本整形外科學會長より感謝され、又日本醫學會の爲め氣を吐くに足ると稱せられたり(日本醫事新誌)、又帝國學士院研究補助費をも受領せり。参考論文中の(5)は恩師神中教授との共著にて貴重なる文獻として斯界の注目を引けり。

△感想に曰く「完全なる醫療は畢竟「ブルジョア」の専有なりとの感を抱かしむるが如きは、要するに醫師が自己の道を梗塞するに過ぎずとの考へを有し、方法によりては、輕費にて充分完全なる醫療を受くる事の可能を實證せんとする意味に於て診療所を開設、入院は自炊制度を本態として一面社會奉仕的經營をなすを以て門前常に市をなすの盛況にて余の考へは誤りならずと私かに快哉を叫びつゝあり」云々と。診療界淨化の急先鋒として大に歡迎すべき也。△現住地奈良井の亡長坂昌作の長男、明治三十三年生る、年齒漸く三十有六歳也。博士の經營する診療所は、社會的奉仕の意味に於て、輕費を本位とし且患者を遇するに徹底的に誠實と親切とを盡すこと、研究に對する態度甚だ熱心にして粘り強く眞劍なる事は、賢明なる博士の長所と見るべき乎、但しやゝもすれば果斷を缺く事が無いとも云へ

ない。研究以外にはスポーツと刀劍に興味を有す。

吉川 春次郎

△帝都の中心、群醫割據の本場たる日本橋區茅場町二ノ一四に堂々の陣を張り、外科を標榜して

大衆の人氣を獲得しつゝある外科吉川病院は、院長吉川春次郎博士の經營にして開業拮据十三、四年の歴史を有す。

博士は千葉醫專出の一先輩にして、嘗て獨逸に留學するや、ギーセン大學にてポツペルト教授に就き外科特に内臟外科を專攻し、慈惠醫大より學位を得たる篤學の名醫博也。經驗豊富にして既に老熟せる手腕を有す、玲瓏たるメスの評判は、多年の聲望と相俟つて今や牢乎たる地盤を築き、大衆より其の大なる存在を認められ老大家として仰がる。

△神奈川縣高座郡相原村の出身にして、明治十五年生る。同三十六年千葉醫專卒業後、直に同校附屬なる縣立千葉病院外科に入り主任三輪德寬博士に師事す、同三十八年十月より東京築地の外科林病院(院長林臆醫學士)勤務大正十一年に至る、林病院在勤中院費にて獨逸留學(明治四十一年五月出發、四十三年六月歸朝)、主としてギーセン大學にて外科教授ポツペルト氏に就き研究(昭和八年九月二十三日發行東京醫事新誌二八四六號「ポツペルト先生を弔ふ」吉川春次郎参照)、同大學にてドクトル、メヂチーネを得、大正十二年三月日本橋區茅場町に外科吉川病院を開く、同年九月大震災に遭ひ焼失す、同年九月一日より十三年三月三十一日まで東京市臨時醫員囑託、下谷池ノ端簡易療養所病院外科主任として勤務、同十三年四月前地に吉川病院再開今日に及ぶ、診療の餘暇、大正十四年秋より昭和四年に亘り慈大病理學教室に於て、悪性腫瘍の研究に従事し、昭和五年一月學位を受領せり。

△主論文は「家鶏肉腫ノ免疫學的研究」にして、参考論文は(1)皮下腎臟破裂(獨逸文)、(2)結腸腫瘍、(3)色腫肉腫等なり。著書、(1)實驗外科學、(2)蟲樣突起炎等。

△年齒知命に入る四歳、健康にして元氣益々旺盛也。誠意、誠實を以て終始し、眞面目なる臨床家として仁術を貫行

する處に博士の貴き使命あり、春秋猶豊富、切に自重加養を祈り、益々努力奮闘あらんことを。趣味は旅行と俳句。

阿部 恭一

△福岡縣田川郡赤池鑛業所病院院長阿部恭一博士は、九州帝大出身の整形外科學者にして、母校の恩師前教授住田博士、現教授神中博士、現名譽教授田原博士、現教授兒玉博士等の指導を受くる所厚く、母校より學位を獲得せる九大派の名醫博たる一人物也。暫く講師として母校の教壇に起ち學生教導の任にありしも、象牙の塔を勇退して診療界に進出するや、得意の領域に獨特の手腕を展べ、熱誠克く院務を統率して治療界の爲め盡瘁しつゝあるは甚だ多とすべき也。該病院は全科診療の設備整ひ、各科は専門の醫師之を擔任す、博士の責任や重且つ大なりと云ふべし。

△博士は一高を経て、大正十年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部整形外科教室に入り、助手より助手に進み、同十二年五月同教室を辭して兵庫縣洲本町洲本病院外科部長として赴任、昭和二年九月同病院を辭し、九州帝大大學院學生として神中、田原兩教授指導の許に整形外科學一般の研究に従事、同四年九月滿期退學後は同教室の助手より講師を囑託せられ、同五年八月學位を受領せり、同六年五月講師を辭し現職に就き今日に至る。

△學位主論文は「佝僂病性骨端部變化ノ成立機轉並ニ骨長徑發育ニ及ボス機能的影響ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文として、(1)實驗的家兎佝僂病ノ燐並ニ「カルシウム」代謝ニ關スル研究、(2)麻痺ヲ伴フ急性化膿性脊椎骨髓炎ニ就テの二篇あり。他の論著中、(1)九州附近ニ於ケル佝僂病ニ就テ、(2)室内換氣ノ佝僂病豫防効果ニ關スル實驗的研究等は最も主要なるものゝ如し。

△岡山縣淺口郡里庄村の人、明治二十七年生る、當年漸く不惑に入る二歳。「醫師對患者の間に今少し緩みが有り度きものなり」とは、博士の述懐の一片なるが、それだけに患者に對する博士の態度が、親切にして熱情あり、誠實に

して霑々たる温味あるは、博士の性格と相俟つて其の特徴を窺はる。一面又博士は何事も自分で爲さねば氣の濟まぬ性質なり。趣味としては魚釣りを好む。福岡縣田川郡上野村赤池四三二に住む。

古川 久米

△神戸市上橋通四丁目七一に於て自宅開業を爲し、外科を標榜して漸次その地盤の擴張に努めつゝある古川久米博士は、熊本縣鹿本郡廣見村の出身にして、明治八年生る。五高を経て、明治三十五年東京帝大醫科大學卒業、同大學附屬醫院近藤外科副手、助手を歴て、三十七年九月三重縣桑名町病院長となり、三十八年六月兵庫縣立姫路病院外科部長、三十九年三月同病院長となる、四十一年三月廢院と同時に日赤兵庫支部姫路病院長兼外科部長となる、大正十年社命にて海外見學、翌十一年歸朝、十二年二月兵庫縣立神戸病院副院長兼外科部長、昭和三年六月依願免職、同年九月より開業今日に至る。

△主論文「種々ノ毒物ニ因ル筋組織變化ニ關スル系統的實驗的研究」及び參考論文「貧血ニ對スル自家輸血法ノ實驗的研究」を提出して、昭和五年八月東京帝大より學位を受領せり。

△醫博古川繁人の兄にして、老來五十五歳を以て學位を獲得せる博士の如きは、近來稀に見る所にして學界の美譚とす、その篤學的精神は學ぶべき也。今高齡耳順に入る一歳、而かも猶矍鑠として壯者を凌ぐの勇氣と、老熟せる手腕とを以て、今や獨立せる自由の立場より混沌たる診療界淨化の爲めに起ち、天職として大に將來に待つあらんとす。その獻身的努力と不撓の精神は更に尊し。幸に健康と共に折角の自重加養を祈る。

高橋 涉

△名古屋鐵道病院院長高橋涉博士は、東大系の外科學者にして、外科界現代の權威近藤次繁博士の高弟として知られ、恩師の指導を受けて斯學の蘊奧を究はめ、東北帝大より學位を獲得せる名醫博として既に江湖に

著聞す。嘗て歐米を視察し、博く學識を有し識見に富む。久しく鐵道治療界の爲め奮盡活躍する所あり、其の篤き今日の聲望と、併せて勢力とを扶植せるもの又偶然ならざるを思ふ。

△仙臺市東七番町高橋孝哉の長男にして、故高橋久醫博及び高橋徹の兄たり。明治二十一年生れにして、大正二年東京帝大醫科大學を卒へ、卒業後引續き近藤外科教室に勤務、同五年六月長岡病院外科部長として赴任、同八年九月鐵道に入り、仙臺、札幌の各鐵道病院を経て現職に就任す、昭和四年十二月より五年十一月迄歐米各國出張（鐵道省）同五年九月學位を授與せらる。

△主論文は「アドレナリン」分泌中樞局所性ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)體溫調節ヲ失セシメタル家兎體溫ニ對スル「ベータ、テトラヒドロナフチールアミン」ノ作用ニ就テ、(2)家兎副腎ノ「アドレナリン」含有量ニ對スル「ストリヒリン」並ニ冷刺ノ影響ニ就テ、(3)無麻酔犬ヲ窒息セシメタル場合ニ於ケル「アドレナリン」分泌ニ就テ（共著）、(4)「アドレナリン」分泌ニ對スル「エフェドリン」ノ作用ニ就テ（共著）、(5)赤血球沈降速度ニ關スル實驗的研究、並ニ外科的疾患ニ於ケル赤血球沈降速度ニ就テ、等なり。

△當年不惑に入る八歳、年壯の意氣益旺にして、勵精恪勤の人として信望を博し、圓熟せる手腕は益々其の特技を發揮せんとし、今は最も得意の時代ならん。名古屋市大會根鐵道官舎に住む。

久米久之

△福岡縣田川郡添田町に在る宮城病院外科に久米久之博士あり、専ら整形外科術に堪能なるを以て知らる。長崎醫專の出身にして、大正十一年卒業後十一年より十四年まで、福岡縣後藤寺町三井病院に勤め、十二年より昭和五年まで、長崎醫大の病理學及び外科學教室に於て斯學の研究に没頭し、五年九月長崎醫大より學位を受領す、爾後頭書の病院に勤務し今日に至る。

△主論文は「乳糜尿ノ原因ニ關スル研究」にして、參考論文としては、(1)「アトファン」胃潰瘍、(2)實驗的胃十二指腸潰瘍、等あり。

△「貪慾を捨て安逸を顧みず自己を没却して病者に接するに常に熱を以てするは世の名醫たるの秘訣なり」云々とは、氏の感想の一片なるを知ると共に、氏が名醫たるの存在である所以を首肯せしむ。博士は熊本縣上益城郡乙女村久米泉平の四男、明治二十九年生にして當年漸く不惑に達す。居常盆栽を愛で、暇を得れば登山を好み、高山を逍遙して自然に親しむ、又た酒を嗜しむ風あり。福岡縣添田町に住す。

村手順吉

△青森縣八戸市利用組合三八城病院副院長村手順吉博士は、愛知縣中島郡千代田村坂田亡村手竹三郎の五男、明治三十年生れにして、愛知縣立三中、八高を経て、大正十二年東京帝大醫學部を卒へ、直に鹽田外科教室に入り外科專攻、同十四年一月より昭和二年三月迄、日赤長野支部病院外科醫長、同年四月より四年五月迄東京帝大醫學部細菌學教室に入り竹内教授の下に細菌學研究、同年五月より五年九月迄再び鹽田外科教室に入り外科專攻、同年九月より八年四月迄東京海軍共濟組合病院外科醫長、同年四月より現職に就任す、期間昭和五年十二月母校より學位を授與せらる。主論文は「「テレビン」油屬藥物ノ細菌ニ對スル作用」にして、參考論文なし。

△感想の一片を寄せて曰く「時世に伴ひ醫業の營業化せらるゝは止むを得ずとするも醫師本來の義務若くは職分を忘れてたゞ醫院又は病院の經營のみ汲々として務むるもの多きは實に慨嘆すべく此點につき醫師の覺醒を望むや切なり」云々。著者曰く、同感の士にして博士の此の説に共鳴する人は多々あらん、況んや近時益々實費診療に近き醫療機關が盛んに跋扈して、醫師の地盤を蠶食しつゝある現代に於てをや。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又散歩を好む風あり。八戸市山伏小路三八城病院内公舎に住む。

柿田俊光 △東京市淺草區小島町に歴史あり、外科、整形外科、泌尿器科、X光線科、齒科を以て高名なる樂山堂病院あり、外科、皮膚科界の先覺者故宇野朗博士の創立せる私立病院にして、宇野俊夫學士現院長たり。外科の大家柿田俊光博士は外科及び皮膚泌尿科を擔任して克く院長を補翼する所あり。同病院の依然として繁榮を持続し歳と共に益々向上隆盛の偉觀を呈しつゝあるもの、博士の力亦與つて大なりと云ふべし。附記す、同病院には院長宇野俊夫學士、柿田博士の外、金子魁一博士、宇野孝齒科學士等々あり。博士は千葉醫大系（専門部出身）の錚々たる外科學者にして、北海道帝大より學位を得たる近來の少壯名醫博也。

△博士は大正十四年千葉醫大専門部卒業、直ちに附屬病院の外科教室に残り、助手として現學長高橋信美博士の下に二年臨床を學ぶ。然るにこの間外科醫として病理學の必要を痛切に感じ、次で北大醫學部の今教授の下に走り病理解剖學を研究する事三年、再び臨床に返り北大醫院第二外科に轉じ柳壯一博士の指導を受く。昭和五年秋釧路市博濟病院外科醫長として赴任し、外科及び皮膚、泌尿科に屬する患者の一般診療に従事せり。同五年十二月學位を得、次で淺草區小島町の樂山堂病院に轉じ現在に至る。

△主論文は「諸臓器内尿素ノ組織化學的研究」にして、(1)組織内尿素ノ證明法ニ就イテ、(2)生理的狀態ニ於ケル腎臟ノ尿素排泄ニ就イテ、(3)病的狀態ニ於ケル腎臟ノ尿素排泄狀況ニ就イテの三篇より成る。參考論文は、(1)肝臟ノ尿素生成及び其排泄ニ就イテ、(2)膽色素生成ニ關スル知見補遺、(3)組織ノ硫化水銀顆粒發現部位ニ就イテの三篇なり。

△北海道釧路市の人、明治三十三年生る、年齒未だ三十六歳の少壯にして、新進の意氣に燃え志操堅實也。今は最も得意時代にて「醫は仁術也」を平生のモットーとし、臨床に熱心勵精し克く誠實と親切とを盡す。蒲田區女塚町一八に住む。

堀田慎之

△海軍燃料廠醫務部に在勤中の海軍々醫大佐堀田慎之博士は、金澤醫專出身の逸才にして、外科レントゲン科を専攻し、嘗ては歐米を視察し、慶大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博なるが、研鑽多年の間、海軍部内部外の先輩指導者として恩恵を受けたる人は枚擧の追なしと雖も、別けても「レ」線界に興味を起したるは小林幹海軍々醫少將の肝煎りにて、大正十四年海軍々醫學校選科學生時代より始まり、次で高橋通磨軍醫少將の指導を受け、同少將故小池博士の縁故にて不圖した機會より、慶大藤浪剛一教授に知遇を得て以來、同教授の厚き指導を受けたり。蘊蓄せる學殖と共に臨床に多年の經驗を有し、今や獨特の手腕を發揮して活躍する所、博士の面目の躍如たるものあり。

△博士は小樽中學校を経て、大正二年金澤醫專を卒へ、直ちに海軍に入り任海軍小軍醫、日獨戦役に参加、同九年叙勳四等授旭日小綬章、同十一年米國に出張、昭和四年叙勳三等授瑞寶章、同五年十二月慶大より學位受領、同八年十一月任海軍々醫大佐、練習艦隊軍醫長として軍艦磐手に乗込み土耳古、希臘、伊太利、馬耳塞、西班牙等航海し、此間佛、獨、英を歴訪、伊、佛、西三國より叙勳の名譽を得、歸朝の後、同九年九月大分縣龜川海軍病院第一部長に補せられ、次で現職に就けり。

△主論文は(1)「エード」油ノ腹腔内吸收ニ關スル「レ」學的研究、(2)同 Hysterosalpingoscopiae ニ關リ腹腔内ニ洩レタル「エード」油ノ運命、(3)自家製「エード」油 (Kreiodol) ノ實驗並臨床成績、の三篇より成る。參考論文は(1) Lipiodol-Lafay ヲ應用セル「レントゲン」診断、(2)後頭骨下穿刺(小腦延髓槽……蜘蛛膜下腫大槽穿刺)並其應用ニ就て、(3) Lipiodol-Lafay ニ依ル子宮喇叭管撮影法ノ臨床的價值、附子宮喇叭管撮影法ヲ喇叭管通過検査(喇叭管通氣法)ニ應用スルノ適否ニ就テ、(4)横痃膿汁ヨリ感染セルバリノー氏結膜炎並其原因説ニ關スル考案、(5)立體鏡ノ新

考案第一、二、三報、(6)異物ノ部位測定法トシテ「レントゲン」立體寫眞法の六篇なり。

△感想を寄せて曰く「レ」線立體寫眞法……立體觀察法は「レ」線發見の翌年から提唱せられ體內異物摘出術の上に一大光明を點じた。それ以來戰役毎に異物摘出の問題が論ぜらるゝと必ずこれが一番に重寶がられて來たが、其の割合に平時は甚だしく閑却せられて居た。然るに近頃漸くこれが異物問題以外に各種の診斷に其の必要性を認識せられ實際化されて來た事は喜ばしい事ではあるが、未だ特殊扱にされる傾向を持つて居るのは斯學の發展上嘆かばしいと思ふ世の中には食はず嫌といふのがある。面倒といふ不經濟といふ、それはやり方である、利益は擧げて數ふべからずである。「レ」線装置のある所必ず立體觀察装置を伴ふべきで「レ」線の有する一〇〇%の價値は此方法に依て初めて發揮せしめ得る事と確信を以て提唱する」云々。「レ」線造影劑と立體鏡、殊に「レ」線立體寫眞に關しての造詣深く、多大の興味を以て今猶精研に餘念なき博士にして、始めて斯言ありと云ふを得べき乎。

△博士は富山市鹿島町の出身にして、明治二十三年生る。學究的温厚の紳士にして篤學者たり、其の今日あるは輝しき閱歷よく之を物語りて餘蘊なし。殊に多年海軍々醫界に活躍して奮盡せる功績は言はずもがな、今は腕の冴え盛にて、年齒漸く不惑に入る五、年壯の意氣益々壯にして研究心に燃え、學識、手腕、人格共に愈々圓熟の佳境に達して最も得意の時代に在り。猶春秋豊かにして、至誠一貫、盡忠以て國家に奉ずるの外亦他事を顧みず、拮据黽勉、孜々として精研に餘念なき前途は、洋々として博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり、幸に健康と共に、海軍々醫界の爲め益々努力奮闘あらん事を望むや切也。

佐田 正人

△九州診療界に於ける内臟外科界の新進大家にして、特に急性腹膜炎、腸閉塞症を最も得意とする佐田正人博士は、貝島病院長として奮盡努力する所あり、名實伴ふ名病院長として嘖々たる好評を聞く。貝島病院

は貝島炭礦株式會社の附屬病院にして、本院を福岡縣宮田町菅平田に置き、分院を同町桐野、同町満之浦、福岡縣遠賀郡香月村、佐賀縣東松浦郡嚴木村の四ヶ所に置き、本院には各科擔任醫師あり、收容患者數八十名、各分院には收容患者數各三十名内外、本院及分院には各レントゲンの設備あり、本院及分院の連絡は病院自家用の患者輸送自動車を以てし、當地方に於ける最大最有力なる治療機關たり。

△博士は九州帝大醫學部出身にして、大正十四年卒業後直ちに第一外科教室に入り、教授三宅速博士につき外科學を研究す、後年三宅教授辭任後赤岩教授につき引續き外科學を研究す、昭和五年七月同教室を辭し、福岡縣鞍手郡宮田町大之浦第二病院長に赴任す、同六年一月九州帝大より學位受領、同七年大之浦第一、第二、第三病院大辻病院及岩屋病院の五病院を貝島病院となして院長となり現在に及ぶ。指導教授は主として母校の恩師三宅速博士、赤岩八郎博士、板垣政參博士等とす。

△學位主論文は「急性腹膜炎ニ關スル臨床的並ニ實驗的研究」にして、他に參考論文三篇あり。
△山口縣熊毛郡平生町佐田俊雄の長男、明治三十二年生れにして當年三十有七歳也。温厚なる學究的少壯の紳士にして、高邁なる人格を備ふ、臨床家としての態度の眞摯にして、熱情あり親切なるは篤き聲望を博す。趣味としては劍道四段、中學時代より初め現在に至る。福岡縣鞍手郡宮田町に住む。

川崎 禎太郎

△優生病院長として日々其の診療に勵しみつゝある川崎禎太郎博士は、愛知醫大の出身にして、大正十五年同大學卒業後、直ちに母校の桐原外科教室(指導教授桐原眞一博士)に入る、同年五月副手、昭和二年五月助手、同六年三月愛知醫大より學位受領、同年九月名古屋醫大講師、外科學擔當、同七年四月和歌山縣新宮病院外科醫長として就任、其後上京して現職に就き今日に至る。

△主論文は「火傷ニ對スル輸血ノ効果實驗的並ニ臨床的研究」にして、參考論文は、(1)火傷毒ノ實驗並ニ臨床的研究
(2)陰囊水腫ノ悲觀血的療法ニ就テ、(3)「ガングリオン」ノ悲觀血的療法ニ就テなり。

△新潟縣南蒲原郡三條町の人、川崎長次郎の長男、明治二十八年生れにして、當年四十有一歳也。少壯銳氣にして手腕漸く壯熟の域に入る、居常人に對するに敢て城壁を設けず、快活にして能く人を愛す、又た患者に對するに甚だ親切なり、其の眞摯にして寛量なる態度は多とすべき也。現住所は東京市牛込區新小川町二ノ一〇江戸川アパート一
一番なり。

平山利弘

△千葉市吾妻町二丁目外科仁靜堂病院あり、院長平山利弘博士の經營する私立病院にして、地所四百坪、建坪二百坪餘、外科手術室、レントゲン科其他各室の施設完備し、博士獨特のメスの好評と相俟つて當地方を風靡す。學系は千葉醫專の出身にて、恩師三輪徳寛教授、高橋信美教授、瀬尾貞信教授、福田得志教授等の指導を受け、研鑽多年の末、主論文「諸種藥物ノ下腿酸素消費量ニ及ボス影響ニ就テ」を完成、千葉醫大より學位を獲得せる名醫博たる新人物也。

△博士は大正八年千葉醫大の前身醫專卒業後、直に東京市神田區阿久津病院に迎へられ誠意診療に勤む、大正十一年より昭和二年迄千葉醫大外科學教室に入り、更に同二年より五年まで藥物學教室に於て研究を續け、五年十月より頭書の病院を經營、六年四月學位を受領せり。

△東京市本郷區湯島、林謙次の三男、千葉醫專卒業後現姓となる、明治三十年生れにして、當年三十有九歳也。少壯にして霸氣滿々たる裡に愛想を浮べ、讀書を愛好し、暇を得れば撞球を趣味す。其専門に關する學識の深遠なるは言はずもがな、多年の經驗と共に手腕今や壯熟の域に入り、益々其妙技を發揮して今は最も得意の時代に在り、而かも

春秋猶頗る豊富なれば、切に自重加餐を祈ると共に、前途の大成を待望して止まず。

寺師正樹

△香川縣綾歌郡坂出町に外科を以て著聞する寺師病院あり、寺師正樹博士の經營する私立病院にして、内容充實す。博士は九州帝大の出身にして、外科を以て立ち、特に内臓外科輸血を最も得意とす、母校の恩師高山正雄博士、三宅速博士、赤岩八郎博士等に親炙して研究の結果、母校より學位を得たる所謂九大派の名醫博也。外科學講師として暫く母校の教壇に起ち、學生指導の爲め精勵甚だ務むるところありしも、一度び象牙の塔を退いて以來治療界に進出して獨立せるが、開業日尙淺少にも拘はらず、圓熟せる診療、手術の好評は著るしく人氣に投じ、年次向上隆盛の活氣を呈しつゝあり、なほ輝しき前途の發展は更に大に期待せらる。

△博士は七高造士館を経て、大正九年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに三宅外科に入局し、大正十二年三月釜山府立病院外科部長として赴任し、昭和三年四月九州帝國大學大學院に入學し、昭和六年七月學位を得、引續き同醫學部赤岩外科に於て講師として臨床に従事し、同年十一月丸龜市吉田病院の招聘に應じて當地に赴任し、翌七年十二月より現住地に於て開業し現在に及ぶ。

△主論文は「正常血液輸血ト枸橼酸曹達ト血液輸血ノ比較」にして、外に參考論文二篇あり。其他の論著夥多。
△鹿兒島縣川邊郡知覽村南別府の人、明治二十四年寺師慎の二男に生る、當年四十有五歳也。年壯銳氣、學究的濃厚
の紳士にして、平生努力主義をモットーとして診療に精進し、熱心克く誠實と親切とを以て終始し倦むことなし、好箇の臨床家として歓迎すべき也。

後藤 誠

△山形縣大石田町に連綿二十代の歴史を有し、著名なる後藤醫院あり、後藤誠博士は之を經營主

宰し、其の専門とせる外科を擔當す、外に祖父内科、小兒科を擔當し、眼科、耳鼻科は専門醫を出張せしめ、別にレントゲン科を有し、入院室の設備有り、其の規模の堂々たる結構と相俟つて、内容の設備充實せる點に於て、名實相伴ふ私立病院として當地方診療界に頭角を抜く。博士は東北帝大系の錚々たる外科學者にして、斯學の權威關口蕃樹教授の愛弟子として知られ、恩師の指導を受けて造詣する所深く、特に内臓外科を最も得意とし、母校より學位を得たる斯科界近來の名醫博たるに耻ぢず。今や斯科の新進大家と仰がれ、大衆より多大の信頼と尊敬とをその一身に集めつゝあるは、地方診療界の爲め甚だ多幸とす。

△博士は仙臺二中、第二高等學校を経て、大正十四年東北帝大醫學部を卒へ、以後昭和六年六月迄同上學部關口外科にて引續き外科專攻、同六年四月母校より學位を授與せらる、同年六月本籍地に開業、一般外科の診療に従事し今日に至る。

△主論文は「レントゲン」線ノ白血球喰菌作用ニ及ボス影響ノ實驗的並ニ臨床的研究」にして原著は獨逸文なり。外に參考論文としては、(1)二三非特異性刺戟體注射「レントゲン」線並ニ人工高山太陽燈放射ノ喰菌作用ニ及ボス影響ノ臨床的並ニ實驗的研究、(2)肘靜脈ノ走行型ニ就テ(獨文)、(3)結核性腹膜炎ノ一異例、(4)關口外科教室十ヶ年間ニ於ケル蟲様突起炎ノ統計的觀察の四篇あり。

△博士は、明治三十三年宮城縣松島の近郷利府にて鈴木春吉の三男に生る、後山形縣北村山郡大石田町後藤源太郎の孫養子となる、年齒未だ三十有六歳にして少壯の意氣益壯也。熱心なる臨床家にして「醫者は一人の患者でも眞面目に患者を治療する醫者であり度い」との信念を以て、常に診療に臨む態度の眞摯にして熱心なるは、博士の篤き徳望を博する所以と見るべき也。趣味としては尺八を能くし、蒼龍を號とす、又た弓道に堪能にして健康と共に心身の鍛錬に力む。猶春秋に富む博士の前途や洋々、光る學位の力と相俟つて益々多幸あれ。

渡邊傳二

△神戸赤十字社病院(湊東區楠町七丁目)外科醫長として活躍し、内外の信望を博しつゝある渡邊傳二博士は、大正十五年岡山醫大を卒へ、卒業後引續き母校赤岩外科、次で泉外科教室にて研究、昭和五年四月神戸赤十字社病院外科醫長に赴任今日に至る、同六年六月岡山醫大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は「實驗的結核感染ニ對スル網狀織内被細胞系統ノ意義ニ就テ」にして、參考論文六篇あり。

△「醫學博士粗製の聲八ヶ間敷き折柄學位なるものを今少し慎重に取扱ふを要す、特に學位論文審査機關を最も權威あらしむべし」云々とは、氏が吐露せる感想の一片なり、以て氏の抱負の一端をも窺はる。出身地は岡山縣川上郡中村長地にして、渡邊常三郎長男、明治三十五年生る、年齒漸く三十有四歳也。終始醫療に勵精し以て自己の天職と爲し、研究と併せて唯一の趣味とせるが如し。未だ少壯にして春秋猶頗る遼遠なれば、向後の活躍と相俟つて洋々たる前途を待望せんとす。博士は前金澤醫科大學々長故須藤憲三博士の女婿なることを附記す。神戸市須磨區行幸町一ノ六に住む。

奥田義正

△北海道帝大助教授にして第二外科教室に在る奥田義正博士は、大正十五年北海道帝大醫學部卒業後、母校附屬醫院柳外科の助手となり専ら臨床の研鑽に勉む、傍ら柳教授の指導により創傷の治癒に就て研究し入局後五年半にして、昭和六年六月母校にて學位を得、同年七月市立釧路病院に外科部長として赴任し、次で現職に任ぜられ今日に至る。

△學位主論文は「創傷治癒ニ關スル研究」なり。富山縣の人、明治三十年生る、當年三十九歳也。未だ少壯にして研究心潑瀾たり、今や母校の教壇に起ちて、勤勉勵精倦むことを知らずと云ふ。折角の努力奮闘を望む。

文 穆 圭 △朝鮮の出身者にして近年醫學博士の學位を得たる篤學者亦尠しとせず、その中にも文穆圭博士の如きは、最も異彩に富む京都帝大派の名醫博たるに耻ぢず、外科學者としては錚々たる人物たるを慶ぶ。殊に内臓外科に至りては獨特の手腕を有し、博士の最も得意とする所にして斯界に既に定評あり。現在にては朝鮮江原道立江陵醫院副院長兼外科部長として、内外の信望を博し、朝鮮診療界の爲め拮据黽勉大に氣勢を昂げつゝあるは多幸とす。

△博士は三高を経て、大正十五年京都帝大醫學部を卒へ、昭和二年六月京城帝大醫學部助手に任ぜられ、四年一月より同大學大学院に於て研究、杉原德行教授、松井權平教授の指導を受く、六年七月京都帝大より學位を得、専攻は藥物學及び外科學にして、特に内臓外科に興味を有す。

△主論文は「吸入麻醉時ニ於ケル家兔腸管運動ニ就テ」にして、原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)家兔吻合腸管ノ藥物學的反應、(2)藥物作用上ヨリ視タル嘔吐、血糖及尿酸調節中樞ノ相互關係ニ就テ、(3)胃軸旋ノ手術治驗及其知見補遺、(4)微毒性脾腫ニ就テの四編なり。

△感想に曰く「近代の醫學は *analysis* 分析化する感あり。今後は之れの *synthesis* 合成化する必要ありと思惟す」云々。亦以て該博なる識見の一端を窺はる。

△博士は京城府授恩洞の人、文容周三男、明治三十年生る、當年三十九歳也。學究的少壯なる紳士として其の人格を尊ぶ。趣味としては乗馬、音樂、ビンボン等を業績の外に楽しむ風あり。緒方洪庵翁抄譯「扶氏醫戒」十二章を自警となして修養する所あり、自ら其の品格の崇高なるを想はしむ。長兄文澤圭は辯護士にして、博士の妻鄭子英は女醫として活躍し、目下京城府授恩洞九二進誠堂醫院に於て内科、小兒科、産婦人科専門診療に従事す。名門なる文博士

家の多慶にして、共に俱に學界に進出して文化貢獻の爲め努力精進しつゝあるを、著者は衷心祝福する一人也。幸に健康と共に、朝鮮診療界の爲め益々健闘盡力あらんことを翹望して止まず。現住所江原立江陵醫院醫局。

◇ 牧野内 良 △八戸市八戸病院に副院長(兼外科部長)として内外の信望を博し、地方診療界の爲め努力精進しつゝある牧野内良博士は、新潟醫大(専門部出身)系の新進にして、母校の恩師中田瑞穂博士、本島一郎博士、工藤得安博士等に親炙して外科、整形外科の蘊奥を究め、後に又大阪外科界の大家大野良藏博士にも師事する所あり學位は新潟醫大より獲得せる名醫博たる一人物也。

△博士は大正十三年新潟醫大附屬醫學專門部を卒へ、直ちに助手として母校の整形外科教室に勤め後ち助手となる、次で日赤長野支部病院外科醫員として赴任の後、再び新潟醫大助手となりて解剖學教室に勤め、次で同大學講師となる、昭和六年八月學位を得、それより大阪市外科大野病院(院長大野良藏博士)に勤めたる後、八戸市八戸病院外科部長に就任し次で副院長となり、目下勤務中。

△主論文は「肢及び肢帶ノ發生學的並ニ比較解剖學的研究」にして、參考論文は、(1)日本人ノS字狀結腸部ニ就テ、(2)日本人ノ坐骨結節ニ就テの二篇なり。

△博士曰く「自ら研究もせず、更に弟子の指導も致さざる大學教授は、學界の爲め引退して欲しい。否何か社會で引退さす方法なきか」云々と。著者曰く、現代學界に對する感想としての斯言は、獨り博士のみと言はず、同感の學者多々あるを信す。由來因習に囚はれたる我國の學者は、兎角自ら早老を以て安んずる徵候なしとせず、否な時と場合とに依りては自ら進んで自分は學界を隠退せりと言ひたがる癖なしとせず、斯の如き弊風は宜しく自他相互に自覺して、時代の進運に順應し、老いて益壯なる氣風を養成し、以て大に後進の誘掖に努むると同時に、學界乃至社會の

爲め益々發奮貢獻する所あるべきが、蓋し現代學者としての本分かと思ふ。

△博士は長野縣下伊那郡下久堅村の人、明治三十五年生れなれば、當年三十有四歳也。年齒未だ少壯にして新進の氣概に富み、居常の趣味としては研究と醫療そのものにおいて、今猶研究を捨てず精研克く勉むる所あり、多とすべき也。八戸市類家外中居に住す。

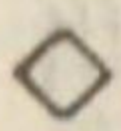
堤 丈夫

△大阪市東區東阪町四九〇に新興せる堤外科あり、堤丈夫博士の自營に成る私立小病院にして、博士自ら精進して日々診療に勵しみ、其の専門とする外科特に内臓外科に至りては、博士獨特の評判益々高く、加ふるに副院長として同僚の手腕家、青山文雄博士ありて院長を輔佐するに厚く、兩博士の手腕、聲望、相俟つて、開業日尙淺きも、近來著るしく擡頭して益々發展の進境に在り。

△更に其の學歴及び閱歴を紹介すれば、博士は大正十四年千葉醫大附屬醫學專門部卒業後、歩兵第八聯隊に一年志願兵として入營、翌十五年十二月より大阪外科大野病院に勤む、昭和三年八月千葉醫大解剖學教室に入り研究に従事し同六年一月より再び大野病院に勤務す、同年八月千葉醫大にて學位を授與せらる、同九年一月大野病院を辭し、前記の現住所に於て開業今日に至る。

△學位論文は「Trionyx Japonicus (japanische dreikrallige Lippenschidkröte)ノ頭骨並ニ Hyobranchi-skelettoノ發生學的研究」にして、參考論文なし。

△博士は大阪市東成區の人、明治三十四年生る。當年三十有五歳、少壯にして進取の氣象に富み、將來有爲の臨床家として囑望せらるゝ所多し。業餘の趣味としては銃獵、テニスを好む。



末岡 悟

△大阪市此花區春日出町下二丁目二番地に外科末岡病院あり、院長末岡悟博士の經營する所に於て、内部の設備全く成る小病院なり。開業日尙淺きも、従前春日出町附近に外科専門の病院なく、大阪市内でも有名なる工場地帯（汽車會社、瓦斯會社、住友系諸會社工場等楯比す）なるにも拘はらず、非常なる不利不便なる爲め、其の地の利を得て博士獨特の評判は益々人氣を昂め、日々患者の輻輳するもの多く極めて盛況を呈す。尙従前阪神甲子園附近に設けある外科専門の自宅診療所は、分院として之亦相當の地盤を有し依然として繁榮を續けつゝあり、蓋し近來の成功と云ふべき乎。博士は岡山醫大系、津田外科を巢立ちたる新進の名醫博にして、特に内臓外科、整形外科を最も得意として、斯界にデヴェューし自己の存在を確立せり。

△博士は山口高校を経て、昭和三年岡山醫大卒業、直ちに津田外科教室に入りて引續き外科學を專攻し、六年八月母校より學位を得、翌七年二月以來大阪市長谷川病院副院長として、勤務の傍ら甲子園附近に自宅診療所を設け、外科一般の診療に従事しつゝありしが、同八年七月長谷川病院を退き、前記の現住所に末岡外科病院を開院今日に至る。斯間母校恩師津田誠次、生沼曹六兩博士に指導を受け學位論文を完成す。

△主論文は「體溫調節中樞ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)一年有餘生存セル脊髓横斷犬ノ一例、(2)外科的結核症ノ血清「リバーゼ」並ニ之ガ赤血球沈降反應トノ關係ニ就テ、(3)外科的結核ノ「ツベルクリン」療法なり。

△感想に曰く「一、學閥打破、二、開業醫のみならず官公立病院の職員をも包含する醫師界を作り以て醫師界の擴大強固を圖ること」云々と。以て博士の抱負の一端をも窺はる。出身地は山口縣都濃郡富田町にして、明治三十六年生る、年齒未だ三十有三歳の年少也。音樂趣味の人、又スポーツファン也。性格は凝性の方にて、善惡結果より見て、之が博士の長所ともなり、或は短所ともなる場合をも考へらる。潔白溫行の少壯紳士、春秋猶豊富にして其前途や洋

々たり、益々自重加餐あつて、治療界浄化の爲め一層の奮發あらん事を祈る。現住地、阪神沿線今津高潮二七。

鳥居 環

△豫備陸軍二等軍醫正鳥居環博士は、金澤醫專出身の錚々たる外科及びレントゲン科學者にして陸軍々醫總監岩崎小四郎博士、金澤醫大教授石川昇博士、岡岡本規矩男博士等の指導を受くる所厚く、金澤醫大より學位を得たる斯科界近來の名醫博也。多年陸軍々醫界に活躍し盡忠の功績尠しとせず、曩に病氣の爲め、豫備に編入せられ、爾來靜養に力めつゝあり。

△博士は大正元年十一月金澤醫專を卒へ、同二年六月任陸軍三等軍醫、補歩兵第三十五聯隊附、同十一年八月補陸軍々醫學校部員、レントゲン教室勤務、同十二年三月免本職補陸軍々醫學校教官、同十五年八月任陸軍三等軍醫正、免本職補廣島衛戍病院附、昭和四年八月免本職補金澤衛戍病院附、同年同月以降勤務の餘暇、金澤醫大石川外科教室及び岡本解剖學教室に於て研究、同六年九月學位受領、同七年八月任陸軍二等軍醫正、待命被仰付、次で同年同月豫備役編入せらる。

△主論文は「肺臟及氣管支淋巴系統ニ關スル解剖學的研究」にして、參考論文としては、(1)所謂健康者ノ胸部潜在性結核病竈ニ關スル「レントゲン」學的研究、(2)畸形性膝關節炎ノ發生原因ニ關スル知見補遺、附正常脛骨頸間關節ノ形態ニ關スル研究、(3)所謂「キンク」様十二指腸狹窄症ニ就テ、(4)「レントゲン」學上ヨリ見タル腺腺結核ト氣管支腺結核トノ關係ニ就テ、(5)「レントゲン」放射ニ依ル内分泌腺ノ血糖量ニ及ボス影響ニ就テノ實驗的研究、(6)所謂、「トロムメルシュレーゲルフィンゲル」(鼓桴狀指)ノ「レントゲン」所見ニ就テ、(7)胸腺「レントゲン」刺戟放射ニ依ル尋常性乾癬ノ治驗補遺、(8)實驗的骨假骨形成ニ及ボス「レントゲン」線ノ影響ニ就テ、(9)慢性蟲樣突起炎ノ「レントゲン」所見ニ就テ、(10)頸腺結核ノ統計的觀察並氣管支腺結核トノ關係ニ就テ、(11)肺結核ノ「レントゲン」療法ニ

就テ等。

△博士は金澤市の人、明治二十二年生る、當年不惑に入る七歳也。年壯不幸にして近來健康を害し、暫く活社會より離れて自適悠々の裡に靜養に力めつゝありと聞く。折角の自重加餐を祈ると共に、應て健康の恢復と相俟つて再び診療界への躍進を望むや切也。人と爲り高潔にして篤實、恬淡として毀譽褒貶を顧みず、謙遜克く自抑して人に厚く、應答また能く禮を重んじて世務を缺ぐことなし。金澤市上本多町二番丁六ノ二四に住む。

高橋 正義

△埼玉縣越ヶ谷町に整形外科、レントゲン科を以て斷然頭角を抜き、名聲噴々、同地方診療界を風靡して餘す所なき高橋診療所あり。所長高橋正義博士の私立小醫院にして、手術室其他内部の設備整ひ、博士自ら診療に勵しみ日々忙殺されつゝあり。博士は日本醫專出身の篤學者にして、整形外科界現代の權威東大教授高木憲次博士に就きて斯學の蘊奥を究め、東京帝大より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。新進にして獨特の新手腕を有し玲瓏たる診療手術の好評は益々遠近の人望を集め、外來患者常に輻輳して日々盛況を極む。

△博士は獨逸協會中學を経て、日本醫專卒業後、東京帝大醫學部整形外科教室に入り、高木教授指導の下に研究、次で東京市衛生試驗所レントゲン科に勤務、又日本大學醫學科講師として物療、レントゲン科を擔任せり、昭和六年九月學位受領後、現住地にて開業今日に至る。

△學位論文は「肩胛關節運動(肢位)ト血管走行ノ變化ニ就テ(「レントゲン」ニ依ル)」が主論文にして、參考論文なし。

△感想に曰く「醫師お互がもつと自覺し合つて共存共榮のために協力しなければならぬ。顯微鏡の世界を見てゐたのではだめ」云々。醫師界浄化の叫び喧々囂々たるの秋、亦以て一服の清涼劑とすべきか。博士は奈良縣宇陀郡三本松

村大野高橋元次郎長男、明治三十一年生る。年齒未だ三十有八歳にして進取の氣象に富み、少壯の意氣益旺也。其の今日ある篤學は博士の前半生史に精彩を放ちて見ゆ。眞面目なる學究的濃厚の紳士にして、今や手腕漸く壯熟の域に入り、診療に甚だ熱心なり。性格は短氣なれども、直情徑行にして同情に富み、克く人を愛し人に親しまる、其の高邁なる人格は敬慕すべき也。春秋猶頗る豊富にして、勵精餘念なき前途は、博士の將來を語るに餘裕綽々たり。尙令弟に正彌博士あり、京都帝大出身にして耳鼻科を専攻中なり、尙福井正憑博士及び中井卓次郎博士とは親戚の間柄なりと聽く。

賈雨田

△滿洲國醫療界の最高機關たる滿鐵大連醫院分院同壽醫院に於て、外科主任として内外一般の信望を博し、東京帝大派の名醫博として活躍しつゝある賈雨田博士は、滿洲醫大系南滿醫學堂出身の逸才にして、又た東京帝大系の巨擘鹽田廣重教授の愛弟子として外科を以て著聞す。殊に滿洲國人としての博士は、代表的學者として我博士人物界に輝しき新彩を添えたるを多幸とす。

△博士は大正十年南滿醫學堂を卒へ、直ちに任黑龍江官醫院醫官、翌十一年八月滿鐵撫順醫院職員外科醫員被命、十五年九月滿洲醫科大學より獎學資金を以て東京帝大醫學部へ留學被命、同學部專攻科へ入學、鹽田外科教室に於て鹽田教授及び土井保一博士の下に外科學研究、昭和三年四月撫順醫院外科に復歸し、同年十月大連醫院に轉勤す、翌四年正月大連醫院金州分院外科主任として赴任し、同六年九月學位を授與せられ、同九年四月現職に就任す。

△主論文は『出血並ニ種々ノ等張溶液注入後ニ於ケル血量ノ調節ニ就テ』にして原著は英文なり、外に參考論文として(1)急性十二指腸閉塞時ニ於ケル血液變化ニ就テ、(2)骨折ノ研究、(3)靜脈瘤之純酒精注射療法、(4)中華民國人ノ健康時ニ於ケル血液像ニ就テの四篇あり。

△現代の醫界に對する感想を叩けば、博士其の一片を吐露して曰く「醫師相互間の連絡を取り大なる團結力を以て社會國家に對する平和貢獻をなすこと」云々と。今後滿洲國の文化發展と日滿兩國の親善の爲め、日滿醫學の提携上、將來大に博士の力に俟つものあらん、折角の奮闘努力を祈る。因に博士は、昭和七年十月名古屋市に於て開催の日本學術協會第八回大會に際し滿洲國學者代表として派遣され、又た學術協會よりも招待されたる事ありと。

△博士は滿洲國奉天省法庫縣團山子の人、賈永興次男、光緒二十四年(明治三十一年)生る、當年三十有八歳也。年齒未だ少壯にして新進の氣慨に富み、切磋卓勵、研學の念今猶壯ん也。學生時代よりの讀書家にして、書見を唯一の樂しみとし、研究以外、品性陶冶の修養に力む。賦性謹直にして敦厚、學究的少壯の紳士として崇高の人格を具ふ。

得能倫二

△宇都宮衛戍病院外科にある陸軍一等軍醫得能倫二博士は、曩に滿洲出動中、滿洲齊々哈爾第十四師團陸軍病院に在動して、重大なる任務を果たして功績を擧げ、今は内地に歸還して熱誠克く臨床に勵しみ、至誠奉公の念に燃えつゝあり。博士は金澤醫大系専門部の出身にして、外科を以て立ち、岡山醫大教授故泉伍朗博士指導の許にて研究の結果、岡山醫大より學位を得たる近來の新進醫博也。未だ少壯にして精研に餘念なき前途は、潑刺として將來の活動を大に期待せらる。

△博士は大正十三年金澤醫大醫專部を卒へ、同年六月陸軍三等軍醫に任ぜらる、爾來盛岡騎兵二十三聯隊、陸軍々醫學校及平壤衛戍病院に勤務、昭和二年四月金澤醫科大學專攻生として入學、同年八月任陸軍二等軍醫、同三年四月岡山醫科大學專攻生として轉校(指導教授岡山醫大に轉任につき)、同四年四月同校專攻生を免ぜられ、爾來岡山歩兵十聯隊及陸軍造兵廠大阪工廠に勤務す、同五年八月任陸軍一等軍醫、同六年九月岡山醫大より學位受領、同六年十二月滿洲に出動、齊々哈爾陸軍病院に勤務す、其後内地に歸還して現職に在り。

△主論文は「脾臓ノ一般網狀織内被細胞系統ニ及ボス一新知見ニ就テ」にして、参考論文は、(1)二、三内分泌臓器ノ「コレステリン」新陳代謝ニ及ボス影響、(2)脾臓ノ「コレステリン」新陳代謝ニ及ボス影響、(3)汎發性急性腹膜炎ノ手術的療法、(4)ベルテス氏病ニ就テ等なり。

△博士は金澤市材木町二丁目得能太一郎の二男にして、明治三十四年生る、當年三十有五歳の少壯にして、新銳の意氣益壯也。勵精恪勤、熱心なる研究家を以て聞ゆ、春秋猶頗る豊富にして、研究不倦の前途は綽々として博士の後半生史を語るに餘裕あり。賦性謹嚴にして高潔、清淡にして名聞を求めず、快活にして能く同僚に親しみ部下を愛撫す、又人に對するに應答禮を厚ふして時務を怠ることなし、其の眞摯にして霽々たる情味あるは、博士に對する人格の尊重を高調するの秋甚だ多とす。趣味としては運動を好む。



増田正徳

△朝鮮診療界近來醫博人物に富む、茲に批判せんとする増田正徳博士は、仁川道立醫院外科醫長として活動し内外の信望を博す。博士は京城醫專出身の一異彩にして、外科を以て立ち、特に内臓外科を得意とす、京城帝大教授小川及び杉原博士の親しき指導の許にて研究を重ね、長崎醫大より學位を得たる新進の名醫博也。臨床的實驗に富み圓熟せる手腕を有し、玲瓏たる診療、手術の好評噴々たるものあるを聞く、而かも少壯にして潑刺たる研究心を有し、孜々として精研に餘念なき前途は、更に大に期待するものあるを翹望して止まざる也。

△顧みて博士の學歴及び閱歷を公開すれば、博士は京城中學校を経て、大正十三年京城醫專を卒へ、朝鮮總督府醫院醫務、副手として外科に勤務、翌十四年二月皮膚科へ轉勤、同年四月より昭和三年三月迄京城府に於て開業、同年四月より再び朝鮮總督府醫院醫務、副手として外科に勤務す、同年六月同醫院は京城帝大醫學部附屬醫院となり、小川及外科教室に於て、小川蕃教授指導の下に外科學一般の研究に従事す、同四年二月京城帝大醫學部助手となり、小川及

び杉原藥物學教室に於て兩教授の指導を受く、同六年六月朝鮮道立醫院醫官となり、黃海道立醫院外科醫長となる、同年十月長崎醫大にて學位授與せらる、同七年五月京畿道立仁川醫院に轉勤今日に至る。

△主論文は「人工的ニ機械的腸閉塞症ヲ惹起セル家兎ノ腸管運動ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。参考論文は、(1)「イレウス」ト肝臓並ニ腎臓、其ノ一、腸閉塞ト蛋白膽汁並ニ蛋白尿ニ關スル實驗的研究、(2)同上、其ノ二、「イレウス」動物ニ於ケル血中輸入異種蛋白ノ膽汁内排泄ニ關スル研究、(3)急性腸閉塞症ノ死因ニ關スル實驗的研究、其ノ四、高位腸閉塞症ト組織及ビ血液食鹽量並ニ食鹽ノ治療的價値ニ就テ、A、高位腸閉塞症ト血液食鹽量、(4)同上、其ノ四、高位腸閉塞ト組織及ビ血液食鹽量並ニ食鹽ノ治療的價値ニ就テ、B、高位腸閉塞症ニ於ケル血液食鹽量減少機轉ニ對スル考察、其ノ四、高位腸閉塞症ト組織及ビ血液食鹽量並ニ食鹽ノ治療的價値ニ就テ、C、生理的食鹽水並ニ等張葡萄糖溶液体内輸入ノ高位腸閉塞ニ對スル治療的價値、(6)生體ニ於ケル腸管運動検査法ノ一新法ニ就テ(獨文)(7)廻腸廻腸重積症ノ二例ニ就テ、(8)Harmoinikererschlussノ一例等なり。

△「我々田舎者は二、三年に一回約一ケ年或は半ケ年位教室或は大病院に於て臨床上の腕を磨く必要あり、しからざれば漸次人後に墜ん」云々とは、博士の感想の一片なり。

△博士の出身地は東京市芝區高輪南町にして、明治三十五年増田遊龜四郎の長男に生る、年齒未だ三十有四歳也。少壯の意氣に富み、殊に責任感強き人にて、辛棒強きことは長所たるべく、但だ短氣なれば或はそれが短所とも云へるが、今は最も働盛にして勵精甚だ務むる所あり、其の平生の態度の眞摯にして和氣溫味あるは、將來有爲の臨床家としての特徴を具備する人格者たるを至囑す。讀書家にして趣味としては書見と音樂を好む。朝鮮仁川府山手町三丁目三に住す。



神川 一格 △秋田市古川端反町秋田組合病院長としての醫博神川一格の名聲は、既に其の地方に著聞し衆望を博す。博士は慈惠醫大の出身にて、東京帝大派の名醫博たる一人物として其の存在を認めらる。博士その抱負の一端を披瀝して曰く「實地と學問とを併行なして行く醫者の少ないことを慨く事實醫者の良心を破つて見たら、自分自からあざむいて、患者を口でごまかしてゐる醫者があるだらう、博士等と云ふものは醫者と云ふ肩書にすぎぬ。只専門的技倆をあくまで眞面目に働かさねばならぬ」云々、以て博士の診療に對する態度の眞摯なるを察せらる。又曰く「近頃醫療組合でやかましく云ふけど、やかましく云ふ價値なし。又醫者が財政の頭をはなれて、病人を一つの生物として生物學的に醫學的に解決して病氣を直して行かうと努力するのは當然だ。醫者は醫術技術者としてやとわれて、財政を考へないで、眞面目な治療をやると云ふこと等は開業醫だつて左様でなければならぬ、眞面目に病氣を民衆が考へて豫防醫學を講じて、眞に治療醫學よりはなれて、病氣がなくなり治療をする醫者の不必要となることそれ自身が醫者のつとめではないか」云々、亦以て傾聴に値す。

△博士は大正十四年東京慈惠醫大を卒へ、直ちに金杉病院に勤め、十五年愛知醫大に轉じ、次で名古屋醫科大學にて名倉重雄教授に就て整形外科を、齋藤眞教授の下にて手術外科を研究、かたわら血管撮影の研究に手を染め辛苦數年、終に氏の獨創的生體血管撮影法を完成し世界の學界に發表、注目を引ききたるとき齡未だ二十九歳、その眞摯なる學究的態度を賞讃さる。主論文「生體血管ノ「レ」線撮影法及び其ノ臨床的應用」及び參考論文七編を完成、東京帝大醫學部に提出して、昭和六年十一月學位受領、翌七年現職に就任す。

△博士の出身地は三重縣飯南郡機殿村にして、明治三十五年生る、當年三十有四歳也。年齒未だ少壯にして、手腕、人格共に漸く壯熟して最も得意の時代に入る、加ふるに天資闊達氣鋭、學者肌にして清淡、眞摯力行の性格と相俟つて益々人望を集め、民衆より多大の信賴と尊敬とを受く。強ひてその缺點の一端を指摘せしむれば、惜むらくば世事にうとく、財政の頭腦に缺けたるは氏の缺點と見るべきも、或はこは先天的ならんか。君が父節君は先年死去されたが、亡父も財を顧みず公共の事業につくし、盛大なる村葬を営まれたる程なるも、赤貧にして常に家政に苦しみたりと云ふ。春秋猶豊富にして、洋々たる前途は綽々として餘裕あり、向後の活躍と相俟つて更に大に期待せらる。趣味として運動は偏らず、これをこのみ保健上の資とす。別に特別の趣味なけれども創作をなし、日本音楽を好み、長唄、小唄を特に好む。著者を以て云はしむれば、氏の如きは目下の如き現職に非らず、貧なるも學究を以て立つがその當を得たるものならん。

◇

佐藤 英 一 △岐阜縣關町に私立療院を經營して、外科一般の診療に従事しつゝある醫博佐藤英一は、同町の出身にして、明治二十九年生る。大正八年金澤醫專卒業、直ちに岐阜縣立病院勤務、昭和三年より愛知醫大助手として藥理、外科教室に於て研究、六年十二月名古屋醫大にて學位を得。斯間林亥之助教授、相原英一教授等に師事して藥理學及び外科學を專攻し、外科専門を以て起り。

△主論文「交感神經系統切斷ノ糖代謝ニ及ボス影響」外參考論文、(1)交感神經系切斷ノ滲透壓ニ及ボス影響、(2)血液ノ葡萄糖分解力ニ就テ(英文)、(3)頸部交感神經節切除後ニ於ケル血糖量ノ消長。

△「現代學界に於ける眞劍味に對し一般社會人の認識は極めて不足せり、殊に論文一篇の文章を書き上げる者と解するに至つては言語同斷なり、又學位を受領したる苦しき經驗なくして傍觀のまゝ、而かも成功の最後の一日を見て難易を批判せんとする傾向あるは現代醫師界の通弊に非ざる歟」とは博士の意見なるが如し、同感の士敢て尠少なからざるを思ふ。然かも又一面より觀察するに、學位獲得後は吾不關焉の態度を持していやに學者振り、殆んど社會と沒交渉にて自惚すぎる淺慮なる學徒も尠からざるを觀る、斯の如き傾向も亦排除すべき博士界の通弊に非らざるかを著者

は痛感するもの也。前途有爲の臨床家としては、宜しく襟度を大にして自己に囚はれず、世相の推移に順應して共存共榮の爲め亦克く他愛主義を尊重すべき乎。博士は物に熟し易く、兎角熱中し過ぎる方なり。趣味としては繪畫と野球を好み、又克く讀書靜修す。白井數馬醫博とは親戚の間柄なりと聽く。現住所岐阜縣關町。

笠原親之助

△關東廳旅順醫院醫官、外科部長としての笠原親之助博士の名聲は既に江湖に著聞し、關東診療界に於ける學究的臨床家としての大なる存在を認めらる。博士は九州帝大系の新智識にして、母校の恩師三宅速博士及び赤岩八郎博士に親炙して外科（特に内臟外科）を造詣する所深く、又た進藤篤一教授に師事して解剖學を研究せり、殊に膽道、消化器外科は博士の最も得意とする所にして、學位は母校より獲得して所謂九大派の名醫博として、其の名を耻しめざる所に博士の面目躍如たるものあり。

△博士は宇都宮中學、四高を経て、大正十三年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに三宅外科に入局、以來副手、助手を歴て昭和六年醫局長となり九月旅順に赴任す、其間大正十三年十二月より一年志願兵として宇都宮歩兵第六十六聯隊に入營、現在豫備役三等軍醫たり。在學中は三宅教授停年後も引續き赤岩教授後任となりて教室へ赴任以來指導を受けたり、途中解剖學教室にて研究し第一研究室（主任進藤教授）に籍を置けり、昭和六年十二月學位を受領す。

△主論文は「哺乳動物並ニ人胆道ノ形態學的研究 附臨床的意義」にして、參考論文は、(1)後頭部減壓手術ニ依リ一時的外ノ好果ヲ得タル小腦腫瘍例ニ就キテ、(2)邦人胆道動脈知見補遺、二篇なり。

△博士は宇都宮市旭町一丁目ドクトル、メヂチネ笠原親文長男、明治三十一年福岡縣若松市（當時親文若松病院院長たり）にて生る、當年三十有八歳也。生來眞面目にして馬鹿正直と云はるゝ位正直の方なり、従つて臨床に臨む態度の眞摯にして熱心なる勵精振りは極めて評判良し。又た否々と云はれぬ質なるが、稍やもすれば怒りやすき癖あり。而

かも人に對するに、熱情と同情とを以てすれば人に親しまる。趣味としては柔道及び音樂を好む。聞説、法博横田秀雄は母の長兄にして、醫博岩永仁雄は妻の義兄なりと。旅順市鮫島町二に住す。

町井秀成

△大連診療界は多士濟々たり。大連醫院外科に在る町井秀成博士は、大阪醫大派の新手腕家として氣焰を昂げ、至誠以て勵精努力する所あり。研鑽多年の經驗に富み、臨床的手術の評判良く、今や斯科の新進大家として大連診療界に重きを爲す。學位論文は京都帝大教授森島庫太、同尾崎良純兩博士指導の下に完成せるもの也。

△博士は大正十二年大阪醫大を卒へ、直ちに大連醫院外科に入る、自昭和三年一月至同五年三月、京都帝大藥物學教室にて研究、七年一月大阪醫大に於て學位受領、引續頭書の現職に在り。

△學位主論文は「アドレナリンノ作用ニ關スル實驗的研究」にして、外に參考論文として、(1)胎兒腸管ノ生理學的並ニ藥物學的研究、(2)胃ノ全剔出ニ就テ、(3)外傷性神經症ノ研究、(4)畢丸痛腫ニ就テ、(5)壓搾氣ニヨル腸管ノ破裂ニ就テの五篇あり。

△博士曰く「現代醫界がも少し腹を太くし學閥關係を一掃し氣持よく働ける様になることを望む」云々とは、博士が懷抱せる感想の一片なり。獨り博士のみと言はず、此説に共鳴雷同する學究の士決して尠しとせず、此の機會に於て亦た一服の清涼劑として、茲に特筆し置くも徒爾ならざるを信す。

△博士は三重縣一志郡神原村、町井博の長男にして、明治二十九年生れれば當年四十歳也。少壯氣鋭にして精力主義の人、手腕漸く壯熟して今は最も得意の時代に入る。賦性溫厚にして篤實、清淡にして功名榮達を意に介せず、謙和にして克く自抑し人を愛す。その寛容なる態度の紳士的なるは、學究的臨床家として其の人格を尊ぶ。趣味としては日本音樂を好む。大連市青雲臺一二三に住す。

溝口壽雄 △横濱診療界に於ける横濱三島堂病院は私立病院中の一勢力たり。溝口壽雄博士は幹部の一人にして外科を擔任す。博士は新潟醫大系(専門部出身)の外科學者として錚々たるもの、大正十二年卒業後直ちに新潟醫科大學助手として外科教室に勤め、十五年二月北海道岩見澤病院外科醫長に就任、昭和三年三月再び新潟醫大に歸學し、同大學助手、講師として解剖學教室に勤務の傍ら研究に従事す、昭和六年より上京し東京同愛記念病院外科に一年有半勤務、名實兼備の手腕を獲得せる後、昭和七年七月より前記の病院に就任す。其間、昭和七年一月新潟醫大にて學位を授與せらる。

△主論文は「内分泌ノ發生ニ就テ」にして、外に參考論文二篇あり。長野縣諏訪郡下諏訪町の人にして、明治三十一年生る、當年三十有八歳、學究的少壯の紳士也。拮据黽勉、精研に餘念なき前途は洋々たり。切に自重加餐を祈る。東京市豊島區池袋三丁目一二六二に住む。

鈴木孝一 △千葉縣佐原上新町に外科の大家として著名なる鈴木孝二博士あり。氏は明治二十五年生にして大正五年東京慈惠醫專を卒へ、同時に同校醫院外科部助手勤務、七年北米合衆國へ留學、十年歸朝、十一年六月より十二年十一月まで宮崎縣東郷病院長として就任、十二年十二月より十五年四月まで九大後藤外科教室にて後藤七郎教授の下に外科學專攻、同時に板垣政參教授の下に血液生理學を專攻す、十五年五月九州帝大にて學位受領、東京慈惠醫大外科學講師囑託、横濱市山下病院を經營し、同時に東京市幸樂堂病院外科顧問として就任せり。

△學位主論文「アルカロージス」ニ關スル實驗的研究」參考論文、(1)「レントゲン」線深部治療ノ血液「アルカリ」度ニ及ボス影響、(2)失血液「アシドーシス」ニ就テ、(3)脾臟血管結紮ノ脾臟ニ及ボス影響ニ就テ。學究的年壯の紳士にして、臨床家としての經驗に富み、今や外科界の手腕家として囑目せらるゝ一人物たるを失はず。

木谷裕寛 △廣島遞信局診療所主任木谷裕寛博士は、金澤市の出身にして、明治十八年生る。明治四十一年金澤醫專を卒へ、直ちに陸軍に入り、四十二年任三等軍醫、四十四年任二等軍醫、大正四年任一等軍醫、七年日赤篤志看護婦人會廣島支會講師を囑託せらる、十二年任三等軍醫正、其後病院及隊附勤務の他、姫路及似島俘虜收容所附として前後三年半に亘り、獨、塙人の診療に従事す、十二年二月より十三年十月まで獨逸に留學、外科及病理學を研究し歸朝後退職を希望し、十四年豫備役に編入せらる、同年十二月廣島遞信診療所主任醫被囑託、十五年七月金澤醫大にて學位を受領し今日に至る。當年知命に入る一歳、益々元氣にして、壯來愈々圓熟の域に達し、今は最も重望せる年輩に在り。

△學位主論文「水腎性削瘦力將タ水腎性萎縮腎カ腎臟水腫ニ就テノ實驗的檢索」(獨文)、參考論文、(1)腎臟及輸尿管皮下損傷ノ臨床的並病理剖的觀察(獨文)、(2)坐骨神經ニ發生セル神經纖維肉腫ノ一例ニ就テ(獨文)、(3)腹部挫傷ニ因スル腸管皮下損傷ノ臨床的並實驗的研究補遺特ニ其ノ「メハニスムス」並病理剖的及診斷的觀察、(4)蟲様突起炎ニ就テノ一二ノ研究、(5)所謂外傷性化骨性筋炎ニ關スル二三ノ知見、外四篇あり。著書、(1)臨床外科類症鑑別、(2)詐病及鑑定法。其他論著夥多あり。

上田寛一 △大阪市大同病院(梅田新道)外科醫長として内外の信望を博し、多年浪速治療界に活躍しつゝある上田寛一博士は、京都市寺町廣小路下上田勝行の長男、明治十九年生にして、明治四十三年京都府立醫專を卒へ、直ちに京都帝大醫科大學外科に介補として勤務、大正二年前橋市日赤群馬支部病院醫員を命ぜられ、四年京都東

山病院外科部長となる、十五年七月京都帝大にて學位受領、昭和二年大阪市大同病院外科皮膚科醫長を命ぜられ今日に至れり。濃厚謙和の紳士にして、臨床家としては多年の経験に富み、犀利なるメスの評判極めて良好也。

△學位主論文「非細菌性類脂體ト共存スル超化學的蛋白質體ノ立證、附抗類脂體抗體說ノ實驗的吟味」、參考論文、(1)局所麻痺法、(2)局所麻痺藥ニ因スル末梢有鞘神經纖維ノ變化ニ就キテ。

塚本 亮太郎

△四日市市沖島局前通外科専門を以て開業せる塚本亮太郎博士は、三重縣三重郡羽津村の人、明治二十四年生にして、四十四年醫術開業免狀下附、四十五年日本醫學校を卒へ、大正元年東京帝大病理學教室に入り病理學研究、三年傳染病研究所に轉じ第一部にて細菌學專攻、五年傳染病研究所を辭し三重縣羽津病院に就職、十年渡歐ベルン大學生理學教室アツシヤ教授の下に實驗生理學專攻、ベルリン大學癌研究所にてビツケル教授の指導を受け實驗的生物學、ハルベルスツタ講師及ブルメンタール教授の下にレントゲン科を研究し、次でカイゼルウイヘルム研究所にてハルトマン教授の指導を受け實驗的生物學を研究、十三年歸朝、引續き羽津病院に副院長として就職、昭和二年三月東京帝大にて學位を受領す、同月羽津病院を辭し、四日市市に開業以て今日に至る。今や當地地方診療界に於ける外科の大家と仰がれ、多年の聲望手腕と相俟つて抜くべからざる勢力を有す。

△學位主論文「肝臟ヲ「レントゲン」線ニテ照射シタル後ニ見ル新陳代謝障礙ニ就テ」(獨文)、參考論文、(1)「ヴィタミン」含有食飼ニテ發育スルモノニ於ケル「イオン」ノ特異作用ニ關スル研究(獨文)、(2)「メゾトリウム」及「レントゲン」放射線ノ單細胞生體「ゴニウムベクトラール」ニ對スル作用ニ就テ。

角田 靜男

△横須賀市立病院に外科醫長として角田靜男博士あり、千葉醫大系の新人にして、母校より學位を得たる近來の少壯醫博也。未だ少壯にして洋々たる前途を語るに遑遠なりと雖も、既にして臨床的多年の経験を有し、玲瓏たる手腕に俟つ評判良く、今や新進手腕家として内外の信望を博し、同市診療界に重きを爲す一人物たるに至囑す。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閱歴を公開すれば、博士は大正十三年千葉醫大卒業後、引續き同大學附屬醫院外科に於て研究途中、一年志願兵として歩兵第一聯隊に入隊、昭和二年三月除隊後再び前記外科に戻り研究繼續、昭和六年十月同所を巢立ち横須賀市立病院外科に赴任現在に及ぶ、其間、昭和七年二月學位を受領せり。

△主論文は「所謂睡眠中樞ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)小腸ニ發生セル「シムバチコグラストーム」ノ一例(2)幸運ナル轉歸ヲ取レル腦濃瘍ノ一例の二篇なり。他に實地臨床上の業績として擧ぐべきは、(1)角田氏間接輸血器、(2)「フルメヨーデン」(殺菌劑)實驗及醫界への紹介等見逃すべからず。

△博士の出身地は山梨縣北巨摩郡駒城村にして、明治三十五年生る、當年漸く三十有四歳也。少壯にして診療界に進出以來、日尙淺くも、熱心にして眞摯なる忠勤振り、博士獨特の手腕と相俟つて篤き聲望を博す。猶向後の活躍に期待するもの益々大なるを想ふの秋、博士の努力奮闘を望むや切也。趣味は彫刻、寫真等。横須賀市公卿町田方一九五一に住む。

荒木 豊吉

△東京市蒲田區羽田町一丁目一一〇に外科専門を以て嘖々たる好評を博し、外來患者常に輻輳しつゝある羽田療院あり、院長荒木豊吉博士の經營する私立病院なり。氏は岡山醫大系醫專時代の出身、又一面には外科學の碩學、京都帝大名譽教授猪子止才之助博士の門弟中の一人物也。多年恩師猪子博士に師事して外科學の蘊奥を究め、學位は東京帝大より獲得せる外科學者として其の手腕を認められ、今や學識、經驗共に愈よ圓熟の域に入り

て最も得意の時代に在り。

△學歴よりすれば、大正四年岡山醫專を卒へ、京都帝大醫學部第一外科教室及び皮膚科泌尿器科教室に勤め、次で千葉醫大法醫學教室及び東京帝大法醫學並に泌尿器科教室に勤務の傍ら研究に従事す、昭和七年二月學位受領、爾來頭書の病院を設立し診療に従事す。主論文は「肝臟機能ニ關スル生物化學的研究」にして參考論文なし。

△博士の出身地は愛媛縣宇和島市裡町にして、明治二十四年荒木市郎平の六男に生る、當年四十有五歳也。年壯にして多年の經驗を有し、臨床家としては今が最も腕の冴えたる全盛時代に在り。殊に博士の特徴とするは、専門は外科なれど研究は多方面に涉りて各科に精通せる點にあり、即ち其の最も得意とする外科學に就ては恩師猪子及び高橋兩博士に負ふ處大なり、同時に又内科學は島蘭教授、皮膚科泌尿器科學は松本教授及び遠山教授、法醫學は三田教授の指導を受けて造詣する所あり。人と爲り溫雅にして氣品高く、學者として頑強の癖なく、刻苦自修して以て圓滿の妙境に到れるを見る。

萩崎爲行

△九州帝大醫學部出身の新進にして、外科特に内臟外科を最も得意とする萩崎爲行博士は、宮崎縣飯肥町鈴木病院に勤め、外科部長として新手腕を發揮し、患者の信望極めて篤く、嘖々たる評判あるを聞く。

△學位論文は「膽道手術ニ對スル腹壁切開法並ニ術後直腹筋麻痺ニ關スル實驗的研究」が主論文にして、參考論文は「囊腫性脊椎破裂症ニ就テ」なり、學位は母校たる九州帝大より獲得せり。氏の論著中「膽道外科」は博士の最も得意とするもの也。

△博士は鹿兒島縣立第一中學校、七高を経て、大正十四年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに母校の三宅外科教室へ入局次で同赤岩外科教室へ轉じて研究を續け、昭和六年四月同教室を退局して現職に就任し今日に至る、七年二月母校に

て學位を受領せり。指導教授は母校の恩師三宅速名譽教授、赤岩八郎教授、田原淳教授(病理)等にして、外科を専攻し特に内臟外科に長ず。

△博士の出身地は鹿兒島縣嶺郡岩川町中之内にして、明治三十三年生る、當年三十有六歳也。スポーツを趣味とする所に博士の健康を窺はる。人と爲り溫厚にして篤實、快活にして能く人を愛し、寛容にして親切なるとは、今の學者にして往々自己の邊幅を修飾して、僅かに得意たる者の比に非ず。年齒未だ少壯にして、今猶研究に對する熱心と、不斷の努力とは、洋々たる前途に猶綽々として餘裕あり。宮崎縣飯肥町前鶴に住す。

井出欽一

△在米健闘約二十年、而かも夫婦相和し、俱に研究に次で實地醫家として懸命の努力精進を續け、今や北米合衆國ワシントン洲シャトル市メーン街に卓然として群を抜き、外科及び産婦人科井出病院長として活躍しつゝあるはドクトル井出欽一博士なり。加ふるに夫人ドクトル井出ひろ博士あり、夫婦協力して創立せるものなるが開業拮据十數年、欽一博士は得意の外科を擔當して犀利のメスを揮ひ、ひろ博士は産科婦人科を擔當して獨特の妙技を發揮し、兩々相俟つて好評嘖々の裡に抜くべからざる繁榮を永らへ、古き歴史と共に牢乎動かすべからざる地盤を有するに至る、成功と云ふべき也。博士は金澤醫專出身の篤學者にして、在米研學多年の後、論文を東京帝大に提出して同大學より學位を獲得せる外科界近來の名醫博也。其の今日あるもの博士の得意や想ふべき也、況んや名譽ある夫婦博士の名譽を海外に馳せ、兩性相俟つて大に世界的氣を吐けるに於てをや。

△博士は大正五年金澤醫專卒業後、母校より岩島病院にて約六ケ年間研究の後、大正九年夫婦にて渡米、ワシントン大學に學び翌十年ドクトルを得、夫婦にてシャトルに開業、昭和二年費府ペンシルバニア大學に入り、附屬ウイスタ―研究所にて二年六ヶ月研究、同七年二月醫學博士の學位を受領せり。